原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第29集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書②

2005

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第29集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書②

巻頭カラー①　原の辻遺跡全景（北から）

巻頭カラー②　護岸遺構①（空撮　左が北）

巻頭カラー③　護岸遺構②（近景　西から）

巻頭カラー④　河道２・樹皮敷遺構・祭祀土坑（空撮　左が西）

巻頭カラー⑤　樹皮敷遺構（近景　東から）

発刊にあたって

本書は主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴い実施した，原の辻遺跡の発掘調査報告書です。

原の辻遺跡は，「一支国」の王都として，弥生時代の国の規模構造を解明できる希有の遺跡として平成12年度に国の特別史跡に指定された重要な遺跡です。今回の調査では，丘陵の西北端部と南端部の調査をおこない，環濠や河道などの遺構を検出することができました。この中でも大きな成果として２点挙げられます。

一つは，護岸遺構の発見です。今回の護岸遺構は，弥生時代の川沿いに石を積み上げ，岸辺の補強を目的としたもので，護岸遺構の周辺が重要な場所であった可能性が高く，以前発見された船着き場跡との関連性を探る上でも興味深い発見となりました。護岸遺構と船着き場跡が川によってつながっていた可能性もあり，船着き場跡から護岸遺構へ，さらには丘陵上へとルートが確保されていた可能性も指摘できます。また，石を使用した構築物は，弥生時代の遺跡の中では数少ない例として注目され，原の辻遺跡での高度な土木技術が明らかとなりました。このような高度な土木技術は大陸からもたらされたものと思われ，原の辻遺跡が交流の拠点であったことを裏付ける発見でもありました。

もう一つの成果として，祭祀遺構の発見があります。祭祀遺構は，川辺で弥生時代の人たちが，祭りをおこなっていたと思われる場所です。大地の恵みと自然に感謝する弥生人の心を感じることができる発見でした。

これらの発見は，今後の原の辻遺跡の復元整備を考える上でも大きな成果となりました。

最後に，調査に際し多くの方々に御協力を頂いたことに感謝するとともに，本報告書が研究の一助となれば幸いです。

2005年３月25日

長崎県教育委員会教育長　**立　石　　暁**

例　　言

1．本書は，主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴って平成15年度に実施した原の辻遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本書は，平成16年度主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査の予算にもとづいて発行した。

3．本書に収録した遺跡の調査地は長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触字八反に所在する。

4．本事業は長崎県壱岐支庁建設部建設課道路班が主体となり，調査主体は長崎県教育委員会が，調査担当は原の辻遺跡調査事務所が行った。また株式会社フジテクノが調査を補佐した。

5．調査組織は下記の通りである。

⑴　平成15年度

原の辻遺跡調査事務所	所長	高野晋司（現県教育庁学芸文化課）
	課長（兼）	野中滋生（壱岐教育事務所）
	係長（兼）	冨永宏美（壱岐教育事務所）
	係長	町田利幸（現佐世保教育事務所）
	主任文化財保護主事	福田一志　※調査担当
	文化財保護主事	小玉友裕（現壱岐高等学校）
	文化財保護主事	林　隆広　※調査担当
	文化財保護主事	中尾篤志

調査協力　芦辺町教育委員会・石田町教育委員会（現壱岐市教育委員会）

委託業者　株式会社フジテクノ（川田・柴田）

⑵　平成16年度

原の辻遺跡調査事務所	所長	安楽　勉
	課長（兼）	野中滋生（壱岐教育事務所）
	係長（兼）	冨永宏美（壱岐教育事務所）
	係長	村川逸朗
	主任文化財保護主事	福田一志　※報告書担当
	文化財保護主事	林　隆広　※報告書担当
	文化財保護主事	溝上貴稔
	文化財保護主事	中尾篤志

6．本書に収録した遺物の実測・製図は原の辻遺跡調査事務所が行った。遺構の実測については原の辻遺跡調査事務所指導のもと，株式会社フジテクノが行った。

7．自然科学分析は古環境研究所に依頼した。

8．本書収録の遺物・図面・写真類は原の辻遺跡調査事務所で保管している。

9．平面直角座標は旧日本測地系を使用している。

10．本書では，溝状遺構をSDで表記している。

11．本書では，原の辻関連報告書を略称（例：H８河川）で引用している（図12参照）。

12．本書の執筆は林が行った。

13．本書の編集は林が行った。

本 文 目 次

Ⅰ章　遺跡の立地する環境
　１．地理的環境……1
　２．歴史的環境
　　⑴　旧石器・縄文時代……2
　　⑵　弥 生 時 代……4
　　⑶　古墳時代・古代……6
　　⑷　中　近　世……8

Ⅱ章　調査に至る経緯……10

Ⅲ章　調査の概要……12

Ⅳ章　遺構と遺物
　１．河　道　1
　　⑴　検 出 状 況……14
　　⑵　土　　層……15
　　⑶　出 土 遺 物
　　①土器（甕）……18
　　②土器（壺）……20
　　③土器（器台・高坏・鉢）……22
　　④土器（底部）……24
　　⑤石器……26
　　⑥木製品……28

　２．河道２・樹皮敷遺構・祭祀土坑
　　⑴　検 出 状 況……30
　　⑵　河道２の土層……32
　　⑶　河道２の出土遺物
　　①土器（壺）……36
　　②土器（壺）……38
　　③土器（脚付短頸壺）……40
　　④土器（高坏・蓋）……42
　　⑤土器（甕）……44
　　⑥土器（甕）……46
　　⑦土器（底部）……48
　　⑧土器（底部）……50
　　⑨石器……52
　　⑩木製品……54
　　⑷　樹皮敷遺構……56
　　⑸　祭 祀 土 坑……58

　３．河道３・護岸遺構
　　⑴　検 出 状 況……62
　　⑵　土　　層……64
　　⑶　出 土 遺 物
　　①護岸遺構……68
　　②河道３（上層）……70
　　③河道３（下層）……72
　　④河道３（下層）……74
　　⑤河道３（下層）……76

　４．その他の遺構
　　⑴　SD２・SD３・SD４・SD５
　　①検出状況と土層……78
　　②出土遺物……81
　　⑵　SD７・集石遺構……82
　　⑶　SD９・SD10・SD11・SD12・水田遺構
　　①検出状況……84
　　②土層……86
　　③出土遺物……87
　　④水田遺構……90
　　⑷　小児甕棺墓……91

　５．その他の遺物……92

Ⅴ章　丹塗の土器と祭りの場……95

Ⅵ章　ま　と　め……101

付編　自然科学分析

写真図版

挿 図 目 次

図１　壱岐島の位置図……１
図２　旧石器・縄文遺跡分布図 ……３
図３　旧石器時代・縄文時代遺物 ……３
図４　弥生遺跡分布図……５
図５　弥生時代遺物図……５
図６　古墳・古代遺跡分布図 ……７
図７　古墳時代・古代遺物図 ……７
図８　中近世遺跡分布図……９
図９　中近世遺物図……９
図10　調査区配置図……10
図11　調査区設定図……11
図12　丘陵西側低地部遺構配置図……13
図13　河道１平面図および断面図……14
図14　河道１土層図……15
図15　15調査区トレンチ土層図……16
図16　河道１出土土器①……19
図17　河道１出土土器②……21
図18　河道１出土土器③……23
図19　河道１出土土器④……25
図20　河道１出土石器①……26
図21　河道１出土石器②……27
図22　河道１出土木製品①……28
図23　河道１出土木製品②……29
図24　河道２・樹皮敷遺構・祭祀土壙平面図…31
図25　河道２土層図……32
図26　河道２ステージ表……34
図27　河道２出土土器①……37
図28　河道２出土土器②……39
図29　河道２出土土器③……41
図30　河道２出土土器④……43
図31　河道２出土土器⑤……45
図32　河道２出土土器⑥……47
図33　河道２出土土器⑦……49
図34　河道２出土土器⑧……51
図35　河道２出土石器①……52
図36　河道２出土石器②……53
図37　河道２出土木製品①……54
図38　河道２出土木製品②……55
図39　樹皮敷遺構実測図……57
図40　祭祀土坑土層図……58
図41　祭祀土坑実測図および遺物実測図……59
図42　祭祀土坑出土遺物……60
図43　河道３・護岸遺構平面図
　　および断面図……63
図44　河道３および護岸遺構土層図……64
図45　河道３ステージ表……45
図46　護岸遺構実測図……66
図47　護岸遺構直上出土土器①……47
図48　護岸遺構直上出土土器②……69
図49　河道３出土土器①……71
図50　河道３出土土器②……73
図51　河道３出土土器③……75
図52　河道３出土土器④……77
図53　SD２・SD３・SD４・SD５平面図および
　　土層図・断面図 ……79
図54　SD５土層図 ……80
図55　SD２・SD４・SD５出土土器……81
図56　SD７・集石遺構平面図
　　および SD７土層図 ……82
図57　集石遺構実測図……83
図58　SD９・SD10・SD11・SD12・矢板平面図
　　および断面図……85
図59　SD９・SD10・SD11・SD12土層図 ……86
図60　SD10出土石器 ……87
図61　SD９・SD10出土土器 ……89
図62　矢板実測図および水田遺構土層図……90
図63　小児甕棺墓実測図……91
図64　その他の遺物①……92
図65　その他の遺物②……93
図66　河道２・樹皮敷遺構推定図および
　　河道３・護岸遺構推定図 ……95
図67　原の辻遺跡出土丹塗土器一括資料……99

表 組 目 次

表１　壱岐・対馬面積比較 …… 1
表２　旧石器・縄文遺跡一覧表 …… 3
表３　弥生遺跡一覧表…… 5
表４　古墳・古代遺跡一覧表 …… 7
表５　中近世遺跡一覧表…… 9
表６　河道１土層観察表……15
表７　河道１’土層観察表……16
表８　河道１出土土器①観察表……18
表９　河道１出土土器②観察表……20
表10　河道１出土土器③観察表……22
表11　河道１出土土器④観察表……24
表12　河道１出土石器観察表……26
表13　河道１出土木製品観察表……28
表14　河道２土層観察表……32
表15　河道２出土土器①観察表……36
表16　河道２出土土器②観察表……38
表17　河道２出土土器③観察表……40
表18　河道２出土土器④観察表……42
表19　河道２出土土器⑤観察表……44
表20　河道２出土土器⑥観察表……46
表21　河道２出土土器⑦観察表……48
表22　河道２出土土器⑧観察表……50
表23　河道２出土石器観察表……52
表24　河道２出土木製品観察表……54
表25　祭祀土坑土層観察表……58
表26　祭祀土坑出土遺物観察表……60
表27　河道３・護岸遺構土層観察表 ……64
表28　護岸遺構直上出土土器①観察表……66
表29　護岸遺構直上出土土器②観察表……68
表30　河道３出土土器①観察表……70
表31　河道３出土土器②観察表……72
表32　河道３出土土器③観察表……73
表33　河道３出土土器④観察表……76
表34　SD２土層観察表 ……78
表35　SD３土層観察表 ……78
表36　SD５土層観察表 ……80
表37　SD２・SD４・SD５出土土器観察表……81
表38　SD７土層観察表 ……83
表39　SD９・SD10・SD11・SD12土層観察表 …86
表40　SD９・SD10出土石器観察表 ……87
表41　SD９・SD10出土土器観察表 ……88
表42　水田遺構土層観察表……90
表43　小児甕棺墓土器観察表……91
表44　その他の遺物観察表……94
表45　原の辻出土丹塗土器比率……96
表46　壺形土器形態分類比率……97
表47　河道２④層丹塗土器組成表……98

図 版 目 次

巻頭カラー①　原の辻遺跡全景
巻頭カラー②　護岸遺構①
巻頭カラー③　護岸遺構②
巻頭カラー④　河道２・樹皮敷遺構・祭祀土坑
巻頭カラー⑤　樹皮敷遺構

図版１　河道１①……17
図版２　河道１②……17
図版３　河道１③……17
図版４　河道２①……33
図版５　河道２②……33
図版６　河道２③……33
図版７　祭祀土坑①……61
図版８　祭祀土坑②……61
図版９　祭祀土坑③……61
図版10　矢板①
図版11　矢板②
図版12　矢板③
図版13　樹皮敷遺構①
図版14　樹皮敷遺構②
図版15　樹皮敷遺構③
図版16　樹皮敷遺構④
図版17　樹皮敷遺構⑤
図版18　樹皮敷遺構⑥
図版19　護岸遺構①
図版20　護岸遺構②
図版21　護岸遺構③
図版22　河道３①
図版23　河道３②
図版24　河道３③
図版25　河道３④
図版26　護岸遺構④
図版27　護岸遺構⑤
図版28　護岸遺構⑥
図版29　護岸遺構⑦
図版30　護岸遺構⑧
図版31　SD３
図版32　SD９・SD10・SD11・SD12・水田遺構
図版33　小児甕棺墓
図版34　石剣①
図版35　石剣②
図版36　骨格器
図版37　仿製鏡
図版38　木製品①
図版39　木製品②

Ⅰ章　遺跡の立地する環境

１．地理的環境

「…又南に一海渡る千余里，名付けて瀚海と曰い，一大國に至る。官は卑狗といい，副官は卑奴母離と曰う。方三百里となす可く，竹林や叢林を多くし，三千許の家が有る。差いに田地を有し，田を耕しても猶食に不足し，同じように船に乗りて南北に市糴している…」

このように『魏志倭人伝』にて記される壱岐は対馬同様，大陸と日本を結ぶ飛び石のように玄界灘に浮かぶ島である。南北約17㎞，東西約15㎞のやや南北に長い本島のほか多くの属島からなり，総面積約138.8㎢，人口は約３万３千人を数える。本土との交通手段は海上交通が主で，福岡県博多と佐賀県呼子へ船便が結ばれている。長崎県には直通の交通手段が空路しかないため，行政区分としては長崎県に属するものの文化的・経済的には福岡県とのつながりが深い。

島全体の地形は比較的平坦な溶岩台地で，最高峰の岳の辻岳でも標高213㍍にすぎない。これは『魏志倭人伝』で「…居る所絶島…土地は山険しく，深林多く，道路は禽鹿の径の如し…良田無く…」と記される対馬とは対照的である。『魏志倭人伝』では「…田を耕しても猶食に不足し…」と記されるが，島南東部の深江田原は県内第一の沖積平野で，今日では圃場整備も進み，有数の穀物地帯となっている。原の辻遺跡はこの中心部に位置し，南から延びた舌状の台地（標高18㍍）を中心に約100㌶の規模を誇る。また遺跡の北側には島内最長の幡鉾川（約8.8㌔）が流れ，東へ約1.5㌔進むとやがて内海湾に注ぎ込む。この幡鉾川では圃場整備に伴う河岸整備が行われる近年まで高潮の遡上がみられ，また遺跡より約２㌔上流には「船橋」という地名が残っていることから，太古より水上交通として機能していたことが想像される。

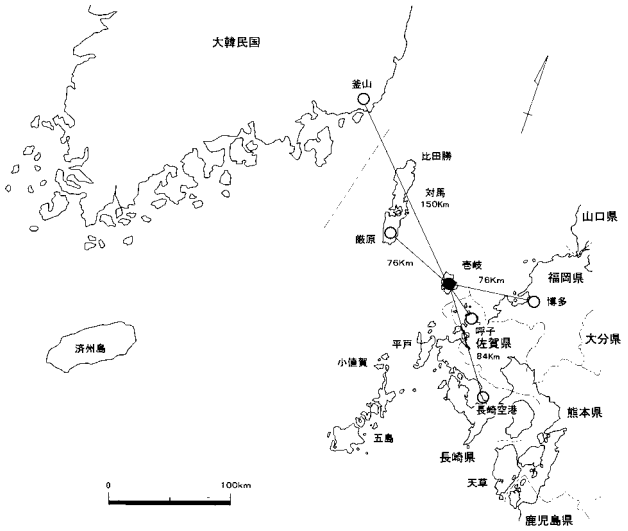
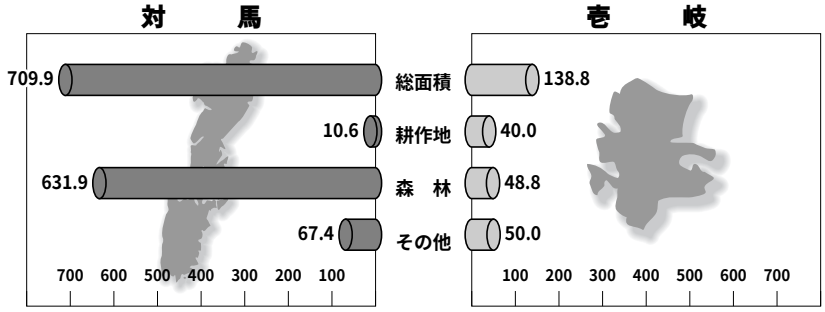


図１　壱岐島の位置図

表１　壱岐・対馬面積比較



単位は㎢	その他	森　林	耕　地	総面積
対　馬	67.4	631.9	10.6	709.9
壱　岐	50	48.8	40	138.8

２．歴史的環境

⑴　旧石器・縄文時代

壱岐における旧石器・縄文遺跡は原の辻遺跡やカラカミ遺跡，双六古墳に代表される巨石古墳などの存在から，これまであまり日の目を見ない観があったが，近年の調査により少しずつではあるがその様相が明らかにされつつある。

壱岐における旧石器時代の遺物は名切遺跡，松崎遺跡，鶴田遺跡など島内の数カ所で確認されている。原の辻遺跡からは昭和50年（1975）に台形石器・ナイフ型石器・細石器・細石核などが広範囲にわたり検出された。特に左右非対称の台形石器は姶良火山灰（AT）降灰直後の石器組成の重要な器種として「原の辻型台形石器」と呼称されることとなり，時期は剥片尖頭器との共伴からナイフ石器文化中期後半におくことができる。また平成３年（1991）には遺跡丘陵西側の水田下180㌢の腐植土層からナウマン象の臼歯が出土している。ナウマン象と旧石器の共伴は確認されていないが，絶滅した動物化石とそれを狩猟した人類の遺物が同時に出土した例は全国でも長野県野尻湖遺跡などがあるにすぎず，原の辻遺跡はその例に追加される可能性もある。

壱岐における縄文時代の遺跡は鎌崎遺跡，名切遺跡，松崎遺跡などで壱岐島西側に集中し，しかも海岸部に立地して干潮時に遺跡が現れる，いわゆる潮間帯遺跡が多いことが特徴としてあげられる。鎌崎遺跡は表面採集ではあるが良好な石銛やスクレーパーなど特徴ある石器が確認されている。特に全体を直角三角形状に整形して底辺にゆるい弧状の刃部を作り出すスクレーパーは「鎌崎型スクレーパー」と呼ばれ，九州北西沿岸部のみならず韓国南岸の東三洞貝塚でも出土している。

壱岐における初めての縄文遺跡発掘の事例となった名切遺跡では，昭和58年（1983）に長崎県教育委員会によって発掘調査が行われている。この遺跡からは中期から晩期に造られた貯蔵穴30基が確認され，底面からカシの実など堅果類が，埋土からは人頭大の礫や石皿が検出された。形状は多くが円形の筒型で，なかにはフラスコ状のものもある。湧水が見られる遺跡の立地状況から貯蔵と灰汁抜きの兼用と考えられる。礫や石皿は堅果類を竪穴に詰め，それに板材で蓋をした際の重しとしたのだろう。多様な石器も出土しており，漁撈・狩猟・植物採集活動を裏付ける多くの資料を得ることとなった。剥片石器の素材は黒曜石が多いが，壱岐産の黒曜石の他に佐賀県伊万里市腰岳産の良質な黒曜石もみられる。

また松崎遺跡では幾何学的細線刻文をもち，滑石粉末を混入した縄文前期の土器が確認されている。この種のものは韓半島の櫛目文土器との関連が指摘されている。

このように確認された石器や貯蔵穴などから，これらの遺跡が生活の糧を海にのみ求めるのではなく，多様な生活を営んでいたことがうかがえる。また縄文時代における海上交流の活発さも物語っており，対馬海峡を舞台にした九州北部と韓半島を結ぶ海上交流が，後の稲作伝播の経路となったことを想起させる。

【図３出典一覧】

１．長崎県教育委員会（1978）「長崎県文化財調査報告書第37集『原の辻遺跡』」
２．長崎県教育委員会（1996）「『原始・古代の長崎県』資料編Ⅰ」

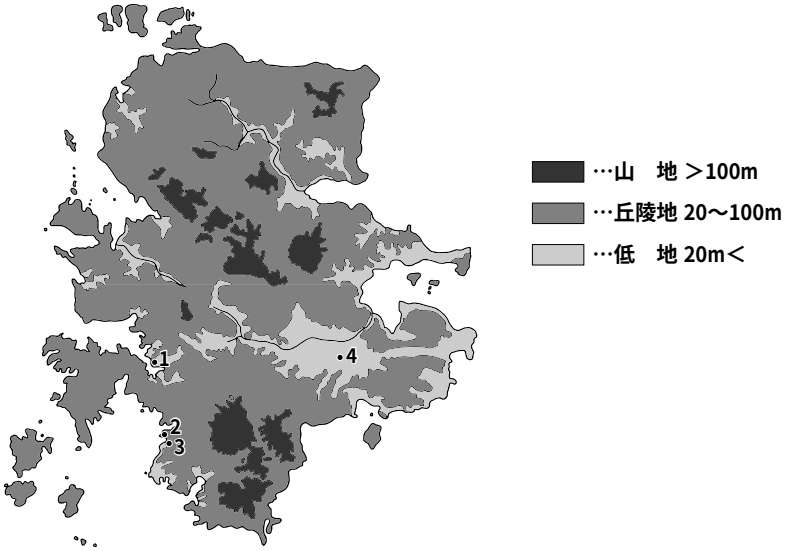
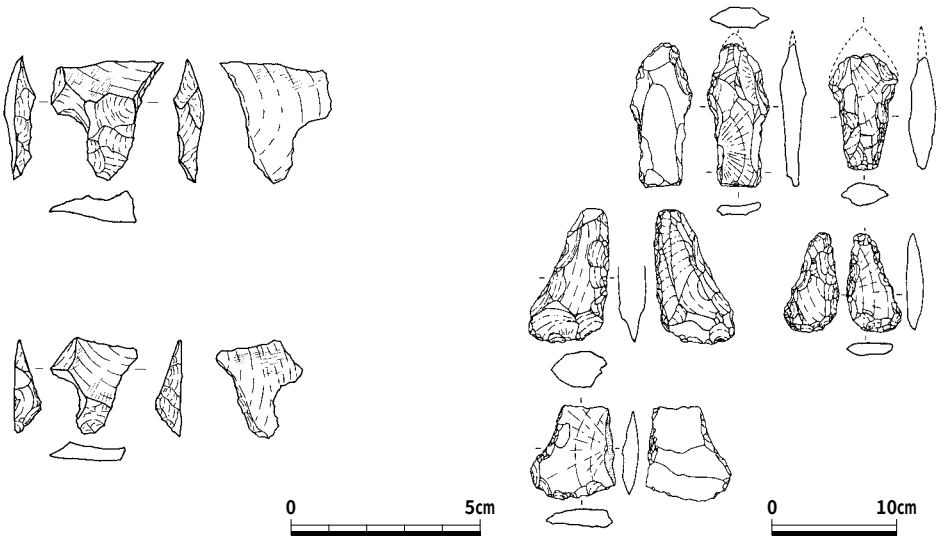


図２　旧石器・縄文遺跡分布図

表２　旧石器・縄文遺跡一覧表

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	松崎遺跡	縄文土器・縄文石器・貝輪 干潮帯遺跡　縄文早期や縄文時代平行期の韓半島新石器時代土器が出土する	勝本町教育委員会（2003）
2	鎌崎遺跡	縄文土器・弥生土器・石器 干潮帯遺跡　鎌崎型スクレーパーは韓半島南岸でも出土	横山　順・田中良之（1979）
3	名切遺跡	旧石器・縄文土器・縄文石器 干潮帯遺跡　貯蔵穴30基を確認	長崎県教育委員会（1985）
4	鶴田遺跡	旧石器（石核・フレーク・ナイフ型石器） 良質の漆黒黒曜石　磯道技法との類似が指摘される	長崎県教育委員会（1998）



１．原の辻遺跡出土台形石器　　**２．鎌崎遺跡出土石銛・スクレイパー**

図３　旧石器時代・縄文時代遺物

⑵ 弥生時代

弥生時代の遺跡は，壱岐島内で約60カ所が周知されているが，なかでも遺跡の規模，出土品の質量から突出するのが原の辻遺跡である。この遺跡は大正時代に発見され，その後の河川改修工事や耕地整理に伴って大量の土器や中国製銅鏡などが，また東亜考古学会による学術調査では貨泉が出土するなどして学術的に重要な遺跡として認知されるようになった。今日までの調査で遺跡面積100㌶，３重の環濠を備え，石積みの船着き場などを有する大規模な集落であることが判明している。また『魏志倭人伝』に記載された記事と国名が一致する唯一の遺跡と特定され，平成12年（2000）には国特別史跡に指定されている。

車出遺跡は幡鉾川の約５㌔西側の上流にある山間部の狭い平野に所在する。この遺跡からは方格規矩鏡や貨泉，卜骨などの祭祀に関わる遺物が出土している。この遺跡の側には後に旧式内社の壱岐一の宮と称される天手長男神社が鉢形山山頂に営まれるため，この地が太古から宗教的な聖地として機能していたことが想像される。

カラカミ遺跡は標高70㍍を超える丘陵部を含む遺跡で，鉄製釣針や鯨骨製アワビオコシなど漁撈に関わる特徴的な遺物が出土することから農耕文化を如実に示す原の辻遺跡とは古くから対比されてきた。しかし勝本町教育委員会が実施した発掘調査（昭和57～60）によって銅鏃や卜骨などが確認され，また環濠を備えている点などから原の辻遺跡との関連も指摘されるようになった。韓半島から舶載された瓦質土器や滑石混入土器も確認されており，海を糧に生活したこの集落の性格がうかがえる。

車出遺跡，カラカミ遺跡両者とも遺跡の存続期間は原の辻遺跡と趨勢を同じくしており興味深い。あるいはこのいずれかが原の辻遺跡とは役割を分かち合った，すなわち呪術・祭祀のためのみに営まれた集落で，「卑狗」が統べる原の辻遺跡に対して「卑奴母離」が治める宗教的な空間であったかと思われるが，これは想像の域を出ない。

宗教的な遺跡としては，天ケ原セジョウ神遺跡をあげることができる。この遺跡は壱岐島の北端部に位置し，昭和36年（1961），護岸工事の際に中広銅矛が３本出土している。おそらくは韓半島や大陸との境界を意識したもので，外的の侵攻を防ぐ目的と，航海の安全を祈る目的で埋納されたものと思われる。

ともに国境の島でありながら，壱岐と対馬では弥生時代の青銅製武器及び武器形祭器のあり方が異なることが従前から指摘されてきた。対馬ではこれまでに約130点の青銅製武器及び武器形祭器が確認されているのに対し，壱岐は12本と10分の１にも満たない。12本のうち出土地点が判明しているのは原の辻遺跡の甕棺から出土した戦国式（中国式）銅剣と上記の３本のみである。一方，壱岐，特に原の辻遺跡からは対馬ではあまり見られない銅鏃が100本以上確認されている。また平成14年度（2002）の芦辺町（現壱岐市）における発掘調査では，原の辻遺跡の原地区から鋳型が検出されている。これは原の辻遺跡で大量に検出された銅鏃が青銅素材として使用されたことを想起させ，今後の調査成果が期待される。

【図５出典一覧】

２．長崎県勝本町教育委員会（1985）「勝本町文化財調査報告書第４集『串山ミルメ浦遺跡』－第１次調査報告書－」
３．　　長崎県教育委員会（1996）「『原始・古代の長崎県』資料編Ⅰ」

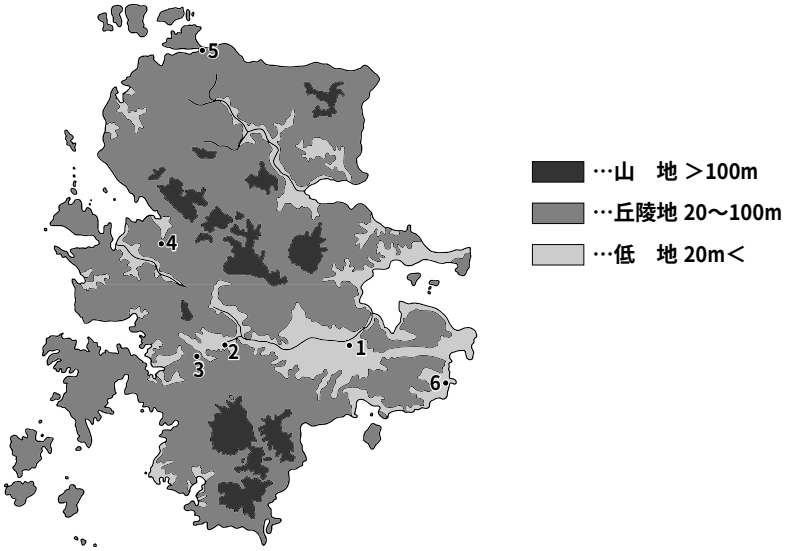
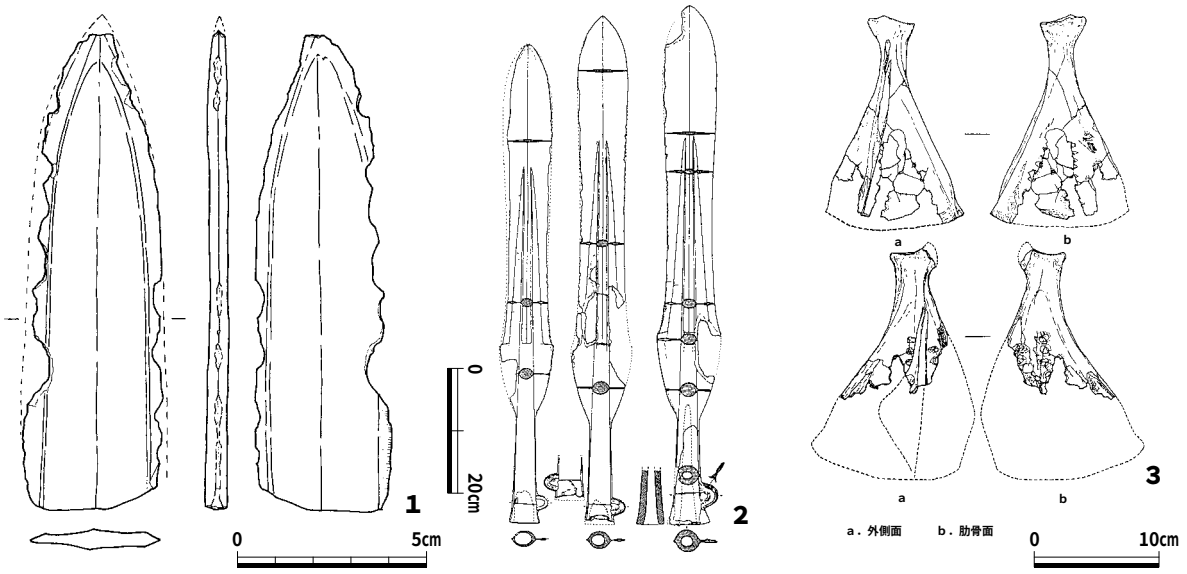


図４　弥生遺跡分布図

表３　弥生遺跡一覧表

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	原の辻遺跡	弥生土器・石器・青銅器・鉄器 一支国の中心集落　韓半島系・大陸系の遺物が大量に出土	長崎県教育委員会・芦辺町教育委員会・石田町教育委員会
2	車出遺跡	弥生土器・銅鏡片・ガラス玉 丹塗磨研土器が多く出土	長崎県・郷ノ浦町教育委員会（1998）
3	戸田遺跡	弥生土器・韓半島系土器 車出遺跡と同一集落の可能性	郷ノ浦町教育委員会（2003）
4	カラカミ遺跡	弥生土器・骨格器・卜骨 海人的性格をもつが環濠も備える	勝本町教育委員会（1985.1988）
5	天ケ原セジョウ神遺跡	銅矛 中広銅矛が３本出土	勝本町教育委員会（1985）
6	大久保遺跡	弥生土器・須恵器 石棺墓　壮年男性の人骨が出土	長崎県教育委員会（1988）



原の辻遺跡出土戦国式銅剣（１/２）　天ケ原セジョウ神遺跡出土中広銅矛（１/12）　カラカミ遺跡出土卜骨（１/６）

図５　弥生時代遺物図

⑶ 古墳時代・古代

現在確認されている壱岐島内の古墳は256基にのぼるが，編年的に４世紀までを遡るものはない。現在周知されている古墳では大塚山古墳や俵山古墳が最も古く，５世紀後半頃に比定されているが，大部分が６世紀から７世紀に築造されたものである。形状は円墳が主で，これら古墳のうち90余基が壱岐島のほぼ中央部に集中している。これは一地方の古墳群としては突出した規模と内容であり，しかも各古墳の間には同じ設計図が使用されたと思われるほどの類似性が見られることは大きな特徴といえる。

鬼の窟古墳は県下最大の円墳で，石室は玄室・中室・前室からなり17㍍と長い。この古墳の西に位置する笹塚古墳も石室は15㍍と長く，その構造や構築方法は鬼の窟古墳と同じであり，その強い類似性は特筆される。県下最大の前方後円墳である双六古墳もこの古墳群にある。全長91㍍，玄室・前室・羨道からなる石室は全長11㍍を測る。周溝はなく，自然地形を利用して版築した２段築成である。調査により石室内から金製品・金銅製品・青銅製品・鉄製品・ガラス玉や須恵器・土師器・唐二彩などの遺物が確認されている。

古代，律令体制下では壱岐は対馬同様に一国（下国）として扱われ，壱岐・石田の２郡が置かれた。従って国府が置かれ，やがて国分寺が設置されるのだが，壱岐では新たに建設する経済基盤がなかったのか，壱岐直の氏寺を国分寺に転用した旨が『延喜式』（玄蕃寮）に書かれている。その記録には「壱岐嶋直氏寺為島分寺。置僧五口」とあり，僧二十口が置かれた諸国の国分寺に比べて規模が小さく，そのため嶋分寺と呼ばれることになる。この嶋分寺の調査では平城様式の軒丸瓦と軒平瓦が少量確認されている。平城宮では第Ⅰ期（和銅元年～養老五年）に使用され，同范資料では大和大安寺などで出土している。このことは壱岐直が朝廷から范木を下賜されたことを想像させる。壱岐直は宮城と同じ瓦で氏寺の甍を飾ったのであろうか。

古代の遺跡としては串山ミルメ浦遺跡をあげることができる。ここでは卜占に使用された海亀の甲羅や，大量の鮑殻が出土している。亀卜は壱岐島内の弥生時代遺跡では確認されていないが，卜骨から引き継がれた卜占の伝統が感じられる。また鮑殻はここが調の加工場であったことを想像させる。

なぜ壱岐に多くの巨石古墳が存在するのか，その理由は古代の様子から想像することができる。まず壱岐には卜占の伝統が弥生時代から受け継がれており，やがて律令時代には卜部として朝廷における重要な職掌を担うに至ったことである。また壱岐は太古より海を生活の糧としているため海上交易に精通した海人族としての性格も併せ持っている。６世紀におこった朝廷と筑紫国磐井との戦いでは，韓半島西岸，新羅付近の制海権を掌握していた磐井勢力を伊吉島造が駆逐したと『旧事記』の国造本紀に記録されている。韓半島と朝廷との仲介をなしうる壱岐の勢力に対して朝廷から何らかの恩賞があったはずで，おそらくはそれを背景に古墳造営が行なわれたと思われる。

【図７出典一覧】

１．長崎県芦辺町教育委員会（1991）「長崎県芦辺町文化財調査報告書第５集『壱岐嶋分寺Ⅰ』」
２．長崎県勝本町教育委員会（1989）「勝本町文化財調査報告書第７集『串山ミルメ浦遺跡』－第２次調査報告書－」

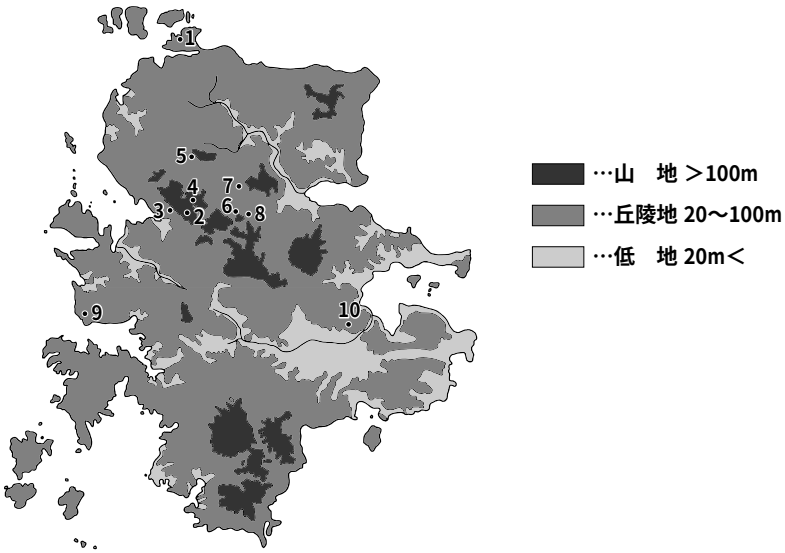
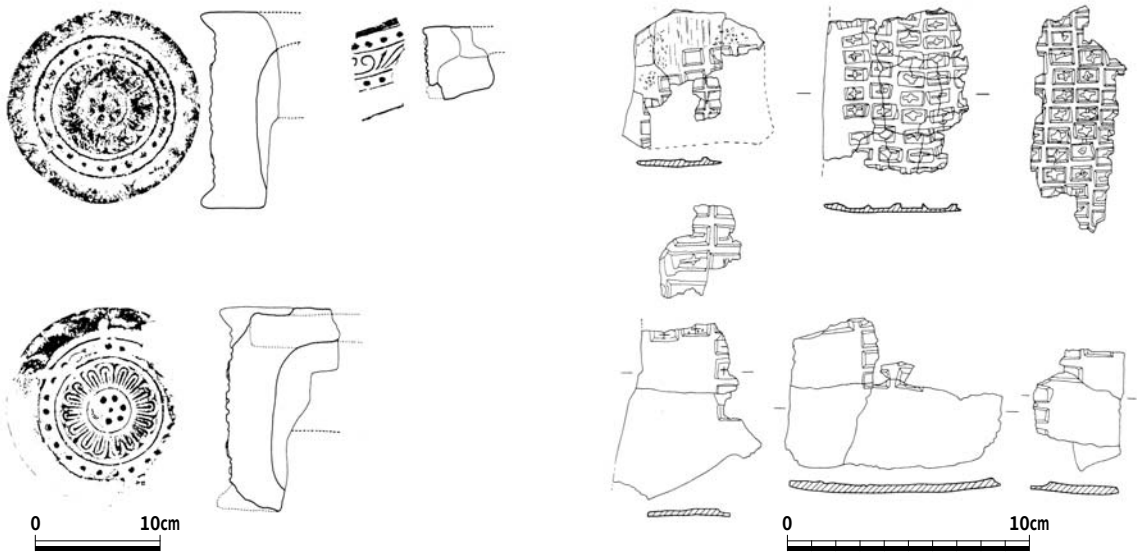


図６　古墳・古代遺跡分布図

表４　古墳・古代遺跡一覧表

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	串山ミルメ浦遺跡	土師器・須恵器・金属器・亀卜・骨格器 砂丘上の生産遺跡で甑把手と鮑殻が出土していることから干し鮑（調か？）生産が中心と推測	勝本町教育委員会（1985.1989.1990）
2	双六古墳	鉄製品・金銅製品・ガラス玉・須恵器・土師器・唐二彩 前方後円墳（全長91㍍後円部直径43㍍高さ10.6㍍前方部幅36㍍高さ５㍍）横穴式石室（全長11㍍玄室・前室）	勝本町教育委員会（2001）
3	対馬塚古墳	― 前方後円墳（全長約65㍍後円部直径約36㍍前方部幅25㍍）横穴式石室（全長9.4㍍玄室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
4	笹塚古墳	須恵器・土師器・陶質土器・金銅製馬具 円墳（直径38㍍高さ10㍍方墳の可能性も）横穴式石室（14.8㍍玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
5	掛木古墳	須恵器・土師器・銅鏡片・金環・鉄製品 円墳（直径約30㍍高さ７㍍）横穴式石室（全長13.6㍍玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
6	鬼の窟古墳	須恵器・陶質土器（新羅系） 円墳（直径45㍍高さ13㍍）横穴式石室（全長16.5㍍玄室・中室・前室）	芦辺町教育委員会（1990）
7	兵瀬古墳	― 円墳（直径34㍍高さ８㍍）横穴式石室（全長12㍍玄室・中室・前室）	松永泰彦（1982）
8	壱岐嶋分寺跡	瓦・須恵器・土師器・輸入陶磁器 奈良平城宮6284Ａ型式と同范の軒丸・軒片瓦が出土	芦辺町教育委員会（1991～1994）
9	鬼屋窪古墳	須恵器 墳丘消失 石室も半壊しており開口方向など不明	副島康司・木村幾太郎（1981） 袖石に船の線刻あり
10	大塚山古墳	須恵器・鉄器 円墳（直径14㍍高さ２㍍）竪穴系横口石室（全長3.96㍍）	芦辺町教育委員会（1987）



１．嶋分寺出土軒丸・軒平瓦（１/６）　　**２．串山ミルメ浦遺跡出土ト甲（１/３）**

図７　古墳時代・古代遺物図

⑷ 中　近　世

国境の島としての過酷な境遇は古代より壱岐に大きな禍根をもたらした。白村江の戦い（663）では多くの壱岐の民が徴発されて海の藻屑と消えたであろうし，寛仁三年（1019）の刀伊の入寇では壱岐島守藤原理忠をはじめ多くの住民が殺害または捕囚された。

鎌倉時代には文永・弘安の役，すなわち蒙古襲来（元寇）を受ける。鎌倉武士団の活躍や神風などが叙情詩的に語られる反面，多くの住民が殺戮された。『八幡愚童訓』には当時の様子を「（元軍兵が）見かくる者をうち殺し狼藉す。島民ささえかねて妻子を引具して深山に逃げ隠れけり。さるに（元軍兵が）赤子の泣声を聞きつけて探り求めて捕らえけり。さりければ片時の命を惜しむ世の習ひ（親が）愛児をさし殺して逃げ隠れするあさましき在様也」と記している。

室町時代の壱岐は「三島の倭寇」の１つとして知られる。三島とは壱岐・対馬・松浦（松浦は島ではない）のことで，倭寇とは14～16世紀にかけて韓半島や中国大陸沿岸で活動した海賊的集団のことである。この背景には南北朝並立から始まる全国的な戦乱がある。もともと農業生産力が低い「三島」は戦乱の影響で生活物資を海外との交易に求めねばならなくなり，しばしば海賊行為を行なうようになるのである。鎌倉期を通じて壱岐対馬の守護職であった少貳氏に代わり，この頃壱岐は松浦党五氏（志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留）によって分割統治されたと『海東諸国紀』（1471）にある。この中に「唯多只（湯岳）郷，志佐代官源武，之を主（つかさど）る。戊子年（1468），図書（李朝が授給した銅印）を受け歳遣一，二船を約す。書に一岐守護代官真弓兵部少輔源武と称す」とあり，志佐氏が真弓氏を代官として活発な交易を展開していたことがうかがえ，この交易は三浦の乱（1510）まで続けられたとされる。原の辻遺跡の西約１㌔ほどに位置する覩城は真弓氏の居城と思われ，発掘調査では14世紀頃の高麗象嵌青磁・粉青沙器などが出土している。その後文明四年（1472）に肥前上松浦の岸岳城主である波多氏が壱岐に侵攻する。その際，松浦党五氏の代官衆が覩城で籠城・降服したといわれるが，先述の通り波多氏による壱岐領有後も志佐氏による朝鮮貿易は活発に行なわれていることから，壱岐の主導権移行はより複雑であったことが想起される。その波多氏も内紛から日高・松浦氏に倒され，平戸を本拠とする松浦氏による壱岐統治が開始される。

松浦氏による壱岐統治が開始された頃，長く続いた戦国時代も終焉を迎える。九州征伐の際，豊臣秀吉のもとへ参陣した松浦氏は領地を安堵される。文禄元年（1592）からはじまる朝鮮出兵（文禄・慶長の役）では，松浦氏は第一軍の小西行長配下に編成され，三千の軍勢で渡海している。またその前年には秀吉の命を受けて勝本城を築城している。『壹岐名勝圖誌』に「夜の中に手々に石を持上がり築けり」とあるように，突貫工事で築城したものと思われる。現在は勝本浦に向かって開かれた枡形虎口と，頂上部を鉢巻状にとりまく石垣が残されている。

【図９出典一覧】

長崎県教育委員会（1997）「原の辻遺跡調査事務所報告書第３集『覩城跡』幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ」

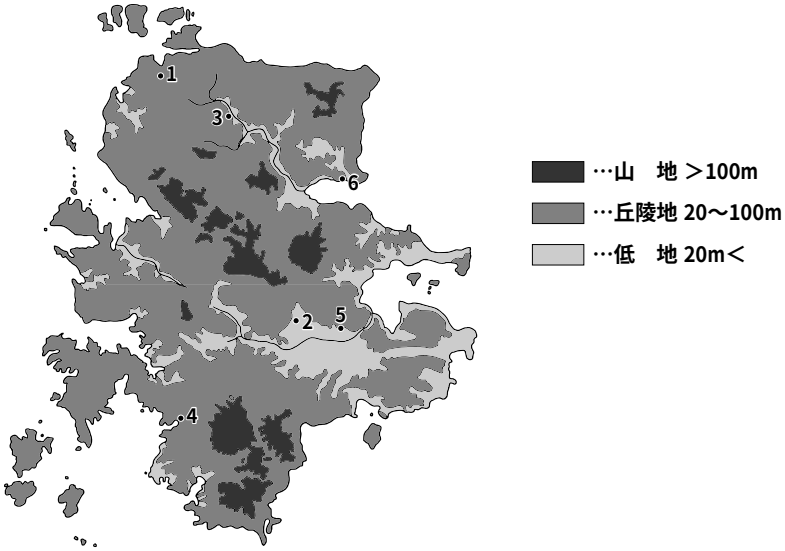


図８　中近世遺跡分布図

表５　中近世遺跡一覧表

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	勝本城跡	― 朝鮮出兵時に豊臣秀吉の命で松浦鎮信が築城　兵站中継基地	―
2	覩城跡	輸入陶磁器 松浦党五氏の佐志氏代官真弓氏の居城 朝鮮貿易の拠点	長崎県教育委員会（1997）
3	文永の役新城古戦場	― 文永の役における戦場 壱岐守護代平景隆らが戦死	―
4	亀丘城跡	― 波多宗無が築城した城郭 近世からの壱岐の中枢部	―
5	壱岐国安国寺跡	― 足利尊氏発願の臨済宗寺 高麗版大般若経を所蔵	―
6	弘安の役瀬戸浦古戦場	― 弘安の役における戦場 壱岐守護代少貳資時らが戦死	―

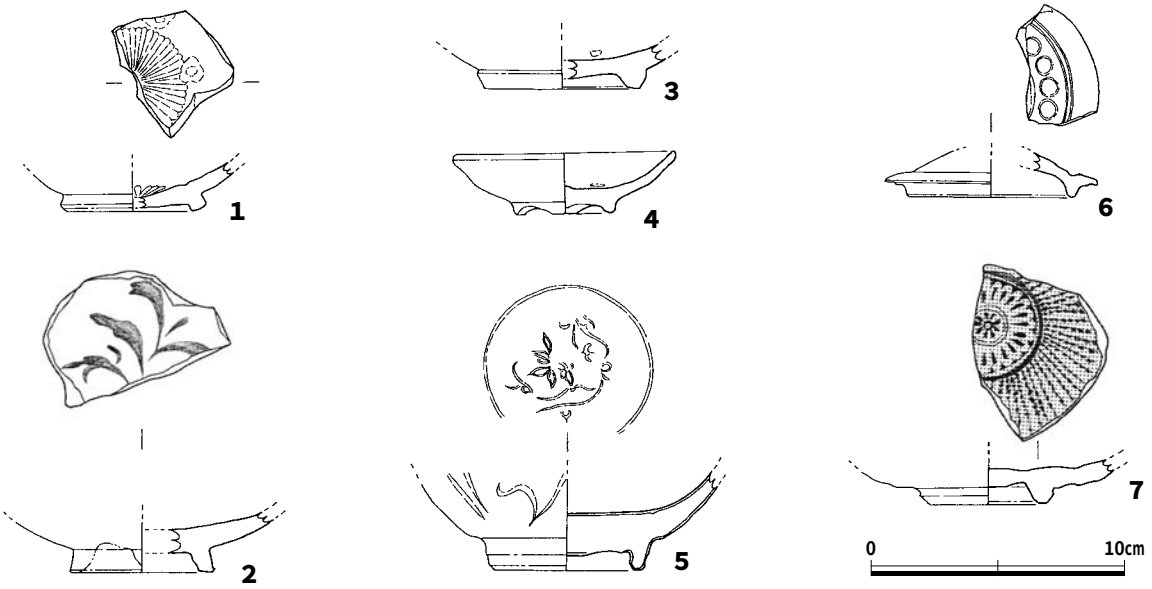


図９　中近世遺物図（1/3　1～3：ベトナム　4～5：中国　6～7：朝鮮）

Ⅱ章　調査に至る経緯

原の辻遺跡は大正年間に松本友雄によって発見された。その後の河川改修工事や耕地整理の際に大量の土器や中国製鏡などが発見され，遺跡の重要性が認識されるようになった。昭和26～36（1951～1961）年には京都大学や九州大学を中心とする東亜考古学会によって学術調査が行なわれた。初の本格的な発掘が行なわれたこの調査では各種鉄製品や貨泉，あるいは韓半島系や楽浪系土器などが出土したことから大陸との関連が強い遺跡として学界で注目を集めた。反面，地元における遺跡への関心は低く，やがて遺跡の位置する丘陵周辺では畑地から水田への転換が進められた結果，遺跡はかなりの損壊を受けた。

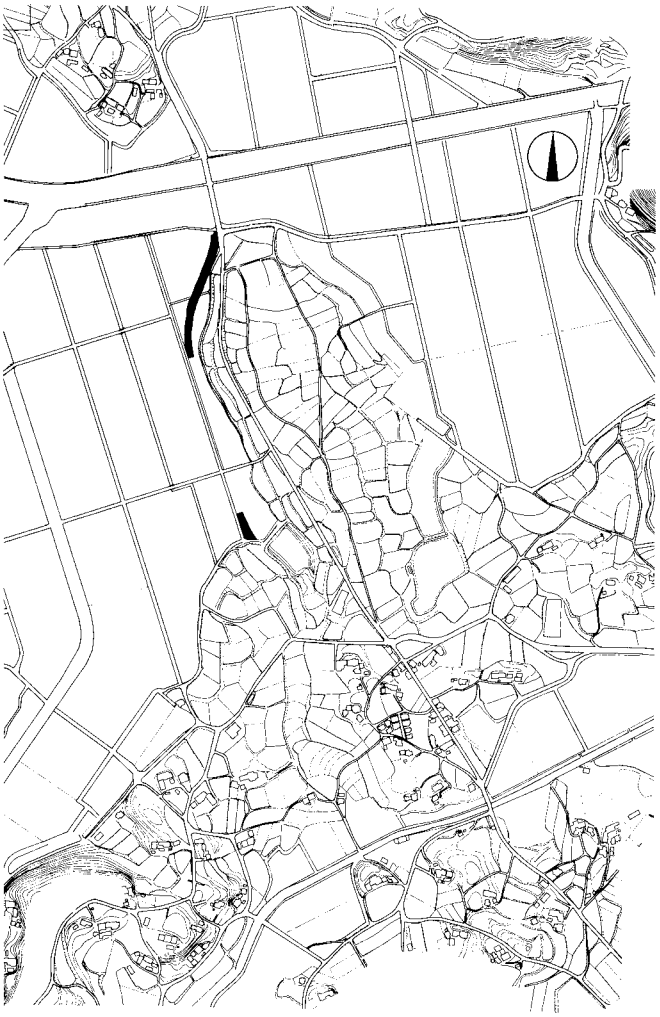


図10　調査区配置図（1/12,000）

昭和49年（1974）には石田大原地区における水田化改良工事にともなう発掘調査で墓域が確認された。この墓域は弥生時代前期末から中期を中心とする箱式石棺墓および甕棺墓から構成されており，区画溝を伴う本格的な墓域として注目された。この調査を受けて昭和50～52年度（1975～1977）に範囲確認調査が実施され，遺跡の範囲が舌状台地の南側まで広がることが確認された。

平成に入ると幡鉾川流域総合整備事業にともない，舌状台地周辺の低地部を中心に広範囲な発掘調査が行なわれた。これにより原の辻遺跡が台地周辺の低地部に幾重にも環濠を巡らす，遺跡規模約100㌶にもおよぶ巨大環濠集落であることが判明した。平成７年（1995）以降は集落構造の把握を目的とした範囲確認調査が実施された。これまでの調査により環濠の外側に墓域が確認され，丘陵上の調査においては多数の竪穴住居跡とともに，丘陵の最高地から掘立柱建物を中心とする祭儀場跡が発見された。また低地部の調査も継続して行なわれ，複雑に巡る環濠の様相が明らかになるとともに，各年度の調査で確認された環濠間の繋がりについて検討可能な基礎資料を得ることとなった。

また芦辺町教育委員会によって平成11年（1999）から，また石田町教育委員会によって平成13年（2001）から遺跡整備にともなう発掘調査が行なわれている。芦辺町は丘陵部を中心に調査を行ない，多数の住居跡や権（秤の錘），青銅製ヤリガンナ，中広銅矛や鋳型などを確認している。また石田町は大原・大川地区の墓域を中心に調査を行ない，甕棺墓22基，多紐細文鏡や細型銅剣など，豊富な遺物を確認している。現在は壱岐４町（他に郷ノ浦町・勝本町）の合併により誕生した壱岐市教育委員会に発

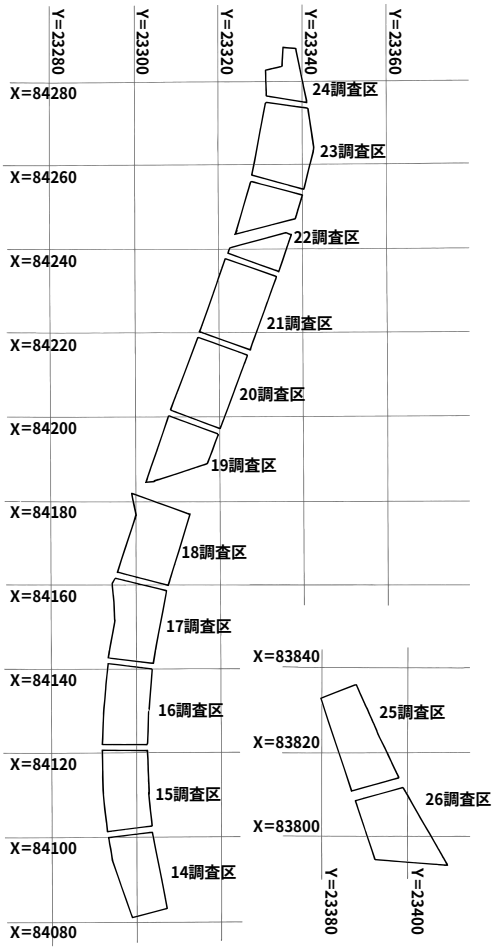


図11　調査区設定図（1/1,800）

掘調査が引き継がれている。

主要地方道勝本石田線は現在遺跡の丘陵部西側を南北に走っているが，幅員が狭く，老朽化も進んでいるため，改良工事に向けての協議が平成５年度（1993）から行なわれた。改良工事に当たっては既存の県道を拡幅する案も検討されたが，丘陵部では重要な遺構が出土する可能性もあり，また将来的に遺跡整備を行なう際の支障となる恐れがあることから，丘陵西側低地部に新道を取り付ける案で合意した。

その間，遺跡の発掘調査では船着き場跡などの重要遺構が次々に発見され，平成９年（1997）には国史跡となり，その３年後の平成12年（2000）には異例の早さで国特別史跡に指定されるに至った。

県道改良工事に伴う調査は平成14年度（2002）から実施され，2,400㎡の調査が行なわれた。当初3,200㎡の予定であったが，水利権が解決していないため調査できない区域が約600㎡存在している。この区域については工事着工直前に調査を行なうことで壱岐支庁建設課道路班と合意している。

H14県道調査（**福田・小玉2004**）では環濠１条・河道２条・溝１条などが確認されている。このうち今年度調査と関連すると思われる遺構としてはSD２，SD３，SD８をあげることができる。

SD２は１～２調査区で南北軸に検出された環濠で幅３㍍，深さ1.2㍍で二段堀りで逆台形の様相を呈している。環濠構築時は出土遺物より弥生時代後期と思われ，自然埋没した後に古墳時代前期には溝として機能していたと思われる。

SD３は弥生時代終末から古墳時代前期の溝で，SD２の西側に平行するように検出され，２調査区においてSD２と合流する。その合流点の北側には粘土や扉材を利用した堰が構築されており，北側の細い引込口に引水したものと思われる。この引込口の北側（３～４調査区）には足跡状遺構が検出されている。検出時は不定型であるが，掘り下げてると偶蹄目の蹄状となる。おそらく古墳時代から古代にかけての水田跡と思われるが，畦畔などは確認されていない。

SD８は13調査区で確認された河道で，９～10調査区で確認されたSD４・５が一旦東側（台地側）に抜け，再び13調査区で現れたものと判断される。傾向としては上部砂礫層に古墳時代初頭，下部粘土層に弥生時代後期の遺物が包含されているが，弥生時代中期の遺物も混在していることから時期判断が難しい状況にある。SD８西縁の淡灰黒色土の帯がSD８に切られていることから，この淡灰黒色土を弥生時代中期の溝と捉え，その遺物がSD８に混入した可能性が報告書では示唆されている。

以上の経緯のもと，今年度の調査に着手した。

Ⅲ章　調査の概要

本年度調査ではH14県道調査（**福田・小玉2004**）における13調査区の北側に14調査区から24調査区までの10調査区を，またH14県道調査における１調査区の南側に25・26調査区の２調査区のあわせて12調査区を設定した。H14県道調査同様に約20㍍間隔を一調査区とし，調査区間に１㍍の土層観察用ベルトを残した。さらに調査区中央部の遺構検出面にもベルトを設定した。掘下げに際しては重機による表土はぎの後に調査区の南北壁に約１㍍幅のトレンチを掘削し，土層堆積状況を確認しつつ行なった。

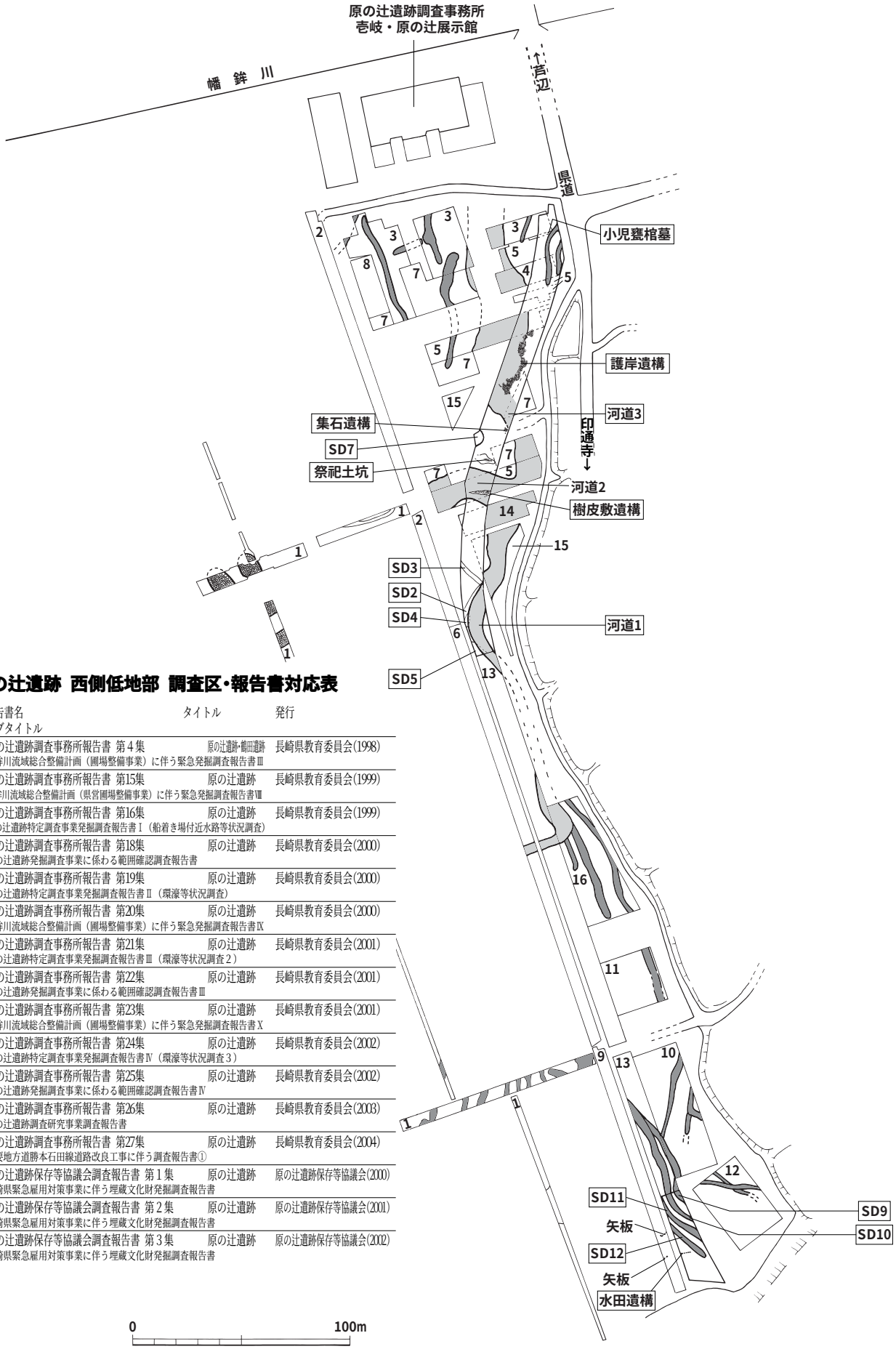
西側低地部では過去の調査で多くの河道や環濠が確認されている。そのため今年度の調査では新たに確認される遺構と，過去の調査で確認されている遺構等との関係・繋がりを考慮しながら調査する必要があった。また緊急調査の性格を考えれば，過去の調査の検証も重要な課題と思われた。そのため過去の調査区と交錯する区域では，過去の調査区と掘り下げられた遺構を再度検出して座標測量を行ない，必要と判断した場合はさらなる掘下げを行なった。調査面積は3,100㎡で，調査期間は平成15年６月９日から平成16年２月25日までの約９ヶ月を要した。低地部であるため雨天後には丘陵部の雨水がフローし，排水作業に手間取りながらの調査が続いた。調査区全体で河道３条，溝状遺構９条，護岸遺構１基，樹皮敷遺構１基，祭祀土坑１基，水田遺構１基，集石遺構１基，甕棺墓１基などを確認した。遺物は取り上げの際に３次元座標による測量（ドットマップ作成）を行なった。

河道１は14調査区および15調査区南側にかけて確認された。砂礫層が多く，弥生時代前期後葉から古墳時代初頭にかけての土器片が多数出土した。流量豊かな時期の存在を土層から観察できるが，堆積状況は複雑で，かなり撹乱した状況が想定された。

河道２は17・18調査区で確認された。西側から丘陵側に向かって流れ，河道１と合流することが想定される。この河道２からは丹塗土器や木製品が多量に出土した。H11特定調査（**杉原2000**）においても貨泉・鉄斧・車馬具・卜骨などが出土していることから，この区域が祭儀的空間として機能していたことが想像される。また河道２の南北では特徴的な遺構が確認された。まず南で確認されたのが東西軸に植物繊維を敷き詰めた遺構である。素材は不明だが，樹木の外皮のような様相であるため樹皮敷遺構として報告している。また北では土坑が確認された。この土坑は東西軸に細長く，底に列石を敷き，中央部に杭を配置する特殊な形状を示している。河道２で見られる祭祀的性格と土坑には密接な関係があると思われることから，祭祀土坑として報告している。

河道３は20調査区で南側の立ち上がりを確認した。この河道３は河道１および河道２と三叉路のように合流することが判明している。この河道３の東側で確認されたのが石組みの護岸遺構である。この遺構は20・21調査区で確認され，当初は検出標高が高いことから比較的時期の新しい遺構と思われた。しかし土層堆積状況を検討した結果，弥生時代中期後半の遺構と判断するに至った。

溝状遺構としたSD２～５，SD７，SD９～12，畦畔遺構や集石遺構，小児甕棺墓はその他の遺構として報告している。また重機による表土はぎを行なっているため，雨天後に排土内から特徴的な遺物を多数検出している。これらはその他の遺物として報告している。



原の辻遺跡 西側低地部 調査区・報告書対応表

番号	本文略称	報告書名 サブタイトル	タイトル	発行
1	H８河川	原の辻遺跡調査事務所報告書 第４集 幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う緊急発掘調査報告書Ⅲ	原の辻遺跡・島田遺跡	長崎県教育委員会(1998)
2	H10農道	原の辻遺跡調査事務所報告書 第15集 幡鉾川流域総合整備計画（県営圃場整備事業）に伴う緊急発掘調査報告書Ⅷ	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(1999)
3	H10特定	原の辻遺跡調査事務所報告書 第16集 原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅰ（船着き場付近水路等状況調査）	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(1999)
4	H11国補	原の辻遺跡調査事務所報告書 第18集 原の辻遺跡発掘調査事業に係わる範囲確認調査報告書	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(2000)
5	H11特定	原の辻遺跡調査事務所報告書 第19集 原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅱ（環濠等状況調査）	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(2000)
6	H11農道	原の辻遺跡調査事務所報告書 第20集 幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う緊急発掘調査報告書Ⅸ	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(2000)
7	H12特定	原の辻遺跡調査事務所報告書 第21集 原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅲ（環濠等状況調査２）	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(2001)
8	H12国補	原の辻遺跡調査事務所報告書 第22集 原の辻遺跡発掘調査事業に係わる範囲確認調査報告書Ⅲ	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(2001)
9	H12農道	原の辻遺跡調査事務所報告書 第23集 幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う緊急発掘調査報告書Ⅹ	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(2001)
10	H13特定	原の辻遺跡調査事務所報告書 第24集 原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅳ（環濠等状況調査３）	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(2002)
11	H13国補	原の辻遺跡調査事務所報告書 第25集 原の辻遺跡発掘調査事業に係わる範囲確認調査報告書Ⅳ	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(2002)
12	H14国補	原の辻遺跡調査事務所報告書 第26集 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(2003)
13	H14県道	原の辻遺跡調査事務所報告書 第27集 主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書①	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(2004)
14	H11雇用	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書 第１集 長崎県緊急雇用対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	原の辻遺跡	原の辻遺跡保存等協議会(2000)
15	H12雇用	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書 第２集 長崎県緊急雇用対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	原の辻遺跡	原の辻遺跡保存等協議会(2001)
16	H13雇用	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書 第３集 長崎県緊急雇用対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	原の辻遺跡	原の辻遺跡保存等協議会(2002)

図12　丘陵西側低地部遺構配置図（１/2,500）

Ⅳ章　遺構と遺物

１．河　道　１

⑴　検出状況（図13）

14調査区から15調査区南側にかけて検出した。幅約7.7㍍深さ約0.5㍍で，川底の標高は4.7㍍を測る。やや西に湾曲しつつ東に向きを変え，やがて丘陵部側に抜けていく。この河道１は南では H15県道（**福田・小玉2004**）SD８と，北東は H12雇用（**小石2001**）SD02および SD03とつながると判断した。土層観察から H12雇用 SD02と SD03が重なっていると思われ，結果として１つの河道として捉えることになった。

今回の調査では古墳初頭の遺物が川底から出土するなど，流路変更などによる撹乱の可能性が考えられ，河道１の時期判断が難しい状況にある。H12雇用の報告では SD02を弥生後期～古墳初頭，SD03を古墳～古代と捉えている。堆積状況から H12雇用が時期判断に都合がよいと思われ，これを追認することとする。

しかしながら２点において疑問点を指摘しておきたい。まず１つは河道１出土の遺物は弥生中期が

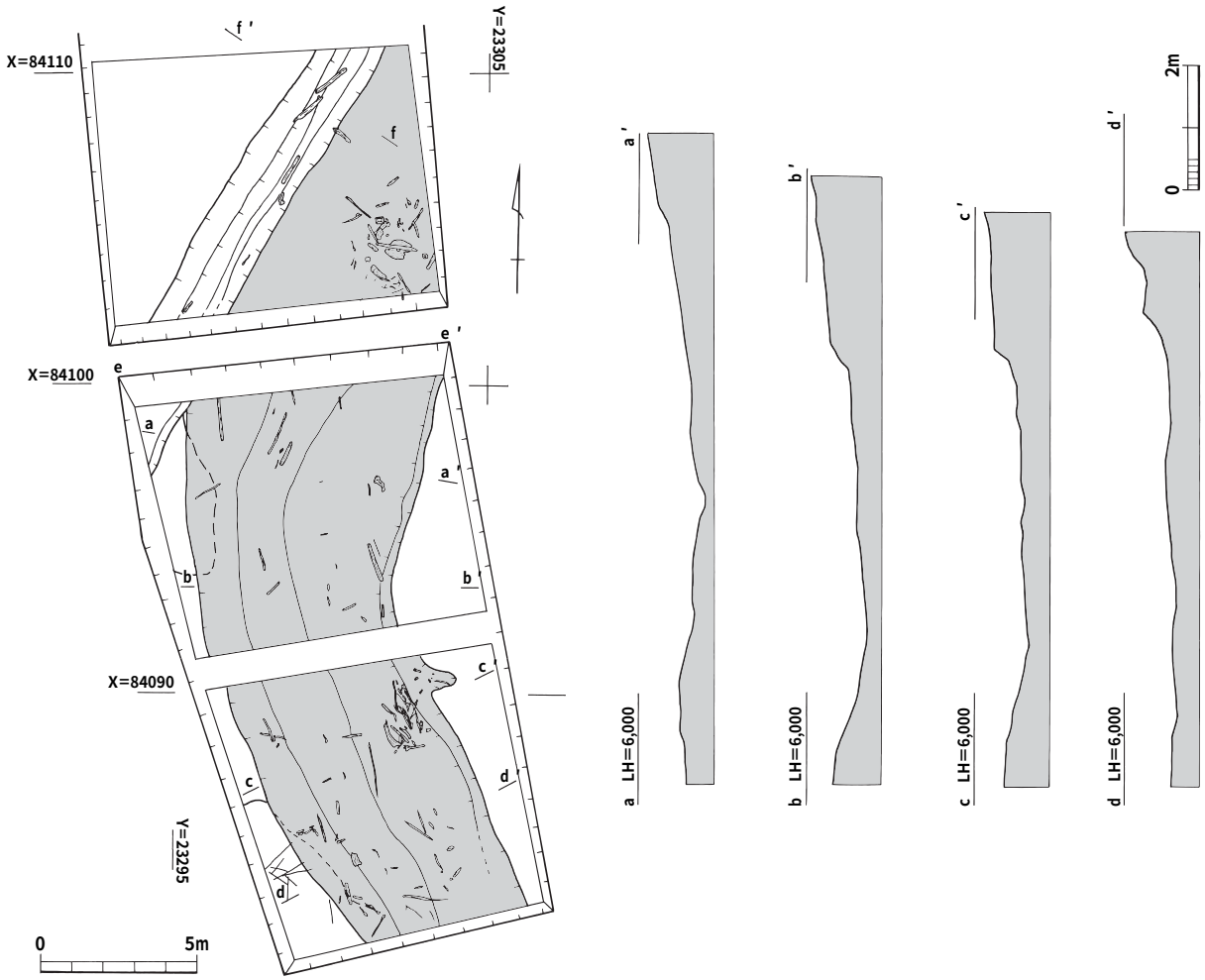


図13　河道１平面図（左１/240）および断面図（右１/120）

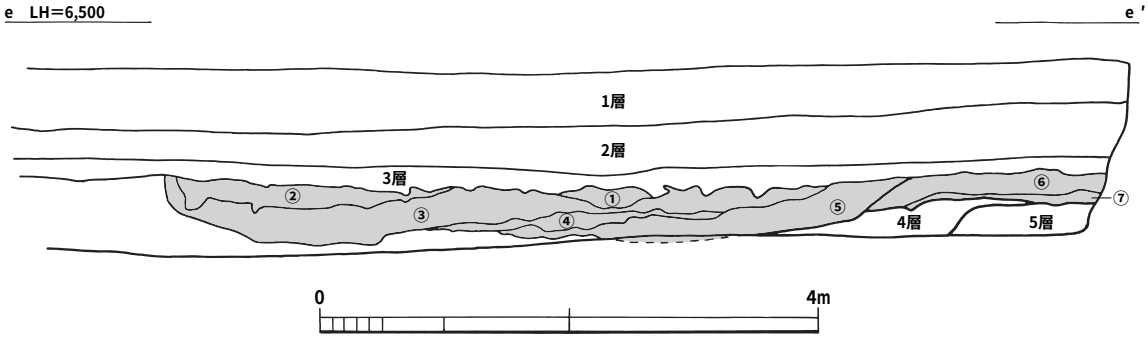


図14　河道１土層図（１/60）

圧倒的に優勢であることである。H12雇用 SD02・SD03でも弥生中期の遺物が検出され，これらを下層にある旧河道（弥生前期～後期）からの混入と捉えているが，混入とするには検出数が多い。２点目は地山直上堆積層の⑥層から弥生中期～後期のまとまった時期の遺物を検出したことである。上記とも関係するが，弥生中期が下層からの混入であれば⑥層に混じることはあり得ない。東側丘陵部からの供給とも考えられるが，すでに削平を受けているため可能性の域を出ない。以上のことから，河道１の成立が弥生中期である可能性を提起しておく。また弥生中期の遺物が多数検出される状況は，すでに削平を受けた東側丘陵部を検討する際の資料となり得ることも付け加えておく。

⑵　土　　層（図14e-e'）

１層は表土で，２層は近世，３層は中世の水田面と思われ，粘質土層で赤褐色の鉄分と思われる斑が多量に混入する。４層・５層は岩盤状の土層で地山ととらえた。

次に河道１の充填土について説明する（**表６**）。

表６　河道１土層観察表

層位	土層色質調	観察注記
①層	赤灰色砂礫層	粗い砂と２～３㌢大の小礫で構成され，強固にしまっている。何らかの人工的な遺構かと思われたが，その性格については確認できなかった。なお①層は H12雇用 SD03に堆積する赤褐色砂層に対応すると判断した。
②層	漆黒色粘質土層	すぐに終息するため落ち込みと思われる。須恵器の破片が検出されている。
③層	黒褐色粘質土層	弥生中期中葉～古墳時代初頭の遺物が検出された。有機物を多く含むため，流量の少ない流路であったと思われる。
④層	砂礫層	５～10㌢大の礫を多く含む砂礫層で最も遺物を多く含む。河道１がこの時期に比較的流量のある河道として機能していたことを示唆する。含有遺物は弥生中期～古墳初頭であるが，弥生中期が圧倒的に多く，取り上げた土器片の約８割を占めた。弥生前期後葉が１点検出されたが混入ととらえた。なお④層は色調で上層の黄橙色砂礫層と下層の青灰色砂礫層に分層できたが，土質は同じであるため１つの層位として捉えた。また④層は H12雇用 SD02中層の黄褐色砂層および黒色砂層に対応すると判断した。
⑤層	漆黒色粘質土層	木片を多く含み，弥生中期～古墳初頭の遺物を含む。すぐに終息するため②層同様に落ち込みであったと思われる。
⑥層	淡灰色粘質土層	ややしまった粘土質にマンガンと思われる赤色斑が混入する。東側地山の上に堆積し，河道１の充填土の中で最も安定した堆積状況を見せる。含まれる遺物は弥生中期中葉～後期初頭が主で時期的なまとまりを見せる。
⑦層	地山層	玄武岩の風化礫層ととらえた。

土層から見る河道１は，氾濫により流路を変え，また一方で丘陵部から土砂の供給を受けるなどしながら，かなり複雑な堆積環境の中で形成されたと思われる。砂礫層である④層から比較的流量が豊

富であった時期も存在すると思われるが，その時期は特定できない。H12雇用から弥生後期～古墳初頭にかけてと思われるが，あまりにも弥生中期の遺物を多く含む点に疑問が残る。全体的には有機物を多く含んだ粘土層で構成されるため，流量の少ない澱みのある流れであったと思われる。

⑥層は地山上に堆積し，含まれる遺物も弥生中期～後期と時期的なまとまりを見せているため，最も安定した層位と捉えた。そこで⑥層を基準に河道１の堆積段階を検討すると，弥生中期～後期にかけて⑥層の流路が成立し，弥生後期～古墳初頭にやや西側に⑥層を深く掘り込むように⑤層の流路が形成される。その後，東側丘陵部から大量の弥生中期土器片をともなった土砂が供給されて④層を形成し，古墳以降には③層・②層と漸次西側に移動しながら流路が形成されると考えられる。

H12雇用における旧河道は15調査区トレンチ（**図15f-f'**）のみの確認であった。このトレンチは調査終了間近に掘削したため，十分に調査することができなかったが，15調査区では河道１の下部にもう１つ流路があると思われ，H12雇用における旧河道に対応すると判断した。これを河道１’とし，下記に土層を説明する（**表７**）。しかし14調査区では河道１の下部に別の流路があるとは思われなかった。そのため，この河道１’は南下せずに西進することが推測される。その場合，H10農道（**西1999**）における２号旧河道とつながる可能性もあるが，土層のみから判断することは困難である。

表７　河道１’土層観察表

層位	土層色質調	観察注記
１層	灰白色硬質粘質土層	14・15調査区における遺構検出面。
２層	淡茶褐色粘質土層	
３層	茶褐色粘質土層	有機質が多く，沈殿するように堆積したと思われる。
４層	オリーブ色粘質土層	片を多く含む。
５層	淡灰白色粘質土層	
６層	暗茶褐色粘質土層	均質な堆積を見せる。
７層	暗灰褐色粘質土層	炭化木片を含む。
８層	淡灰褐色粘質土層	炭化物を含むやや硬質な粘土層。
９層	淡灰褐色粘質土層	８層に似るが，間に炭化物層が介在するため分層した。
10層	茶褐色粘質土層	有機質を含む。
11層	灰青色粘質土層	有機質を多く含み，粘質が強い。灰青色の砂粒も若干含まれる。
12層	淡灰青色砂礫層	上部はやや青みがかった色調で粒子が細やかであるが，下部では橙色となり粒子は粗い。何回かの堆積があったものとみえ，間に粘土層をはさむ。上部には流木が多く，若干の土器片と黒色頁岩の扁平片刃石斧，また加工痕が認められる木製品も確認した。いずれも弥生時代の範疇のものであり，特に石斧はその石材から弥生前期～中期のものと判断している。
13層	明橙色粘質土層	河道１’の北側立上がり面となる。
14層	玄武岩礫層	河道１’の川底ととらえている。

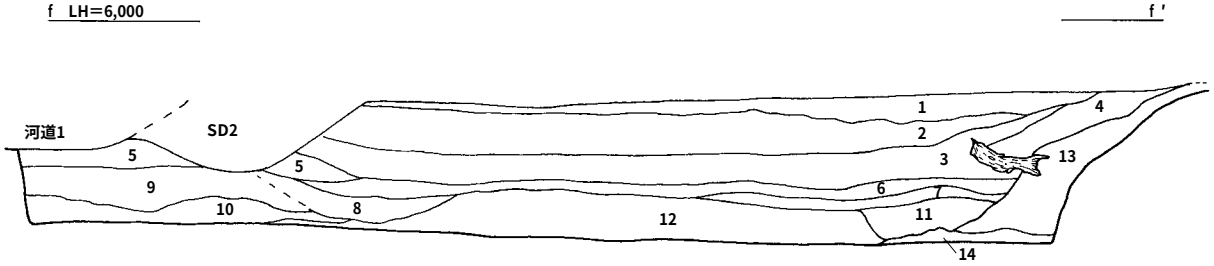


図15　15調査区トレンチ土層図（１/60）

図版１
河道１①
（遺構検出状況　前14調査区　奥15調査区　南から）

図版２
河道１②
（遺物検出状況　15調査区南東部　東から）

図版３
河道１③
（遺構完掘状況　14調査区　南から）

⑶ 出土遺物

①土器（甕）（図16・表８）

河道１における甕はその大多数が口縁部破片のみの出土で，④層からの出土が多い。完形品の出土は皆無である。④層は砂礫層であり，その様相からある程度の流量が想定されるが，検出された土器にはローリングによる摩滅は見受けられない。このことは，④層の遺物が東側丘陵部からの供給である可能性を示唆する。

1は今回の調査で唯一確認された弥生前期後半の土器で口縁部に刻目が施される。**2**は丹塗で逆Ｌ字型の口縁下にM字凸帯が施され，やや口縁が内側に傾斜する。**3**～**6**も逆Ｌ字形の口縁をもつ。**2**～**6**は弥生中期前葉～中葉（須玖Ⅰ式段階）に比定できる。**7**は丹塗で口縁に２つの孔が穿たれており，おそらく蓋が備えられていたと思われる。**8**・**9**は丹塗で鋤先型口縁の下にM字凸帯を施す。ともに口縁部の横ナデや胴部の縦ヘラ磨により丹念に成形されている。特に**9**は口の大きな窄みが特徴的である。**10**・**11**も鋤先型口縁で，口縁内側を摘み出している。**7**～**11**は弥生中期後葉～終末（須玖Ⅱ式段階）に比定できる。

12は丹塗で，裏面にも口縁屈曲部付近まで丹塗が施される。**13**～**15**は「く」の字形口縁で，**15**は頸部表に指オサエにより一段つくられる変形「く」の字形となる。**12**～**15**は弥生後期と捉えた。**17**は後期終末から古墳初頭，**16**，**18**～**19**は古墳期（布留式）と判断される。

表８　河道１出土土器①観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表)　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
1	14　河道１　④　2.5Y６/２　長石・石英　甕　口縁部　口縁部：刻目 表：横ナデ
2	14　河道１　④　5YR６/８　長石・石英・金雲母　甕　口縁～胴部　表：丹塗 表：横ナデ　裏：横ナデ・ハケ目
3	14　河道１　④　10YR４/２　長石・石英　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
4	14　河道１　④　10YR６/３　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
5	14　河道１　⑥　7.5YR６/３　長石・石英　甕　口縁部 表：口縁部付近に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：口縁部付近に横ナデ
6	14　河道１　④　10YR５/２　石英・長石・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：口縁部付近に横ナデ
7	14　河道１　④　2.5YR６/３　長石・石英・金雲母　甕　口縁部　口縁部：穿孔２　表裏：丹塗 表：口縁部に横ナデ　裏：口縁部付近に横ナデ
8	14　河道１　④　5YR５/６　石英・金雲母　甕　口縁部　口縁部：刻目　表裏：丹塗 表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ヘラ磨（暗文様）　裏：横ナデ
9	14　河道１　④　2.5Y６/３　長石・石英・金雲母　甕　口縁～胴部　口縁部：二重沈線　表裏：丹塗 表：口縁部付近に横ナデ・胴部に縦ヘラ磨　裏：口縁部付近に横ナデ
10	14　河道１　⑥　7.5YR６/６　長石・石英・金雲母　甕　口縁～胴部 表：口縁部付近に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：口縁部付近に横ナデ
11	14　河道１　⑥　7.5YR７/４　長石・石英・金雲母　甕　口縁～胴部 表：口縁部付近に横ナデ　裏：口縁部付近に横ナデ
12	14　河道１　④　2.5YR５/６　長石・石英　甕　口縁～胴部　表：丹塗　裏：口縁部まで丹塗 表：ハケ目横ナデ消し　裏：ハケ目
13	14　河道１　④　10YR７/２　長石・石英・金雲母　甕　口縁部　胴部：スス痕 表：口縁部付近に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：横ナデ
14	14　河道１　⑥　2.5YR６/６　長石・石英　甕　口縁～胴部 表：口縁部付近に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ
15	14　河道１　④　10YR６/４　長石・石英・金雲母　甕　口縁～胴部 表：口縁部付近に横ナデ・口縁部下に指オサエ・胴部に縦ハケ目　裏：横ナデ
16	14　河道１　④　2.5YR７/２　長石・石英・金雲母　甕　口縁～胴部 表：口縁部に横ナデ・胴部に横ハケ目横ナデ消　裏：口縁部に横ナデ・胴部に横ケズリ
17	14　河道１　④　5YR５/２　長石・金雲母　甕　口縁～胴部　表：スス痕 表：口縁部に横ナデ・胴部にハケ目　裏：口縁部に横ナデ・胴部にハケ目
18	14　河道１　⑤　10YR６/２　石英・金雲母　甕　口縁～胴部 表：口縁部に横ナデ・胴部に横ハケ目ナデ消　裏：口縁部に横ナデ・胴部に指オサエ・横ケズリ
19	14　河道１　④　2.5Y’６/１　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：口縁部に横ナデ　裏：口縁部に横ナデ・胴部にケズリ

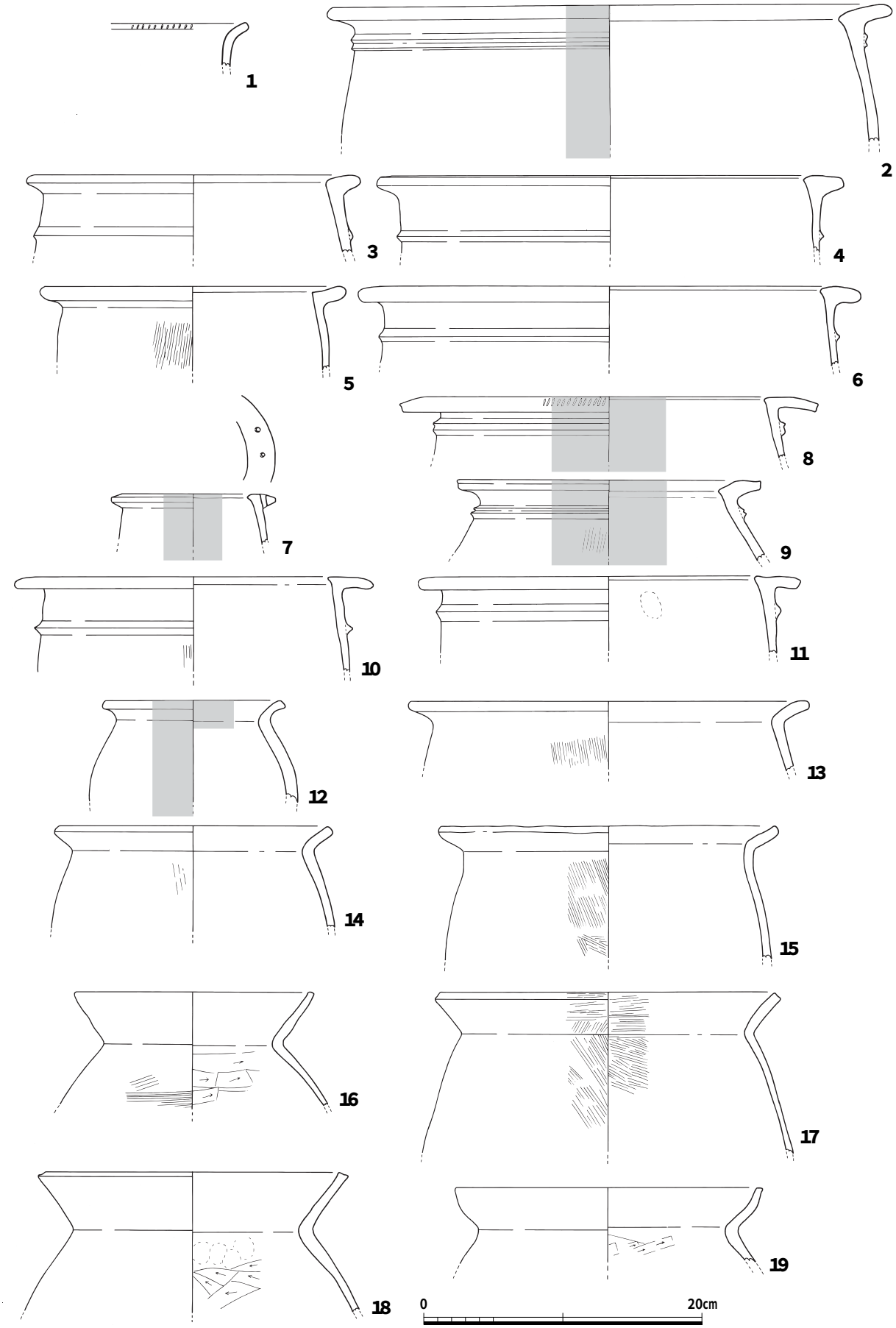


図16　河道１出土土器①（1/4）

②土器（壺）（図17・表９）

河道１における壺も大多数が破片による検出で，完形品は**34**の小型壺のみである。甕同様にローリングによる摩滅は見られない。④層からの出土が大半で，丹塗壺も数点確認されている。

20は丹塗で糸袋状口縁壺の頸部である。M字凸帯を３条廻らし，凸帯間は縦ヘラアテによって暗紋様となる。**21**・**22**は広口壺口縁部で，逆Ｌ字口縁の内側を摘み出している。21には逆Ｌ字形口縁の外側先端に刻目が施されている。**23**・**24**は丹塗の広口壺口縁部である。**23**にはきめの細かい胎土が用いられ，精巧に成形されている。頸部下には上面が平坦となるように三角凸帯が施される。**24**は口縁がやや垂れ下がり，口縁の内側に粘土帯を貼り，摘み出し状に成形している。**25**はM字凸帯を施す壺底部である。**20**～**25**は弥生中期前葉～中期末（須玖Ⅰ式古段階～須玖Ⅱ式新段階）に比定される。

26・**27**は袋状口縁壺口縁部である。**26**は丹塗で，ともに袋部に明瞭な稜線がつくられ，口縁が逆「く」の字に近づく。**28**は頸部下に上面が平坦となるように三角凸帯が施される。**26**～**28**は弥生後期前葉～後葉（高三瀦～下大隈新段階）と思われる。**29**は複合口縁部で北部九州東部系の資料である。**30**は口縁が外反する広口壺で，粘土帯を貼り重ねて口縁部を厚く成形し，口縁外側には刻目を施している。**29**・**30**は弥生後期終末（西新古段階）と思われる。

31～**33**は複合口縁壺で山陰系の資料と思われる。**34**は小型丸底壺で，河道１で唯一完形品として出土した。口縁部から胴部最長径部までは縦ハケ目横ナデ消し，最長頸部下は横ハケ目で調整を行なっている。古墳初頭から古墳前期にかけてのものと思われる。**35**は須恵器で，轆轤を使用し，焼成後の胎土内の色調は小豆色である。７世紀頃のものと思われる。

表９　河道１出土土器②観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表)　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
20	14　河道１　⑥　2.5YR５/６　長石・石英・金雲母　壺　胴部　表：丹塗 表：頸部にヘラ磨（暗文様）・胴部に横ナデ　裏：ナデ・指オサエ
21	14　河道１　④　５Y６/１　長石・石英・金雲母　壺　口縁部　口縁部：刻目 表：口縁部に横ナデ　裏：口縁部に横ナデ
22	14　河道１　④　2.5YR６/４　長石・石英・金雲母　壺　口縁～頸部 表：ナデ　裏：ナデ
23	14　河道１　④　10YR６/２　金雲母　壺　口縁～頸部　表裏：丹塗 表：横ナデ　裏：横ナデ
24	14　河道１　③　2.5YR５/６　長石　壺　口縁部　表裏：丹塗 表：横ナデ　裏：横ナデ
25	14　河道１　④　10YR６/２　長石・石英　壺　胴～底部 表：横ナデ・底部付近にヘラケズリ　裏：ナデ・底部付近に指オサエ
26	14　河道１　④　2.5YR５/６　長石・石英　壺　口縁～頸部　表裏：丹塗 表：口縁部に横ナデ・頸部に縦ハケ目　裏：口縁部に横ナデ・頸部にハケ目
27	14　河道１　⑥　7.5YR６/６　長石・石英　壺　口縁～頸部 表：口縁部に横ナデ・頸部に縦ハケ目　裏：口縁部に横ナデ・頸部にハケ目
28	15　河道１　④　10YR５/５　長石・石英　壺　口縁～胴部　表：スス痕 表：口縁上部に横ナデ・口縁下部から胴部にハケ目　裏：口縁上部に横ナデ・口縁下部から胴部にハケ目
29	14　河道１　④　2.5Y７/２　長石・石英　壺　口縁部 表：口縁部に横ナデ・頸部に横ハケ目ナデ消し　裏：横ナデ
30	15　河道１　④　2.5Y７/３　長石・石英・金雲母　壺　口縁～頸部　口縁部：刻目 表：縦ハケ目　裏：口縁部に横ハケ目
31	14　河道１　④　7.5YR６/６　長石・石英・金雲母　壺　口縁～頸部　頸部：斜向紋 表：横ナデ　裏：横ナデ
32	14　河道１　④　7.5YR７/５　長石・石英・金雲母　壺　口縁～胴部 表：口縁部に横ナデ・頸部に縦ハケ目　裏：口縁部に横ナデ・胴部にヘラケズリ
33	15　河道１　④　2.5Y７/１　長石・石英・金雲母　壺　口縁～胴部 表：口縁部に横ナデ・頸部に縦ハケ目　裏：口縁部に横ナデ・胴部にヘラケズリ
34	14　河道１　③　10YR６/２　長石・石英・金雲母　壺　完形 表：口縁部に縦ハケ目横ナデ消し・胴部にハケ目　裏：口縁部に横ナデ・胴部にハケ目
35	14　河道１　④　N５/(断面2.5YR５/２)　壺　口縁～頸部　陶質土器 表：轆轤使用の回転ナデ　裏：轆轤使用の回転ナデ　表裏とも青灰色　胎土は小豆色

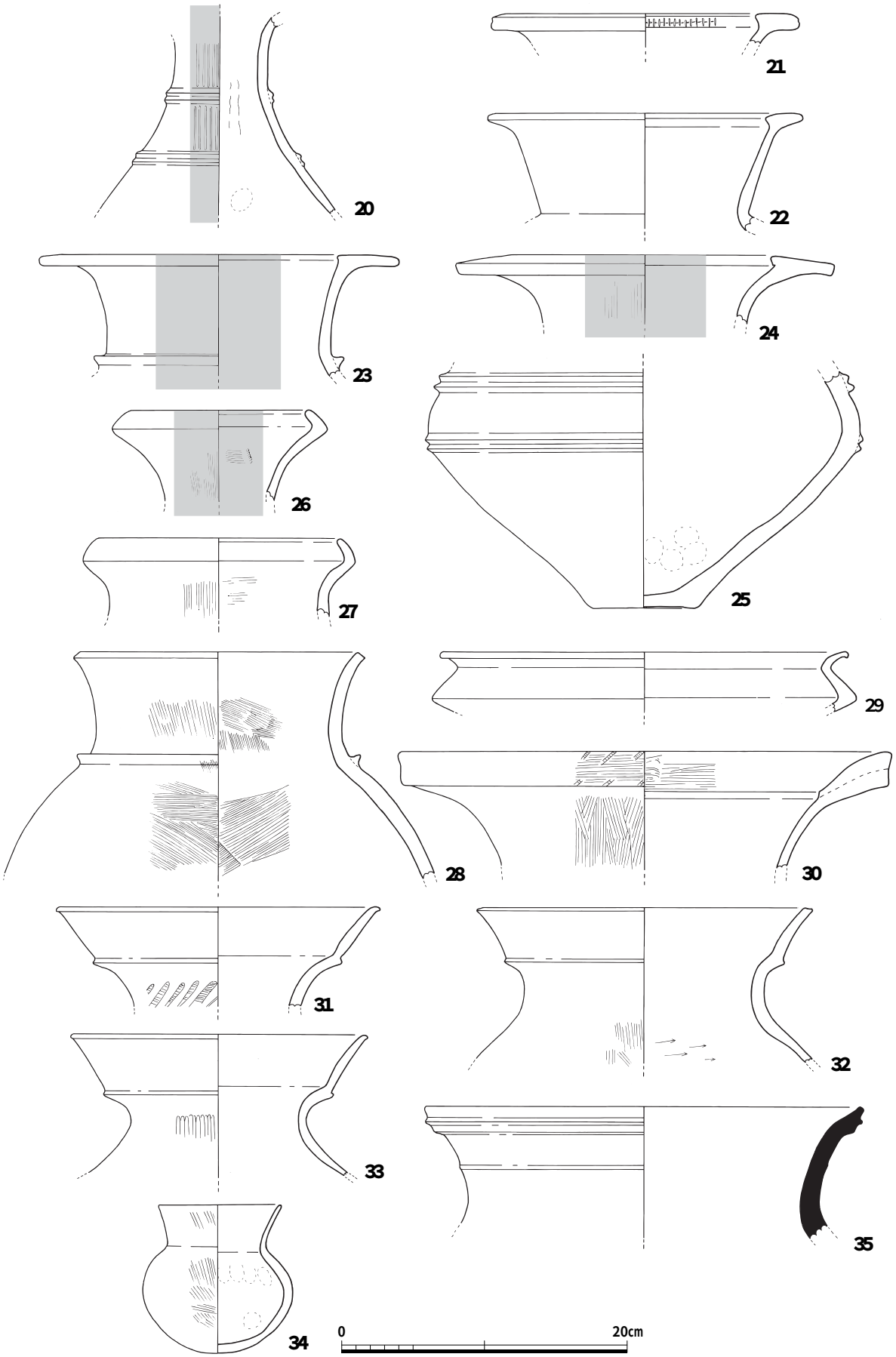


図17　河道１出土土器②（1/4）

③土器（器台・高坏・鉢）（図18・表10）

甕や壺と比較し，器台や高坏，鉢の出土は少ない。甕や壺同様に丹塗のものも数点確認されている。

36～**39**は鼓形の器台である。**36**は胴部の最短径部が上部に位置し，裾部がやや大きい。**37**はくびれが明瞭である。ともに弥生後期の範疇と捉えられよう。**39**は表を横ナデで調整した後に縦ヘラアテで暗紋様を施している。裏はヘラ削りにより薄く成形された跡が残る。古墳前期の山陰系の資料と思われる。

40～**48**は高坏である。**40**は鋤先型の口縁が薄く水平に伸び，口縁内側に粘土帯を貼り付けて摘み出し状に成形している。きめの細かい胎土を使用し，表裏とも丹塗を施す。口縁と三角凸帯の間には丹が乾燥する前にヘラアテを行い，暗紋様を施している。**41**・**42**は鋤先型の口縁で，やや垂れ下がる。口縁下に三角凸帯を施す。**40**～**42**は弥生中期末（須玖Ⅱ式新段階）に比定できよう。**44**は口縁が直立気味に外反しながら立ち上がる。屈曲部にM字凸帯を施し，坏下部の表ではヘラ磨で成形している。弥生後期初頭の資料と思われる。**45**・**46**はいずれも坏部のみであるが，坏部が浅く，坏部上半が外湾しつつ立ち上がる。きめの細かい胎土が使用され，表裏ともヘラアテによる調整が施され暗紋様となる。時期は弥生後期終末に相当すると思われる。**47**・**48**は高坏の脚部である。**47**は脚部の屈曲部やや下に３つの孔が穿たれる。裾部が広く，安定感がある。きめ細かい胎土を使用し，脚部表全面に縦ヘラナデ，裏は屈曲部まで横ハケ目による調整を行ない，端正に仕上げられている。後期後葉と思われる。**48**は１つの穿孔が認められる。屈曲部の上半がややふくらみ，ずんぐりとしている。古墳前期に相当すると思われる。**49**・**50**は鉢である。**50**は丹塗が施され，口縁部は途中から屈曲して垂直に立ち上がる。口縁縁に認められる規則的な波紋状も特徴的である。ともに弥生後期の範疇と捉えている。

表10　河道１出土土器③観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表)　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
36	15　河道１　⑤　10R６／６　長石・石英・金雲母　器台　ほぼ完形　表裏：スス痕 表：縦ヘラナデ　裏：横ハケ目
37	14　河道１　④　2.5Y７／２　長石・石英　器台　口縁部 表：口縁部に横ナデ　裏：指オサエ
38	14　河道１　③　10YR５／２　長石・石英・金雲母　器台　脚部 表：縦ヘラナデ　裏：横ハケ目
39	14　河道１　④　10YR６／４　長石・石英・金雲母　器台　口縁～頸部　鼓型器台 表：横ナデ後縦沈線　裏：横ヘラケズリ
40	14　河道１　⑤　2.5YR５／６　長石・石英・金雲母　高坏　口縁～胴部　表：丹塗・暗文　裏：丹塗 表：口縁部に横ナデ後縦ヘラアテ暗文
41	15　河道１　⑥　10YR６／２　長石・石英・金雲母　高坏　口縁～胴部　表裏：丹塗 表：横ナデ　裏：横ナデ
42	14　河道１　④　10YR５／４　長石・石英　高坏　口縁～胴部　表裏：丹塗 表：横ナデ　裏：横ナデ
43	15　河道１　南トレンチ2　10YR６／３　長石・石英・金雲母　高坏　口縁～胴部 表：横ナデ後縦ヘラ磨　裏：口縁部に横ハケ目横ナデ消し・胴部にハケ目後縦ヘラ磨
44	15　河道１　⑤　５YR７／６　長石・石英　高坏　口縁～脚上部 表：口縁部に横ハケ目横ナデ消し・胴部～脚部：ヘラ磨
45	15　河道１　南トレンチ2　10YR６／３　長石・石英・金雲母　高坏　口縁～胴部 表：横ナデ後縦ヘラ磨　裏：横ナデ後縦ヘラ磨
46	14　河道１　④　10YR５／２　長石・石英・金雲母　高坏　口縁～胴部 表：：縦ハケ目　裏：横ハケ目
47	14　河道１　④　7.5YR６／４　長石・石英　高坏　脚部　脚部：穿孔３ 表：脚部に縦ハケ目後縦ヘラ磨　裏：ハケ目
48	15　河道１　③　7.5Y７／１　長石・金雲母　高坏　脚部　脚部：穿孔１ 表：縦ハケ目後横ヘラ磨　裏：ハケ目
49	14　河道１　④　５YR５／４　長石・石英・金雲母　鉢　口縁～底部 表：ハケ目　裏：ハケ目
50	14　河道１　④　５YR５／６　長石・石英　鉢　口縁～底部　表：丹塗　裏：口縁部に丹塗　口縁部：波文状 表：ハケ目後ナデ　裏：口縁部に横ナデ・底部付近に指オサエ

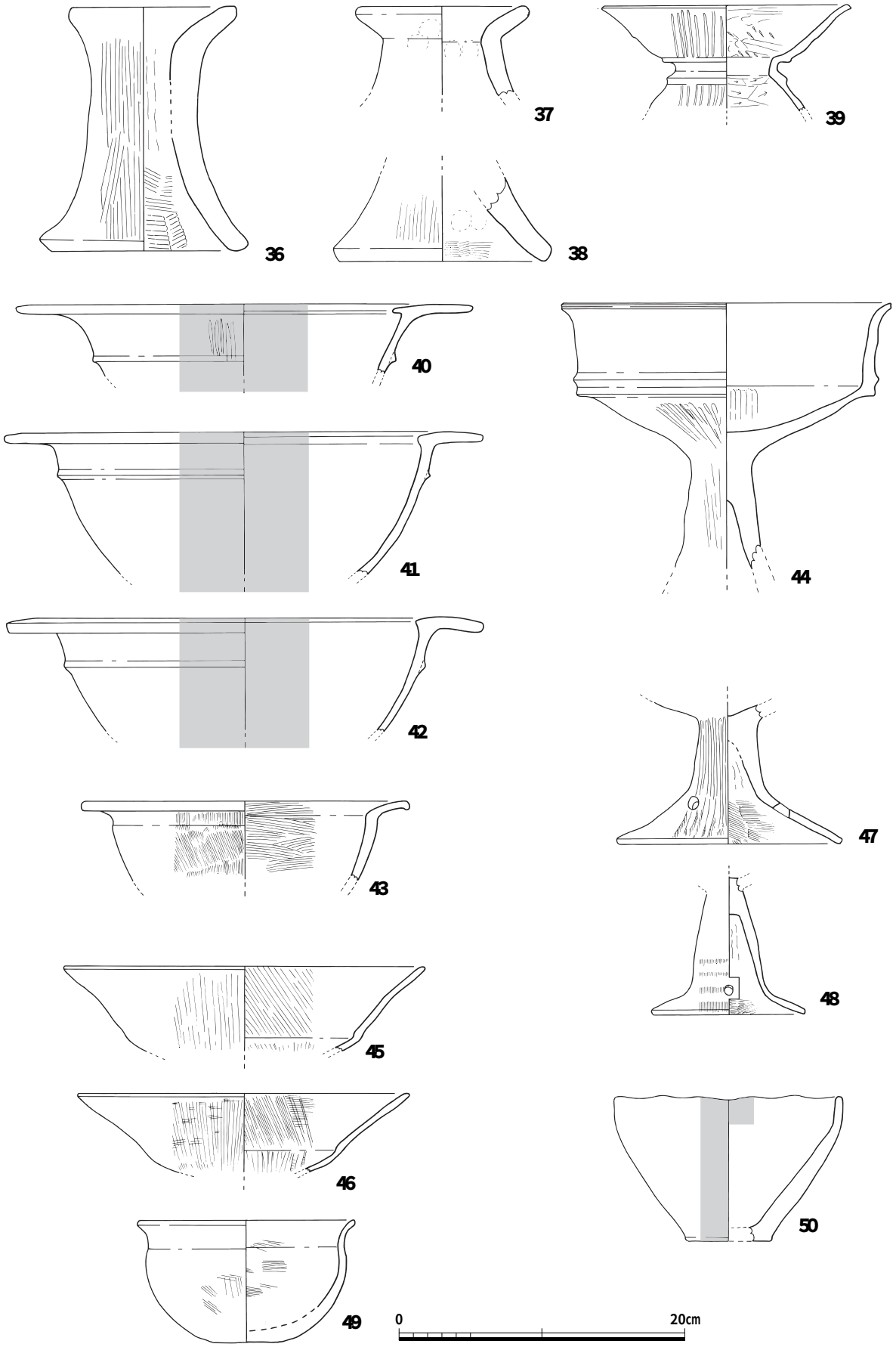


図18　河道１出土土器③（1/4）

④土器（底部）（図19・表11）

底部については弥生中期前半以降は，時期の細分化が困難であるため，大まかな区分での説明とする。古墳期の底部も確認されているが，破損状況が著しかったため割愛した。

51～**55**の底裾部はやや広がり，上げ底となる。底部はほぼ垂直に立ち上がり，胴部とつながる際に屈曲する。表は縦ハケ目によって調整されている。弥生中期前葉（須玖Ⅰ式古段階）に相当すると思われる。

56～**62**は平底となり，緩やかに外湾しながら底部から胴部へとつながる。表は縦ハケ目によって調整される。弥生中期中葉～弥生後期前半としておく。

63～**68**は平底で，緩やかにふくらみながら底部から胴部へとつながる。表は縦ハケ目によって調整される。弥生後期後半としておく。

69～**74**は凸レンズ状底への移行をうかがわせる。弥生後期終末としておく。

表11　河道１出土土器④観察表

報告番号	調査区	遺構	層位	色調番号(表)	胎土	器種	残存状況	備考
	調整手法							
51	14	河道１	④	10YR６/３	長石・石英	不明	底部	
	表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
52	14	河道１	④	10YR５/３	長石・石英・金雲母	不明	底部	
	表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
53	14	河道１	④	５YR７/６	長石・石英・金雲母	不明	底部	
	表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
54	14	河道１	④	2.5YR６/６	長石・石英	不明	底部	裏：スス痕
	表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
55	14	河道１	④	2.5YR６/６	長石・石英・金雲母	不明	底部	
	表：縦ハケ目　裏：ハケ目							
56	14	河道１	④	2.5Y５/２	長石・石英	不明	底部	
	表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
57	14	河道１	④	10YR７/２	長石・石英	不明	底部	
	表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
58	14	河道１	④	7.5YR６/４	長石・石英・金雲母	不明	底部	
	表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
59	14	河道１	④	7.5YR６/４	長石・石英・金雲母	不明	底部	
	表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
60	14	河道１	④	7.5YR６/３	長石・石英・金雲母	不明	底部	
	表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
61	15	河道１	⑨	10YR６/４	長石・石英・金雲母	不明	底部	
	表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
62	14	河道１	④	10YR４/１	長石・石英・金雲母	不明	底部	
	表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
63	14	河道１	④	2.5Y６/２	長石・石英・金雲母	不明	底部	
	表：縦ハケ目　裏：ハケ目ナデ消し指オサエ							
64	14	河道１	④	2.5Y６/２	長石・石英・金雲母	不明	底部	
	表：縦ハケ目　裏：ヘラケズリ							
65	14	河道１	④	５YR４/８	長石・石英・金雲母	不明	底部	表：丹塗
	表：ナデ　裏：ナデ指オサエ							
66	14	河道１	④	10YR５/３	長石・石英	不明	底部	
	表：ナデ　裏：ナデ							
67	14	河道１	④	2.5Y６/２	長石・石英・金雲母	不明	底部	
	表：縦ハケ目ナデ消し　裏：ナデ指オサエ							
68	14	河道１	④	2.5Y６/３	長石・石英・金雲母	不明	底部	
	表：ヘラナデ　裏：ヘラケズリ後ナデ・底部に指オサエ							
69	14	河道１	④	7.5YR５/４	長石・石英	不明	底部	
	表：ヘラナデ　裏：ヘラケズリ後ナデ・底部に指オサエ							
70	14	河道１	④	7.5YR５/１	長石・石英・金雲母	不明	底部	裏：スス痕
	表：ハケ目ナデ消し　裏：ヘラナデ							
71	14	河道１	④	10YR５/３	長石・石英・金雲母	不明	底部	
	表：ヘラナデ　裏：ナデ							
72	14	河道１	④	2.5Y６/２	長石・石英	不明	底部	
	表：ナデ　裏：指オサエ							
73	14	河道１	④	2.5Y６/２	長石・石英	不明	底部	
	表：ナデ　裏：指オサエ							
74	14	河道１	④	2.5Y６/３	長石・石英	不明	底部	
	表：ナデ　裏：指オサエ							

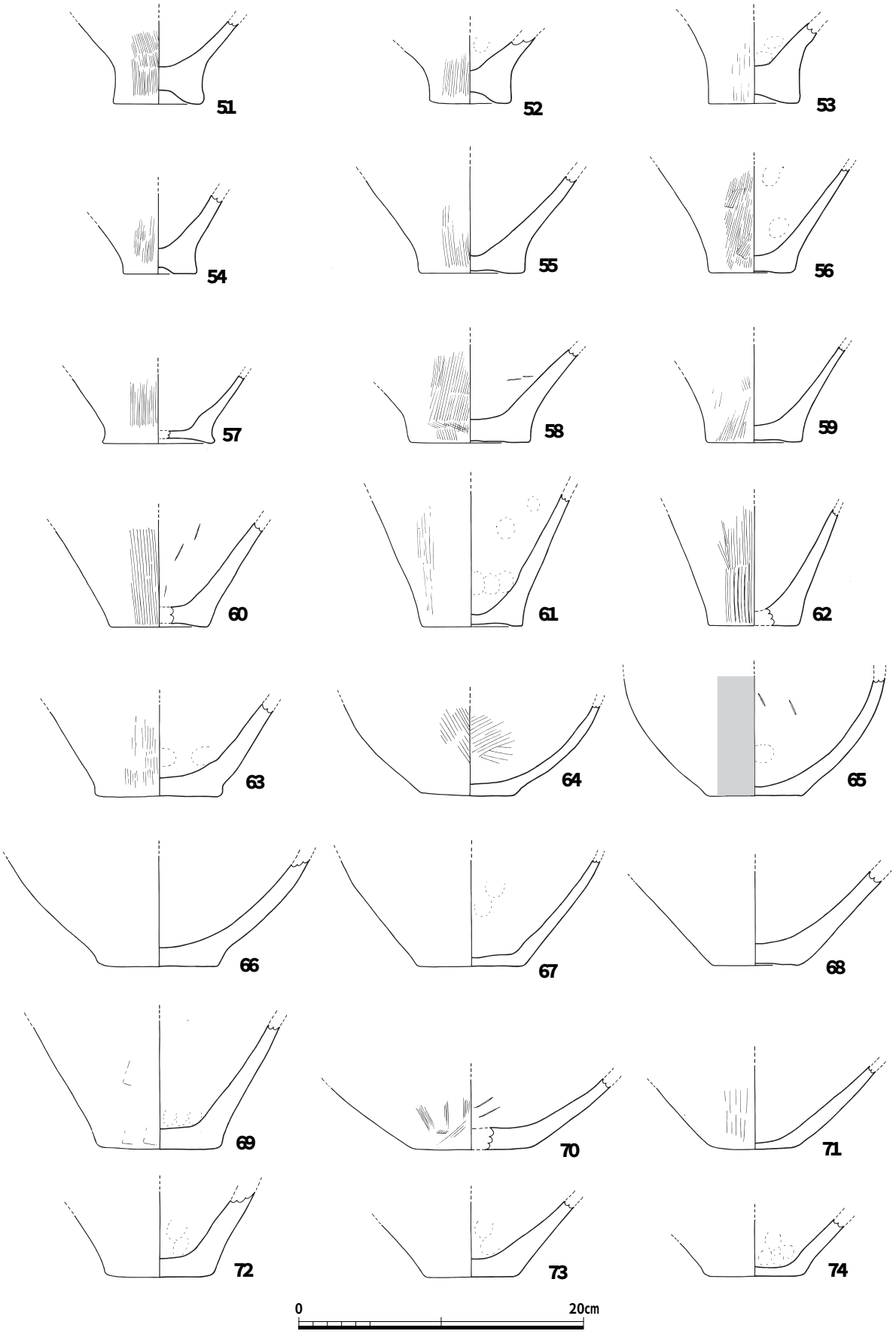


図19　河道１出土土器④（1/4）

⑤石器（図20～21・表12）

1の石庖丁は大型で，孔が下部に位置することから研ぎ減りしていると思われ，本来かなり大型のものと推定される。孔は直径が大きく，穿孔方法は敲打の後に穿孔具によって仕上げをおこなっている。遺跡出土の石庖丁のなかでも大型の部類に入ることや，孔の大きさや穿孔方法において特異な例である。**6**の砥石は良質な頁岩を使用しているが，被熱の影響か全体にヒビ割れが激しい。４面とも緻密な研磨痕が観察されることから仕上げ段階の砥石であろう。**3**・**4**の敲石は中央に窪みをもつタイプで周縁にも敲打痕が観察される。**5**については台石と砥石とを併用している。素材が砂岩であることから，やや粗い段階の砥石として利用したものと思われる。側面は台石として使用されていることから研磨と敲きの一連の作業の中で使用されたものであろう。**7**は凝灰岩製のクド石で，把手部分や全体の形状から規格性が非常に高いが，小型の部類に入る。上下の面取りは平滑で面的に造られている。**8**の石斧は幅広の刃部と扁平なことから，扁平片刃と考えられるが，節理の方向からは扁平片刃石斧の素材の獲得方法が相違することから機能的には，伐採具として機能していたものと思われる。

表12　河道１出土石器観察表

報告番号	調査区	遺構	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	器種	石材
	調整手法								
1	14	河道１	⑤	14.1	4.7	0.5	54.8	石包丁	頁岩
	孔の直径が大きく，敲打と穿孔具とを併用して穿孔する　擦痕が一部認められる								
2	14	河道１	④	6	5.6	0.4	19.6	石鎌	頁岩
	両端欠損　背がやや湾曲する　刃部周辺のみ研磨								
3	14	河道１	④	11.6	11.8	5.1	966.2	敲石	玄武岩
	中央部を中心に敲打痕が広い範囲に集中する								
4	14	河道１	④	11.5	9.1	4.4	799.9	敲石	玄武岩
	表裏ともに深い敲打による窪み痕あり								
5	15	河道１	⑧	18.4	11.7	7.1	2,225.5	砥石･台石	砂岩
	砥石と台石とを併用								
6	15	河道１	⑤	28.4	5	4.4	963.8	砥石	黒色頁岩
	粒子の緻密な頁岩を使用。４面とも研磨痕あり。								
7	15	河道１	④	13.5	11.3	7.8	835.7	凝灰岩	支脚石
	規格性があるがクド石としては小型								
8	14	河道１	④	6.1	7.9	1	78.0	頁岩	石斧
	扁平な片刃石斧　伐採用のものと考えられる								
9	14	河道１	⑤	22.5	8	3.9	874.4	黒色頁岩	石斧
	研磨痕が見られるが，後に再加工する意図があったものと見られ，剥離痕が見られる								

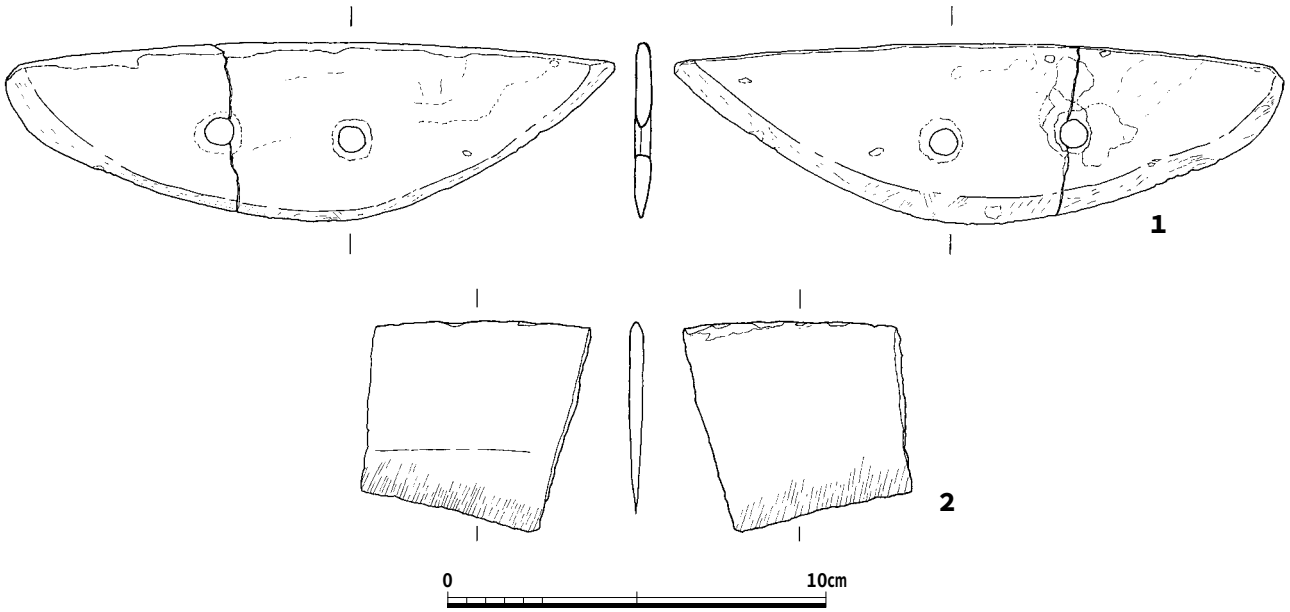


図20　河道１出土石器①（1/2）

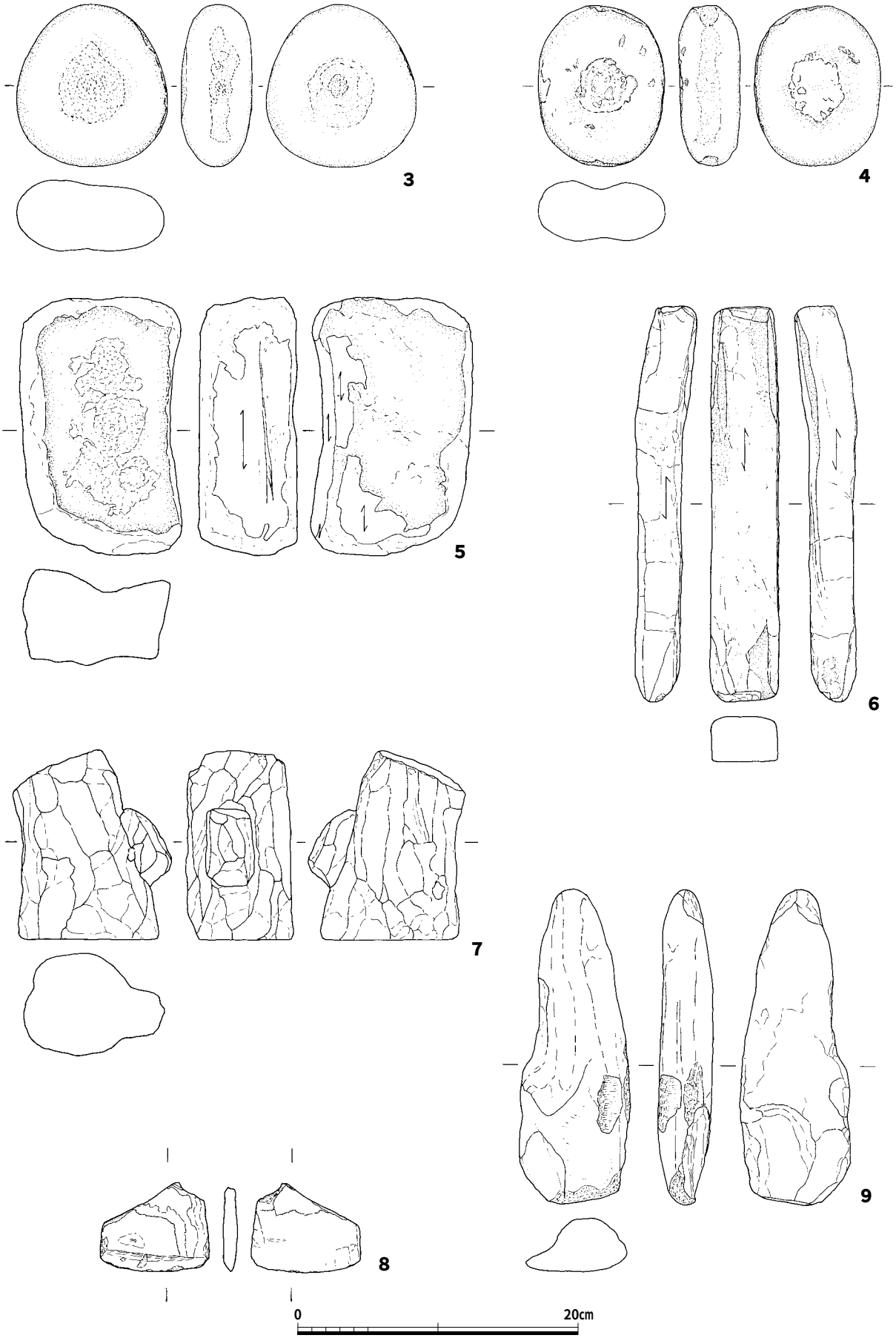


図21　河道１出土石器②（1/4）

⑥木製品（図22～23・表13）

河道１出土の木製品は主に14調査区南側と15調査区南東部で検出されたした。14調査区の木製品は弥生時代に属するものと考えているが，攪乱も多く時期は断定出来ない。これに対して15調査区南東部の木製品は布留式土器と一緒に木製品が投げ込まれた状況を呈しており，いわば廃棄場の様相を呈していたことから，ほぼこの時期のものとして捉えてよいだろう。

1は握部を棒状に加工し，先端は方形状に加工している。この平坦部に１㌢弱の円形の穿孔を施し，何かを取り付けたものと考えられる。あまり朽ちておらず，残存状況が良好である。**2**は先端部を加工し，３㍉程の溝を廻らしている。飾りか紐を結びつけるための溝か，その目的は不明である。**3**は斧屈曲柄である。装着部が先細りしており，袋状鉄斧を装着したと思われる。**4**はほぞ状に円形の凹みが彫り込まれ，先端部にも加工が施されている。凹みは片面が大きく削られ，もう片面は小刻みに削られる。先端部の加工はほぞ穴への挿入部にも見え，建築用の横木としたのかもしれない。**5**は横槌である。握部末端が削り残され，滑り止めとなる。**6**は両面とも加工され，平坦に仕上げられている。ほぞ穴などは見受けられない。

表13　河道１出土木製品観察表

報告番号	調査区	遺構	層位	最大長(㎝)	最大幅(㎝)	器種	備考
1	14	河道１	④	42.3	3.4	不明(柄？)	先端部を方形状に加工し，穿孔を施す
2	14	河道１	南側トレンチ	44.9	2.5	不明(柄？)	先端部に溝を彫り込む
3	14	河道１	南側トレンチ	44.2	13.2	柄	台部の先端が細まる　袋状鉄斧の握部か
4	15	河道１	④	55.2	5.6	建築部材？	ほぞ組状の凹みを彫り込む
5	15	河道１	⑤	27.9	8.1	横槌	柄部末端は滑り止め状に残す
6	15	河道１	⑧	47.2	20.4	板材	両面を削り平坦に仕上げる

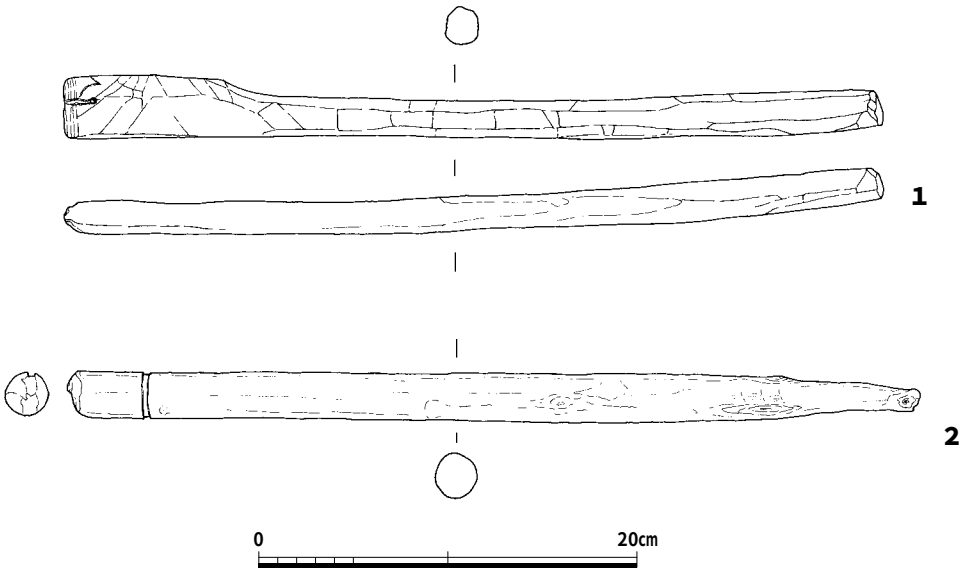


図22　河道１出土木製品①（1/4）

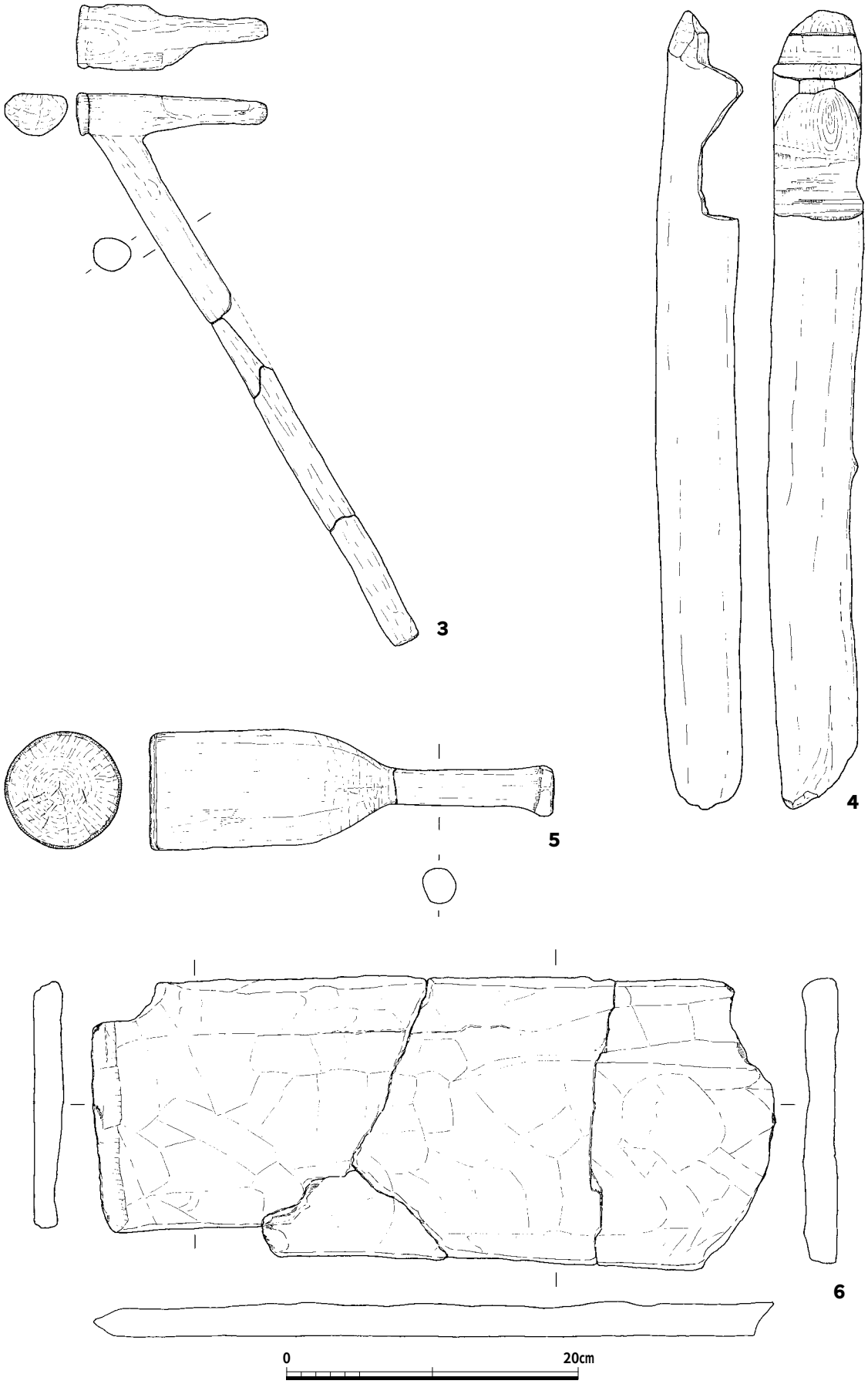


図23　河道１出土木製品②（1/4）

２．河道２・樹皮敷遺構・祭祀土坑

⑴　検 出 状 況（図24）

河道２は17調査区北側～18調査区南側において検出し，南北幅が約13㍍深さ約１㍍で川底の標高は4.1㍍を測り，北西から南東に流れる軸をとる。この河道２はH11特定（**杉原2000**）においてトレンチで確認されている３号旧河道に相当すると思われる。また東側ではH11特定２号旧河道に，西側ではH12特定（**杉原2001**）２号旧河道につながるものと思われ，この一帯が丘陵部の西側を南北に流れる河道と，西から直交するように流れる河道との合流点であることがうかがえる。

H11特定の報告によれば，２号旧河道内では３つの層が確認され，上層は古代，中層は弥生後期から古墳前期，下層は弥生中期から後期と捉えている。特に中層に属し，北側微高地沿いに広がる土器溜からは貨泉４，楽浪系馬車具１，卜骨など特徴的な遺物が出土しており，北側微高地が何らかの祭儀的空間であると判断している。また中層，下層から木を並べて杭を打った遺構が検出され，河道を渡るための施設の基礎である可能性を指摘している。

今回検出された河道２の主要層（上部）からは弥生中期後葉～後期初頭の丹塗磨研土器を中心とする豊富な土器片を検出した。また大量の流木に混在して特徴的な木製品や石器も出土している。このような状況はH11特定２号旧河道や土器溜の検出状況に酷似することから，河道２の上部は２号旧河道の中層から下層に相当すると思われる。また河道２の南岸および北岸で検出された樹皮敷遺構や祭祀土坑が示す特殊性からも，河道２が祭祀に関わる流路であることは明らかである。川幅に対して深度が浅いことや，樹皮敷遺構の構造などから河道２の上部が祭祀を目的として人工的に整備・管理された水路であることが推測される。

また河道２の下部では川幅も狭く，かつ深い河道跡が確認されている。この下部の河道は標高約4.2㍍を測り，これまでの調査で確認された旧河道の川底とほぼ同じ標高を示している。土層からやや南側に曲がりつつH11特定２号旧河道に合流する様相を見せており，河道２上部の祭祀を目的に整備された水路とは異なる軸の流れであったことがうかがえるが，トレンチでの確認のため全体的な調査を行なっておらず，遺物から時期を判断することはできなかった。

『魏志倭人伝』には「其の俗挙事往来に云為する所有れば，輒（すなわ）ち骨を灼きて卜し以て吉凶を占い，先ず卜す所を告ぐ」とあり，行事や往来の際には骨を灼いて占いをしたことが記されている。その起源は諸説あるものの韓半島南部から伝播したことは確実である。H11特定で出土した卜骨は焼灼痕は確認できないものの，神澤氏による第Ⅱ形式（**神澤1990**）に比定され，時期は弥生中期～後期とされる。原の辻遺跡ではこれまでに15点の卜骨が出土しており，内訳はシカ９点，イノシシ４点，不明２点である。ややシカの比率が高いことは韓半島の出土状況と符合する。

水辺に臨んだ祭祀場であれば，東アジア季節風地帯における降雨不安定さゆえの農事・天候にかかわる祭祀が執り行なわれたと思われるが（**佐原1978**），河道２の西側に船着き場があることを思えば，あるいは往来，すなわち交易での無事を祈願する祭りであったかもしれない。

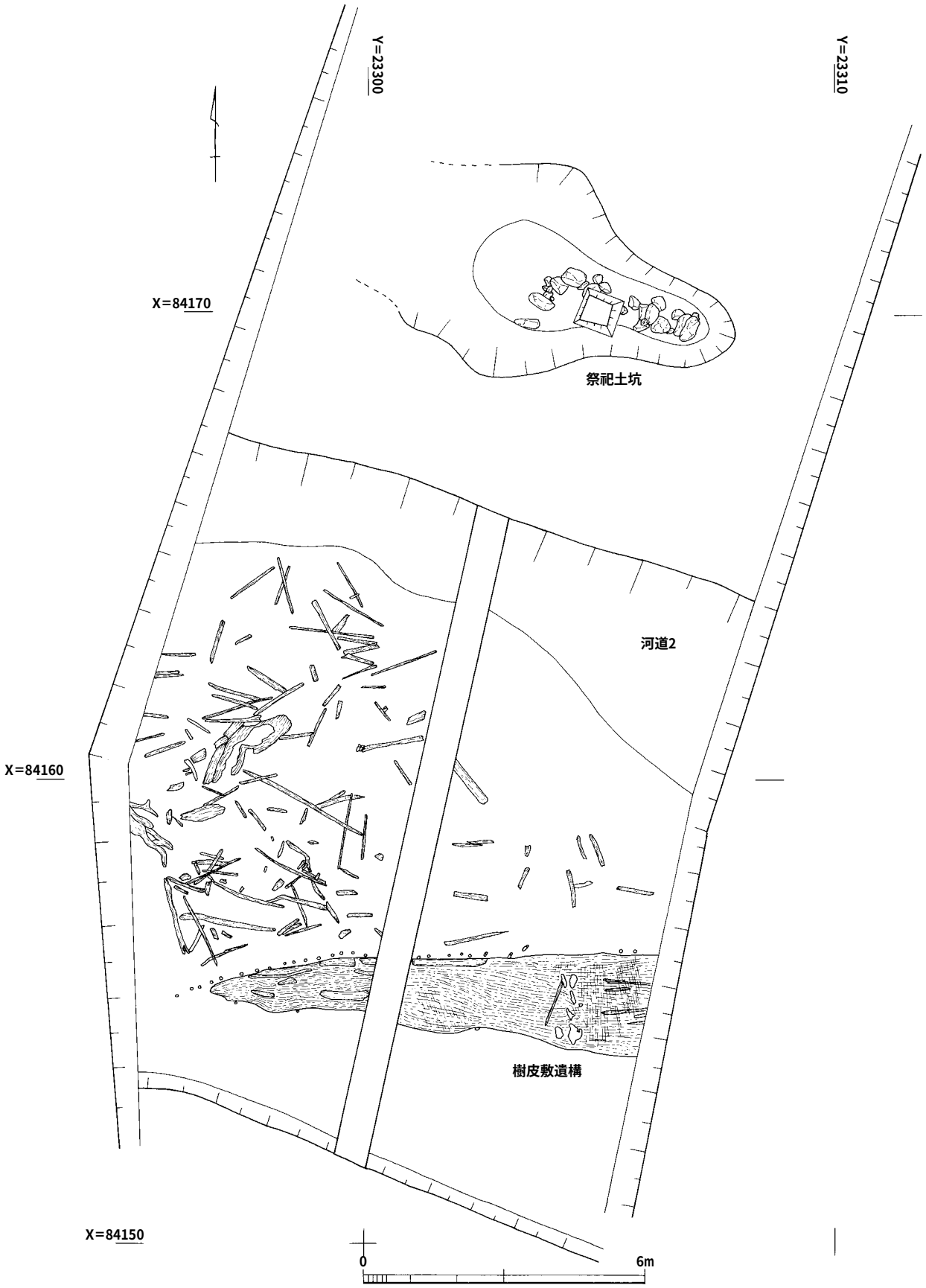


図24　河道２・樹皮敷遺構・祭祀土坑平面図（１/120）

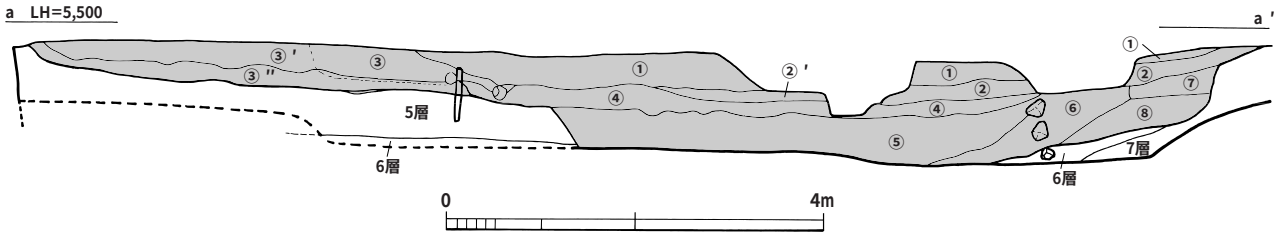


図25　河道２土層図（１/80）

⑵　河道２の土層（図25a-a'）

１～３層は耕作土であるため説明を省略する。４層（黄褐灰粘質土）は遺構検出面で，５層（暗青灰色混砂土）は時間が経過すると褐灰色に変色する。６層（暗灰色粘質土層）および７層（暗青灰色砂岩）は河道２の北側立上がり面と捉えた。

次に河道２の充填土について説明する（**表14**）。

表14　河道２土層観察表

層位	土層色質調	観察注記
①層	暗灰色粘質土層	マンガン粒を含み，やや硬質である。古代から古墳時代の溝によって切られていることから，それ以降のものと判断できる。
②層	褐灰色粘質土層	カーボン粒を含み，弥生中期後葉～古墳前期の遺物を含む。河道２の北岸にあたり，劣化した土器が多く出土した。H11特定における中層に相当する。
②'層	褐灰色混砂土層	カーボン粒や黄灰色の砂粒を含む。遺物は少ない。
③層	白灰色粘質土層	樹皮敷遺構上に堆積した層で，樹皮の上に意図的に盛られた層ととらえられる。遺物は確認されなかったが，④層と同じ時期と考えられる。
③''層	暗灰色粘質土層	①層に似てマンガン粒を少量含む。弥生中期後葉の遺物が少量出土した。樹皮敷遺構を造成する際の埋土と考えられ，時期的にも同様と判断した。
③'層	褐灰色粘質土層	樹皮の下に堆積する層だが，③'層と同様，樹皮遺構構築にともなうものと判断している。弥生中期後葉の遺物を少量含む。
④層	褐灰色混砂粘質土層	多量の流木，木製品，土器，石器が出土し，祭祀が行なわれていた時期の河道２の流路。弥生中期後葉から後期初頭と判断している。H11特定における下層に相当する。
⑤層	暗オリーブ混砂土層	粘性が強く，多くの炭化した材，有機物を含む。
⑥層	黒褐色粘質土層	⑤層以上に粘性が強い。炭化材や玄武岩礫を含む。本来玄武岩を含む層でないことから人為的な投げ込みも考えられる。
⑦層	黄褐色混砂土層	やや堅く締まった層で，遺物は検出されなかった。
⑧層	淡青灰色混砂土層	若干粘性をもつが，砂を含みやや硬質な土層。

図版４
河道２①
（河道２南側立上がり樹皮敷遺構　西から）

図版５
河道２②
（河道２④層遺物検出状況　北から）

図版６
河道２③
（河道２④層木製品出土状況）

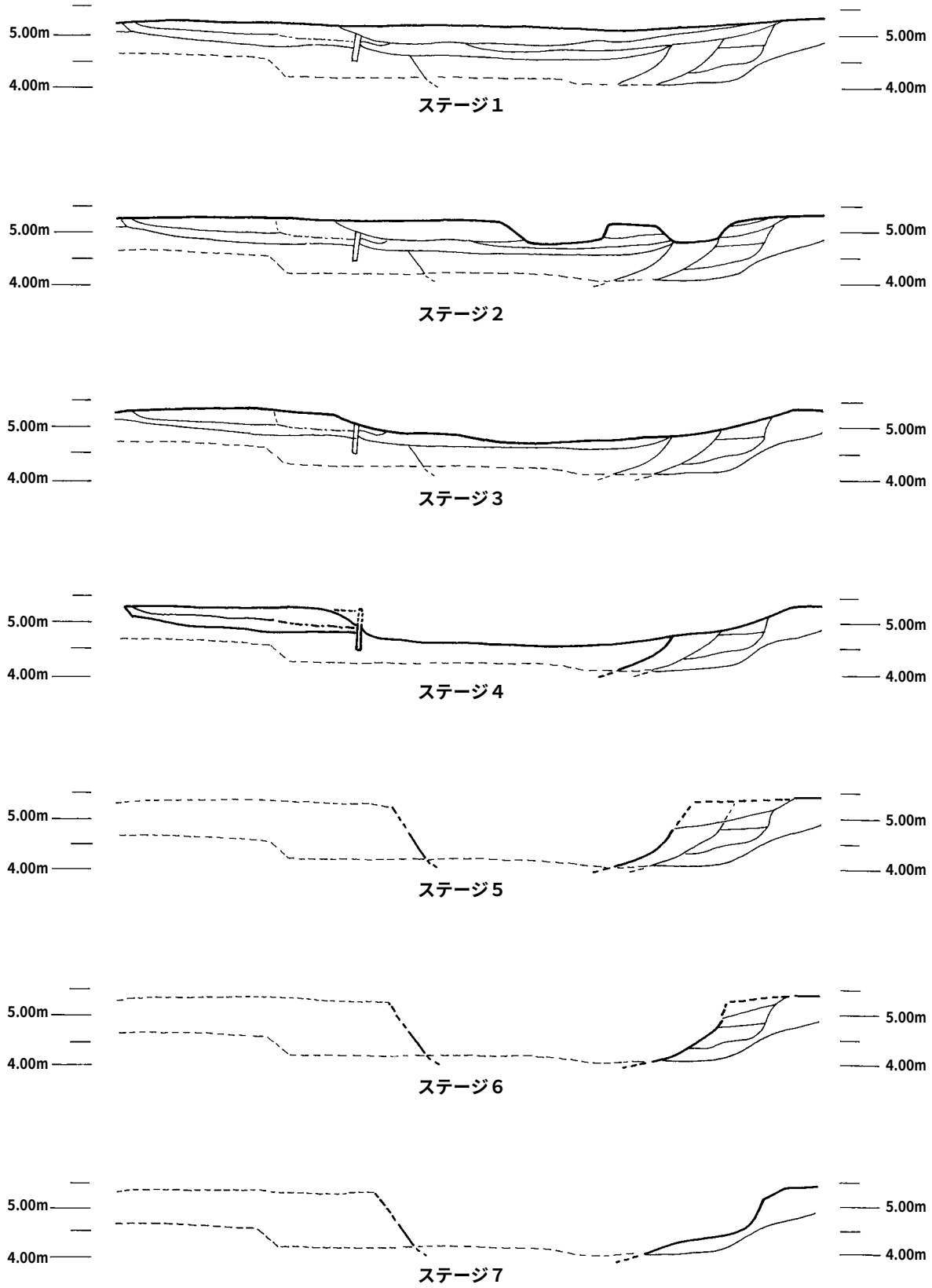


図26　河道２ステージ表

河道２・樹皮敷遺構のステージ（堆積変遷）（図26）

ステージ１…流路が完全に埋没し平坦になる時期。この段階で古代から古墳時代前期の時期に水田として利用されていた可能性が高い。

ステージ２…古代の溝が２条掘削されている。上場については削平されている可能性が高い。H11特定によると，板をはめ込んで用排水施設にしたと考えられる相対する窪みが確認されており，水田施設が周囲にあったものと思われる。

ステージ３…幅広い流路跡が検出される。幅が広く，深さ約40㌢を測る浅い流路である。土層はやや硬質の淡灰色を呈する。北側微高地（**図26右側**）の岸縁に土器溜があり，弥生時代中期後半から古墳時代前期の段階の土器が検出される。遺物はかなり劣化していることから，流路は常に水が流れていたというよりも，定期的な流れとして捉えたい

ステージ４…**ステージ３**とほぼ同じ幅の流路で，幅約9. 5m を測る。④層からおびただしい量の土器・流木・木製品が出土したことから，この段階で両岸から多くの遺物が投げ込まれたものと思われる。特に土器は丹塗磨研土器がそのほとんどを占めており，壷や蓋類が多い。時期は中期後葉（須玖Ⅱ新段階）から後期初頭（高三潴古段階）と捉えてよいと思われる。この**ステージ３**とほぼ同じ時期に樹皮を敷き詰め，その右岸に杭を打ち込んだ遺構（樹皮敷遺構）が検出されている。杭は土中内で現存長約１㍍を測ることから，上部にもかなり突き出ていたものと考えられる。また，杭はすべて北側に傾いていることから，南側の埋土の土圧で傾いたと考えられる。杭より南側（**図26左側**）は埋土の可能性を指摘しておきたい。

ステージ５…幅が狭くなり，深さも深くなることから人工的な流路ではなく河道として捉えた。覆土は灰白色で粘性が非常に強く，遺物の出土はない。

ステージ６…左岸を浸食し川幅が幾分広くなる。暗黒色で炭化した木片や玄武岩の石が覆土内に見られた。部分的な調査に終わっていることから，遺物は確認できなかったが，炭化木片や玄武岩などから一時期を設定することも考えられる。

ステージ７…最初の河道面で，底には赤褐色砂礫層が堆積する。この段階での川底は標高約4.1㍍で，今回確認された河道３の底とほぼ同じ値を示す。しかし河道３の川底からは弥生時代中期後葉の丹塗土器が多く出土しているが，**ステージ７**では遺物は見られなかった。河道３川底と時期を同じくするのは**ステージ４**であるが，標高差が50㎝以上ある。このことから**ステージ７**は河道３よりも古い河道として捉える。

【参考文献】

神澤　勇一（1990）「弥生時代，古墳時代および奈良時代の卜骨・卜甲について」『日本考古学論集３呪術と祭祀・信仰』
佐原　　眞（1978）『日本人の誕生』大系日本の歴史１

⑶　河道２の出土遺物

①土器（壺）（図27・表15）

河道２で検出された壺は祭祀との関連が考えられる丹塗が大多数を占め，弥生中期後葉から後期初頭の資料とまとまった時期を示すことも特徴といえる。きめ細かい厳選された胎土が使用され，精巧に成形されている。ここでは丹塗広口壺および丹塗袋状口縁壺について説明する。

1～**2**は広口壺の口縁部で，頸部には縦ヘラアテにより暗紋様が施される。**1**は頸部の立上がりが途中から大きく外反し，中期後葉（須玖Ⅱ式古段階）まで遡る可能性がある。**2**は表面の口縁部上半が左から右方向への斜ハケ目，下半が縦ハケ目で，裏面は横ハケ目で調整されている。**3**は袋状口縁壺の頸部である。２条のM字凸帯が廻らされ，その間は縦ヘラアテにより暗紋様が施される。頸部上半が胴部に比べて細く絞り込まれている。胴部が非常に薄く，また焼成時の影響か，裏面が漆黒色に変色している。**4**・**5**は袋状口縁壺の口縁部で，**4**には口縁下にM時凸帯が１条確認される。**6**は袋状口縁壺の口縁～頸部で，２条の鋭利なM字凸帯間に縦ヘラアテにより暗紋様が施される。やや頸部径が大きいが，口縁最大径に明瞭な稜線は認められない。**1**については疑問が残るものの，**1**～**6**までを弥生中期末（須玖Ⅱ新段階）と捉える。

7・**9**・**10**は袋状口縁壺である。**7**は口縁部で，口縁最大径に明瞭な稜線が認められる。その成形時に裏面には指オサエがなされる。頸部には縦ヘラアテにより暗紋様が施される。**9**は口縁～頸部で，**7**同様に頸部には縦ヘラアテにより暗紋様が施される。**10**は袋状口縁壺の頸部が短くなった短頸壺状のもので，ここまで極端に省略されたものはあまり例を見ない。表面の口縁部は横ナデ，胴部には縦ハケ目による調整がなされる。**8**・**11**は広口壺の口縁部である。口縁立上がりの外反が緩やかで，頸部が大きく広がる。**7**～**11**は弥生後期初頭（高三瀦式古段階）と捉えた。

表15　河道２出土土器①観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表) 調整手法	胎土	器種	残存状況	備考
1	18　河道２　④　2.5YR５/６ 表：横ナデ後縦ヘラ磨	長石・石英・金雲母	壺	口縁部	表裏：丹塗
2	17　河道２　④　５YR６/６ 表：縦ハケ目　裏：横ハケ目	長石・石英・金雲母	壺	口縁～頸部	表裏：丹塗
3	18　河道２　④　2.5YR５/６ 表：頸部に横ナデ後縦ヘラ磨　裏：ナデ	長石・石英・金雲母	壺	頸～胴部	表：丹塗
4	18　河道２　④　2.5YR５/８ 表：横ナデ　裏：横ナデ	長石・石英	壺	口縁部	表裏：丹塗
5	17　河道２　④　10YR７/３ 表：横ナデ後縦ヘラ磨　裏：横ナデ	長石・石英・金雲母	壺	口縁～頸部	表：丹塗
6	18　河道２　④　５YR６/６ 表：ナデ　裏：ナデ	長石・石英・金雲母	壺	口縁部	表裏：丹塗
7	17　河道２　④　2.5YR５/６ 表：横ナデ　裏：横ナデ	長石・石英・金雲母	壺	口縁部	表：丹塗・縦暗文　裏：丹塗
8	18　河道２　④　2.5YR５/８ 表：横ナデ　裏：横ナデ	長石・石英	壺	口縁部	表裏：丹塗
9	17　河道２　④　2.5YR６/６ 表：横ナデ後縦ヘラ磨　裏：横ナデ	長石・石英・金雲母	壺	口縁～頸部	表：丹塗
10	18　河道２　④　2.5YR５/８ 表：口縁部に横ナデ・頸部に縦ハケ目　裏：ナデ	長石・石英	壺	口縁～胴部	表：丹塗
11	17　河道２　④　2.5YR６/６ 表：横ハケ目横ナデ消し・縦ヘラ磨き　裏：ナデ	長石・石英・金雲母	壺	口縁部	表裏：丹塗

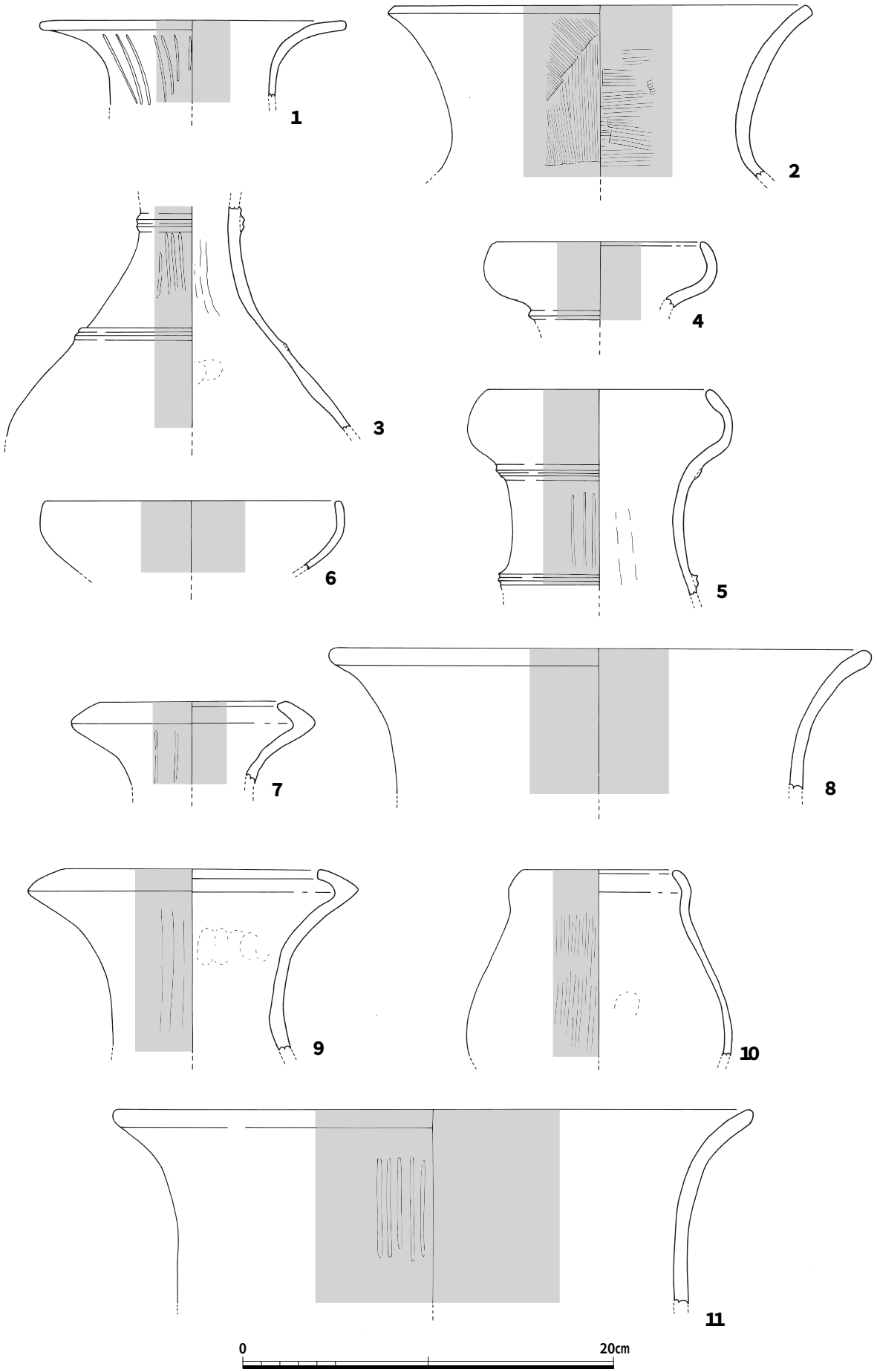


図27　河道２出土土器①（1/3）

②土器（壺）（図28・表16）

河道２においては丹塗の短頸壺が多く検出されたことが特徴としてあげられる。丹塗壺同様に祭祀との関連が考えられるものである。口縁に穿孔が施されているものが多く，これには蓋が備えられたと推測される。きめ細かい厳選された胎土が使用され，精巧に成形されている。丹塗が底面や裏面には施されていないものが多く，そのため裏面底部に丹が滴状に垂れたように付着している場合が多い。短頸壺は時期の比定が難しいため，共伴する他の遺物から弥生中期末から後期初頭としておく。

12はほぼ完形品で出土した。口縁はやや内側に傾斜し，穿孔が２つ確認される。胴部は横ヘラ磨が丁寧に施される。**13**も同様の成形で，口縁に穿孔が４つ確認される。底面がやや凸レンズ状で安定感に欠く。**14**は頸部から口縁につながる屈曲部が丸みを帯び，明瞭な稜線が認めらない。胴部は横ヘラ磨が丁寧に施され，胴部最高径部は薄く成形されており，裏面には指オサエが明瞭に残る。**15**は口縁部がほぼ水平につけられ，穿孔が２つ確認される。**16**は口縁がやや内傾し，その先端は垂れる。推定される器高に対して胴部の張りが少ない。**17**は口縁がやや内傾し，４つの穿孔が確認される。胴部及び口縁部に黒みがあるが，焼成時のスス痕が丹を透けているのか，丹塗後に被熱等で焦げたのかは不明。**18**・**19**は丹塗壺の底部と思われる。**18**は底面および裏面に丹が施されず，裏面底部に丹が滴状に垂れたように付着している。なお，丹塗の底部は後述でも触れる。

表16　河道２出土土器②観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表)　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
12	18　河道２　④　5YR５/６　長石・石英・金雲母　壺　口縁～底部　表：丹塗　口縁部：穿孔２ 表：口縁部に横ナデ・胴部にヘラ磨　裏：ナデ指オサエ
13	17　河道２　④　10R６/５　長石・石英　壺　口縁～底部　表：丹塗　口縁部：穿孔４ 表：横ナデ　裏：ナデ指オサエ
14	17　河道２　④　2.5YR５/８　長石・石英・金雲母　壺　口縁～胴部　表：丹塗　口縁部：穿孔２ 表：横ナデ　裏：ナデ指オサエ
15	18　河道２　④　2.5YR５/６　長石・石英・金雲母　壺　口縁～胴部　表裏：丹塗　口縁部：穿孔２ 表：横ナデ　裏：ハケ目ナデ消し
16	18　河道２　④　2.5YR６/６　長石・石英・金雲母　壺　口縁～胴部　表：丹塗 表：横ナデ　裏：ナデ指オサエ
17	18　河道２　④　2.5YR５/８　石英・金雲母　壺　口縁～底部　表：丹塗 表：口縁部に横ナデ・胴部にヘラ磨　裏：ナデ指オサエ
18	18　河道２　④　2.5YR５/６　長石・石英・金雲母　壺　胴～底部　表：丹塗 表：横ナデ　裏：ハケ目指オサエ
19	18　河道２　④　10YR６/２　長石・石英・金雲母　壺　胴～底部　表：丹塗 表：ナデ　裏：ナデ指オサエ

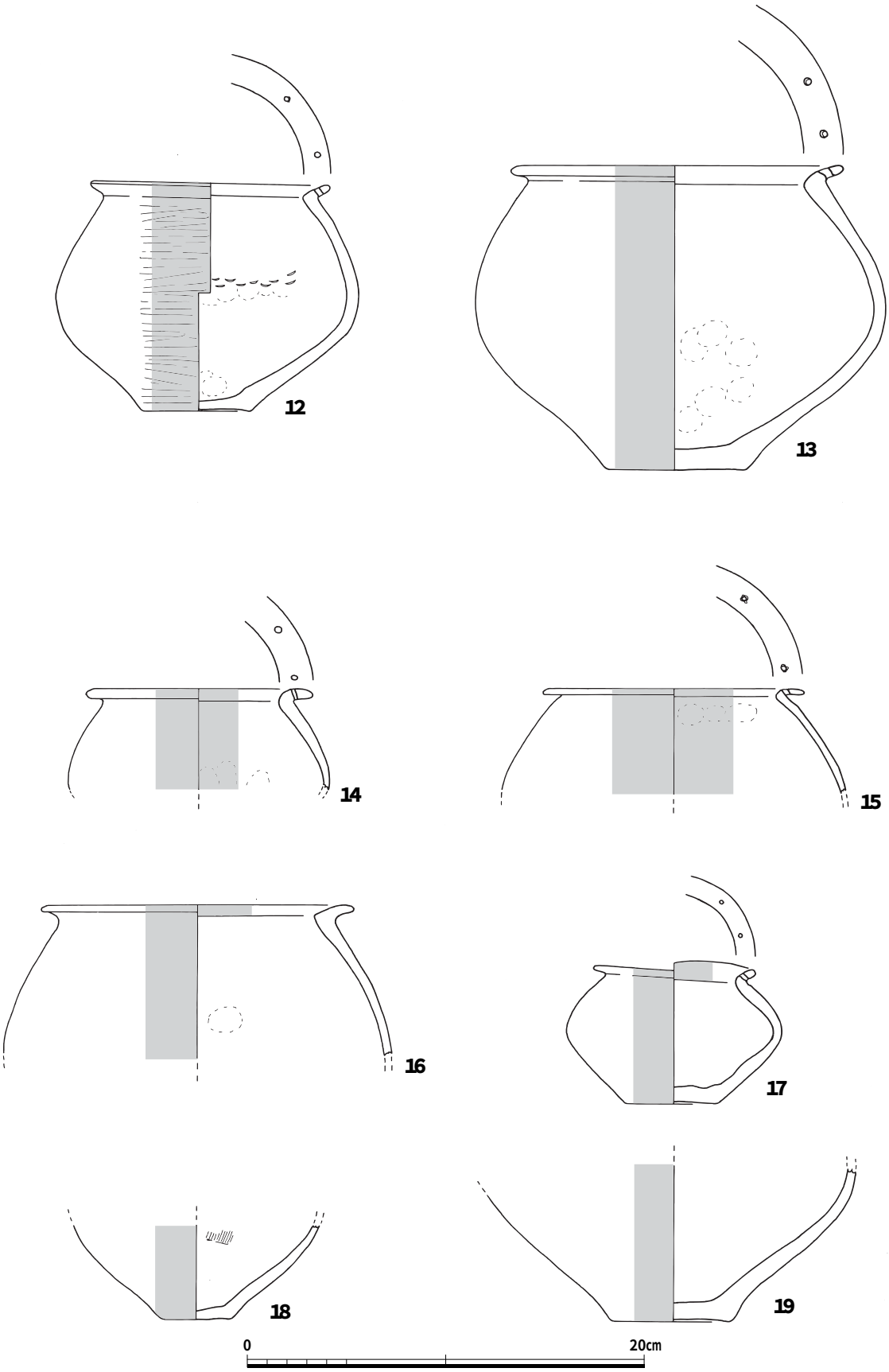


図28　河道２出土土器②（1/3）

③土器（脚付短頸壺・高坏）（図29・表17）

壺形土器同様，良質の胎土が使用され，巧緻に仕上げられている。**20**～**23**は丹塗脚付短頸壺である。これまで原の辻遺跡では４例の出土が確認されている。いずれも胴部は最大径から内傾し，断面横楕円形を呈す。胴部最大径付近に２条，頸部下に１条のM字凸帯が施される。

20は脚部が欠損するもの，脚部の付け根に沈線が１条確認される。頸部から口縁部につながる屈曲部には明瞭な稜線が見られ，口縁は内側に傾斜する。口縁に穿孔が２つ確認される。本来は丹塗であったと思われるが，表裏面とも激しく摩滅しており，その痕跡は確認できない。

21は**20**と同様の成形で，その規則性は特筆される。口縁部は横ナデで調整され，頸部から脚部では縦ヘラアテにより暗紋様となる。口縁に穿孔が３つ確認されるが，欠損部にもう１つあったと思われ，向かい合う４つの穿孔が施されていたと思われる。裏面には丹塗が施されていない。**22**は頸部から口縁部につながる屈曲部が丸く仕上げられ，口縁はやや垂れる。口縁に２つの穿孔が確認される。裏面に丹塗は施されていない。

23は頸部と胴部最大径に施されたM字凸帯間は縦ヘラアテにより暗紋様となり，口縁に穿孔が１つ確認される。

24～**27**は丹塗高坏である。**24**は坏部がやや深く，口縁部は逆Ｌ字形を呈してほぼ水平につくられる。表面は縦ハケ目，裏面は横ヘラアテで調整されている。表の丹塗は激しく摩滅し，一部にしかその痕跡を残していない。**25**は素口縁で胴部中央にM字凸帯を施す。口縁とM字凸帯間，および脚部は縦ヘラアテにより暗紋様となる。**26**は口縁部が逆Ｌ字形を呈し，口縁外側はやや垂れ，口縁内側は摘み出し状となる。**24**同様に表面の丹塗は摩滅している。**27**は口縁がやや内傾し，口縁部を横ハケ目，胴部を縦ハケ目で調整する。これも表面の丹塗だけが摩滅している。表面だけ丹塗が摩滅しているものが多く，その理由については見当がつかない。

表17　河道２出土土器③観察表

報告番号	調査区	遺構	層位	色調番号(表)	胎土	器種	残存状況	備考
20	17	河道２	④	10YR７/１	長石・石英	壺	口縁～脚上部	口縁部：穿孔１　脚付短頸壺 調整手法：表裏とも表面剥離が生じているため調整不明
21	17	河道２	④	2.5YR５/６	長石・石英・金雲母	壺	口縁～脚上部	表：丹塗　口縁に穿孔３　脚付短頸壺 調整手法：表：口縁部に横ナデ・胴部にヘラ磨　裏：ナデ指オサエ
22	18	河道２	④	2.5YR５/８	長石・石英・金雲母	壺	口縁～胴部	表裏：丹塗　口縁：穿孔１　脚付短頸壺 調整手法：表：横ナデ　裏：ナデ
23	17	河道２	④	2.5YR５/６	長石・石英	壺	口縁～胴部	表：丹塗　口縁：穿孔１　脚付短頸壺 調整手法：表：口縁部に横ナデ・胴部にヘラ磨　裏：ナデ指オサエ
24	18	河道２	④	7.5YR７/４	長石・石英・金雲母	高坏	口縁～胴部	表裏：丹塗 調整手法：表：縦ハケ目横ナデ消し　裏：横ヘラ磨
25	17	河道２	④	5YR６/６	長石・石英	高坏	口縁～脚上部	表裏：丹塗 調整手法：表：横ナデ後縦ヘラ磨　裏：ヘラ磨
26	17	河道２	④	2.5YR５/８	長石・金雲母	高坏	口縁～胴部	表裏：丹塗 調整手法：表：ナデ　裏：横ナデ
27	18	河道２	④	7.5YR６/４	長石・金雲母	高坏	口縁～胴部	表裏：丹塗 調整手法：表：口縁部に横ナデ・胴部にハケ目　裏：横ハケ目横ナデ消し

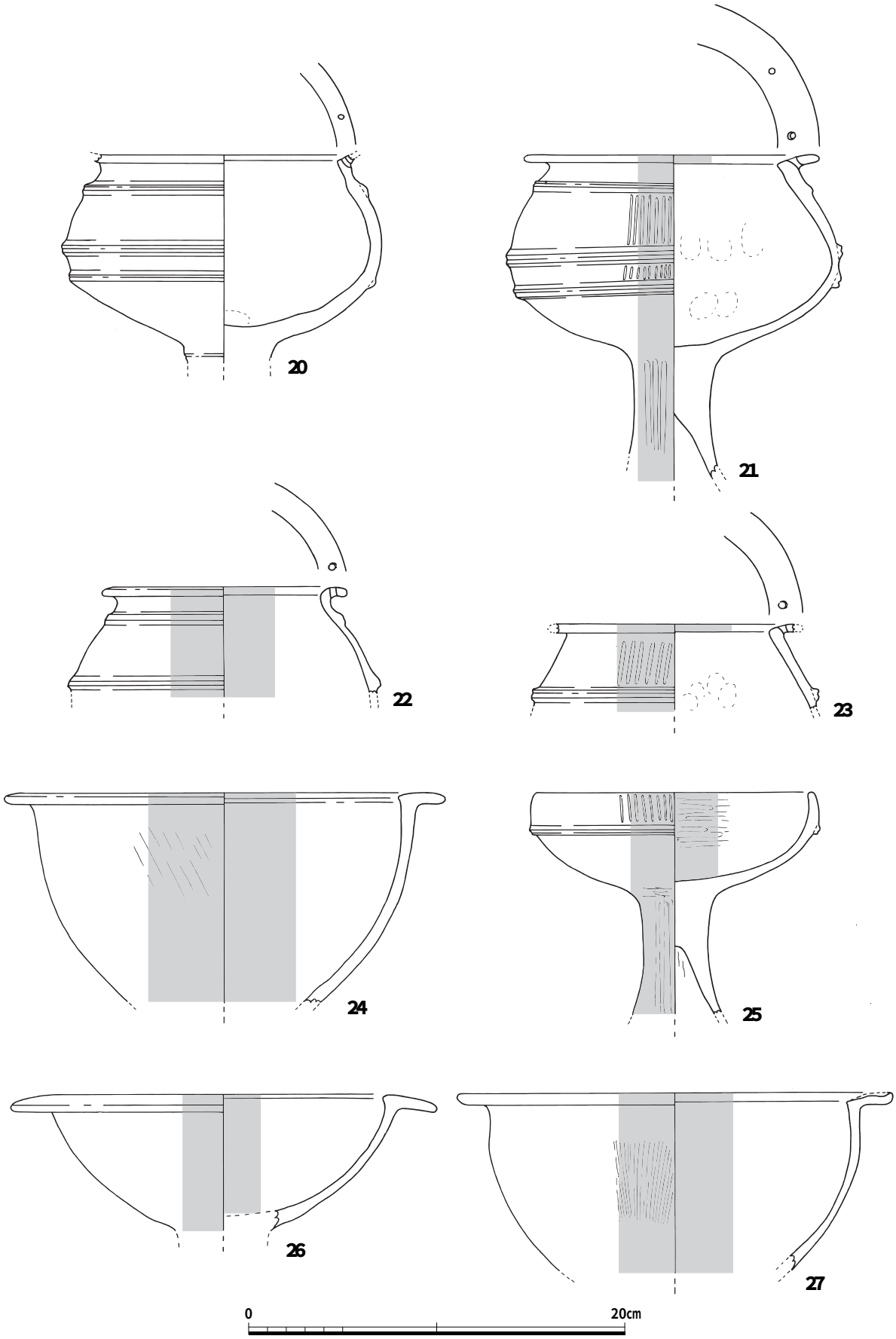


図29　河道２出土土器③（1/3）

④土器（高坏・蓋）（図30・表18）

28～**33**は丹塗の蓋である。原の辻遺跡ではこれまでに19例の丹塗蓋が報告されている。形状では圧倒的に頂上部凹状が多く（12例），把手付は１例しかない。

28は半径９㌢高さ３㌢を測り，穿孔が１つ確認される。頂上部から裾部へ直線的につながる断面盛山型で，やや厚みのある蓋である。頂上部は欠損しているため不明であるが凸状と思われる。表面は縦ヘラ磨が施される。

29は半径７㌢高さ2.6㌢を測り，穿孔が３つ確認される。頂上部は凹状で，頂上部から裾部へはやや下方へ湾曲しながらつながる富士山型である。表面は縦ヘラ磨が施される。

30は半径4.6㌢高さ1.1㌢を測り，穿孔が２つ確認される。頂上部は凹状で，頂上部から裾部へはやや下方へ湾曲しながらつながる断面富士山型である。表面が摩滅しているため調整は不明である。

31は半径6.1㌢高さ1.8㌢を測り，穿孔が２つ確認される。頂上部は凹状で，頂上部から裾部へ直線的につながり，断面は富士山型である。表面は縦ヘラ磨が施される。

32は半径5.4㌢高さ1.6㌢を測り，左右対称の穿孔が４つ確認される。頂上部は凹状で，頂上部から裾部へ直線的につながり，断面は富士山型である。

33は半径9.3㌢高さ3.6㌢を測り，穿孔が１つ確認される。頂上部には把手が備えられ，頂上部から裾部へやや膨らみながらつながる。表面は縦ヘラ磨が施される。

34は高坏である。口縁断面が鍬先型で，口縁外側がやや垂れ下がる。口縁内側は摘み出し状となる。坏部の深さや脚部の広がりなど，均衡が取れており安定感がある。丹塗が表全面に施され，表面の口縁から胴部は横ナデ，脚部は縦ヘラ磨，裏面は横ナデにより調整される。

表18　河道２出土土器④観察表

報告番号	調査区　遺構　層位 調整手法	色調番号(表)	胎土	器種	残存状況	備考
28	17　河道２　④ 表：縦ヘラ磨　裏：ナデ	5YR 5／6	長石・石英	蓋	５割程度	表：丹塗・穿孔１　頂上部：凸状
29	18　河道２　④ 表：縦ヘラ磨　裏：ナデ	2.5YR 6／6	長石・石英・金雲母	蓋	５割程度	表：丹塗・穿孔３　頂上部：凹状
30	18　河道２　④ 表：不明　裏：ナデ	2.5YR 5／8	長石・石英・金雲母	蓋	７割程度	表：丹塗・穿孔２　頂上部：凹状
31	18　河道２　④ 表：ヘラ磨　裏：ナデ	2.5YR 5／6	長石・石英・金雲母	蓋	４割程度	表：丹塗・穿孔２　頂上部：凹状
32	18　河道２　④ 表：ナデ　裏：ナデ	2.5YR 5／8	長石・石英・金雲母	蓋	ほぼ完形	表：丹塗・穿孔４　頂上部：凹状
33	17　河道２　④ 表：縦ヘラ磨　裏：ナデ	5YR 5／6	長石・石英	蓋	２割程度	表：丹塗・穿孔１　頂上部：把手
34	18　河道２　④ 表：口縁～胴部に横ナデ・脚部に縦ヘラ磨　裏：ナデ	2.5YR 5／8	長石	高坏	ほぼ完形	表裏：丹塗

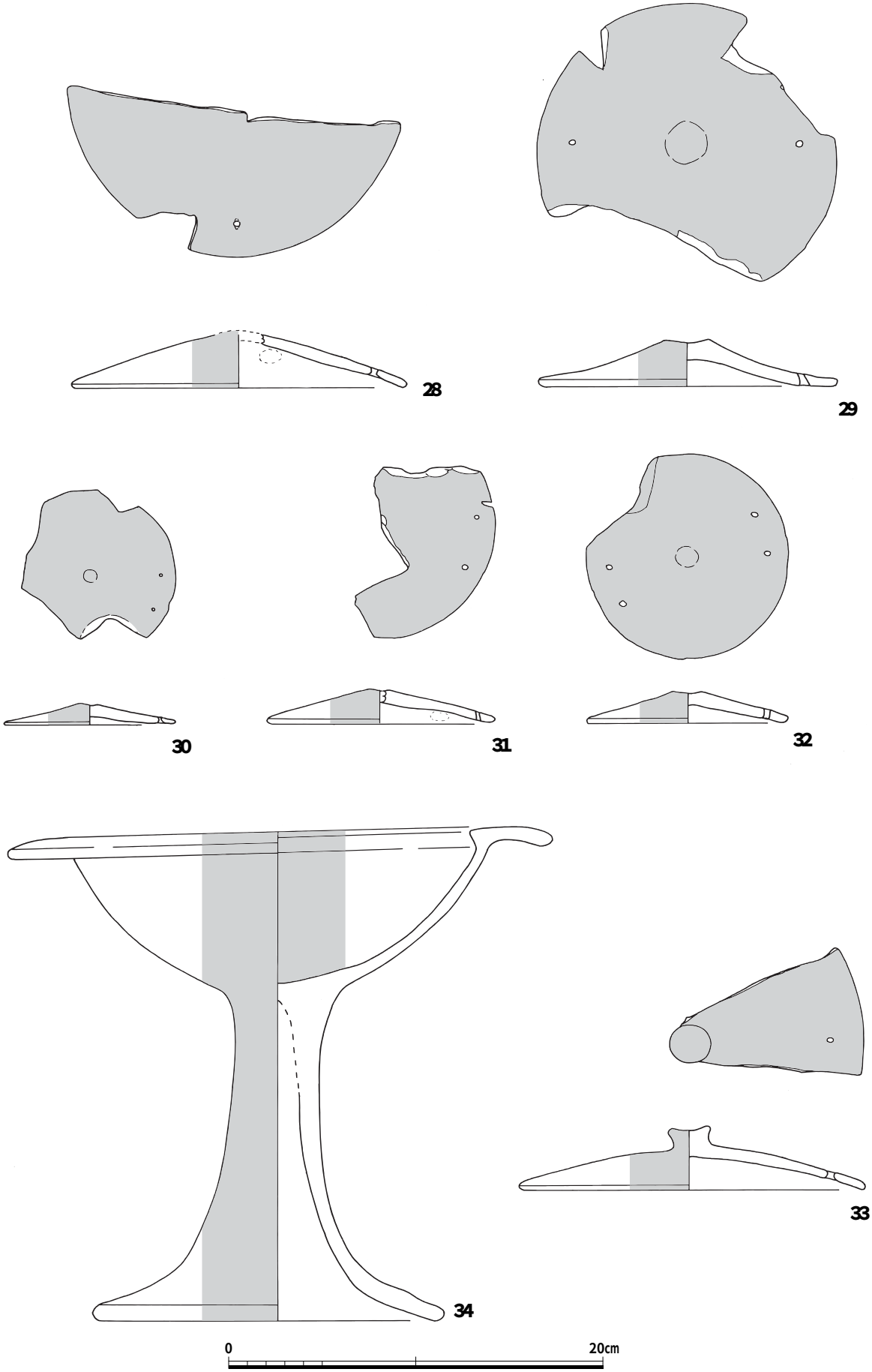


図30　河道２出土土器④（1/3）

⑤土器（甕）（図31・表19）

河道２で検出された甕は口縁破片が大半で，弥生中期後葉から終末（須玖Ⅱ式）が優勢であったが，後期に属するものも数点確認されている。丹塗甕も数点確認されているが，大多数は日常性の強いものと判断される。

35・**36**は口縁断面が「コ」の字形の粘土帯を貼り付けて逆Ｌ字形の断面を示し，口縁は水平につくられている。**35**は口縁下に三角凸帯を施し，口縁部および凸帯は横ナデ，胴部は縦ハケ目により調整されている。やや古く弥生中期前葉（須玖Ⅰ式古段階）と思われる資料である。

37～**43**は口縁断面が逆Ｌ字で，やや内側に傾斜する。**41**は口縁がやや内側に傾斜し，口縁内側は摘み出し状となる。口縁部から口縁下の三角凸帯にかけて横ナデ，胴部は目の細かい縦ハケ目が施される。裏面に丹塗が施されるが，表面には施されていない。摩滅とも思われるが，所々丹を塗る際に垂れたように滴状に付着している。**44**～**45**は口縁断面が逆Ｌ字で，ほぼ水平につくられる。**44**は表裏とも横ヘラ磨の後に丹塗が施される。**46**～**47**は口縁断面が逆Ｌ字で，口縁上面に凹みがあるのが特徴である。**46**は口縁を水平に作り出し，口縁内側は摘み出し状となる。口縁部から口縁下の三角凸帯にかけて横ナデ，胴部は目の細かい縦ハケ目により調整される。**37**～**43**は弥生中期中葉～中期後葉（須玖Ⅰ式新段階～Ⅱ式古段階）に相当すると思われる。

48～**49**は口縁部外側がやや垂れ，内側は摘み出し状となり，鋤先型への移行がうかがえる。弥生中期終末（須玖Ⅱ式新段階）と判断される。

表19　河道２出土土器⑤観察表

報告番号	調査区	遺構	層位	色調番号(表)	胎土	器種	残存状況	備考
	調整手法							
35	17	河道２	④	7.5YR６/４	長石・石英	甕	口縁～胴部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
36	18	河道２	④	7.5YR６/４	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
37	18	河道２	④	５Y２/１	長石・石英	甕	口縁～胴部	表：スス痕
	表：横ナデ　裏：ナデ指オサエ							
38	18	河道２	④	10YR６/２	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
39	17	河道２	④	2.5YR６/２	長石・石英	甕	口縁～胴部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
40	17	河道２	④	2.5YR６/６	長石・石英	甕	口縁部	
	表：ナデ　裏：ナデ							
41	18	河道２	④	2.5YR６/８	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	表裏：丹塗
	表：横ナデ　裏：ナデ指オサエ							
42	17	河道２	④	５YR６/６	長石・石英・金雲母	甕	口縁部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ							
43	17	河道２	④	7.5YR６/６	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	表：スス痕
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
44	17	河道２	④	10YR６/３	長石・石英	甕	口縁～胴部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
45	17	河道２	④	10YR６/３	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	表裏：丹塗
	表：口縁部に横ナデ・胴部にヘラ磨　裏：ヘラ磨							
46	18	河道２	④	５YR５/２	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：横ナデ指オサエ							
47	18	河道２	④	7.5YR６/４	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	
	表：横ナデ　裏：ナデ指オサエ							
48	18	河道２	④	7.5YR６/３	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	
	表：横ナデ　裏：ナデ指オサエ							
49	17	河道２	④	５YR７/４	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							

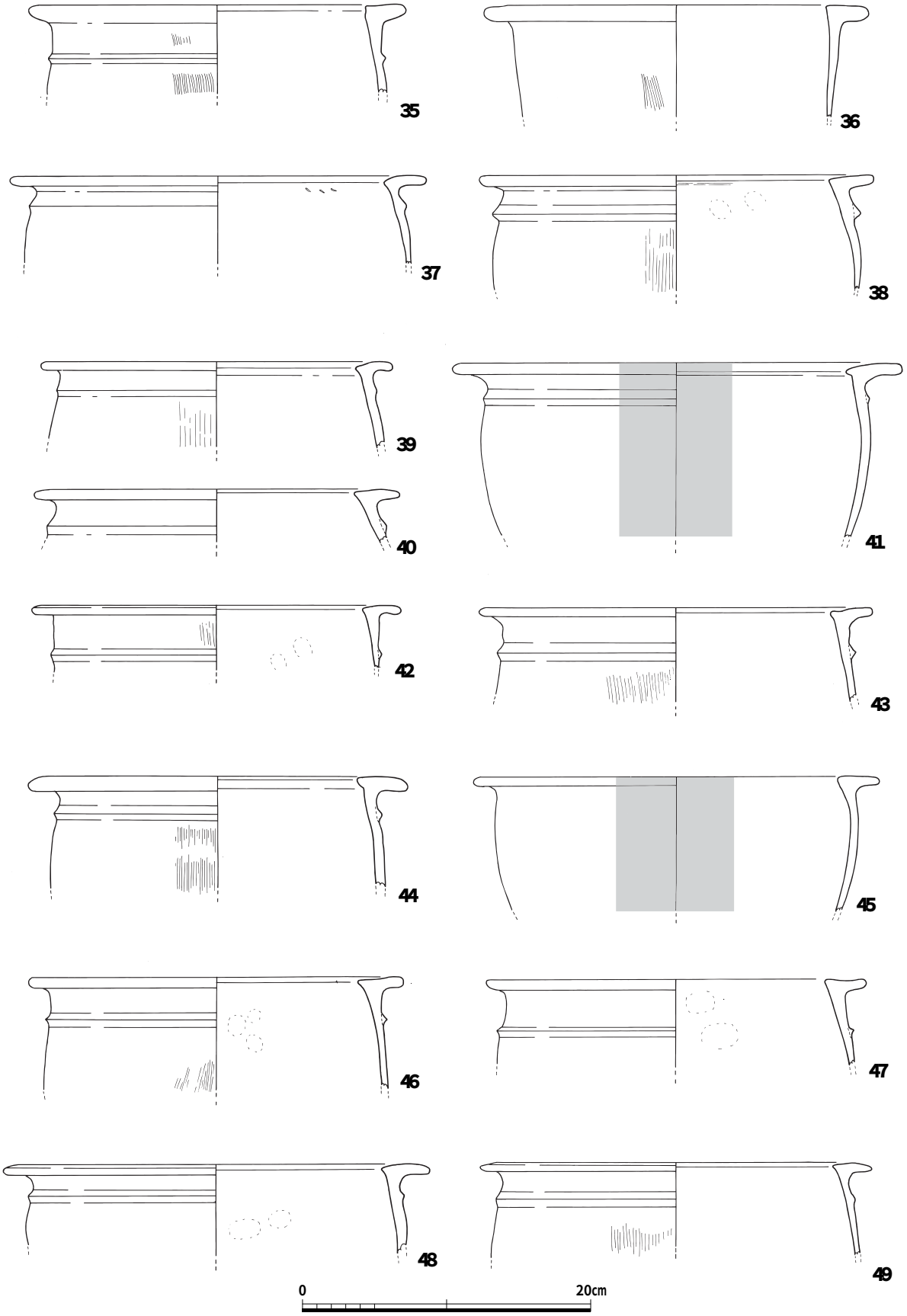


図31　河道２出土土器⑤（1/4）

⑥土器（甕）（図32・表20）

50は口縁部外側が垂れ，内側は摘み出しがより顕著となり，口縁断面が鋤先型へ移行する。口縁下に１条の沈線が認められ，口縁部は横ナデ，胴部は目の細かい縦ハケ目により調整される。**51**は口縁が鋤先型で胴部は縦ハケ目により調整される。**52**は口縁内側に三角粘土帯を貼り付け，摘み出し状に成形する際の指オサエが確認できる。口縁部付近は横ナデ，胴部は縦ハケ目により調整される。**53**は鋤先型口縁で，口縁部は横ナデにより調整される。表面にはスス痕が見られる。**54**は鋤先型口縁で，口縁内側の摘み出し先端がさら細く摘み出されて二段の突き出しがつくられる。**55**は鋤先型口縁で，口縁部は横ナデにより調整される。これら**50**～**56**は弥生中期終末（須玖Ⅱ式新段階）に比定される。

57は口縁の屈曲が断面「く」の字形となる。口縁の外反は緩やかに立ち上がる。口縁部は横ナデ，胴部は縦ハケ目により調整される。**58**は口縁が断面「く」の字形となり，口縁の外反は緩やかである。口縁部および胴部は横ナデにより調整され，後に丹塗が施される。**59**は「く」の字形口縁が内湾したものである。表面に口縁立上がりを成形した際の指オサエが認められるが，粗雑な調整である。胴部は縦ハケ目により調整される。**60**は口縁部から胴部にかけて断面「Ｓ」字形を示し，口径に対して胴部径が小さい。表面は口縁部は横ナデ，胴部は縦ハケ目により調整される。裏は縦ハケ目，部分的に横ヘラアテにより調整される。胎土が灰白色の明るい色調を示す。「く」の字型口縁が縦に間延びした印象を受けるが，胎土色や胴部径の小ささなど弥生後期と捉えるには不明な点が多い。**62**は口縁の屈曲が断面「く」の字形となる。口縁の外反は緩やかに立ち上がる。口縁部は横ナデ，胴部は縦ハケ目により調整される。**61**は小型短頸壺である。表面は口縁部に横ナデ，胴部に縦ハケ目による調整が見られる。裏面はハケ目の後に縦ヘラ削りにより調整される。**60**は類例を見ないため時期判断が困難であるが，一応**57**～**62**は後期初頭（高三潴式古段階）と判断している。

表20　河道２出土土器⑥観察表

報告番号	調査区	遺構	層位	色調番号(表)	胎土	器種	残存状況	備考
	調整手法							
50	17	河道２	④	10YR６/１	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
51	18	河道２	④	2.5Y４/１	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
52	18	河道２	④	2.5YR５/６	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
53	18	河道２	④	10YR２/１	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	表：スス痕
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
54	17	河道２	④	５YR６/６	長石・石英・金雲母	甕	口縁部	
	表：横ナデ　裏：ナデ							
55	17	河道２	④	10YR６/３	長石・石英・金雲母	甕	口縁部	
	表：横ナデ　裏：ナデ							
56	17	河道２	④	10YR７/２	長石・石英	甕	口縁部	表：スス痕
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
57	18	河道２	④	10YR５/３	長石・石英	甕	口縁～胴部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
58	18	河道２	④	2.5YR５/８	長石・石英	甕	口縁～胴部	表：丹塗
	表：横ナデ　裏：ナデ							
59	17	河道２	④	10YR６/３	長石・石英・金雲母	甕	口縁部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ							
60	17	河道２	④	10YR８/３	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ハケ目							
61	17	河道２	④	10YR５/３	長石・石英・金雲母	甕	口縁～底部	
	表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ハケ目							
62	18	河道２	④	５YR６/11	長石・石英・金雲母	甕	口縁部	
	表：横ナデ　裏：ナデ							

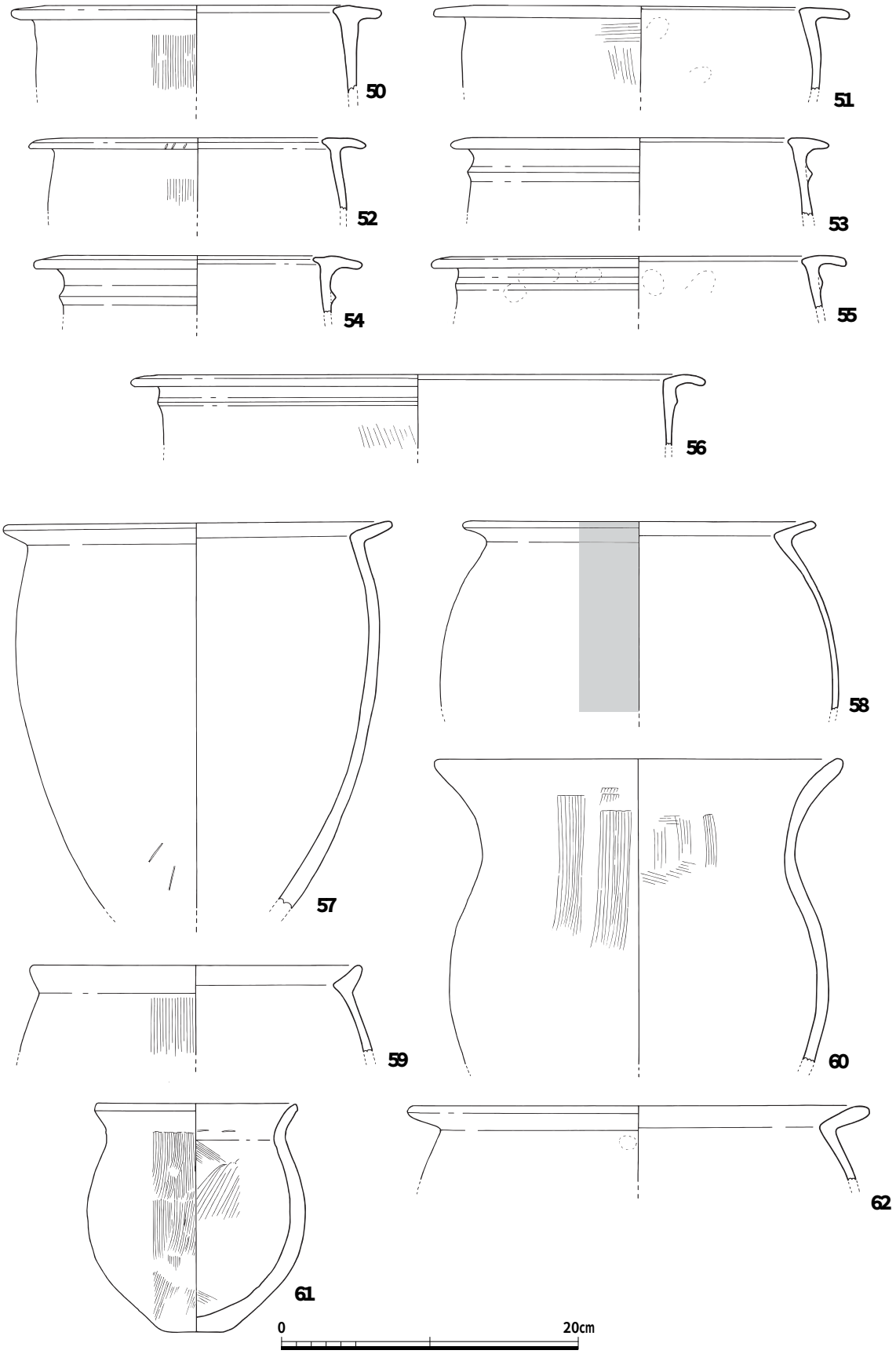


図32　河道２出土土器⑥（1/4）

⑦土器（底部）（図33・表21）

63～**66**は丹塗の底部で，器種は壺と思われる。**63**は平底で底部と胴部がほぼ直線的につながる。丹塗は表裏両面とも施されるが，表面がやや摩滅気味である。表面の胴部は縦ヘラ磨，裏面は横ヘラ磨により調整される。**64**は平底で，底部は垂直に立上がり，その後に外湾しながら胴部へとつながる。丹塗は裏面のみに確認される。表面は縦ハケ目が残るもの，摩滅のためか丹塗の痕跡は見受けられない。あるいは裏面のみに丹塗が施されたのかもしれない。裏面は横ヘラ磨により調整される。**65**は平底で底部と胴部のつながりはやや湾曲する。表面に丹塗が施されるが，摩滅が著しい。**66**は平底で底部から胴部がほぼ直線的につながる。表面はハケ目により調整される。**67**は平底で底部から胴部がほぼ直線的につながる。表面はヘラ磨で調整される。

68は底裾部のふんばりはなく，厚底で底の凹みが少ない。底部はほぼ垂直に立ち上がり，外湾しながら胴部へつながる。表面は縦ハケ目により調整される。**69**は底裾部がややひろがり，上げ底となる。表面は縦ハケ目により調整される。**70**はやや上げ底であるが平底に近い。底部がほぼ垂直に立ち上がり，外湾しながら胴部へつながる。表面は縦ハケ目により調整され，裏面底にスス痕が見受けられる。**71**はほぼ平底となる。底部の垂直な立ち上がりが短く，外湾しながら胴部へつながる。表面は縦ハケ目により調整される。**72**～**75**はやや上げ底で，底部はやや外湾しながら立ち上がり，さらに外湾ししつつ胴部へつながる。表面は縦ハケ目により調整される。

表21　河道２出土土器⑦観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表) 調整手法	胎土	器種	残存状況	備考
63	17　河道２　④　2.5YR 5/8 表：ハケ目ナデ消し　裏：ナデ指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	表：丹塗
64	18　河道２　④　10YR 6/1 表：縦ハケ目　裏：ヘラ磨	長石・石英・金雲母	不明	底部	裏：丹塗
65	17　河道２　④　2.5YR 6/8 表：ヘラ磨　裏：ナデ	長石・石英	不明	底部	表：丹塗
66	18　河道２　④　7.5YR 6/4 表：ヘラ磨　裏：ヘラ磨	長石・石英・金雲母	不明	底部	表裏：丹塗
67	18　河道２　④　2.5YR 5/8 表：ナデ　裏：ナデ指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	表：丹塗
68	17　河道２　④　10YR 7/2 表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ	長石・金雲母	不明	底部	
69	18　河道２　④　2.5YR 5/6 表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	
70	18　河道２　④　2.5YR 5/6 表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	
71	18　河道２　④　2.5YR 6/2 表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	裏：スス痕
72	17　河道２　④　5YR 5/6 表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	
73	18　河道２　④　2.5YR 6/2 表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	
74	17　河道２　④　7.5YR 6/4 表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ	長石・石英	不明	底部	
75	17　河道２　④　10YR 6/1 表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエヘラケズリ	長石・石英	不明	底部	

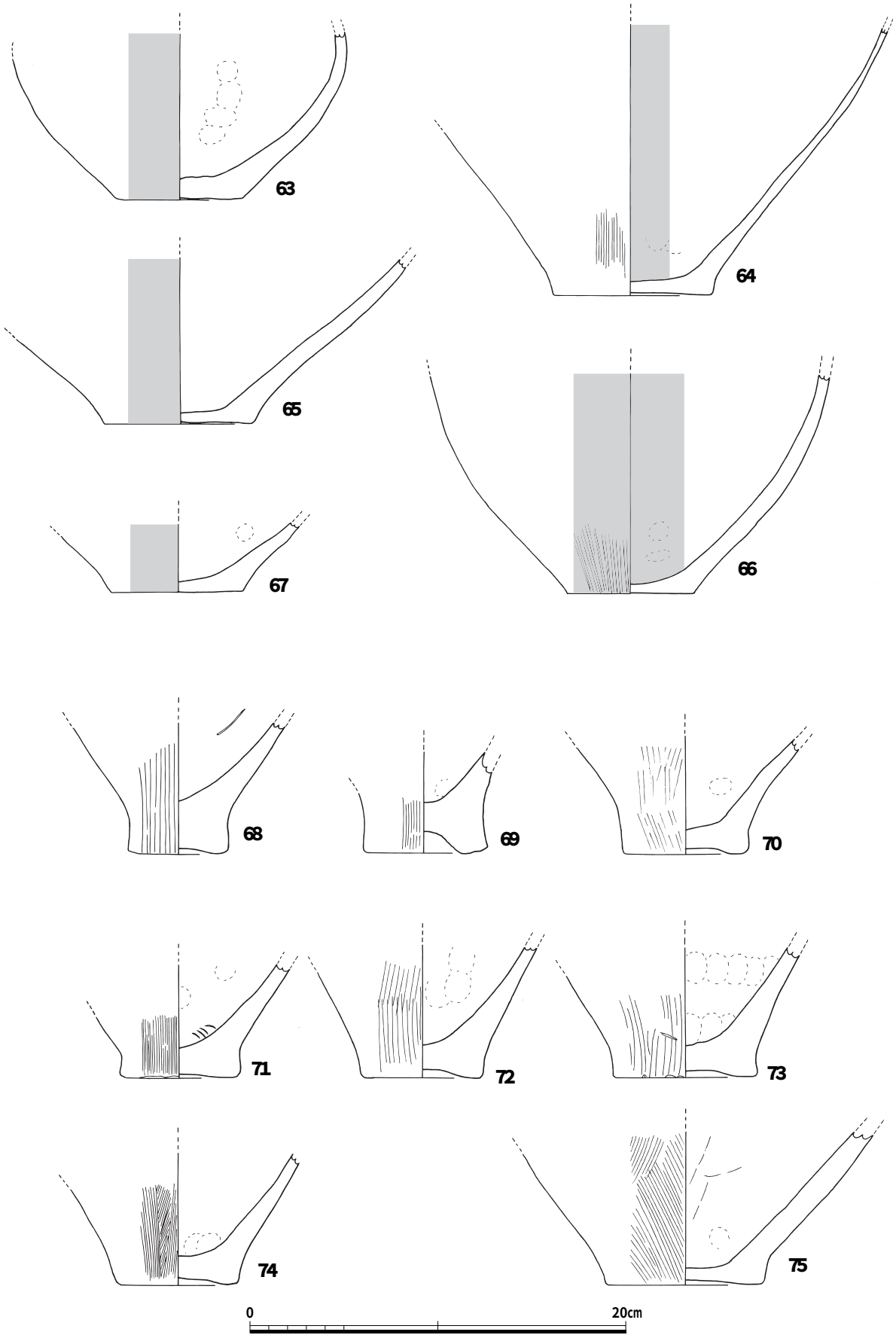


図33　河道２出土土器⑦（1/3）

⑧土器（底部）（図34・表22）

76～**78**は丹塗土器である。**76**は表面にのみ丹塗が施され，底部と胴部がほぼ直線的につながる。底面はやや凸レンズ状で安定を欠く。表面は横ナデ，底部付近では縦ヘラ磨，裏面はハケ目により調整される。**77**は表面のみに丹塗が施され，底部と胴部がほぼ直線的につながる。底面は摩滅により確認できないがやや凸レンズ状と思われる。表面は横ナデ，底部付近では縦ヘラ磨，裏面は横ナデにより調整される。**78**は表裏面とも丹塗が施され，底部と胴部がほぼ直線的につながる。底面は摩滅しているが底部の角が丸みを帯びるため，やや凸レンズ状と思われる。表面は底部付近で縦ヘラ磨，裏面縦ハケ目横ナデ消により調整される。

79は平底で底部と胴部がほぼ直線的につながる。表面は縦ハケ目で調整される。**80**は底部と胴部がほぼ直線的につながる。底面はやや凸レンズ状で安定を欠く。表面は縦ハケ目により調整される。**81**は底部と胴部がほぼ直線的につながる。平底ではあるが安定を欠く。表面は縦ハケ目の後に部分的に縦ヘラ磨が施される。**82**は底部と胴部が直線でつながる。平底ではあるが安定を欠く。**83**は底部と胴部が直線でつながる。平底で表面は縦ハケ目，裏面は横ナデにより調整される。**84**は底部と胴部が直線でつながる。底面はやや凸レンズ状で安定を欠く。表面は縦ハケ目により調整される。**85**は底部と胴部がやや膨らみながらつながる。底面は摩滅しているが凸レンズ状と思われる。表面は縦ハケ目により調整される。

表22　河道２出土土器⑧観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表)　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
76	17　河道２　④　2.5YR６/３　長石・石英・金雲母　不明　底部　表：丹塗 表：ヘラ磨　裏：ハケ目指オサエ
77	18　河道２　④　５YR７/６　長石・石英・金雲母　不明　底部　表：丹塗 表：ヘラ磨　裏：ハケ目横ナデ消し指オサエ
78	18　河道２　④　５YR６/６　長石・石英　不明　底部　表裏：丹塗 表：ヘラ磨　裏：ナデ
79	18　河道２　④　５YR６/３　長石・石英・金雲母　不明　底部　裏：スス痕 表：ハケ目　裏：ナデ指オサエ
80	17　河道２　④　7.5YR６/４　長石・石英・金雲母　不明　底部 表：ナデ　裏：ヘラオサエ指オサエ
81	18　河道２　④　10YR７/３　長石・石英・金雲母　不明　底部 表：胴部に縦ハケ目・底部に縦ヘラナデ　裏：ナデ指オサエ
82	18　河道２　④　10YR６/３　長石・金雲母　不明　底部 表：ナデ　裏：横ナデ
83	18　河道２　④　10YR６/２　長石・石英・金雲母　不明　底部 表：縦ハケ目　裏：横ナデ指オサエ
84	17　河道２　④　５YR５/３　長石・石英　不明　底部 表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ
85	17　河道２　④　7.5YR５/３　長石・石英　不明　底部 表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ

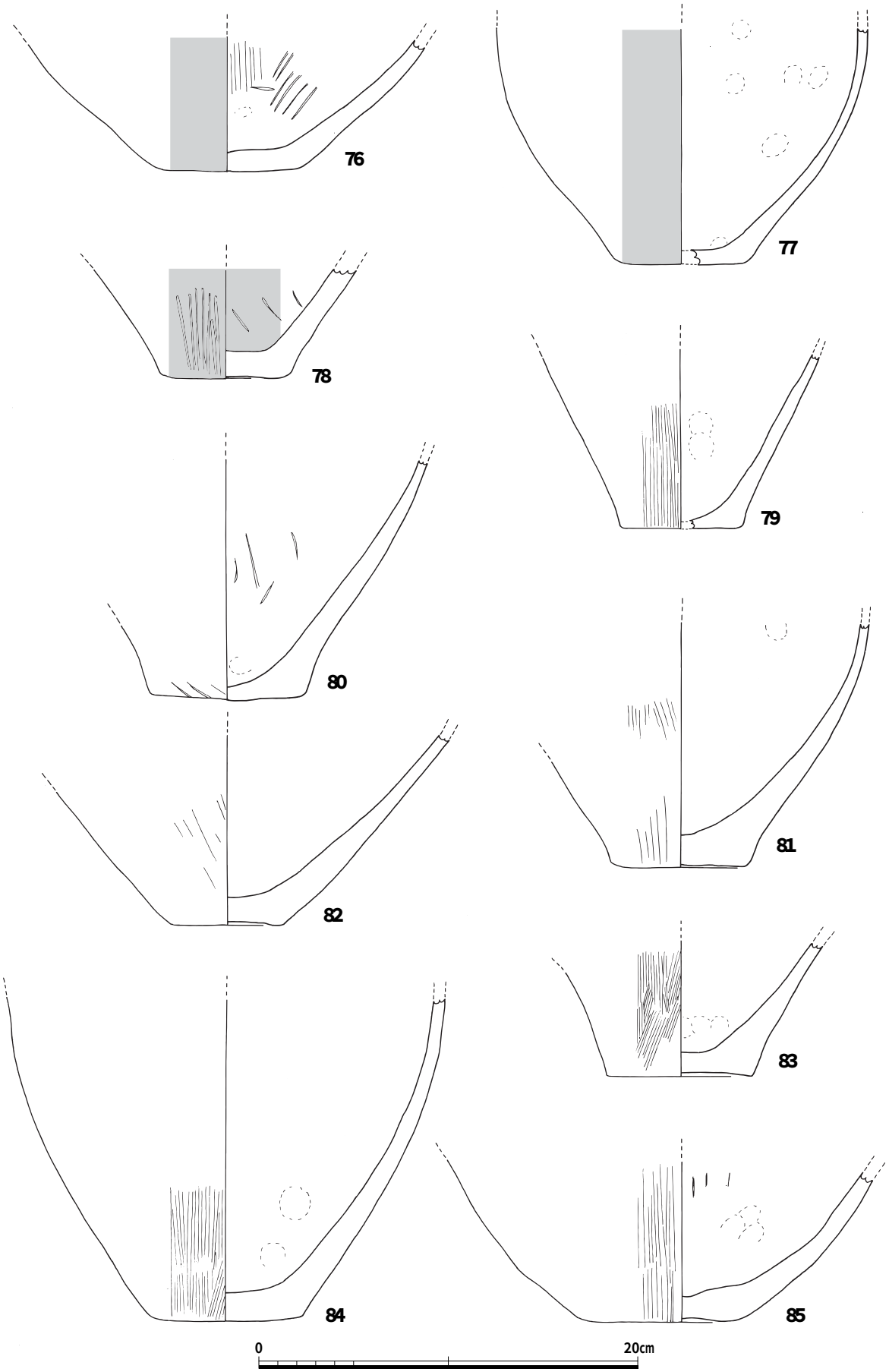


図34　河道２出土土器⑧（1/3）

⑨石器（図35～36・表23）

河道２の石器はほぼ弥生中期後葉～後期初頭のものとしてとらえることが可能である。また祭祀における道具との関連も考慮すべきである。**1**の磨製鏃は頁岩の表面が風化によって剥落しているため，研磨の方向が不明瞭であるが，基部に浅い加工を施し，僅かに茎部を造り出している。遺跡内出土の磨製鏃は凹基式のものが多いことから中期後葉の例として特質されよう。**2**は左右対称に削り出した石製品で，特に尾鰭のように突き出した突起に特徴がある。中央部は丸く研磨しているが，上下両端は面取りをおこなっている。使用方法については不明だが，装身具や漁撈具なども考慮すべきであろう。**3**は河道１で出土している砥石に近似しており，全面研磨痕に覆われた方形の砥石である。質的には河道１出土の方形の砥石よりも硬質の頁岩を使用しており，敲打によって整形しながら砥石として使用していたのであろう。長方形であることに特徴がある。**4**の石斧は，輝緑質安山岩と思われる素材を使用した断面円形の磨製石斧である。刃部は蛤刃状を呈するが，かなり研ぎ減りしていることや，刃部が破損状態であることから河道内に廃棄されたものであろう。**5**の石鎌は通常の石鎌より分厚く，敲打のみで整形されている。遺跡出土の石鎌は，素材段階でほぼ厚みが決定され，薄身であることから考えれば異質といえる。この他，台石や中央部が窪んだ敲石などが出土しているが，祭祀に関連する遺物としては，先の不明石製品などが考えられよう。

表23　河道２出土石器観察表

報告番号	調査区　遺構　層位 調整手法	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	器種	石材
1	17　河道２　⑥ 茎部を造り出し鎬も明瞭である	6.3	2.3	0.7	12.0	石鏃	頁岩
2	18　河道２　南側トレンチ 全面を研磨　特に両端部は面取りしている	9.3	3	1.1	46.8	不明	黒色頁岩
3	18　河道２　⑥ 全面に研磨痕　長方形が特徴	18.8	4.7	4.4	1,160.0	砥石	黒色頁岩
4	18　河道２　③ 全面を研磨　敲打と研磨により長方形状に整形を行なう	12.4	5.5	4.4	484.6	石斧	玄武岩
5	17　河道２　⑥ 搬入品の素材を使用　破損後廃棄されたものと思われる	11.5	4.65	1.45	118.8	石鎌	頁岩
6	18　河道２　⑥ 表裏とも敲打による窪みが認められる	12.3	11.1	3.7	832.8	敲石	玄武岩
7	18　河道２　⑥ 表裏とも平滑に研磨される　磨石として使用か	18.6	18.4	3.9	2,198.2	石皿	玄武岩
8	18　河道２　⑥ 表裏とも敲打による窪みが認められる	9.95	4.6	4.5	460.0	敲石	玄武岩

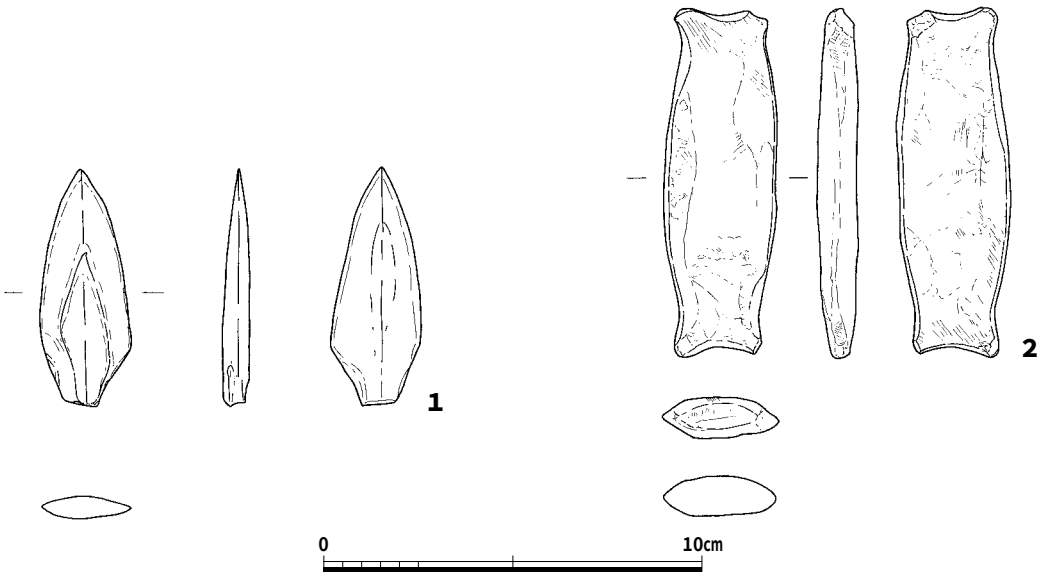


図35　河道２出土石器①（1/2）

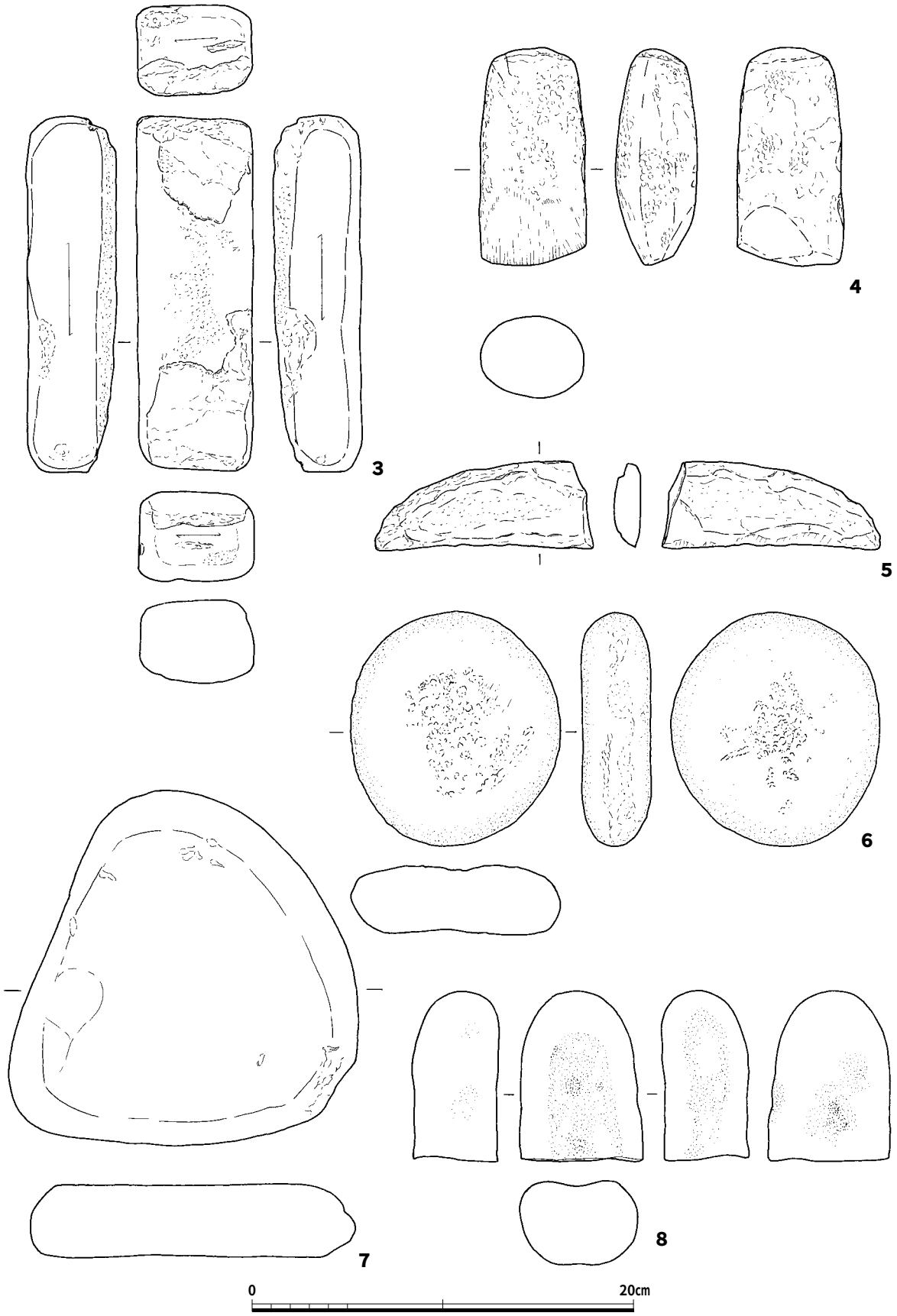


図36　河道２出土石器②（1/3）

⑩木製品（図37～38・表24）

河道２から検出された木製品は，共伴する土器から弥生中期後葉～後期初頭と捉えることができる。流木と思われる木材がほぼ全面から多数検出され，それらに混在して木製品が確認された。黒漆塗りの木製品も検出され，河道２の特殊性が感じられる。全体の傾向として朽ちた木製品が多く，残存状況はあまり良くない。そのため検出後に崩れるものが多く，報告できるものが限られた。

2と**4**には黒漆が確認された。**2**は木製高坏の脚部で透かし彫りが施され，表に黒漆が塗られている。原の辻遺跡ではこれまでにも漆塗木製高坏の脚部が出土しているが，透かし彫りが施された例は初見である。**4**は内面に黒漆が施された鉢状容器である。裏面の一部分にも漆塗りが施されている。柄が付いて杓子であった可能性もある。漆の特性は土中であっても変化することがなく，土化や消滅することがない点にある。河道２は木製品が劣化しやすい環境であったとしても，圧倒的な丹塗磨研土器の数に比べて漆塗木製品の検出量は少ない印象を受ける。祭祀に使用される漆塗木製品自体が少なかったのか，他の理由によるものか，ともかくも検出量の違いには疑問を感じる。

1は横鍬またはエブリと思われる。中央部の凹みは本来はほぞ穴でやや幅が短いように思われる。接地面は激しい摩耗のため不明である。歯はもとからなかったものと思われる。**3**は匙柄である。全体に湾曲する。**4**は黒漆塗りの鉢状容器である。**5**は玉杓子である。**6**は切り込みを入れた杭である。簡易な構築ものの部材であろう。**7**は建築部材の転用であろうか，その性格は不明である。

表24　河道２出土木製品観察表

報告番号	調査区	遺構	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	器種	備考
1	17	河道２	⑥	32.9	4.8		
2	18	河道２	⑥	11.4	5.2	脚	表：漆塗
3	17	河道２	⑥	15.7	1.5	匙	
4	17	河道２	⑥	21	8.6	不明	凹面：漆塗
5	18	河道２	中央部トレンチ	20.9	9.9	不明	
6	17	河道２	⑥	29.5	4.2	不明	
7	17	河道２	⑥	38.6	14.8	不明	

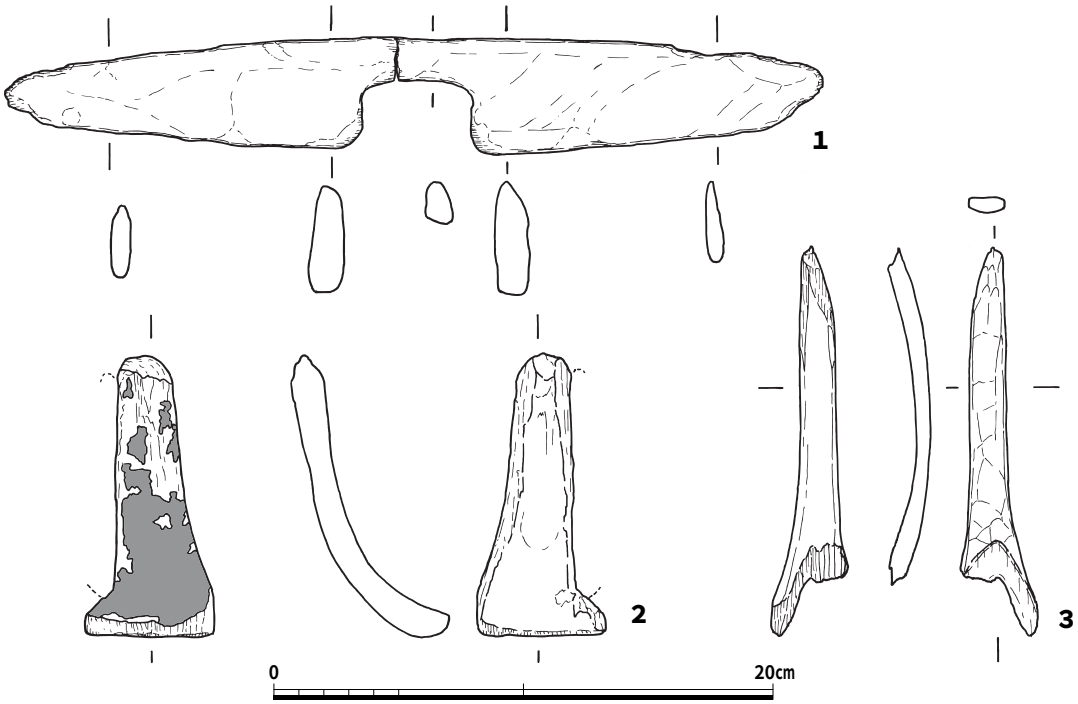


図37　河道２出土木製品①（1/3）

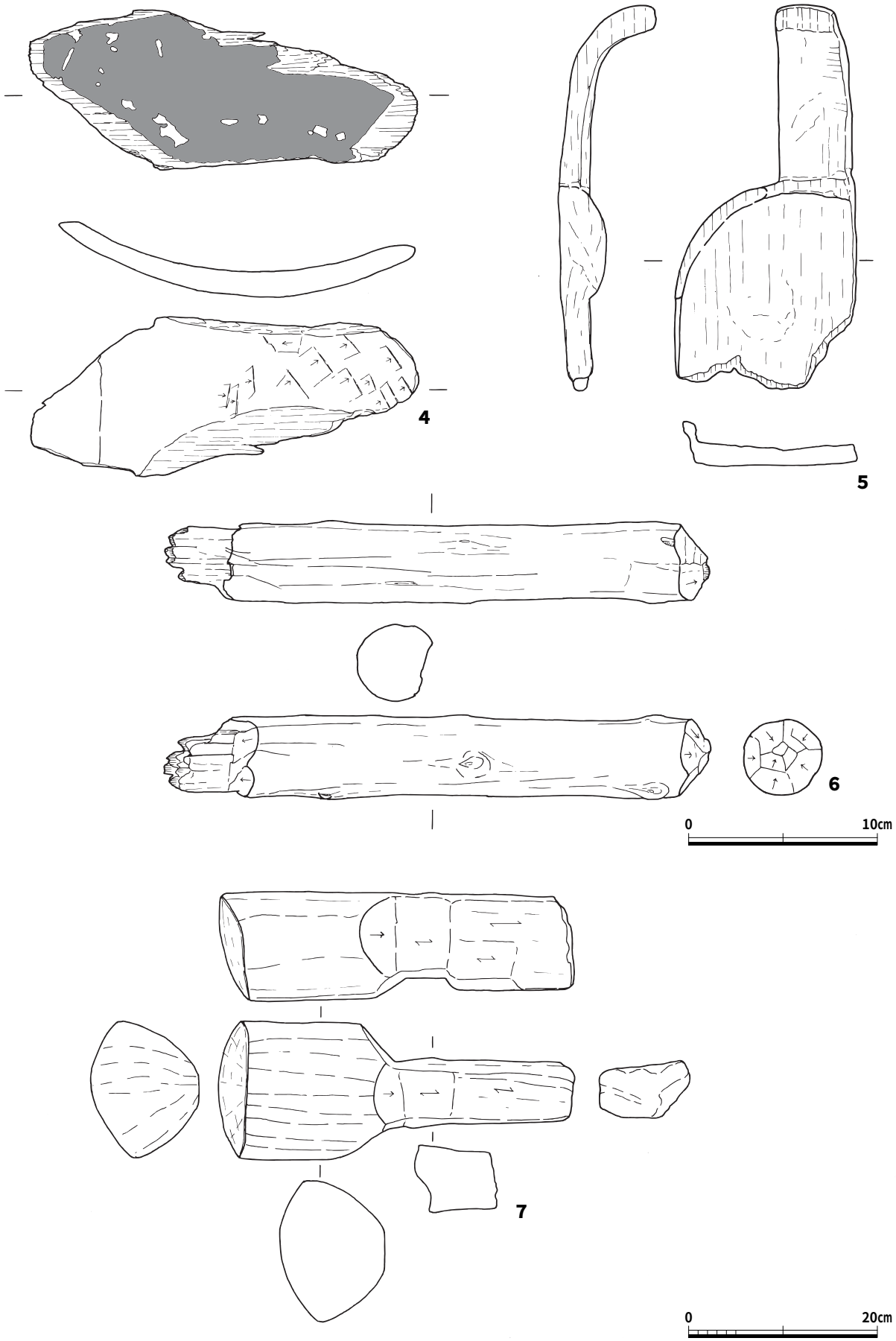


図38　河道２出土木製品②（4～6：1/3　7：1/6）

⑷ 樹皮敷遺構（図39）

17調査区で検出した樹皮状繊維を敷き詰めた遺構で，南北最長幅2.2㍍東西最大長10㍍を測る。最大幅は検出面の東側にあたり，西側は徐々に細くなり，やがて終息する。平坦ではなく，やや北側に傾斜する。所々虫食い状に樹皮状繊維の抜けた所はあるものの，ほぼ全面にわたり厚さ１～２㌢ほどの繊維が敷き詰められている。東西軸に繊維が敷かれている傾向が観察されるが，検出面東側および調査区中央の南北ベルト付近では縦横に交錯するように敷かれている所も見受けられる。特に検出面東側では樹皮状繊維の下に複数の木材が直角に交差するように横たわっており，意図的な配置を感じさせる。

この樹皮敷遺構は北側に杭列を備える。33本を確認し，うち２本は矢板状のもので，杭・矢板はいずれも先端部が加工されている。樹皮敷遺構の確認面からほぼ１㍍の深度に打ち込まれていることや，杭同士がほぼ等間隔に打ち込まれている点から，極めて計画的かつ規則的に設けられていることがうかがえる。杭は土圧で北側に傾いていることから，樹皮敷遺構上の堆積層はこの遺構が構築された際の埋土と判断される。杭の上部はすでに朽ちているため，杭本来の長さは不明であるが，遺構上堆積層の標高を考慮するなら1.3～1.5㍍と推測できよう。杭の南側，樹皮敷遺構上には横木と思われる木材が数本確認されている。

樹皮敷遺構は河道２の土層堆積状況から，水辺で祭祀が執り行なわれた時期に構築されたと判断した。杭列の存在からも，この遺構が埋土を含めて河道２の南岸に構築された護岸的な遺構である可能性が極めて高いといえる。樹皮状繊維を敷くことが目的ではなく，河道２南岸の保護が目的であったことは，樹皮状繊維が途切れてもなお杭列が３本ほど西側に打ち込まれていることから推測される。

なぜこのような護岸的な施設を河道２は必要としたのか。この点については樹皮敷遺構が，南側微高地をより河道２に迫り出すことを目的とした造成及び護岸であった可能性を提起したい（**図66**）。その理由は，すでに祭祀が執り行なわれたと判断される北側微高地と同様に，南側微高地においても何らかの祭祀が行なわれた可能性があるためである。H11雇用（**小石2000**）の報告ではSD02において丹塗祭祀土器および大量の建築部材が廃棄された状態で確認され，時期は弥生後期と捉えている。またその周辺からは楽浪系瓦質土器や銅釧が出土している。この状況は河道２④層の遺物検出状況と酷似するといえる。また南側微高地を迫り出すことは，なにもない空間を作り出すことに意味があると思われる。今回の調査において樹皮敷遺構の南では古代の足跡状遺構や水田跡以外，弥生時代に帰属する遺構が確認されなかったことは，南側微高地の性格を検討する際の１つの視点となり得る。

樹皮敷遺構の東側については未調査区域に入るため推測ではあるが，南側微高地を迫り出し，それを保護することが樹皮敷遺構の目的と仮定すれば，おそらく南に曲がり，不完全な三日月状になるものと思われる。これまでに原の辻遺跡で確認された護岸施設は石で構築されたものであったが，杭列と樹皮状繊維によるものは初見である。

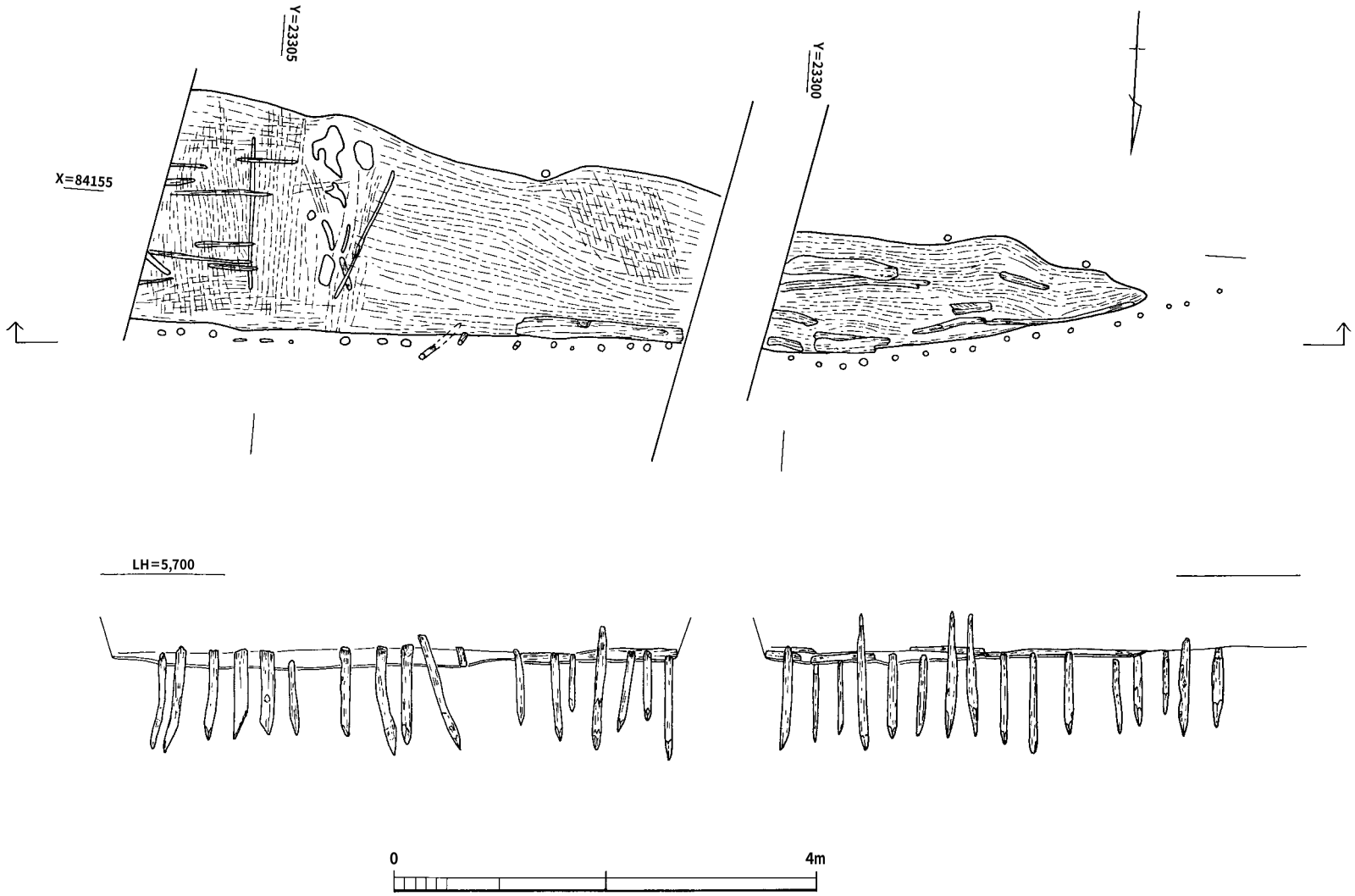


図39　樹皮敷遺構実測図（1/60）

⑸ 祭 祀 土 坑（図41）

18調査区で検出した土坑で，最大幅約4.2㍍長さ約７㍍深さ約0.5㍍を測り，南東側がややくびれる変形菱形状を呈している。この土坑の位置する区域は河道が南西側を迂回する所で，あたかも河道に北側微高地が突き出た地形（図66）となっており，そのほぼ中央部にこの土坑は位置する。覆土は暗灰褐色を呈するが，東側での検出面はシミ状のため不明瞭であった。土坑中央部に20～30㌢大の玄武岩が東西軸にほぼ一列に配置されており，底から弥生中期前葉の壷と杭１本を検出した。杭は上部がかなり劣化していたが，直径11㌢を測り，かなりしっかりとした杭である。土坑中央部に立てられていたと思われる。壷は玄武岩上に口縁を下に置かれていた。この杭と壷は土坑が構築された際の最初の埋納物と思われる。土坑内の層位には数層の炭化物層があることから，数回にわたり火を燃やしたものと思われ，状況的に祭祀を執り行なった場所であると判断した。この土坑を中心に祭祀がおこなわれ，後に祭祀道具が河道に廃棄されたと考えられる。

祭祀土坑の土層（図40b-b'）。

分層はしていないものの，層位間に炭化物層が多く介在する点が特徴と思われる。

表25　祭祀土坑土層観察表

層位	土層色質調	観察注記
①層	淡灰青色粘質土層	しまりがあり，炭化物を若干含む。祭祀土坑が埋没する最終段階。
②層	暗灰色粘質土層	やや粘性をもつ。炭化物を散漫的に含む。東側では不明瞭になる。
③層	黒褐色粘質土層	多量のカーボンを含み，②層との間に炭化物層をはさむ。
④層	淡灰色粘質土層	①層に近似し，炭化物を含む。
⑤層	オリーブ色粘質土層	硬質粘土で意図的に粘土を貼った可能性がある。⑦層に近似する。
⑥層	淡灰青色粘質土層	ややしまった粘土層。
⑦層	オリーブ色粘質土層	炭化物はあまり含まない。
⑧層	暗灰褐色粘質土層	炭化物を多量に含み，上面に焼土が若干乗る。
⑨層	淡灰白色粘質土層	⑧層からの落ち込みか土層上部に炭化物を含むが，土坑の縁側では炭化物を含まない。下部に玄武岩角礫を包含する。

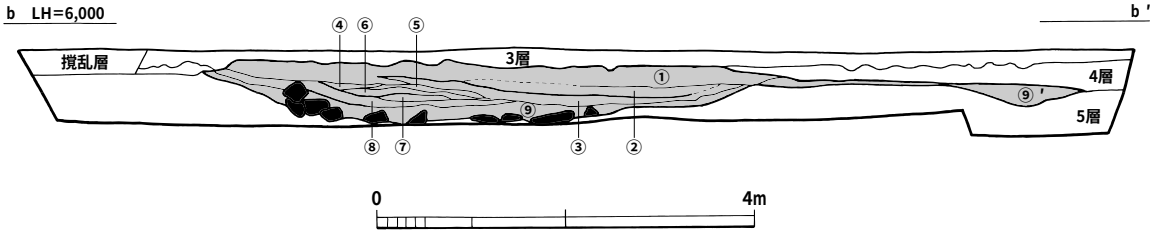


図40　祭祀土坑土層図（1/80）

祭祀土坑の遺物（図42・表26）

土器は弥生中期中葉～後期初頭のものが主体である。**1**は土坑底に配置された玄武岩上から出土した壷で，胴部に穿孔が確認される。弥生中期前葉（須玖Ⅰ式古段階）と思われる。**2**～**3**は壷口縁部で，**3**には口縁先端に刻目が施される。**4**～**7**は甕口縁部で，**8**～**11**は底部である。**12**は土坑中央部に打ち込まれた杭で，先端は加工されている。**13**は砥石，**14**は石鎌である。

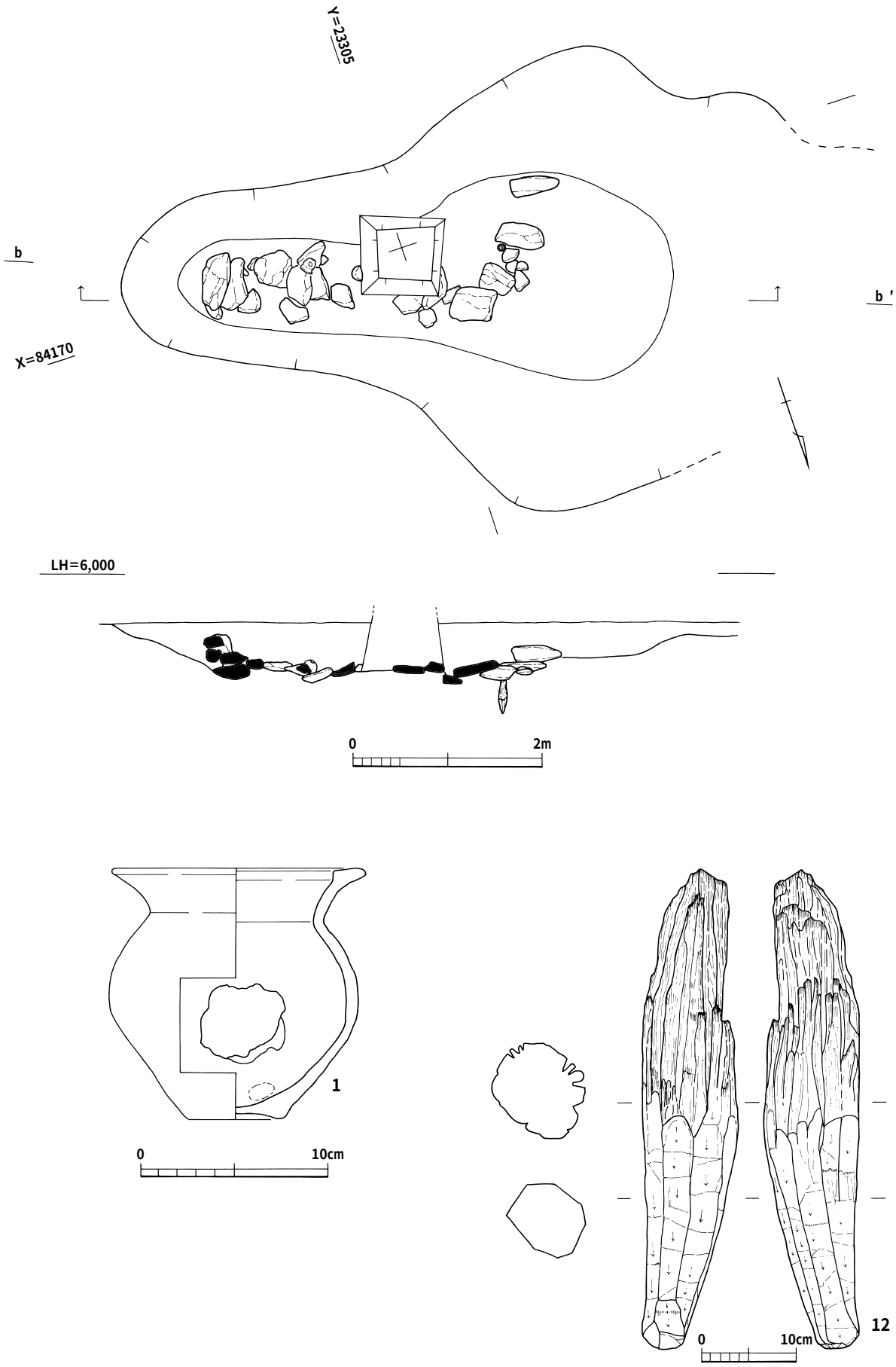


図41　祭祀土坑実測図（上１/60）および遺物実測図（左１/３　右１/６）

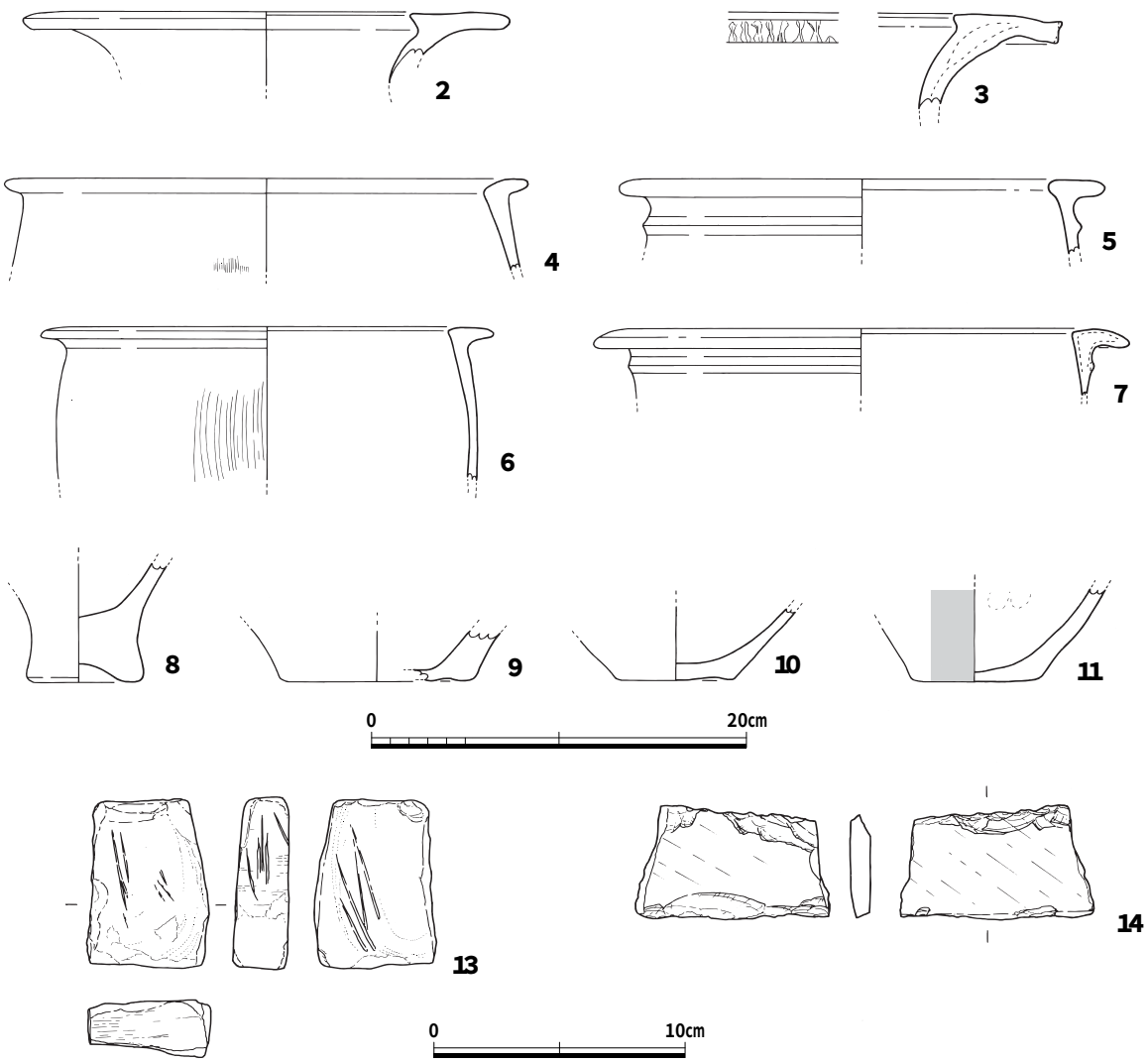


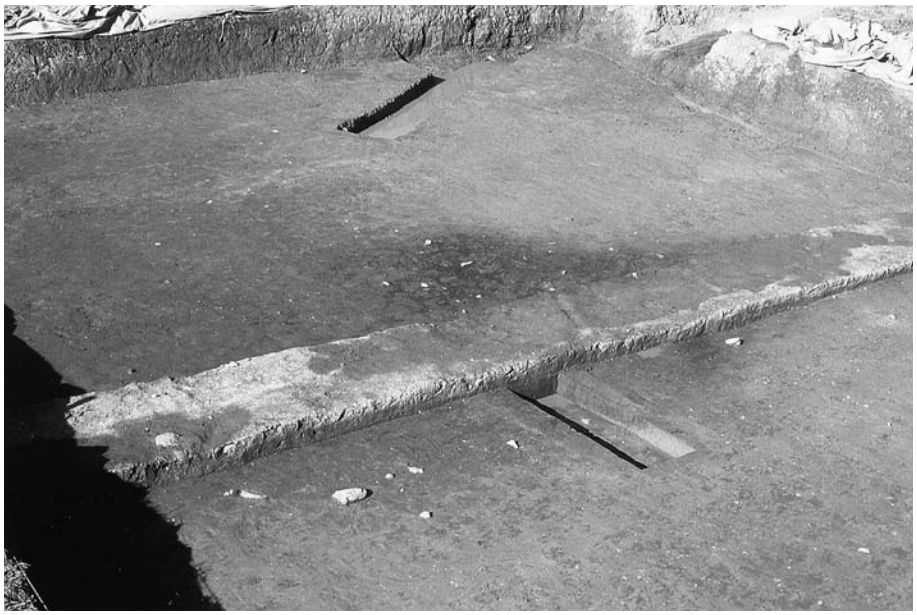
図42　祭祀土坑出土遺物（2～11：1/4　13～14：1/3）

表26　祭祀土坑出土遺物観察表

報告番号	調査区　遺構　層位 調整手法	色調番号（表）	胎土	器種	残存状況	備考
1	18　祭祀土坑　― 表：ナデ　裏：ナデ指オサエ	7.5Y７/１	長石・石英	甕	完形	胴部：穿孔
2	18　祭祀土坑　― 表：口縁部に横ナデ	５YR６/６	長石・石英・金雲母	壺	口縁部	
3	18　祭祀土坑　― 表：横ナデ	５YR５/４	長石・石英	壺	口縁部	口縁部：刻目
4	18　祭祀土坑　― 表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：横ナデ	2.5Y７/３	長石・石英	甕	口縁～胴部	
5	18　祭祀土坑　― 表：横ナデ　裏：横ナデ	7.5YR７/４	長石・石英	甕	口縁部	
6	18　祭祀土坑　― 表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：横ナデ	10YR５/２	長石・石英・金雲母	甕	口縁～胴部	
7	18　祭祀土坑　― 表：横ナデ　裏：横ナデ	2.5Y７/３	長石・石英	甕	口縁部	
8	18　祭祀土坑　― 表：ナデ　裏：指オサエ	7.5YR７/３	長石・石英	甕	底部	
9	18　祭祀土坑　― 表：ナデ　裏：ナデ	５YR６/６	長石・石英・金雲母	壺	底部	
10	18　祭祀土坑　― 表：ナデ　裏：ナデ	10YR７/３	長石・石英・金雲母	壺	底部	
11	18　祭祀土坑　― 表：ナデ　裏：ナデ指オサエ	10YR７/３	長石・石英	壺	底部	表：丹塗

報告番号	調査区　遺構　層位 調整手法	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	器種	備考
12	18　祭祀土坑　底面	46	11	10	杭	先端部に加工痕

報告番号	調査区　遺構　層位 備考	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	器種	石材
13	18　祭祀土坑　― 線状痕あり	6.7	4.8	2.2		砥石	砂岩
14	18　祭祀土坑　― 石鎌未製品	7.7	4.5	2.2		石鎌	頁岩



図版７
祭祀土坑①（遺構検出状況　南から）

図版８
祭祀土坑②（遺構完掘状況　北から）

図版９
祭祀土坑③（遺物検出状況　東から）

３．河道３・護岸遺構

⑴　検 出 状 況（図43）

河道３

河道３は20調査区で南側の立ち上がりを確認した。この河道３は南で河道１および河道２と三叉路のように合流することが判明している。北ではH11特定（**杉原2000**）における１号旧河道とつながり，北上した後に幡鉾川に合流すると思われる。

護岸遺構

河道３の東側に南北長40㍍にわたって検出した。遺構は川底に向かって緩やかに傾斜しており，「傾斜護岸」の形態を示している。岩の大きさから洪水等で流されてきた岩が積み重なったものではなく，人工的に構築された「石積み護岸」と考えられる。護岸には大きいもので約50㌢程の角張った玄武岩（岩種は地元産）が使用されており，岩の無造作な位置関係から投げ込みによる「捨て石護岸」と判断される。角張った岩を使用する理由は，その形状がもたらすインターロッキング（噛み合わせ効果）によって相互に動かない状態を保つためと思われる。（**註１**）

護岸遺構ではＨ８河川（**西1998**）における船着き場跡（弥生中期前葉）で見られた敷粗朶（しきそだ）工法や杭による石積みの補強は認められなかったが，船着き場の南で検出された石組み遺構（人工水路か？）と無造作な置き方などが類似している。なお護岸遺構の構築時期は河道３堆積層との関係，および遺構上層から出土した遺物から弥生中期後半と判断した。護岸遺構と船着き場・石組み遺構の間にはやや時期的な差があるものの，両遺構の関連性は十分に指摘し得る。

この遺構の役割は東側丘陵部にある空間を河川の浸食から守ることと断定できる。しかしながら不明な点も多い。まず遺構の東側には何らかの重要な施設・空間が存在したと推測されるものの，すでに削平を受けているため詳細は分からない点である。次に護岸遺構が臨む河道３は，ほぼ南北軸に一直線に流れている。そのため流路の合流地点でも河道の屈曲部でもないこの地点で，水流による浸食作用が強く発生するとは思えない点である。

ここに護岸を必要とした理由は何か。仮説ではあるが護岸遺構西側で河道３に合流する河道の存在を提起したい（**図66**）。この河道が流れる軸上ではH12雇用（**小石2000**）およびH10農道（**西1999**）調査が行なわれているが，ともに掘下深度は標高約５㍍と河道３の川底標高よりも約１㍍高く，そのため調査では検出されなかった可能性がある。またH12特定（**杉原2001**）Ｄ区における集石遺構も注目される。報告によれば集石頂上部の標高約５㍍，集石内からの出土遺物から構築時期は弥生中期後半，遺構南西部は弥生後期の堆積層に覆われるとある。護岸遺構の南約５㍍に位置することや，石の積み方，遺構西側の土層堆積状況は護岸遺構に酷似することから，両遺構は同じ性格の施設として機能していたと考えられる。やや勇み足の観はあるが，集石遺構は北上する河道２に対して，護岸遺構は東進して河道３と合流する未検出の河道に対しての「護岸」として機能したと推測している。

図43　河道３・護岸遺構平面図（１/240）および断面図（１/80）

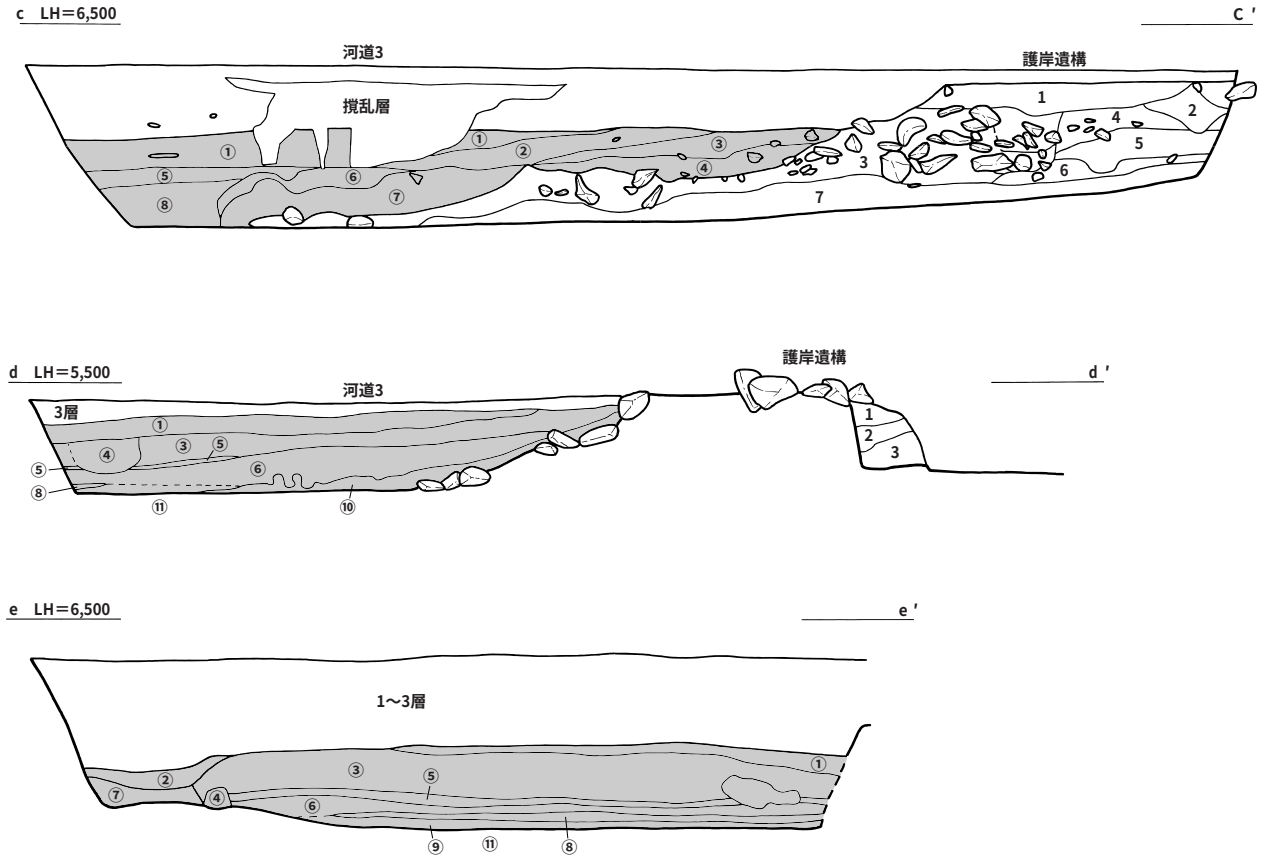


図44　河道３および護岸遺構土層図（1/80）

⑵　土　　層（図44）

河道３および護岸遺構の土層について説明する（**註２**）（**表27**）。

表27　河道３・護岸遺構土層観察表

20調査区北壁土層図（図44c-c'）

遺構	層位	土層色質調	観察注記
河道３	①層	暗灰色粘質土層	古代期の層で骨や流木を含み，粘質が強い。
	②層	黒褐色粘質土層	古墳時代の層位。（※中央ベルト・西壁①層に対応）
	③層	暗灰色粘質土層	弥生後期初頭～古墳初頭の遺物を含み，やや硬質。
	④層	淡灰色粘質土層	③層よりやや暗い。
	⑤層	暗灰色粘質土層	⑧層に似るがあまり有機物は含まない。
	⑥層	暗灰色粘質土層	⑤層よりやや暗い。
	⑦層	褐灰色粘質土層	弥生後期初頭～後葉の時期。（※中央ベルト・西壁⑦層に対応）
	⑧層	暗灰色粘質土層	木片などの有機物を多く含む。
護岸	１層	暗茶褐色混礫土層	中世～近世にかけての造成と思われる。
	２層	黒褐色土層	中世の溝か？
	３層	黄橙色粘質土層	やや硬質で，石列遺構が構築されている層位。
	４層	褐灰色混礫土層	ややしまった土をベースに10㌢大の礫が混入する。
	５層	多重砂層	赤褐色と褐灰色の砂層が交互に堆積する。
	６層	灰黄色粘質土層	カーボンを含む。
	７層	地山層	一部に護岸遺構大の石が含まれる。

20調査区中央ベルト南および西壁土層図（図44d-d'・e-e'）

遺構	層位	土層色質調	観察注記
河道３	①層	黒褐色粘質土層	やや粘質をもち，有機質を含む。古代～古墳前期の層ととらえられる。
	②層	黒褐色粘質土層	河道３を東西に切る古墳時代の溝と判断している。
	③層	淡灰色粘土層	粘性の強い均一の細かい粘土層。弥生後期初頭～古墳前期の遺物を含む。
	④層	黄橙色混砂土層	ブロック状に入り込み固くしまる。植物根の成分が浸透したものか？
	⑤層	緑灰色硬質土層	２～３㌢の薄い層で緑色を呈し硬質である。19調査区まで確認される。
	⑥層	灰褐色粘質土層	弥生後期初頭～後期後葉の土器を含む。
	⑦層	褐灰色粘質土層	河道３を東西に切る古墳時代の溝と判断している。
	⑧層	漆黒色炭化物層	炭化物のみで構成される層で，20調査区のみで確認される。
	⑨層	灰色混砂土層	所々炭化物や黄橙色の砂を混入する。⑧層と⑪層の漸移層。
	⑩層	明褐色硬質土層	護岸の石上に乗る土で，赤化しており，かなり硬質である。
	⑪層	赤褐色砂礫層	弥生中期後葉の土器を多く含む層。小礫と粗砂で構成され硬質である。

河道３・護岸遺構のステージ（堆積変遷）（図45）

ステージ１…古墳前期～古代の水田。古代～中世では水田造営が丘陵裾部まで広がり，護岸遺構上部はかなりの損壊を受けたと思われる。21調査区の護岸遺構がやや西側に張り出しているのは，これら水田造営に伴う削平を受けてのことと思われる。

ステージ２…古墳前期～古代の段階ととらえられ，流れのない湿地であったと思われる。

ステージ３…弥生後期初頭～古墳前期の段階。この段階でほぼ護岸は埋没し，護岸遺構上の堆積層に弥生後期初頭の甕が埋められる。

ステージ４…弥生中期後葉～後期初頭の段階。この頃まで護岸遺構は機能していたと考えられる。

ステージ５…弥生中期後葉の段階。護岸遺構構築時の川底と判断している。護岸遺構内に挟まった土器と同じ弥生中期後葉の土器が多い。直下の基盤層⑪層は砂礫層で，この段階ではある程度の水量があったことが想定される。護岸の上部との比高差は１㍍ほどである。

【註】

1．後藤惠之輔氏（長崎大学院教授）よりご教授頂いた。

2．中央ベルト南と西壁の土層番号は対応する。これら２カ所の土層番号と北壁の土層番号は対応しないが，同一層位は注記にて説明を行なっている。また d-d’護岸遺構１～３は放射性炭素年代測定の試料を取り上げた層位である。

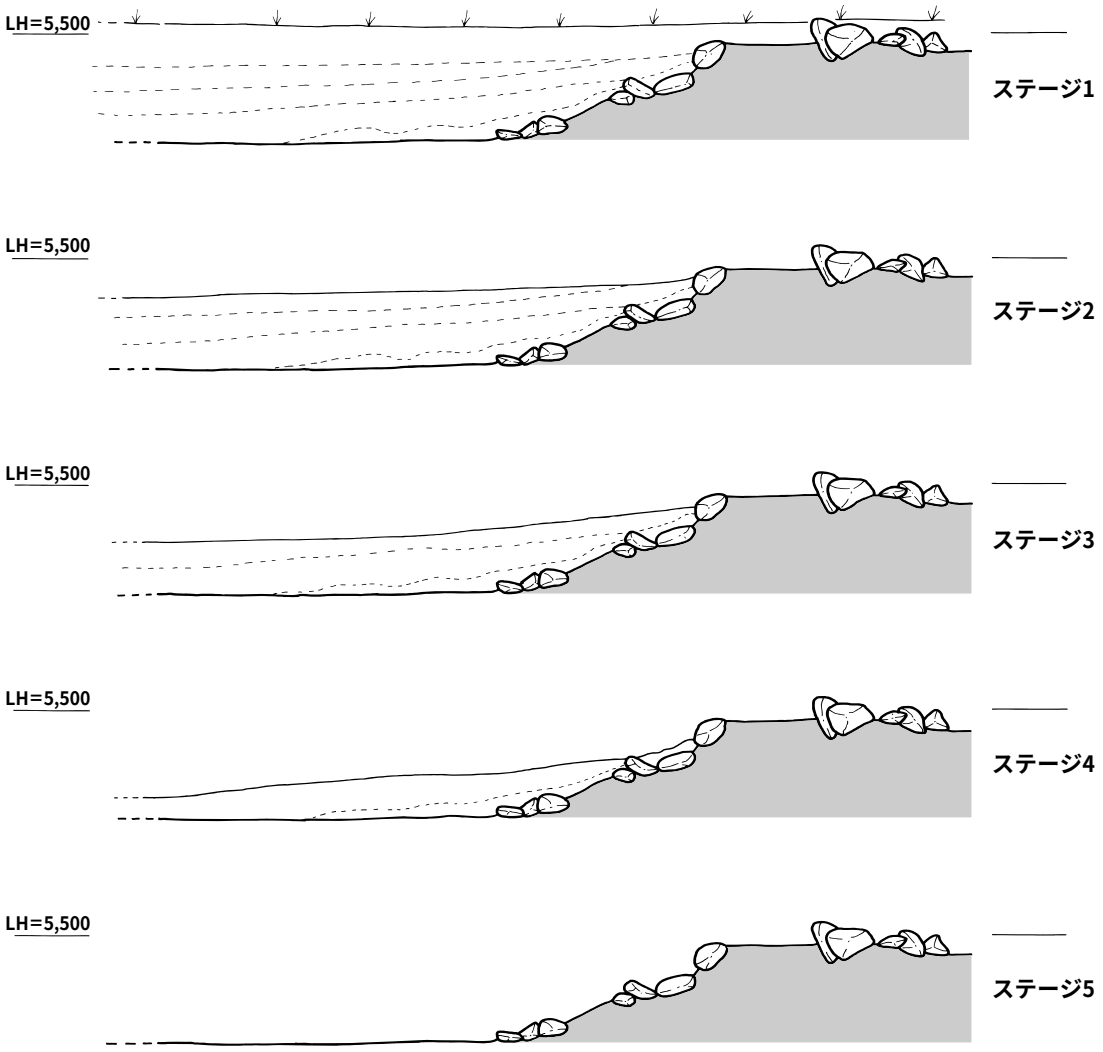


図45　河道３ステージ表

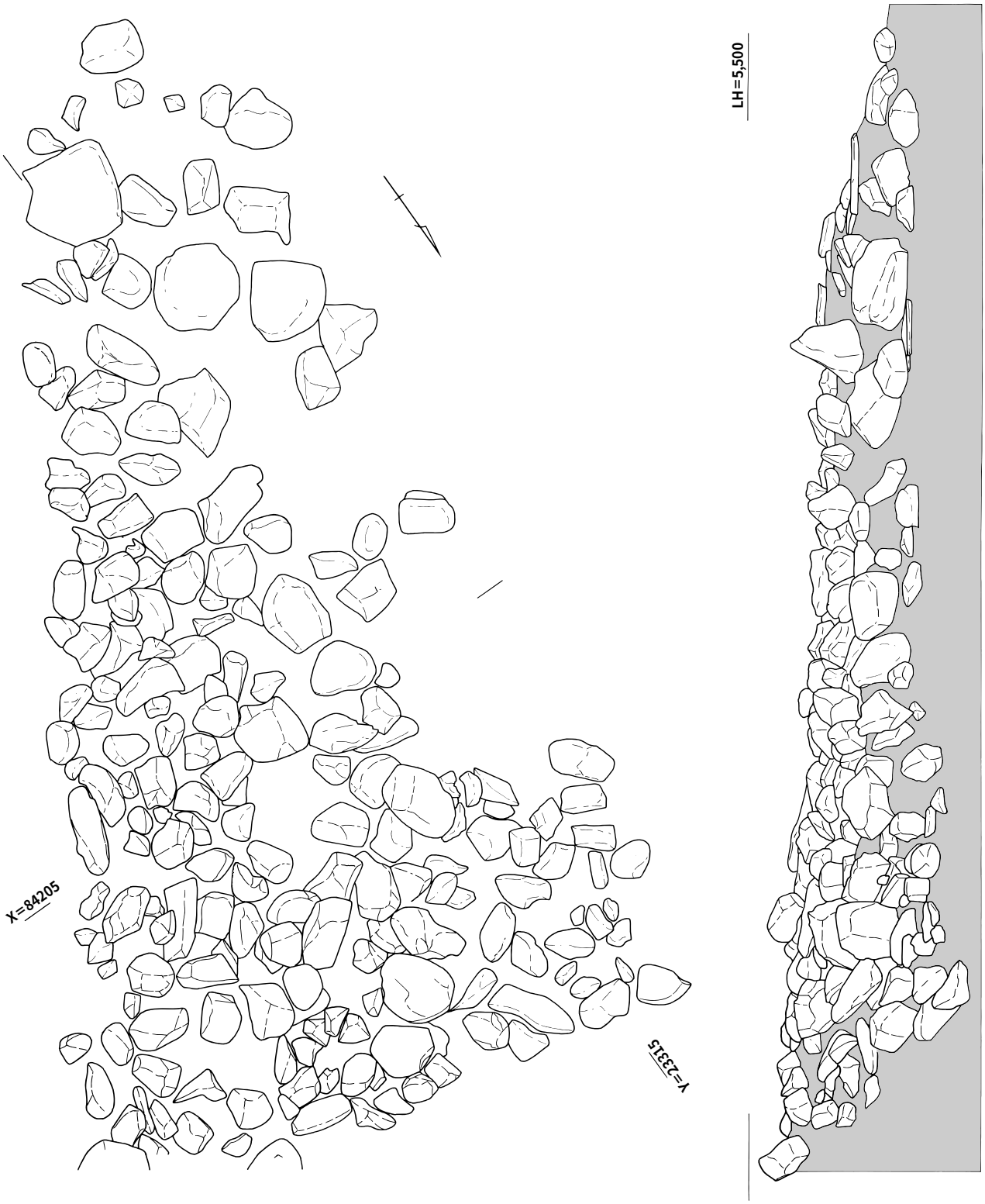


図46　護岸遺構実測図（1/40）

表28　護岸遺構直上出土土器①観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表)　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
1	20　護岸　遺構直上　7.5YR 6/6　長石・石英　壺　口縁～底部 表：ハケ目　裏：口縁部に横ナデ・胴部にヘラナデ
2	20　護岸　遺構直上　7.5YR 6/4　長石・石英　壺　口縁～底部　口縁部：刻目 表：口縁部及び突帯に横ナデ・胴部にハケ目　裏：ハケ目ナデ消し・口縁部に指オサエ

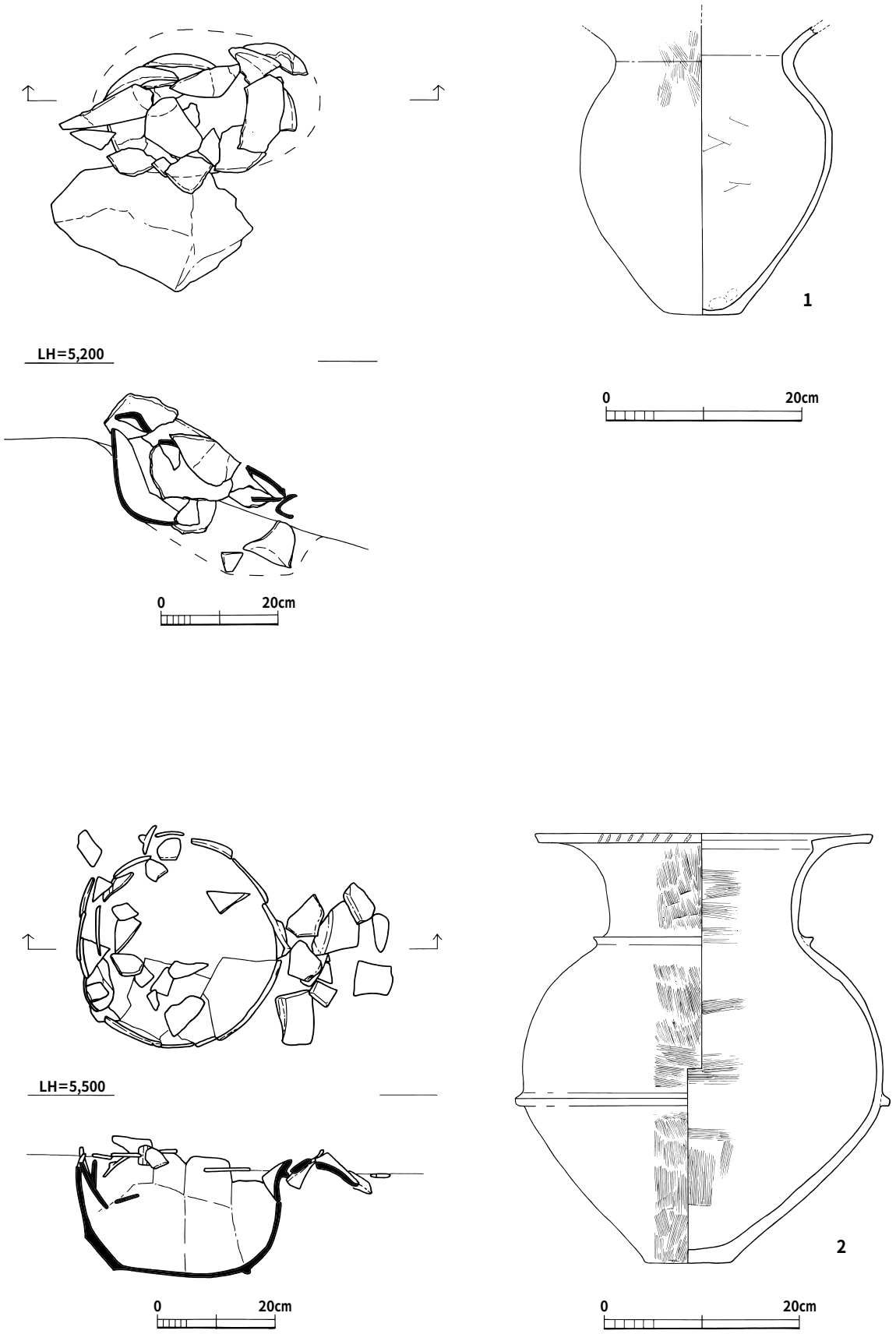


図47　護岸遺構直上出土土器①（左１/10　右１/６）

⑶ 出土遺物

①護岸遺構（図48・表29）

1は護岸遺構南側，遺構頂上部から南側へゆるやかに傾斜するところで出土した甕である。帰属する土層は西側から護岸遺構上に堆積する。出土状況から意図的に置かれたものと判断した。胴部から口縁部にかけて「く」の字型を示し，頸部の屈曲部には明瞭な稜線は見られない。底部と胴部がほぼ直線的につながり，底面はやや凸レンズ状となり安定に欠く。

2は護岸遺構中央頂上部に位置するところから出土した壺である。**1**同様に護岸遺構上に堆積する層位からの出土で，上部は削られているものの，その出土状況から意図的に置かれたと判断した。口縁部は大きく外反し，上部に粘土帯を貼って厚みがつくられている。口縁先端に刻目が施され，頸部下に三角凸帯，胴部最大径下に凸帯が施される。底部と胴部は直線的につながり，平底である。ともに弥生後期中葉～後葉に比定される。

3は甕の口縁部である。口縁は鋤先型を示し，口縁先端が垂れ下がる。口縁下に三角凸帯を施す。弥生中期終末（須玖Ⅱ式新段階）と思われる。**4**は甕の口縁部である。口縁上部に粘土帯を貼って厚みをつくる。口縁外側先端に凹みをつけ，口縁内側は摘み出し状となる。**3**・**4**はともに弥生中期終末（須玖Ⅱ式新段階）と思われる。

5は甕の底部である。底部はややふんばり，底面は上げ底となる。表面は縦ハケ目により調整される。かなり大型な甕と思われる。**6**は甕の底部と思われる。底部と胴部がやや広がりながらつながる。底面は平底に近く，安定する。表面は目の細かい縦ハケ目により調整される。裏面にはスス痕が確認される。**7**は壺の底部である。底部と胴部がほぼ直線的につながる。底面はやや上げ底で安定する。外面は縦ヘラ磨が施される。**8**は甕の底部である。底部と胴部がほぼ直線的につながり，胴部最長径から内湾して球形状となる。底面はやや上げ底で安定する。外面は縦ヘラ磨が施される。**9**は壺の底部である。底部が垂直に立ち上がり，外反しながら胴部へつながる。裏面にはヘラオサエ痕が見られる。**10**は壺の底部と思われる。底部と胴部が直線的につながり，底面は平底で安定する。

表29　護岸遺構直上出土土器②観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表)　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
3	20　護岸　遺構直上　10YR 7／3　長石・石英　甕　口縁部 表：ナデ　裏：ナデ
4	20　護岸　遺構直上　5YR 7／4　長石・石英　壺　口縁部 表：ナデ　裏：ナデ
5	20　護岸　遺構直上　10YR 7／2　長石・石英・金雲母　不明　底部 表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ
6	20　護岸　遺構直上　7.5YR 8／6　長石・石英・金雲母　不明　底部　裏：スス痕 表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ
7	20　護岸　遺構直上　7.5YR 6／6　長石・石英・金雲母　不明　底部 表：縦ヘラナデ　裏：ナデ指オサエ
8	20　護岸　遺構直上　7.5YR 6／6　長石・石英・金雲母　不明　底部 表：縦ヘラナデ　裏：ナデ指オサエ
9	20　護岸　遺構直上　10R 6／4　長石・石英　不明　底部 表：ナデ　裏：ナデヘラオサエ指オサエ
10	20　護岸　遺構直上　7.5YR 6／4　長石・石英・金雲母　不明　底部 表：ナデ　裏：ナデ指オサエ

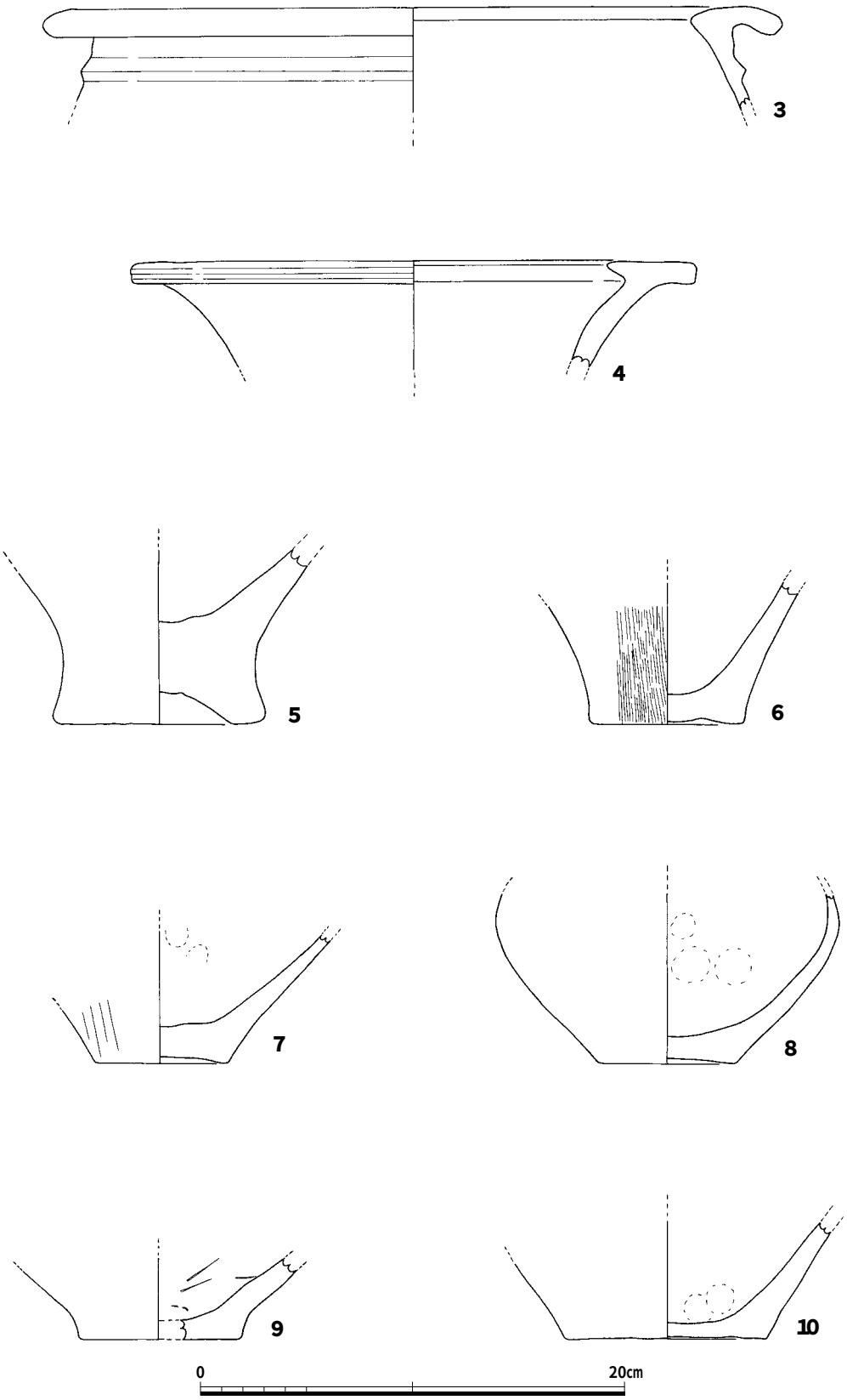


図48　護岸遺構直上出土土器②（1/3）

②河道３（上層）（図49・表30）

河道３の上層（⑥層）から出土した遺物である。完形品に近い状況で出土するものが多い点が特徴といえる。時期は弥生後期初頭～後期後葉と捉えている。

1は甕の底部から胴部にかけてである。底部と胴部がほぼ直線的につながる。底部の角が丸みを帯び，底面もやや凸レンズ状で安定を欠く。表面は目の粗い縦ハケ目により調整される。

2は甕の胴部破片である。四角凸帯および三角凸帯が施される。四角凸帯と三角凸帯の間では縦ヘラ磨により暗紋様となる。

3は丹塗の短頸壺である。口縁部の一部が欠損するのみで，ほぼ完形で出土した。底面は平底で，表面は縦ハケ目の後にナデ消している。

4は甕の口縁部から胴部で，口縁部断面が「く」の字型を示す。表面は口縁部に横ナデ，胴部は縦ハケ目により調整される。

5は短頸壺の底部から胴部である。底部の角がなくなり，ほぼ丸底となる。表面はハケ目により調整される。

6は広口壺で完形品である。底部と胴部がほぼ直線的につながり，底部の角が丸みを帯びる。底面は凸レンズ状となり安定に欠く。表面はハケ目により調整される。

7は甕で，口縁部の断面は「く」の字型となる。

表30　河道３出土土器①観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表)　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
1	20　河道３　⑥　2.5YR４/６　長石・石英　甕　胴～底部　裏：スス痕 表：縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ
2	20　河道３　北側トレンチ　2.5Y７/２　長石・石英　甕　胴部 表：突帯間にヘラナデ　裏：ナデ指オサエ
3	20　河道３　③　2.5YR５/６　長石・石英・金雲母　甕　完形　表裏：丹塗 表：縦ハケ目縦ナデ消し　裏：ナデ指オサエ
4	20　河道３　⑥　7.5YR４/１　長石・石英・金雲母　甕　口縁～胴部 表：口縁部に横ナデ・胴部にナデ　裏：ナデ指オサエ
5	20　河道３　③　7.5YR６/４　長石・石英・金雲母　壺　胴～底部 表：ハケ目　裏：ナデ指オサエ
6	20　河道３　③　7.5YR６/３　長石・石英・金雲母　壺　ほぼ完形 表：口縁部に横ナデ・胴部にハケ目ナデ消し　裏：ナデ指オサエ
7	20　河道３　⑥　５YR５/４　長石・石英　甕　口縁～胴部 表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ

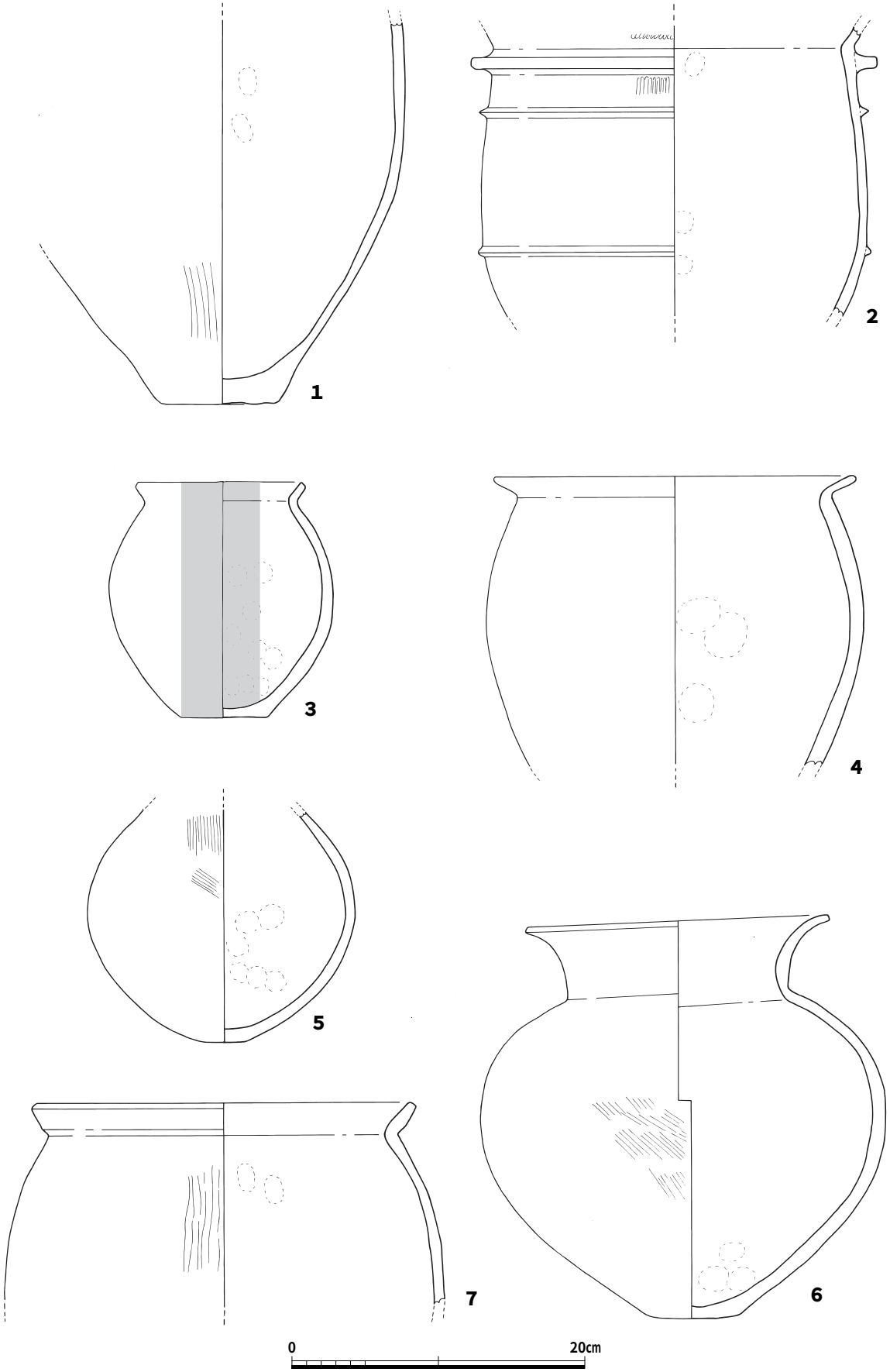


図49　河道３出土土器①（1/40）

③河道３（下層）（図50・表31）

河道３の下層（⑪層）から出土した遺物である。破片で出土するものが多く，鉄分の付着で黄色に変色するものもある。時期は弥生中期中葉～後期中葉と捉えている。

8～**13**は壺の口縁部破片である。

8は丹塗袋状口縁壺で口縁下にM字凸帯を施し，頸部はヘラアテにより暗紋様となる。**9**は丹塗広口壺で口縁上部に粘土帯を貼り，厚みをつくっている。口縁外側はやや垂れ気味に傾斜し，口縁内側は摘み出し状となる。口縁部は横ナデ，頸部は丹塗布後の縦ヘラアテにより暗紋様となる。**10**は丹塗短頸壺で口縁部は内側に傾斜し，横ナデにより調整される。**11**は丹塗短頸壺で口縁外側は垂れ下がり，口縁内側は摘み出し状となる。横ナデにより調整される。**12**は丹塗短頸壺で口縁断面が「く」の字型を示し，屈曲部が丸みを帯びる。横ナデにより調整される。**13**は袋状口縁壺で，口縁が逆「く」の字型を示す。⑪層で唯一確認された弥生後期終末の土器である。上層からの混入と捉えた。

14～**23**は甕の口縁部破片である。

14～**17**は口縁に「コ」の字型粘土帯を貼り付けて逆Ｌ字型を示す。口縁外側は水平につくられ，口縁内側の摘み出しは認められない。**16**は口縁下に三角凸帯を施し，口縁から凸帯にかけて横ナデにより調整される。**18**～**21**は口縁断面が逆Ｌ字型を示し，口縁がやや内側に傾斜する。口縁内側に短い摘み出しが確認される。**19**は口縁先端に刻目が施され，口縁部は横ナデ，胴部は縦ハケ目により調整される。**22**・**23**は口縁断面が逆Ｌ字型となり，口縁内側の摘み出もが顕著となる。

表31　河道３出土土器②観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表)　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
8	20　河道３　⑪　7.5YR７/１　長石・金雲母　壺　口縁～頸部　表裏：丹塗 表：口縁部に横ナデ・頸部に縦ヘラ磨　裏：横ナデ指オサエ
9	20　河道３　⑪　2.5YR６/８　長石・石英　壺　口縁～頸部　表裏：丹塗 表：横ナデ縦沈線　裏：横ナデ指オサエ
10	20　河道３　⑪　2.5YR５/６　長石・石英　壺　口縁部　表裏：丹塗 表：横ナデ　裏：横ナデ
11	20　河道３　⑪　7.5YR５/３　長石・石英・金雲母　壺　口縁部　表：丹塗 表：横ナデ　裏：横ナデ指オサエ
12	20　河道３　⑪　2.5YR５/４　長石・石英　壺　口縁～胴部　表：丹塗 表：横ナデ　裏：横ナデ
13	20　河道３　⑪　10YR７/４　長石・石英・金雲母　壺　口縁～頸部 表：口縁部に横ナデ・頸部に縦ハケ目　裏：横ハケ目横ナデ消し
14	20　河道３　⑪　５YR５/６　長石・石英・金雲母　甕　口縁～胴部 表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ハケ目
15	20　河道３　⑪　7.5YR５/４　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
16	20　河道３　⑪　５YR６/６　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：ナデ
17	20　河道３　⑪　５YR６/６　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
18	20　河道３　⑪　10YR６/２　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
19	20　河道３　⑪　５YR７/４　長石・石英・金雲母　甕　口縁～胴部 表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：横ナデ
20	20　河道３　⑪　５YR７/４　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
21	20　河道３　⑪　7.5YR６/１　長石・石英・金雲母　甕　口縁～胴部 表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：横ハケ目指オサエ
22	20　河道３　⑪　５YR５/６　長石・石英　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
23	20　河道３　⑪　５YR６/６　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ

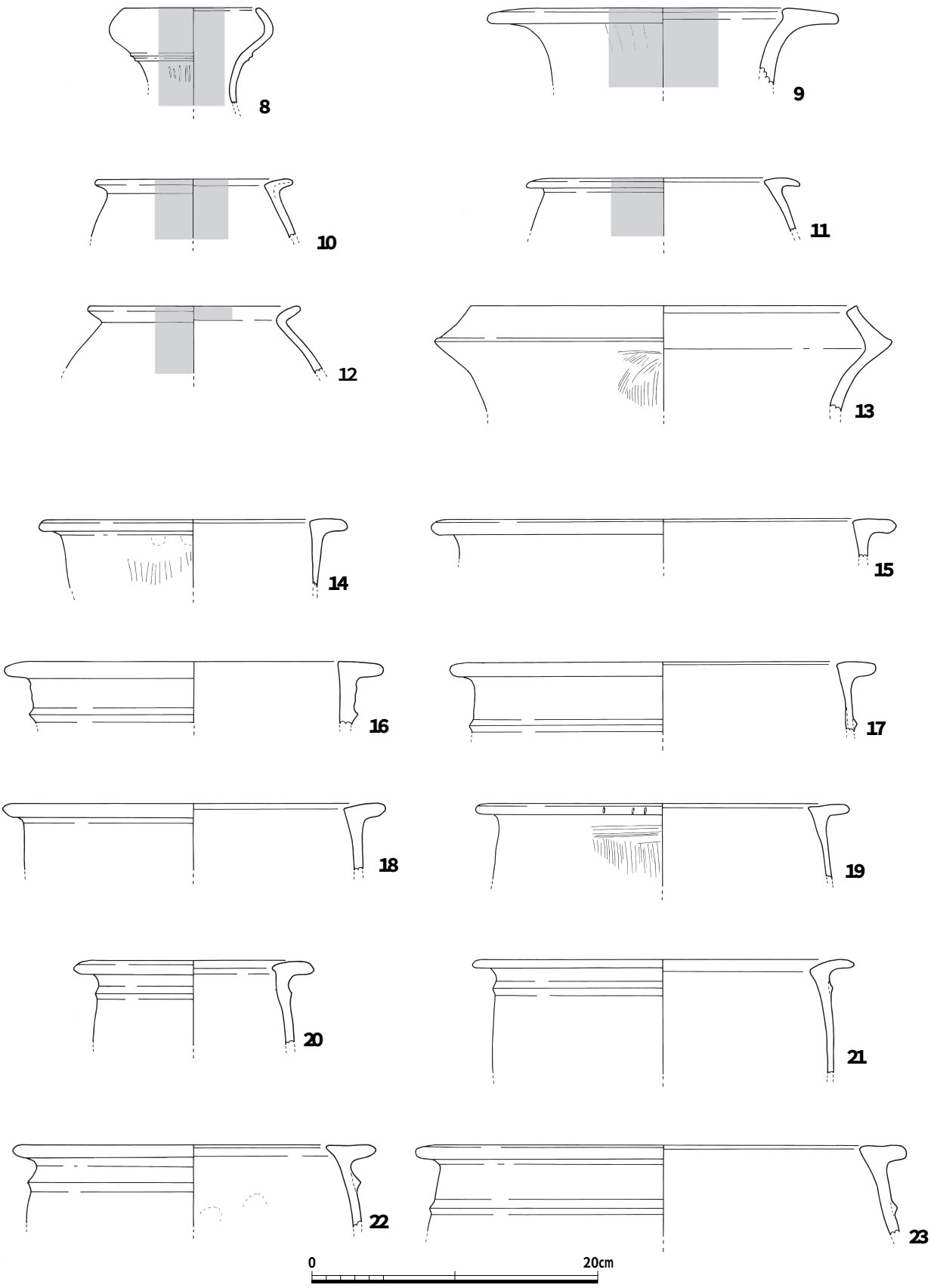


図50　河道３出土土器②（１/40）

④河道３（下層）（図51・表32）

24～**41**は甕の口縁部破片である。

24～**35**は口縁断面が鋤先型となる。口縁外側は水平につくられ，口縁内側の摘み出しも大きくなる。**25**は丹塗が施され，口縁下にM字凸帯を１条備える。凸帯下は縦ヘラアテにより暗紋様となる。**31**は口縁内側を摘み出す際の指オサエ痕が確認できる。口縁下に三角凸帯を施す。口縁部から凸帯にかけて横ナデ，胴部は縦ハケ目により調整される。**35**は口縁下に三角凸帯を施し，口縁部は横ナデにより調整される。

36～**39**は口縁断面が鍬先型で，口縁外側が垂れ下がる。**36**は丹塗が施され，口縁下に２条の三角凸帯を備える。口縁外側が垂れ下がり，口縁内側の摘み出しも大きい。鉄分の付着が多く，黄色く変色している。**39**は口縁下に３条の三角凸帯を備える。表面は横ナデにより調整される。

40～**41**は口縁断面が鍬先型で，口縁内側の摘み出しが特に強調されている。**40**は口縁内側を摘み出す際の指オサエ痕が確認できる。口縁下に三角凸帯を施し，口縁から凸帯にかけて横ナデ，胴部は縦ハケ目により調整される。**41**は口縁外側および内側が薄く水平につくられる。口縁下に三角凸帯を施し，口縁から凸帯にかけて横ナデ，胴部は縦ハケ目により調整される。

表32　河道３出土土器③観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表)　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
24	20　河道３　⑪　10YR６/３　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
25	20　河道３　⑪　2.5YR５/６　長石　甕　口縁部　表：丹塗　裏：口縁部に丹塗 表口縁部に横ナデ・胴部に縦沈線　裏：横ナデ
26	20　河道３　⑪　2.5YR５/６　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
27	20　河道３　⑪　2.5YR８/８　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
28	20　河道３　⑪　10YR６/８　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
29	20　河道３　⑪　５YR７/２　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
30	20　河道３　⑪　7.5YR６/４　長石・石英　甕　口縁～胴部 表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ
31	20　河道３　⑪　2.5YR７/１　長石・石英・金雲母　甕　口縁部　表：スス痕 表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ
32	20　河道３　⑪　５YR６/３　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
33	20　河道３　⑪　10YR６/１　長石・石英　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
34	20　河道３　⑪　7.5YR５/１　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ
35	20　河道３　⑪　2.5YR７/４　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
36	20　河道３　⑪　2.5YR５/６　長石・石英　甕　口縁部　表裏：丹塗 表：横ナデ　裏：横ナデ
37	20　河道３　⑪　10YR４/１　長石・石英　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
38	20　河道３　⑪　7.5YR７/１　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
39	20　河道３　⑪　7.5YR７/３　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
40	20　河道３　⑪　2.5YR６/６　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ
41	20　河道３　⑪　7.5YR５/４　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ナデ指オサエ

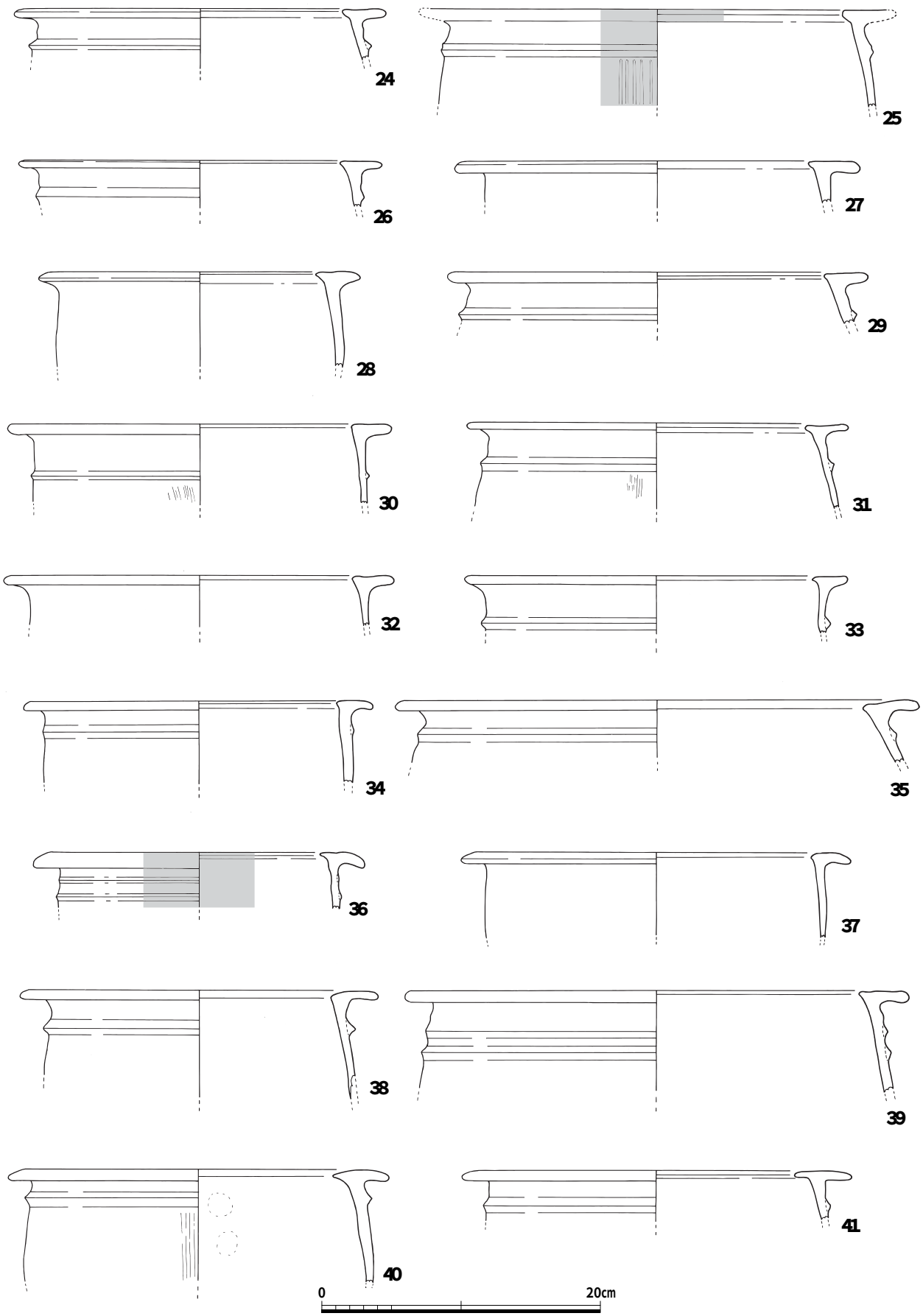


図51　河道３出土土器③（１/40）

⑤河道３（下層）（図52・表33）

42～**58**は底部である。

42～**44**は上げ底で，底部が垂直に立ち上がり，外湾しながら胴部へつながる。表面は縦ハケ目により調整され。**44**の裏面にはスス痕が確認される。**45**～**50**は平底に近く，底部がやや外反しながら垂直に立ち上がり，外湾しつつ胴部へつながる。表面は縦ハケ目により調整される。**45**の裏面にはスス痕が確認される。

51～**57**は平底となり，底部と胴部がほぼ直線的につながる。**54**は丹塗で，表面は横ヘラ磨により調整され，裏面はヘラオサエ痕が確認できる。**55**は丹塗で，表面はヘラ磨により調整される。56は裏面に丹塗が確認される。

58は底面が凸レンズ状となり，安定に欠く。表面はハケ目により調整される。

59は丹塗高坏の口縁部破片である。口縁上部に粘土帯を貼り付けて厚みをつくり，口縁外側を薄く水平に作りだす。

60は特殊器台の頸部である。鍔状突出の上部を意図的に打ち欠いている。頸部全面に縦ヘラ磨が施される。

表33　河道３出土土器④観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表) 調整手法	胎土	器種	残存状況	備考
42	20　河道３　⑪　5YR 6／1 表：縦ハケ目　裏：指オサエ	長石・石英	不明	底部	
43	20　河道３　⑪　10R 6／4 表：縦ハケ目　裏：指オサエ	長石・石英	不明	底部	
44	20　河道３　⑪　10R 6／8 表：縦ハケ目　裏：指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	裏：スス痕
45	20　河道３　⑪　2.5Y 6／1 表：縦ハケ目　裏：指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	裏：スス痕
46	20　河道３　⑪　10R 5／3 表：縦ハケ目　裏：指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	裏：スス痕
47	20　河道３　⑪　10YR 6／1 表：縦ハケ目　裏：指オサエ	長石・石英	不明	底部	
48	20　河道３　⑪　10YR 7／6 表：縦ハケ目　裏：指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	
49	20　河道３　⑪　5YR 6／1 表：縦ハケ目　裏：指オサエ	長石・石英	不明	底部	
50	20　河道３　⑪　10YR 5／1 表：縦ハケ目　裏：指オサエ	長石・石英	不明	底部	
51	20　河道３　⑪　2.5YR 6／6 表：縦ハケ目　裏：指オサエ	長石・石英	不明	底部	
52	20　河道３　⑪　7.5YR 5／1 表：縦ハケ目　裏：指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	
53	20　河道３　⑪　5YR 6／6 表：縦ハケ目　裏：指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	
54	20　河道３　⑪　2.5YR 5／8 表：ヘラナデ　裏：ヘラオサエ指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	表：丹塗
55	20　河道３　⑪　5YR 6／6 表：ヘラ磨　裏：指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	表：丹塗
56	20　河道３　⑪　10YR 7／1 表：ナデ　裏：ナデ指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	裏：丹塗
57	20　河道３　⑪　7.5YR 6／3 表：ナデ　裏：ナデ指オサエ	長石・石英・金雲母	不明	底部	
58	20　河道３　⑪　10YR 7／4 表：縦ハケ目　裏：指オサエ	長石・石英	不明	底部	
59	20　河道３　⑪　YR 7／3 表：ナデ　裏：ナデ	長石・石英・金雲母	高坏	口縁部	表裏：丹塗
60	20　河道３　⑥　5YR 5／6 表：ハケ磨　裏：指オサエ	長石・石英	器台	頸部	表：丹塗

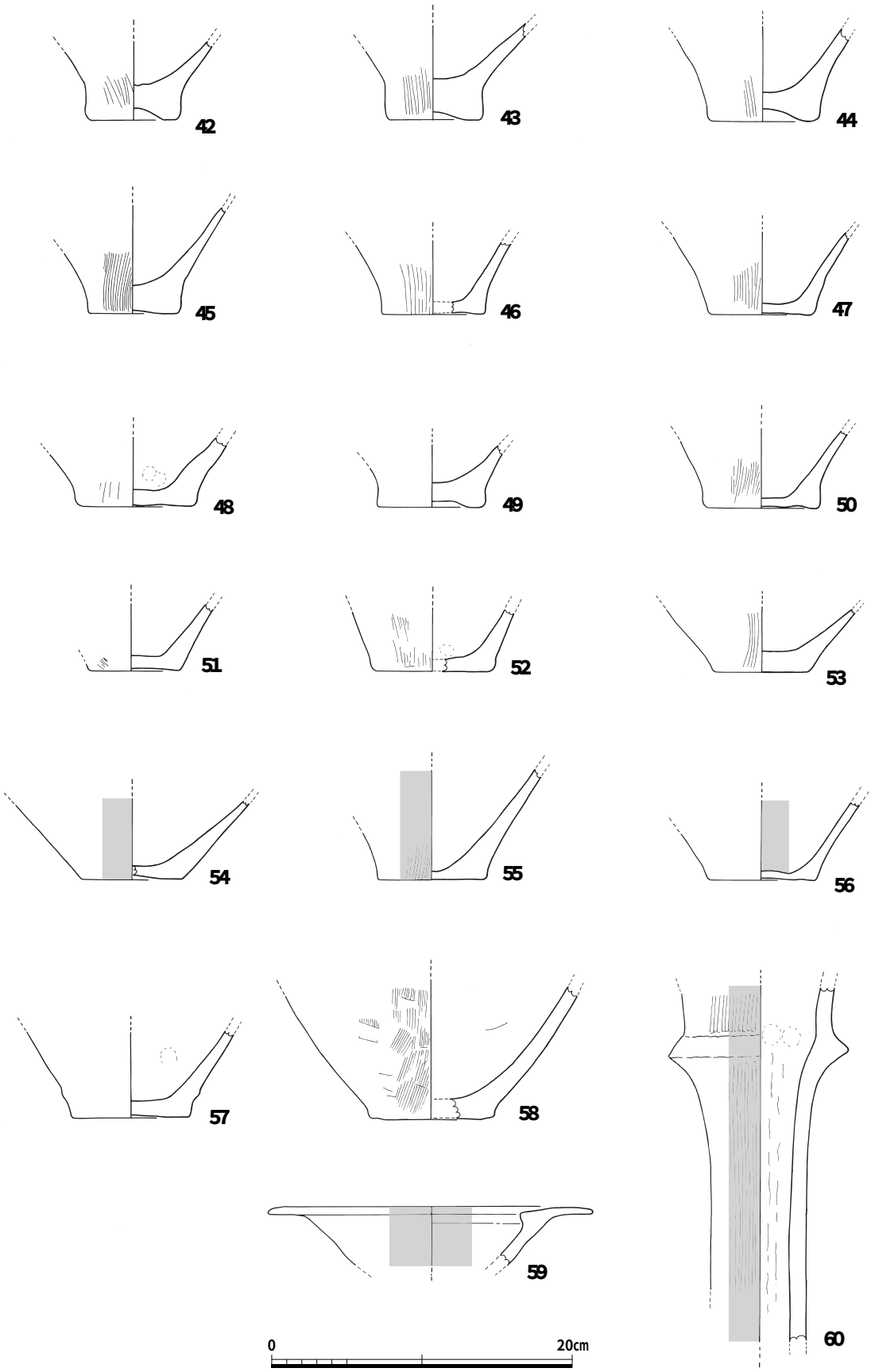


図52　河道３出土土器④（1/40）

４．その他の遺構

⑴　SD２・SD３・SD４・SD５

①検出状況と土層

SD２・SD３・SD４・SD５は14～15調査区で検出した溝状遺構である。検出範囲や含まれる遺物が少ないため，時期の判断がつきにくいものが多い。検出した遺物や遺構同士の切合い，過去の調査との関係から検討すれば，おおむね弥生時代の範疇に入ると思われるが不明な点も多い。以下，個別に説明を行なう。

SD２（図53d-d'，e-e'）

SD２は河道１の西側を平行するように検出し，河道１に切られている。幅約２㍍深さ0.7㍍，底部の標高4.9㍍を測る。14調査区北西部で河道１の流れから外れるように南西へ抜けていくため，H11農道（**村川・西2000**）における１号溝（弥生中期～後期）とつながる可能性があるが詳細は不明である。遺物があまり含まれておらず，わずかに弥生後期後葉の遺物を数点検出した程度である。

４層はややしまった粘質土層で縦にのびる赤色斑が多量に混入し，４’層は４層よりやや暗い同質の粘土層である。５層は層位上部に炭化物が堆積し，６層はカーボン粒を少量含む。SD２の充填土は３層確認され，粘質土がほぼ均等に堆積する様相を見せる。次に遺構の充填土を説明する（**表34**）。

表34　SD２土層観察表

層位	土層色質調	観察注記
①層	暗灰白褐色粘質土層	鉄分斑紋などを多く含むSD２の検出面。
②層	淡灰色粘質土層	①層より暗く粘質が強い。鉄分斑紋を含む。
③層	暗灰色粘質土層	粘質が強く，所々暗オリーブ灰色をまだら状に混入する。

SD３（図53b-b'）

15調査区北側で北西から南東軸に検出し，幅約２㍍深さ0.5㍍，底部の標高５㍍を測る。土器などの遺物が検出されず，SD２と直交するものの両者の切合いを土層からは確認できなかったため，遺構の時期は不明である。中央部では槽と思われる凹みのある板材を検出したが非常に薄く，取り上げたものの実測することができなかった。

４層は赤色斑を含み，炭化物粒が多く含む。５層はかなりしまった粘質土層である。SD３の充填土は３層確認され，粘質土が均等に堆積する様相を見せる。次に遺構の充填土を説明する（**表35**）。

表35　SD３土層観察表

層位	土層色質調	観察注記
①層	暗灰色粘質土層	マンガン粒などを含むSD３の検出面。
②層	淡灰色粘質土層	①層よりもやや明るく，マンガン粒を含む。
③層	褐灰色粘質土層	有機物やカーボン粒を多少含む。

SD４（図53）

14調査区北西部で，南側の立上がり部分のみ検出した。SD２および河道１に切られている。弥生中期中葉～後期中葉の遺物が上層で検出された。なお調査終了間際での検出であったため，土層の観察ができなかった。

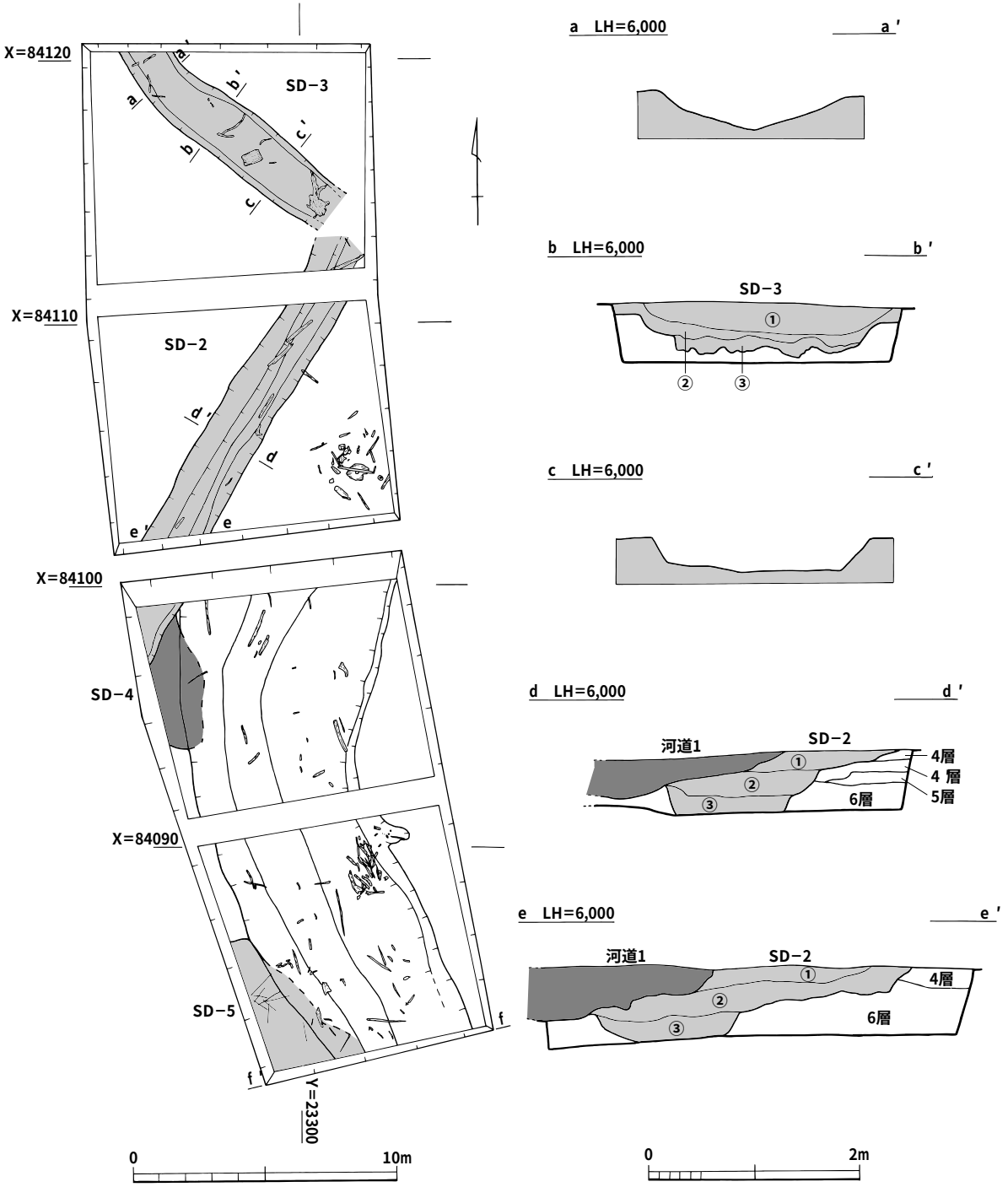


図53　SD２・SD３・SD４・SD５平面図（左１/240）および土層図・断面図（右１/60）

SD５（図53・図54f-f'）

14調査区南西部で，北側の立上がり部分のみを検出し，底部の標高は約4.4㍍を測る。H11農道における１号旧河道（弥生前期末～後期）とつながると思われるが，符合しない点も多い。H11農道の報告では，この１号旧河道は上層に褐灰色，中層に黒褐色，下層に黄褐色の粘土層を堆積するとあるが，今回の調査では下層に黄褐色の土層が確認されなかった。また，SD５では各層位とも有機質が豊富に含まれているが，H11農道の報告には土層観察注記がないため，土質からの検討ができなかった。また底部の標高も１号旧河道では5.2㍍と，SD５と比較してずいぶんと高い。

なおSD５からは弥生中期前半と思われる甕が検出されている。

土層図ではSD５と河道１との切合い関係が確認できる。なお河道１については基本的に北壁と同じ堆積状況が観察されたが，南壁では②⑤⑥⑦層が確認されなかった。SD５の充填土は５層確認され，有機質を多く含んだ粘質土がほぼ均等に堆積する様相を見せている。これは河道１と比べて流路変更や丘陵部からの供給物が少なかったことを意味すると思われる。次に遺構の充填土を説明する（**表36**）。

表36　SD５土層観察表

層位	土層色質調	観察注記
①層	褐炭色粘質土層	マンガン粒などの斑紋を含む。
②層	褐炭色粘質土層	①層よりやや暗く酸化鉄粒や炭化物粒を多少含む。
③層	黒褐色粘質土層	流木や小枝などの材を多く含み，有機物の混入も多い。
④層	黒褐色粘質土層	炭化した材が多く含まれ，炭層と粘土層が薄く交互に堆積する。
⑤層	暗灰青色粘質土層	流木などの材を多く含む。

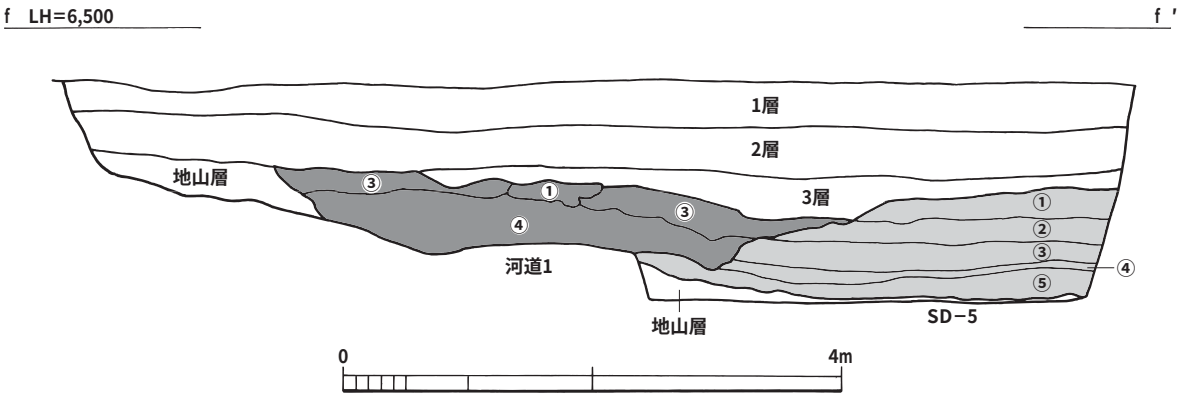


図54　SD５土層図（１/60）

②出土遺物（図55・表37）

SD２・SD４・SD５から５点の弥生土器が検出された。以下，個別に説明を行なう。**1**・**2**・**5**は甕である。**1**は「く」の字形口縁で，表面の殆どが剥落しており，調整は不明。わずかにスス痕が残り，内面は口縁部下に多数の指オサエ痕がある。弥生後期後葉と思われる。**2**は鋤先型口縁を呈し，表面は口縁部に横ナデ，胴部と底部に縦ナデがある。内面は口縁部に横ナデ，胴～底部に縦ナデがあり，底部に指オサエ痕がある。生時代中期前葉と思われる。**5**は表面の殆どが剥落しており，調整は不明。内面はほぼ全てにスス痕があり，口縁部下に指オサエ痕がある。口縁部の形状から弥生中期前半の須久Ⅰ式と思われる。**3**・**4**は壺である。**3**は口縁部で，表面全体が摩滅している。M字形突帯を有し，突帯間は不明瞭で突帯～内面の口縁部まで横ナデ，表面の突帯上部に丹塗があるが，おそらく全面丹塗であったと思われる。弥生中期後半頃と思われる。**4**は底部がほぼ完全に残っている。内面はスス痕があり底部に指オサエ痕がある。弥生後期中葉と思われる。

表37　SD２・SD４・SD５出土土器観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表)　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
1	15　SD２　②　5YR５/８　長石・石英・角閃石　甕　口縁部　表：スス痕 表：表面のほとんどが剥落しており調整不明　裏：口縁部下に多数の指押さえ痕
2	14　SD４　②　10YR７/２　長石・石英・金雲母　甕　完形 表：口縁部・胴部・底部に縦ナデ　裏：口縁部・胴部にナデ仕上げ・底部に指押さえ痕
3	14　SD４　②　2.5Y７/２　長石・石英・金雲母　壺　口縁～頸部　表：突帯上部に丹塗 表：ほとんどが剥落しており調整は不明・袋状口縁の突帯の上下に横ナデ　裏：口縁部に横ナデ
4	14　SD４　②　10YR６/４　長石・石英　壺　底部　裏：スス痕 表：激しい減摩のため調整不明　裏：底部に指押さえ痕
5	14　SD５　②　2.5YR６/８　長石・石英・金雲母　甕　口縁部　裏：スス痕 表：ほとんどが剥落しているが口縁部に横ナデ　裏：口縁部下に指押さえ痕

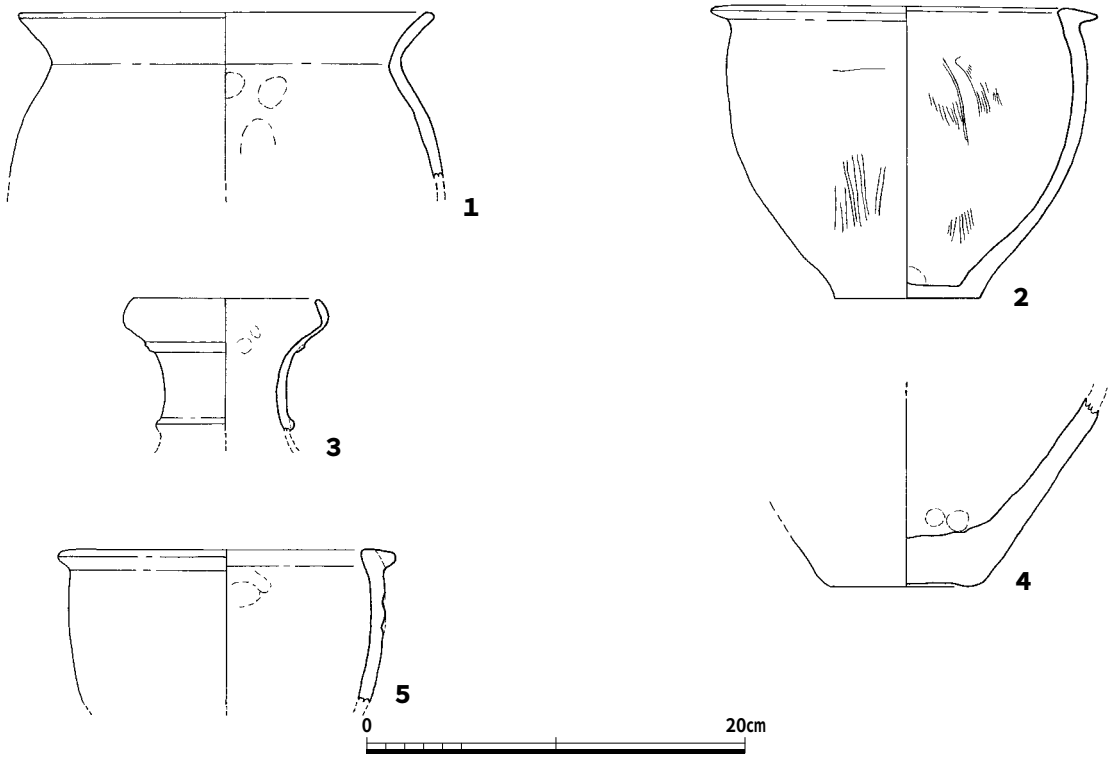


図55　SD２・SD４・SD５出土土器（1/4）

⑵ SD７・集石遺構

SD７（図56）

SD７は18調査区において検出し，南北８㍍東西４㍍深さ約１㍍を測る。東側に弧を描くような遺構である。検出時の遺構線が明瞭であったため，西壁にトレンチを掘削し，土層の確認のみ行なった。ただし，この遺構の北側に農道が通るためトレンチを拡張できず，北側立上がりが確認できていない不完全な土層であることを補足しておく。また１～３層は耕作土であるため省略する。

次に遺構の充填土を説明する（**表38**）。

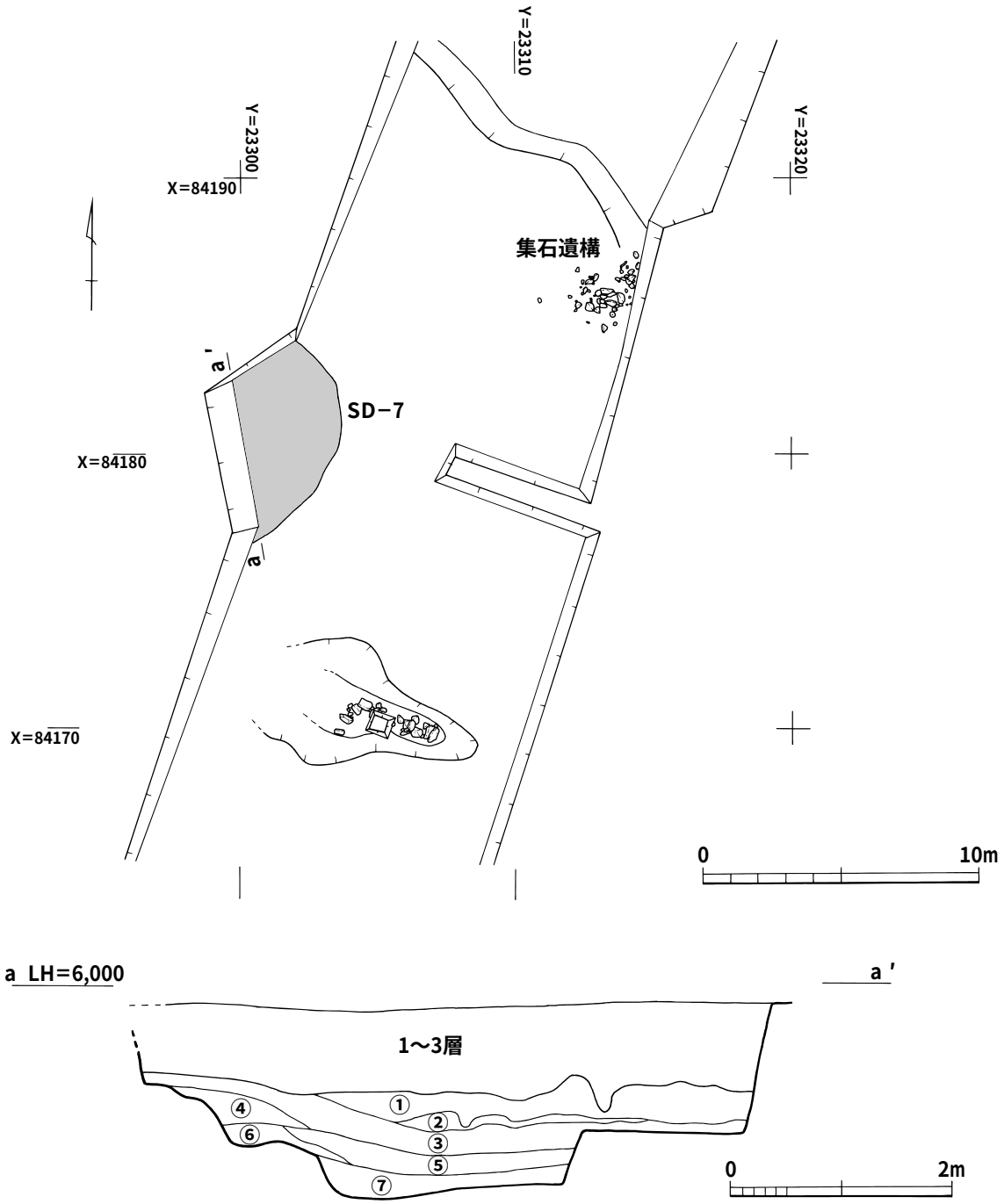


図56　SD７・集石遺構平面図（上１/240）およびSD７土層図（下１/60）

表38　SD７土層観察表

層位	土層色質調	観察注記
①層	黒褐色土層	炭化した流木や有機物が混入する。
②層	暗黒褐色土層	①層より暗く，炭化物粒が混入する。
③層	黒褐色多重土層	暗オリーブ・褐灰色・黒褐色などの土層が多重に堆積している。全体的に同質の有機物や炭化物粒が混入する。下部では漆黒炭化物土層が薄く堆積する。
④層	黄灰色粘質土層	ややしまりがある。有機質はあまり含まない。
⑤層	黒褐色混砂土層	有機質と砂を含む。
⑥層	黄灰色粘質土層	ややしまりがある。④層よりやや暗い。
⑦層	褐灰色粘質土層	有機物の混入はなく，SD-７の最下層となる。

土層の観察から，SD７では３段階の流路（あるいは窪地）が形成されていたことが分かる。

トレンチのみの掘下げのため，遺構の性格や時期を判断する遺物が検出されておらず，これまでの調査と関係から検討することも困難である。

集石遺構（図57）

集石遺構は19調査区の東側壁沿いにて検出し，南北約３㍍東西約２㍍の範囲にわたる。河道３の岸辺であり，約15㍍南には祭祀土坑があるため，祭祀行為に付随する施設とも検討されたが，顕著な遺物も伴っておらず，現時点での判断は難しい。

図57　集石遺構実測図（１/60）

⑶ SD９・SD10・SD11・SD12・水田遺構

①検出状況（図58）

SD９・SD10・SD11・SD12は25・26調査区において，いずれも南東から北西に向かい，ほぼ等間隔で並列するように検出した。本来は南東丘陵部の裾野が広がる地域で，後に削平を受けたのか，SD12は南で終息している。このことは26調査区南側において約20㌢掘り下げた時点で岩盤層が露出したことからも想像できる。

25・26調査区周辺ではこれまでにも環濠や溝が多数検出されている。調査区西側ではＨ８河川（**西1998**）において幾重もの溝状遺構が確認されたが，これらは底面標高から２つに分類できる。１つは底面標高が約６㍍のもので，確認された遺構の大半にあたる。出土遺物から時期が判断できるものが４条（つながる可能性があり，その場合は２条）あり，弥生中期と判断される。これらは断面が薄いレンズ状を示すことから溝と判断されるが，自然発生によるものか水田造営に伴う人工的な用排水路かは不明である。一方，底面標高が約５㍍と深いものは２条確認され，特にA-24区１号壕は4.4㍍と深く，断面は逆台形を示している。形状から意図的に掘削されたと判断され，環濠と判断できる。

今回確認された４条の溝状遺構はともに底面標高が約６㍍であり，上記の分類から溝と判断される。しかし丘陵に隣接した地域であるため，本来遺構は南東方向の勾配を上がるように構築された可能性もある。その場合は上記の分類とは別の基準から判断する必要があり，環濠であった可能性も払拭できない。ともかくも，これらは丘陵西側に展開する溝状遺構群の一部と捉えられる。以下，各遺構の説明を行なう。

SD９

SD９は東西幅２㍍南北長５㍍を測り，H14県道（**福田・小玉2004**）SD02につながる。報告ではSD02の構築時期は弥生後期，自然埋没した後に古墳前期には溝として機能したと判断している。

今回の調査では上層より弥生後期～古墳初頭の遺物が検出されたが，下層からの遺物検出はない。また溝壁の強度を保つために貼り粘土が施されていることが確認された。

SD10

SD10は東西幅約３㍍南北長14㍍を測り，H14県道SD03につながる。このSD03は弥生終末～古墳前期の溝と報告されている。今回の調査では弥生中期中葉～古墳前期にかけての遺物が出土しており，時期判断に修正が必要と思われる。

SD11・12

SD11は東西幅約３㍍南北長約16㍍，SD12は東西幅約３㍍南北長約20㍍を測る。ともにH10農道（**西1999**）における４号溝（同じくH10農道３号溝とつながる可能性が報告されている）とつながる可能性もあるが，現時点では判断できない。遺物は検出されなかった。

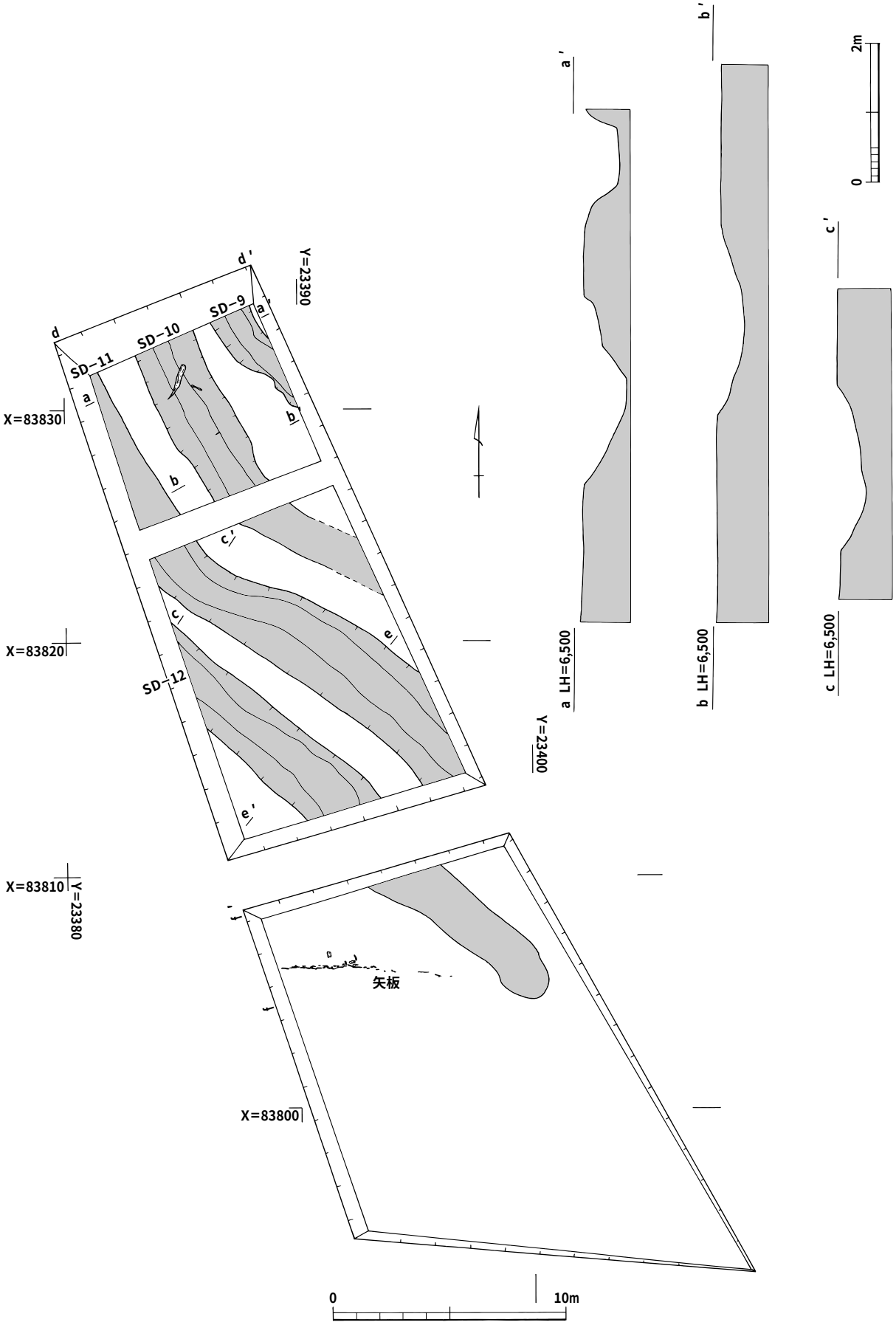


図58　SD９・SD10・SD11・SD12・矢板平面図（左下１/240）および断面図（右上１/80）

②土層（図59）

４層（淡灰青色粘質土層）は小礫を混入した締まった層である。５層（灰青色粘質土層）は遺構検出面で，６層（淡灰褐色粘質土層）は均一な粘土層で不純物を含まない。７層（淡灰褐色粘質土層）は白色粘土が混入して斑状となる。８層（明茶褐色粘質土層）は均質粘土層で，９層（暗灰褐色粘質土層）は有機物や木片を多量に含む。10層（暗灰褐色粘質土層）は９層に似るが炭化物の混入がより多く，11層（砂礫層）は２～５㌢大の小礫を多量に含む。

次に遺構の充填土を説明する（表39）。

表39　SD９・SD10・SD11・SD12土層観察表

遺構	層位	土層色質調	観察注記
SD９	①層	漆黒粘質土層	SD９の検出面。
	②層	淡灰色粘質土層	古墳時代に溝の肩を補強するために貼った粘土。
	③層	暗黄褐色砂層	やや粗い砂層で，古墳時代初頭の遺物を含む。
	④層	暗灰色粘質土層	③層と⑤層の漸移層。若干砂を含む。
	⑤層	灰黄色粘質砂層	粘土と粒子が細かい砂層がラミナ状をなす。
	⑥層	暗灰色粘質砂層	⑤層以上に粒子が細かい砂層と粘土がラミナをなす。
	⑦層	暗茶褐色粘質土層	粘質の強く有機物を含む。
SD10	①層	漆黒粘質土層	SD９①層と対応。３層の落ち込みが顕著で凹凸が激しい。
	②層	暗黄褐色砂層	※SD９③に対応
	③層	暗茶褐色粘質土層	有機物に富み木片等が混入する。
	④層	暗灰色粘質土層	※SD９④層に対応
	⑤層	暗茶褐色粘質土層	※SD９⑦層に対応
SD11	①層	黒褐色粘質土層	有機質に富む古墳初頭の層位。
	②層	淡茶褐色粘質土層	粒子の細かい粘土層で，下部に炭化物を含む。
	③層	暗茶褐色粘質土層	粘質が強く，有機物や木片を多く含む。
SD12	①層	暗茶褐色混砂土層	パサパサしており，有機質を含む。
	②層	黒褐色粘質土層	砂層を取り込んでいる古墳時代の層位。
	③層	暗茶褐色粘質土層	粘質が強く，有機物や木片を多く含む。

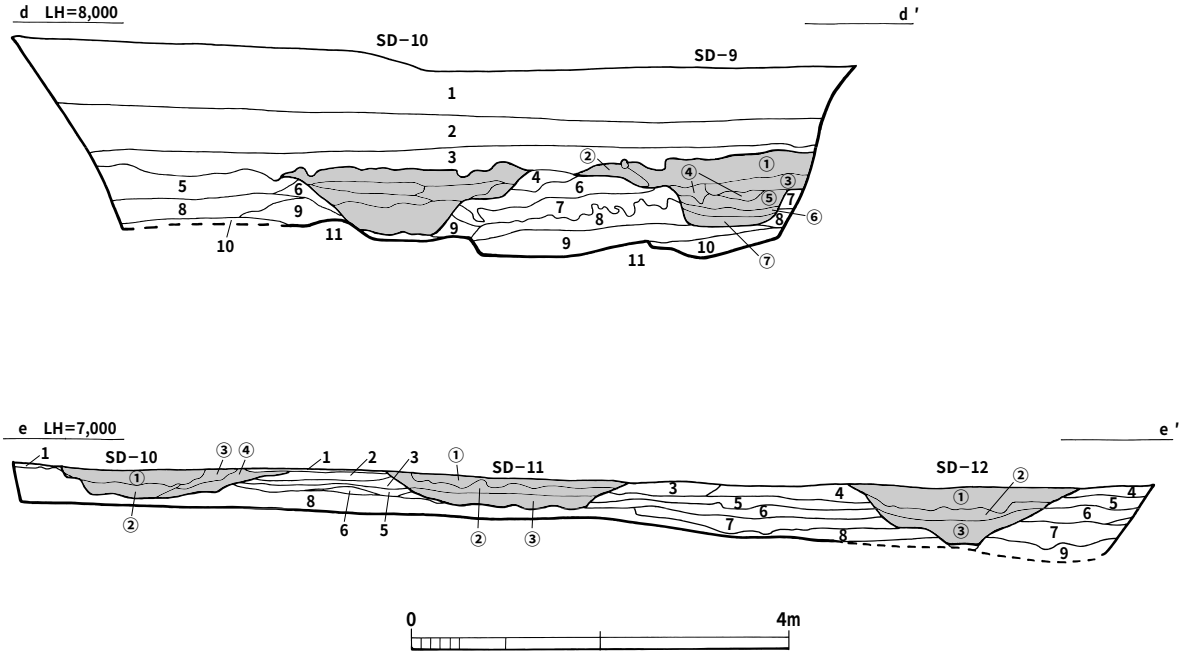


図59　SD９・SD10・SD11・SD12土層図（１/80）

③出土遺物

SD10出土石器（図60・表40）

石器はSD10で検出した。**1**は周縁の４箇所に敲打痕を止め，表裏面にも敲打による窪みが認められる。敲打にも積極的に打ち付けて出来た敲打痕と，他の敲打具に打ち付けられて敲打痕が残る場合がある。**1**の場合周縁の敲打痕は積極的に敲打した際の痕跡と思われ，表裏面の敲打痕は被敲打痕と考えられる。**2**については全面研磨を施しているが，上部は削りによって窪ませることにより楔状の形態を示す。使用法は見当がつかないが，先端部に向かって平坦になる形態はまさに楔を連想させる。

表40　SD10出土石器観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　長(cm)　幅(cm)　厚(cm)　重量(g)　器種　石材 調整手法
1	25　SD10　① 上下，両側辺に敲打による窪み，中央部に窪みがある。裏面には磨り面があり，磨り石としての機能も持ち合わせている。
2	25　SD10　① くさび状に削り出す。削りは金属によるものか。
3	25　SD10　① 側面に磨り痕，上部に敲打痕を認める。

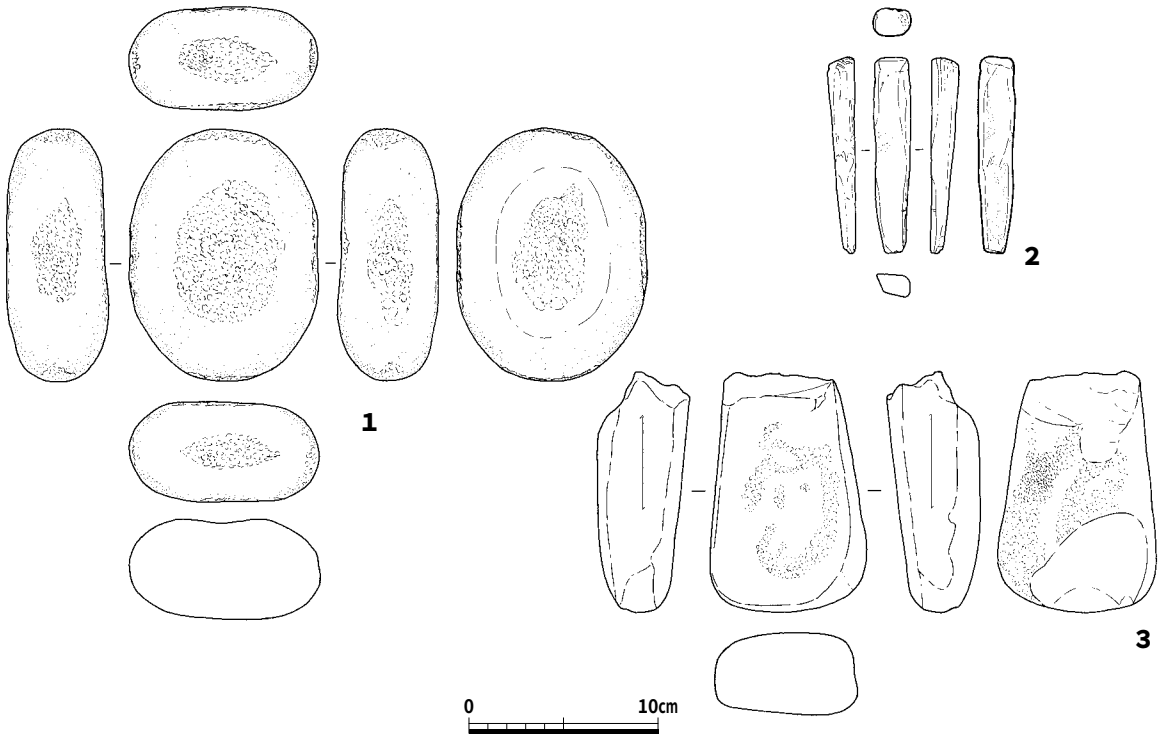


図60　SD10出土石器（1/4）

SD９・SD10出土土器（図61・表41）

1～**9**はSD９からの出土である。

1は袋状口縁壺の口縁破片である。口縁断面が逆「く」の字型となり，屈曲部の稜線も明瞭となる。**2**・**3**は甕の口縁破片である。口縁断面が「く」の字型となる。表裏面ともハケ目により調整される。**4**は底部である。底部と胴部が直線的につながり，底部の角が丸みを帯びる。底面は凸レンズ状となり安定に欠く。**5**・**6**は布留式甕の口縁破片である。口縁部が外側に湾曲しながら立ち上がる。胴部裏面はヘラ削り痕が認められる。**7**は丸底長頸壺で，完形品である。**8**は脚付長頸壺である。口縁部から胴部は横ナデ，脚部は縦ヘラアテにより調整される。**9**は高坏の口縁破片である。坏部は浅く，表面は横ハケ目，裏面は屈曲部に縦ハケ目が認められる。

10～**18**はSD10からの出土である。

10・**11**は甕の口縁破片である。**10**は口縁断面が鍬先型を示し，口縁下に三角凸帯を施す。**11**は口縁に断面「コ」の字型粘土帯を貼り付け，厚みをもたせている。口縁下に三角凸帯を施す。**12**は高坏の脚部と思われる。穿孔が２つ認められ，ハケ目の後にナデ消している。**13**は上げ底状の底部である。**14**は丹塗短頸壺である。口縁に穿孔は認められず，やや胴長である。**15**は甕の口縁破片である。口縁断面が「く」の字型を示し，表裏面ともハケ目により調整される。**16**は後期終末の壺である。口縁下に三角凸帯を施す。表裏面ともハケ目により調整される。**17**は布留式甕の口縁破片である。**18**は高坏または脚付甕の脚部である。

表41　SD９・SD10出土土器観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表)　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
1	25　SD９　②　2.5YR５/３　長石・石英　壺　口縁～頸部　表：丹塗 表：横ナデ縦ヘラ磨　裏：横ナデ
2	25　SD９　②　10YR６/２　長石・石英・金雲母　甕　口縁～胴部 表：口縁部に横ナデ・胴部にハケ目　裏：横ナデハケ目
3	25　SD９　②　10YR６/２　長石・石英　甕　口縁～胴部 表：口縁部に横ナデ・胴部にハケ目　裏：横ナデハケ目
4	25　SD９　②　10YR６/２　長石・石英・金雲母　甕　底部 表：ハケ目　裏：ハケ目
5	25　SD９　②　５YR６/６　長石・石英・金雲母　甕　口縁部　表：スス痕 表：口縁部に横ナデ・胴部にハケ目　裏：口縁部に横ナデ・胴部にヘラケズリ
6	25　SD９　②　10YR６/１　長石・石英・金雲母　甕　口縁～胴部 表：口縁部に横ナデ・胴部に横ハケ目　裏：口縁部に横ナデ・胴部にヘラケズリ
7	25　SD９　②　7.5YR７/４　長石・石英　壺　完形 表：横ナデ　裏：ナデ指オサエ
8	25　SD９　②　10YR５/３　長石・石英・金雲母　台付鉢　口縁～脚上部 表：横ナデ　裏：ナデ指オサエ
9	25　SD９　②　10R５/８　長石・石英　高坏　口縁部 表：横ハケ目ナデ消し　裏：横ナデ縦ハケ目
10	25　SD10　②　10YR５/２　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
11	25　SD10　②　2.5YR６/２　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：横ナデ　裏：横ナデ
12	25　SD10　②　2.5Y６/２　長石・石英・金雲母　高坏　脚部　穿孔２ 表：縦ハケ目ナデ消し　裏：横ハケ目ナデ消し
13	25　SD10　②　10YR６/３　長石・石英・金雲母　不明　底部 表：縦ハケ目　裏：指オサエ
14	25　SD10　②　10YR６/２　長石・石英　甕　口縁～胴部　表裏：丹塗 表：横ナデ　裏：横ナデ
15	25　SD10　②　2.5YR３/１　長石・石英　甕　口縁部　表：スス痕 表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：ハケ目
16	25　SD10　②　10YR６/２　長石・石英・金雲母　甕　口縁～胴部 表：口縁部に横ナデ・胴部にハケ目　裏：ハケ目指オサエ
17	25　SD10　②　５YR５/８　長石・石英・金雲母　甕　口縁部 表：口縁部に横ナデ・胴部に縦ハケ目　裏：口縁部に横ナデ・ヘラケズリ
18	25　SD10　②　2.5YR６/２　長石・石英・金雲母　台付甕　脚部 表：脚上部に横ハケ目・脚下部に縦ハケ目　裏：横ナデ

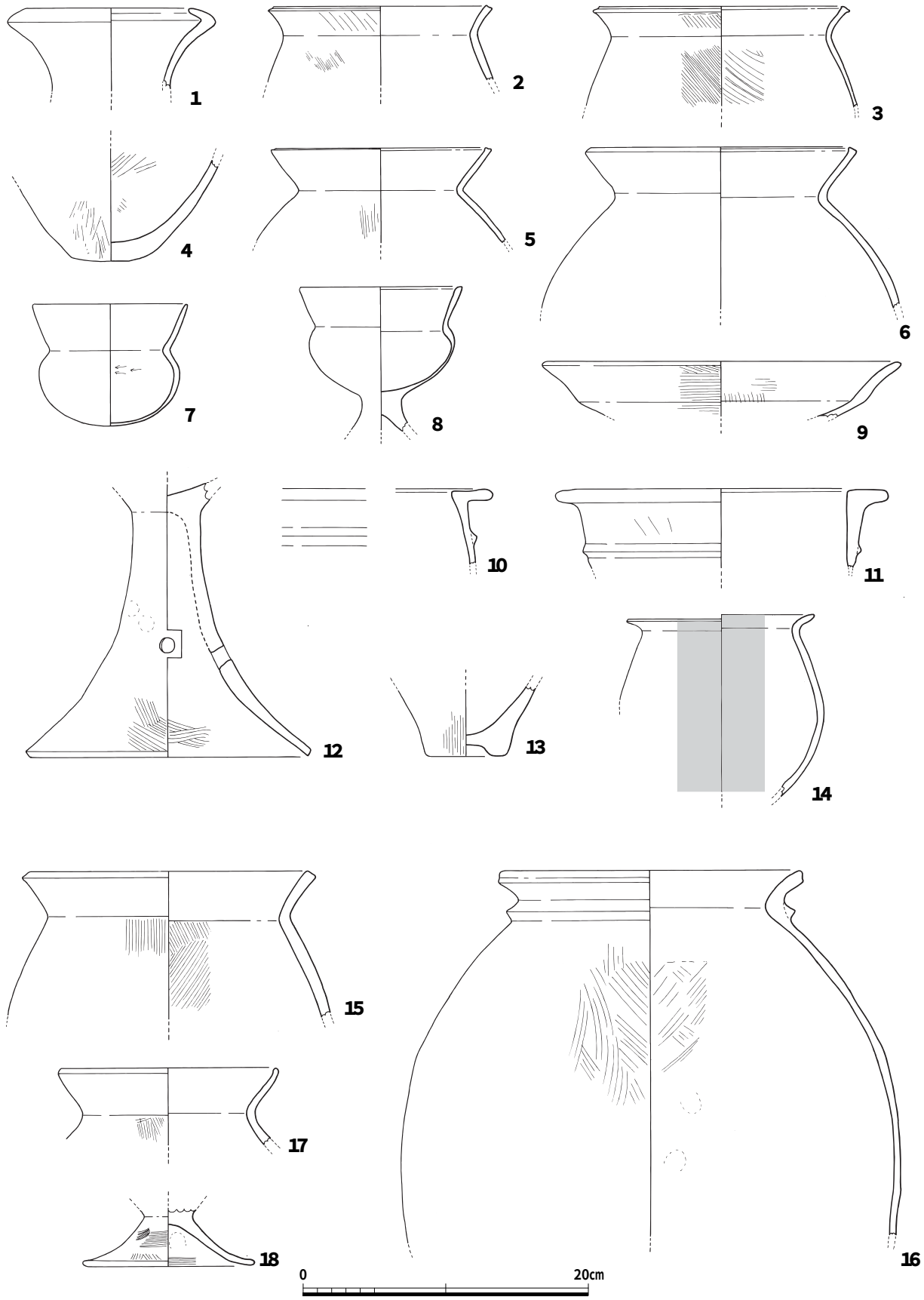


図61　SD９・SD10出土土器（１/４）

④水田遺構（図62・表42）

26調査区において検出し，矢板は東西軸に約５㍍を測る。北側では水田床土跡と思われる堆積が３層，南側では畦畔と思われる堆積が確認された。下記に土層を説明する（**表42**）。この矢板はH12農道（**杉原2001**）で検出された矢板列とつながる可能性が高いが，具体的な報告がないため詳細は不明である。その場合H12農道６号溝に切られるが，時期が不明なため，切合いからの検討はできない。H12農道では北側でも水田畦畔跡が検出されており，出土状況は今回の調査と類似する。矢板間の距離は約10㍍であり，この一帯に整備された水田が営まれたことが推測される。植物珪酸体分析では②層では稲作，①層の上層ではムギ栽培の可能性が認められている。矢板材の放射性炭素年代測定（β線係数法）では補正年代2540年±（60年）であった。H12農道26区の矢板も同様の数値が計測されている。Ｈ８河川（**西1998**）では水田遺構に伴って弥生前期末と思われる甕の口縁部が出土しており，弥生前期の水田の可能性もあるが，時期判断には慎重を要すると思われる。

表42　水田遺構土層観察表

層位	土層色質調	観察注記
①層	灰褐色粘質土層	弥生の水田の上に貼った粘土層，上部の古墳時代の足跡状の落ち込みが観察されることから古墳時代と思われる。
②層	暗灰褐色粘質土層	矢板列を伴う水田の跡と考えられ，やや玄武岩の微粒子やカーボンを含む。
③層	暗灰褐色粘質土層	地山の玄武岩の小礫層上に水田設営のために貼った粘土と思われる。

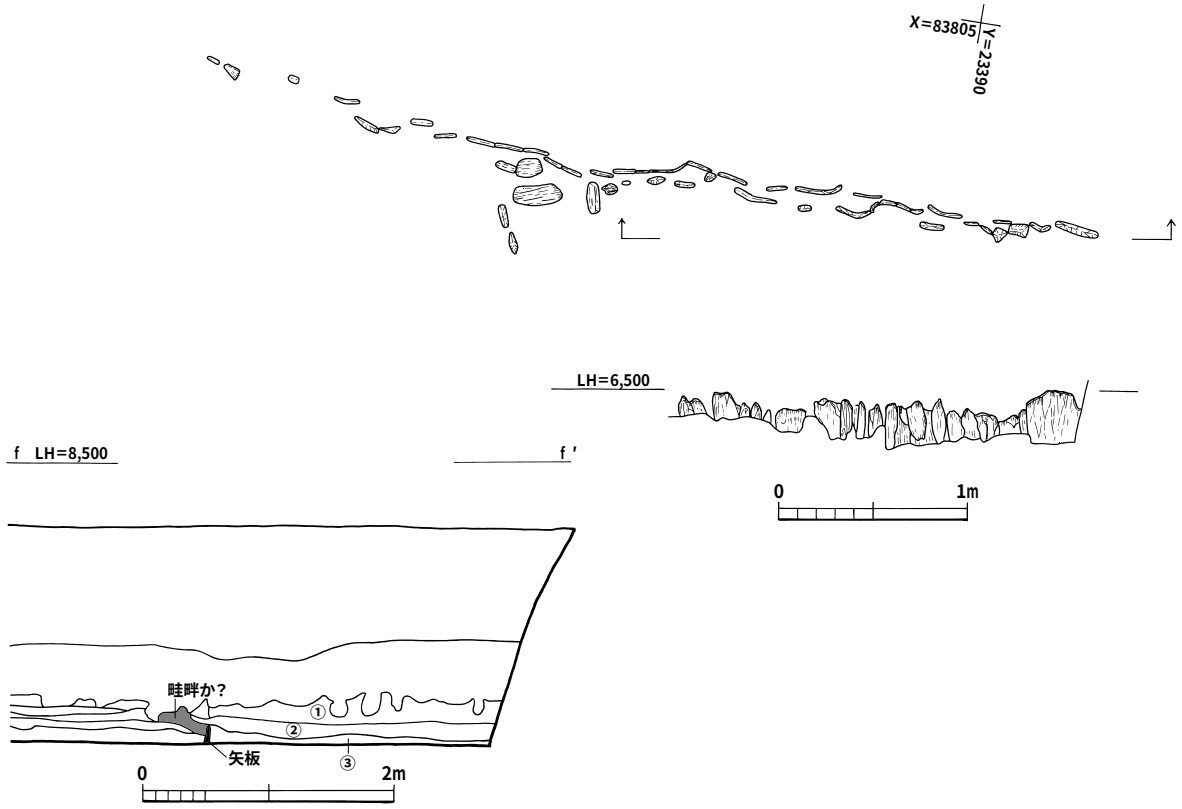


図62　矢板実測図（右上１/40）および水田遺構土層図（左下１/60）

⑷ 小児甕棺墓（図63・表43）

24調査区の南側から，合せ口の壷棺を１基検出した。主軸をほぼ南東方向にとり，丘陵側を向く。

周辺はかなり削平されており，壷も口縁部の一部と胴部の半分を残して上部は削平されていた。検出時に，方形の掘り方を一部確認したが，削平のため本来の立ち上がりについては掴める状況ではなかった。本来，方形の掘り方の中に壷を納め，壷の下場の胴部付近については，地山を削って２段掘りにしたものと思われる。下甕の口縁部付近には，上甕の口縁部の一部を確認した。上甕は，口径約32㌢を測る。下甕は全長約55㌢，口径約49㌢を測り，朝顔状に開いた口縁部，間延びした頸，胴部が球体を呈するなど全体的に寸詰まりとなる。頸部から胴部にかけては丁寧なハケ目を縦方向に施し，底部の内側は指おさえとヘラナデで調整する。口縁内には突帯一条を巡らし，頸部に２条の突帯，胴部のやや下部に一条の突帯がある。上甕については，頸部が間延びした２重口縁壷である。２つの壷については後期の終末頃のものと考えられる。この周辺では，他に墓らしきものは確認されておらず，この１基のみである。すぐ側に環濠が走っていることから，環濠の盛衰の中で捉えることも考えられるが，環濠はまだ機能している時期であることから，小児甕棺が他の成人棺とは別の意味合いをもって埋納されたと考える。このような例は遺跡内でも幾つか確認されていることから，小児棺の特殊な埋納方法について考える必要があろう。

表43　小児甕棺墓土器観察表

報告番号	調査区　層位　色調番号(表) 調整手法	胎土	器種	残存状況	備考
1	24　小児甕棺　7.5YR８/４ 表：ハケ目　裏：ナデ	長石・石英	甕	口縁部	複合口縁壷
2	24　小児甕棺　7.5YR７/４ 表：ハケ目　裏：ナデ	長石・石英	甕	口縁～胴部	

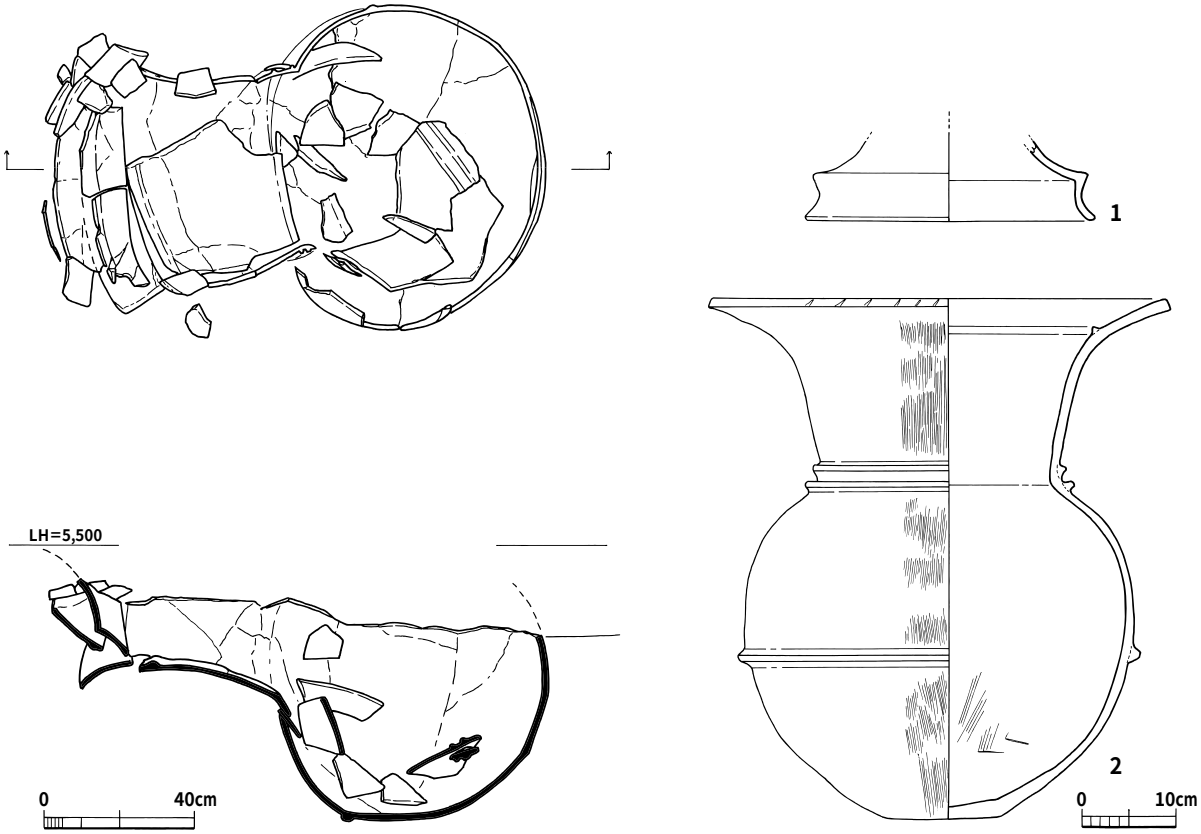


図63　小児甕棺墓実測図（左１/10　右１/８）

５．その他の遺物

先の図版に掲載していない旧石器時代から古墳時代時代前期の遺物を掲載した。

1は支脚型石製品である。臼状を呈し上部に浅い窪みがある。原の辻遺跡における支脚型石製品の出土は多く，烏帽子状になるものが多い。本資料は左右対称で上部に窪みをもつことから，クドの中央に据え置き，土器を直接乗せたと思われる。支脚型石製品を考える上で重要な資料である。**2**は肥後系ジョッキ型土器の把手部である。**3**は河道３から出土した双管付小型甕で，底部にほぼ90度の角度で左右に管状のものが取り付けられている。甕は緩やかに底部から立ち上がり口縁部でやや開き気味になる。底面は管と連結させるために指ナデする。底に管状のものを貼り付けて上部と左右の管がつながるように造られている。連結に際しては，ヘラで押さえたり，管の底部はヘラナデあるいは一部削りも入る。用途については不明である。**4**は刻骨で，中央から半分を欠損している。おそらく刀子の柄と考えられる。**5**の小型仿製鏡は20調査区の河道の岸辺から出土している。小型仿製鏡は原ノ久保Ａの石棺墓から出土しており，本例が２例目である。劣化が激しく文様に明確さを欠くが，後期終末の内行花文日光鏡と思われる。田尻分類の第３型に属するものであろう。（**註1**）**6**・**7**は柳葉型銅鏃である。**8**～**12**は河道内から出土したナイフ形石器，細石核，台形石器である。ナイフ形石器については一側片のみにブラティング加工を施した縦長剥片素材のナイフ形石器の一群である。**9**・**10**は一部背面に自然面を残すことから剥片剥離の早い段階の剥片を使用していることが理解できる。**11**の船底形の細石核は新しい時期のもので，船底状を呈し打面調整を丁寧におこなう。**12**は背面の１点に頂点を持つ断面三角形を呈する台形石器である。相対するブランティングが錯交するが，原の辻型台形石器とは断面形や製作技術も相違することから，別のタイプと考えられる。**13**は碧玉製の石釧である。高さ1.9㌢，内径3.2㌢，外径4.3㌢を測る。壱岐での石釧の出土は勝本町の伊志呂遺跡から表面採集されている。詳細は不明だが粗い造りであるとの情報は得ている。今回の石釧は，碧玉製で造りもしっかりしていることから４世紀代のものと考えられる。４世紀代までは原の辻遺跡は機能していることから，その時期の権威者のものであろうことが予想される。通常，石釧は副葬品として出

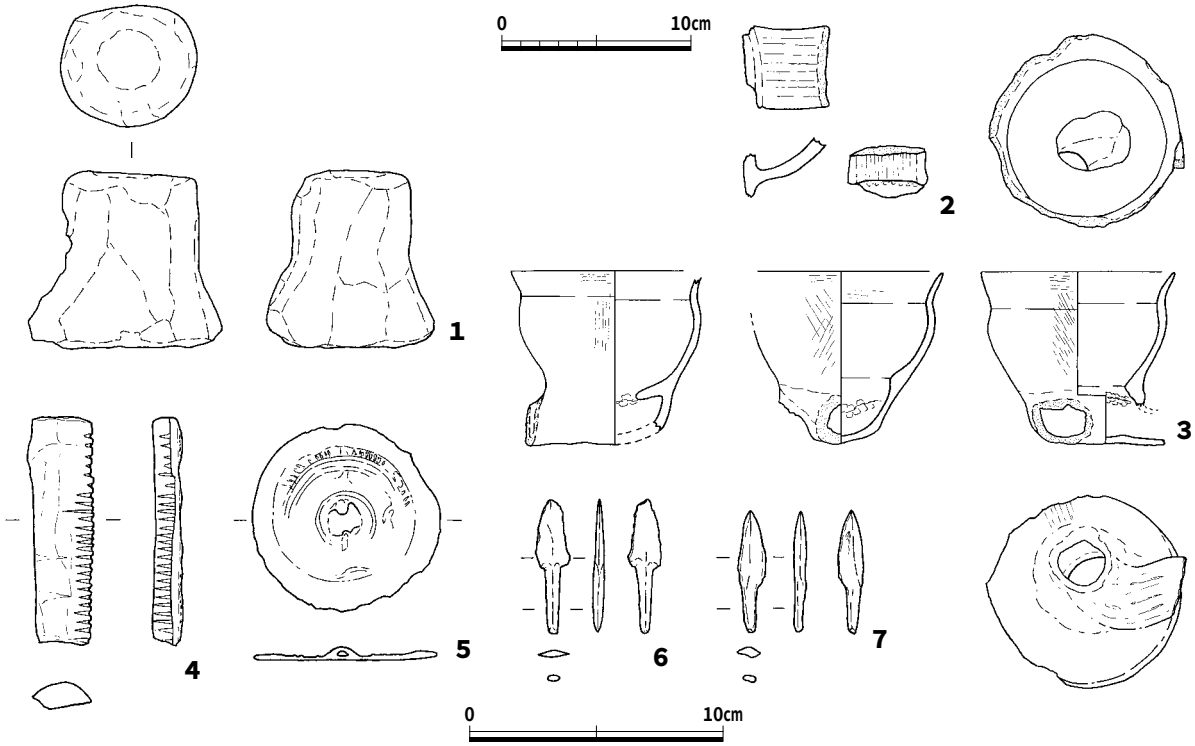


図64　その他の遺物①（1～3：1/4　4～7：1/3）

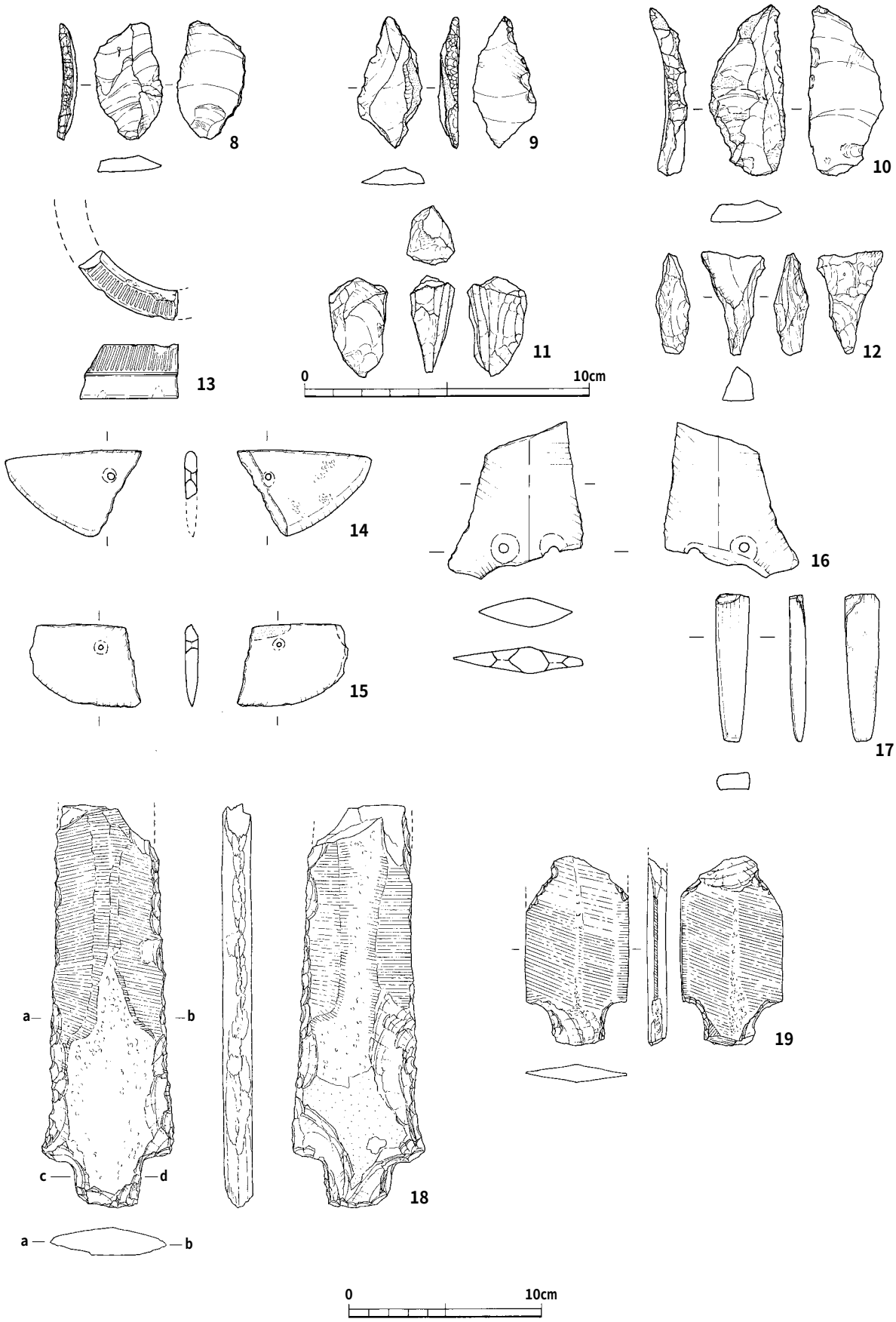


図65　その他の遺物②（8～13：1/2　14～19：1/3）

土するのが常で，今回のように溝の中に廃棄された様相で出土することは稀であろう。墓が近くに存在しないことから，権威者がその象徴として身に付けていたものが廃棄されたとみることになるが，廃棄までの過程については複雑な意味が存在するであろう。**14・15**は輝緑凝灰岩使用の石庖丁である。遺跡出土の石庖丁は頁岩を使用していることからこの２点は搬入品と思われる。特に**14**は立岩産のものと思われ，小豆色を呈する。両方とも穿孔具として金属を使用したと思われ，敲打痕は観察できない。多分に後期の石庖丁であろう。**16**は頁岩を素材とした石戈で孔の形状が臼状を呈することから，先端が鈍角の穿孔具を使用したのであろう。石戈は遺跡の中でも10点程度しか出土していないことから，日常的に使用するということではなく，祭祀具として使用されていた可能性が高い。**17**は頁岩製で全体を研磨して楔状に整形している。**18・19**は頁岩製の石剣の未製品である。どちらも身は長いが，茎が極端に短いことを特徴とする。**18**はその製作工程として，敲打によって調整し，ある程度の形になると研磨して調整する。これを繰り返しおこなうことによって整形していく過程が見て取れる。遺跡内出土の石剣は形態的に**18・19**と同じものが多く，ほぼ中期後葉で納まる傾向にある。

今回の調査で出土した石器類は，丘陵北西側の河道出土の遺物組成に近い。ただし，量的なものを考えるならば北西側の河道からの石器の出土量が圧倒的に多い。基本的に河道は西北側の河道と今回の河道の２本が中期まで流れていたと考えられており，石器組成において似通っているのも当然である。調査した河道は，南側から流れていたと考えられるが，南にいくほど石器の出土は貧弱になる傾向が強い。

【註】

１．田尻　義了（2004）『弥生時代小形仿製鏡の生産体制論』日本考古学第18号

表44　その他の遺物観察表

報告番号	調査区　遺構　層位　色調番号(表)　胎土　器種　残存状況　備考 調整手法
2	14　河道１　④　2.5Y５／２　長石　－　把手部　肥後系ジョッキ型土器 表：ハケ目ナデ消　裏：ハケ目ナデ消
3	19　河道３　⑪　7.5YR５／４　長石・石英　甕　ほぼ完形　用途不明な双管付小型甕 表：ハケ目　裏：下部双管と上部甕の接続部にナデ・ヘラオサエ

報告番号	調査区　遺構　層位　長(cm)　幅(cm)　高･厚(cm)　重量(g)　器種　素材 備考
1	－　－　－　7.2　6.4　9.4　693.0　支脚　凝灰岩 頂上部に凹みがあり，クドの中央部に置いたと思われる
4	14　河道１　④　9.0　2.6　0.6　25.6　刻骨　鹿角？ 刀子柄か？
5	19　河道３　－　7.2　－　0.6　52.3　仿製鏡　青銅 内行花文日光鏡
6	14　河道１　－　5.4　1.8　0.4　7.4　銅鏃　青銅 柳葉型銅鏃
7	21　－　－　4.8　0.6　0.5　6.6　銅鏃　青銅 柳葉型銅鏃
8	14　河道１　④　4.1　2.2　0.6　5.6　ナイフ形石器　黒曜石 縦長剥片素材を使用
9	15　河道１　①　4.7　2.2　0.6　5.8　ナイフ形石器　黒曜石 縦長剥片素材を使用
10	14　河道１　④　5.9　2.7　0.8　12.5　ナイフ形石器　黒曜石 縦長剥片素材を使用
11	15　河道１　③　3.4　2.1　1.7　7.8　細石核　黒曜石 船底形で新しい時期のもの
12	14　河道１　④　3.7　2.4　1.3　5.2　台形石器　黒曜石 原の辻型台形石器とは異なるタイプ
13	14　－　－　3.5　1.1　1.9　9.8　石釧　碧玉 丁寧な成形で４世紀頃のものと思われる
14	－　－　－　7.2　4.5　0.7　24.1　石包丁　輝緑凝灰岩 搬入品（立岩産か？）
15	－　－　－　5.9　4.3　0.7　28.5　石包丁　輝緑凝灰岩 搬入品
16	－　－　－　6.2　7.1　1.5　88.3　石戈　頁岩 祭祀用具の可能性
17	20　－　－　7.8　1.8　0.9　20.6　不明(祭祀具か？)　頁岩 楔状
18	－　－　－　21.0　6.8　1.2　327.9　石剣　頁岩 製作過程で敲打成形と研磨調整が繰り返される様子がわかる　弥生中期後葉頃のものか
19	－　－　－　9.7　5.3　0.7　64.8　石剣　頁岩 製作過程で敲打成形と研磨調整が繰り返される様子がわかる　弥生中期後葉頃のものか

Ⅴ章　丹塗の土器と祭りの場

今回の調査では河道２④層から多くの丹塗の土器が出土した。特にこれまでの出土例（４例）と同数の検出を見た脚付短頸壺は，まさに祭祀用土器と呼ぶにふさわしい。褐色の土中から姿を見せる朱色の土器は目に焼き付かんばかりの印象を与える。多くの丹塗土器を取り上げた余韻がまだ体内に残る今，原の辻における丹塗土器とそれらが使われた祭りについて少し述べたい。

１．２つの遺構の性格

河道２の北側微高地はH11特定（**杉原2000**）の報告において何らかの祭儀的空間である可能性が示唆されていた。今回検出した祭祀土坑は，原の辻遺跡における中心的な祭祀の場であった可能性が高い（**註１**）。この土坑で丹塗の土器を用いて祭りを行ない，それらを川辺から流れに打ち棄てた情景が脳裏に浮かぶようである。

丹塗の土器は，埋葬遺構に伴う祭祀土坑や青銅器鋳造関連の土坑，井戸跡などから出土する例が知られる。最近の発掘成果では遺跡や遺構の性格にかかわらず出土する例も見られるが，それでも人の死や，水や火などの畏怖すべき対象への聖なる器として使われることが多かったはずである。馬場弘稔氏（**馬場1982**）は土器を伴う祭祀について次のように述べている。

①土器祭祀とは「土器の内容物が，被葬者（群）あるいはその対象物（者・群・質）へ供献されるとともに，共膳ないしその対象関連行為が，土器を介して，葬送者（群）あるいはその対象物（者・群・質）によってなされる諸種の行為」である。

②土器祭祀遺構は「かかる行為（供献・共膳）が行なわれたことが明らかな遺構と，使用した祭祀土器をとりまとめて遺棄した遺構とに区別されるべき」である。

③さらに「区別された遺構相互には，共時性の有無と，供献・共膳・遺棄場所が同一であるか」検証する必要がある。

これまでに報告されている各地の土器祭祀遺構で，これら項目を満たすものは少ない。そもそも当時の精神活動に考古学的成果のみで迫ること自体が困難である。今回確認した遺構を上記②の規定に

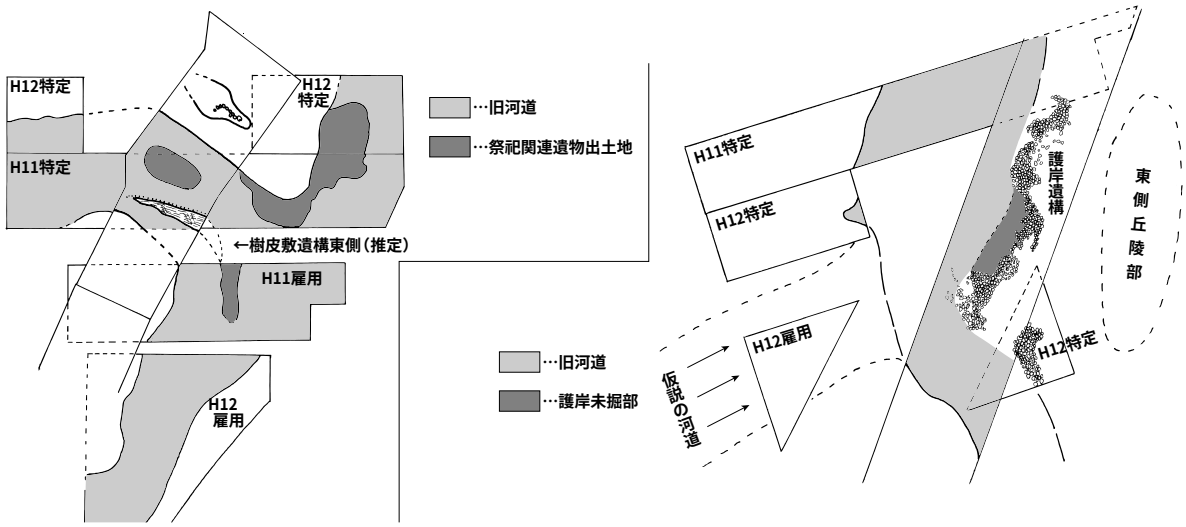


図66　河道２・樹皮敷遺構推定図および河道３・護岸遺構推定図

照らせば，祭祀土坑を「かかる行為（供献・共膳）が行なわれたことが明らかな遺構」，河道２を「使用した祭祀土器をとりまとめて遺棄した遺構」と判断することが可能である。

しかし祭祀土坑から出土した穿孔のある壺（中期前葉）と河道２で優勢な祭祀用土器（中期終末）の時期差が大きく，上記③の「遺構相互」の「共時性の有無」という点において疑問が残る。

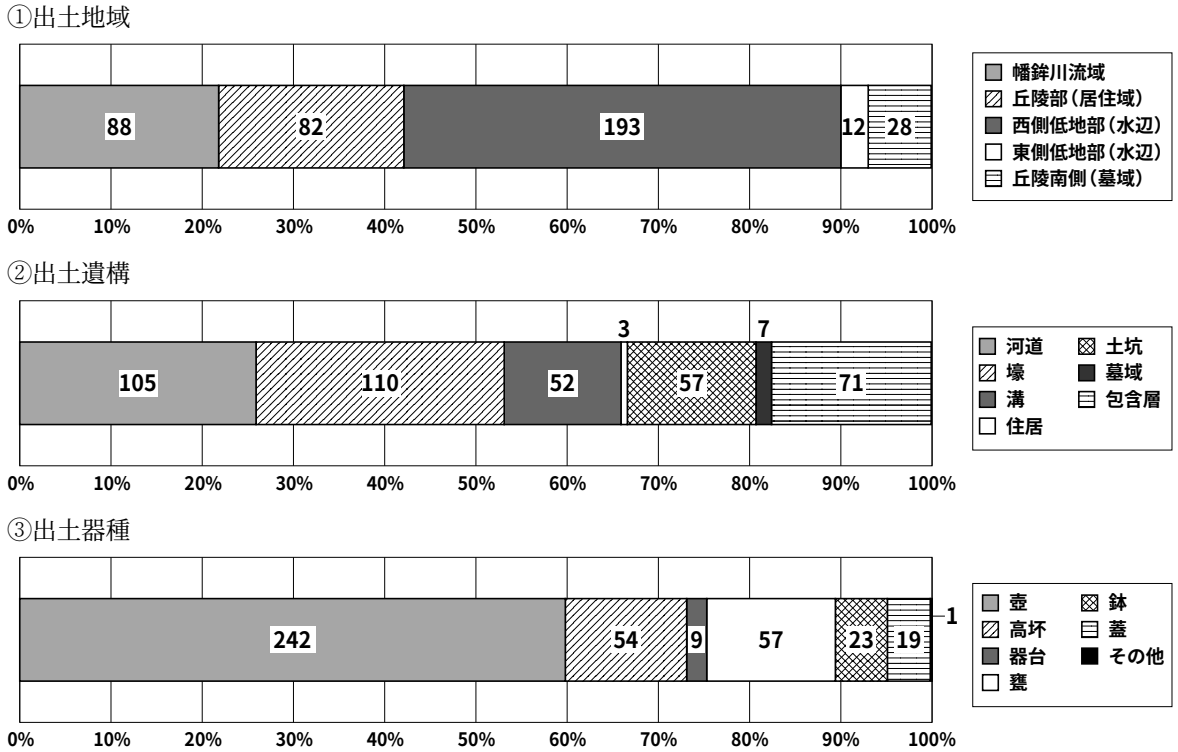
祭祀土坑では数回にわたる火の使用や，あるいは焼け残りの炭化物を廃棄した痕跡が見受けられる。そのため数世代に渡り同じ場所で祭りを執り行なったとも考えられるが，そのような類例はこれまで確認されていない。伴う遺物の時期関係という物的証拠に欠ける観はあるが，それでも遺構の位置関係から，両遺構が一連の祭祀を共有していたと考えたい。

次に，丹塗の土器が「供献・共膳」された対象についてはどうだろうか。先にも述べたように祭祀土器が出土する遺構は多様であるが，その性格は遺構の立地に大きく影響されることは想像できる。今回の祭祀土坑が水を祭祀の対象にしたことは明らかであり，豊饒にあずかる水(雨)であれば農事・天候にかかわる祭祀を，文物を舶載して渡る水（海）であれば交易にかかわる祭祀を行なったのだろう。しかし水の「質」については想像するしかない。

３．丹塗土器の比率

原の辻遺跡における丹塗の土器は，これまでに405点が報告されている。次はこれら丹塗の土器を①出土地域，②出土遺構，③出土器種の項目で分類した比率である（**註２**）（**表45**）。

表45　原の辻遺跡出土丹塗土器比率

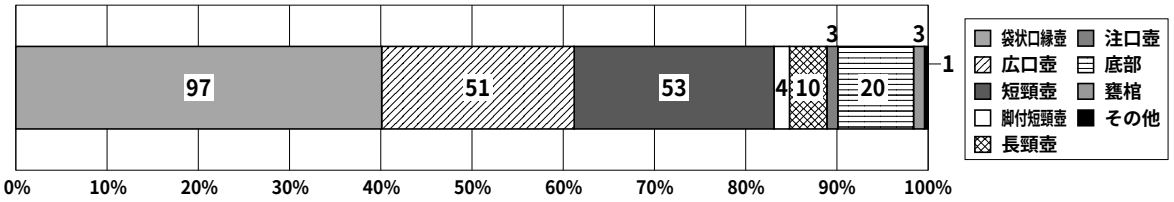


注目すべき点は水に関わる場所からの出土が多いことである（**註３**）。出土地域では西側低地部が最も多く（193点），以下，幡鉾川流域（88点），丘陵部（82点）と続く。幡鉾川流域や西側低地部では糸島系袋状口縁壺や広口壺の他に，鍔状突出部を備える筒型（特殊）器台も出土している。

出土遺構では壕（110点），河道（105点），溝（52点）の順で多く（**註４**），福岡平野や筑紫平野で見られるような墓域に伴うものは少ない。土坑をさらに地域別に分類すると幡鉾川流域（19点），西側低地部（18点），丘陵部（17点），丘陵南側（２点）となる。改めて丘陵部（居住空間）や丘陵南側（墓域）に少なく，低地部，すなわち水辺に多いことが分かる。

出土器種では圧倒的に壺が多く６割（242点）を占める。壺を分類すると次のようになる（**表46**）。袋状口縁壺が４割（97点）を占め，短頸壺（53点），広口壺（51点）の順で続く。

表46　壺形土器形態分類比率



袋状口縁壺は糸島平野に主体をもつ特徴的な土器であり，代表的な祭祀用土器として知られる。原の辻遺跡と糸島平野の土器が類似し，その変遷も共通することは従前から指摘されており，時期的には弥生中期前葉から似通うといわれる（**宮崎2001**）。また袋状口縁壺に代表される糸島系祭祀用土器が成立するのは弥生中期後葉とされる（**石橋1992**）。

それにしても袋状口縁壺が丹塗土器全体に占める割合（24%）は相当に高いといえる。この点からも原の辻遺跡と糸島平野が緊密な関係にあることは確実であり，このことは『魏志』における一支国（原の辻遺跡）が伊都国（糸島平野）の影響下にあったともいえる。

原の辻遺跡における丹塗土器の比率から，推定される点を要約すると次のようになる。

①原の辻遺跡では，土器祭祀が主に水辺で行なわれた可能性が高い。

②丹塗壺が多く用いられ，なかでも糸島系袋状口縁壺を好んだ。

③糸島半島で祭祀用丹塗土器が成立すると同時に搬入し，多くの祭りを行なった可能性がある。

丹塗土器から見る原の辻と糸島平野の関係は，単に土器の動き（搬入）として捉えるだけでなく，より積極的に，人の動き（移住）として捉えることも可能だろう。

２．丹塗土器の様相（図66）

原の辻遺跡には一括資料として捉えられる遺構が少なく（**註５**），同様に丹塗土器の編年や組成を検討する資料も不足している。前記の通り，丹塗土器の大半が河道・壕・溝と，時代によって混ぜ返り（撹乱）の多い遺構に集中していることもその理由となる。

このような中で高元地区１号土坑（SK１）（**中尾2003**）は特別な遺構といえる。この遺構は長２㍍幅1.5㍍深さ0.5㍍を測り，西半分が二段掘となる。炭化物層と黒褐色土層が交互に堆積し，遺物は主に５層から出土している。出土した遺物に多くの丹塗土器が含まれるだけでなく，破砕された甕棺が混在している点が特徴といえる。伴う遺物から時期は中期後葉（須玖Ⅱ式古段階）と判断されている。

この１号土坑付近では壁面や床面に焼土が張り付いた２号土坑（須玖Ⅰ式段階）および５号土坑（須玖Ⅱ式段階）が確認されいる。金属器関連の工房である可能性もあり，仮に１号土坑を祭祀用土器の廃棄場とすれば，この一帯では火を対象にした祭祀が行なわれた可能性が想起される。あるいは１号土坑の壁がほぼ垂直に立ち上がり，破砕した甕棺の混入する様相などから，甕棺墓域群（**註６**）であっ

た一帯を金属器工房集落として再開発した際の地鎮的な祭祀であったかもしれない。どちらにしても，主に水辺での祭祀が行なわれていたと推定される原の辻では希有な例といえる。

これ以外での一括資料としては川原畑地区 SK 群（幡鉾川北岸域）（**山下・川口1997**），不條地区１号壕Ⅰ層（西側低地部）（**杉原1999**），八反地区Ｆ区土器溜Ⅰ層（西側低地部）（**杉原2001**）をあげることができる。しかし時期関係を検討するには問題も多い。まず川原畑地区 SK 群は小規模な土坑が多く，一括資料数が少ない点である。また不條・八反地区はともに濠溝内の層位による把握であるため，撹乱の影響が心配される。この点は今回の河道２④層も同じである。

調査現場における印象として，袋状口縁壺（須玖Ⅱ式段階）などの祭祀用土器が，やや新しい時期（後期前葉頃）まで残るように思われた。八反地区Ｆ区土器溜Ⅰ層でこのような様相が見られるが，限られた資料から検討するには限界がある。

次に丹塗土器の組成についてである。ここでも一括資料と同じ問題を抱えるのだが，今回は河道２④層の出土丹塗土器から検討してみたい。次（**表45**）は器種形態の出土個数（**註７**）と比率である。壺が多い点は全体の傾向と同じだが，短頸壺の比率が高い点は異なる。全体の傾向に対して局地の様相が異なることは認められるとしても，この祭祀土坑・河道２が原の辻における祭祀の中心地と仮定すれば，やや奇異な印象を受ける。

表47　河道２④層丹塗土器組成表

器種	壺（26点　42%）			高坏	甕	蓋	底部	合計
形態	袋状口縁壺	広口壺	短頸壺					
出土数	7	6	13	10	6	6	14	62
比率	11.3%	9.7%	21.0%	16.1%	9.7%	9.7%	22.6%	

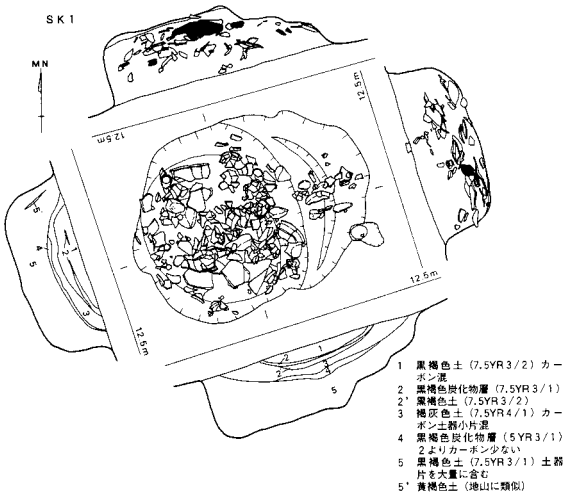
※底部は壺（10点），甕（４点）に区分される。その場合の比率は壺（58%），甕（16%）となる。
※短頸壺には脚付短頸壺も含まれる。

３．おわりに

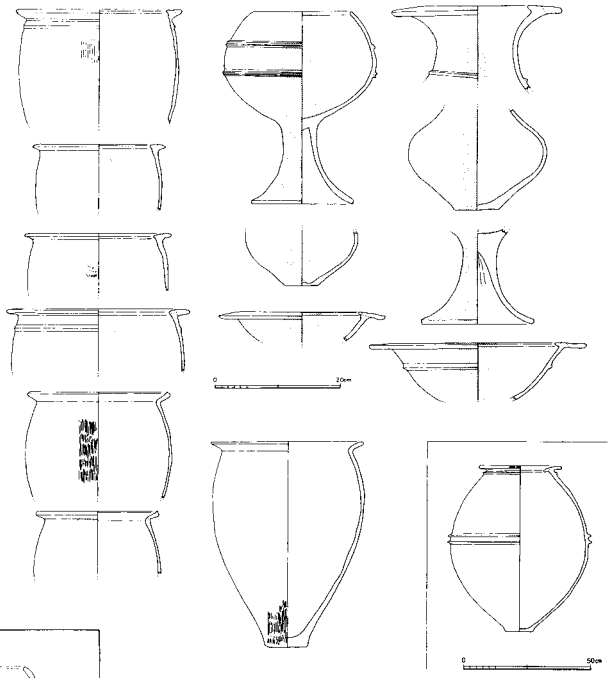
原の辻遺跡における糸島系土器の搬入が顕在化する時期の東アジアおよび倭国の情勢を概観すると，倭と楽浪郡との間に活発な交易や朝貢の往来が展開されたことが分かる。『後漢書』「建武中元二年（57），倭の奴国，奉貢朝賀す。…光武賜うに印綬を以てす」からは奴国が冊封体制に編入されたことが読み取れ，このことは志賀島出土の金印や，須玖岡本Ｄ地点甕棺墓の副葬品からもうかがい知れる。当時，楽浪郡を介して後漢に朝貢したのが奴国だけでないことは同書「使訳漢に通ずる者，三十許国なり」や「安帝の永初元年（107），倭国王帥升等，生口百六十人を献じ，請見を願う」からも読み取れるが，それでも他地域に対する奴国の優位性は認められる。

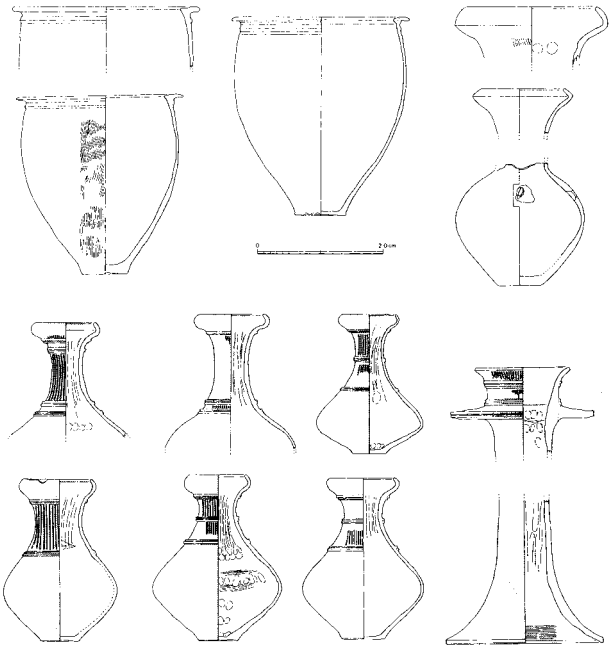
これが『魏志』になると少し様子が異なる。「女王国より以北には，特に一大率を置き，諸国を検察せしむ。諸国これを畏憚す。常に伊都国に治す」とあり，邪馬台国における伊都国の特殊性が際立ち，状況的（井原・平原遺跡の副葬品などから）には伊都国が奴国を凌駕するといえる。その際，『後漢書』「倭国王帥升等」の帥升を伊都国王とし，伊都国が２世紀代における筑紫連合諸国の盟主的地位にあったとする見解（**小田1993**）は魅力的に映る。対馬海峡を舞台とする朝貢経路を掌握していた伊都国が，３世紀末の「倭国大乱」を経て邪馬台国連合へ組み込まれた後も，その対外交渉における伝統的実力が重要視されていたと考えられるのである。

原の辻遺跡が，伊都国の人的移動（入植）によって発展した集落であるとすれば，その目的は朝貢・交易中継基地の整備にあったことは想像に難くない。そして彼ら伊都国の人々が原の辻で盛んに祭り

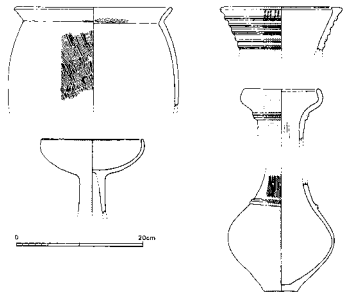


高元地区１号土坑（SK１）（中尾2003）

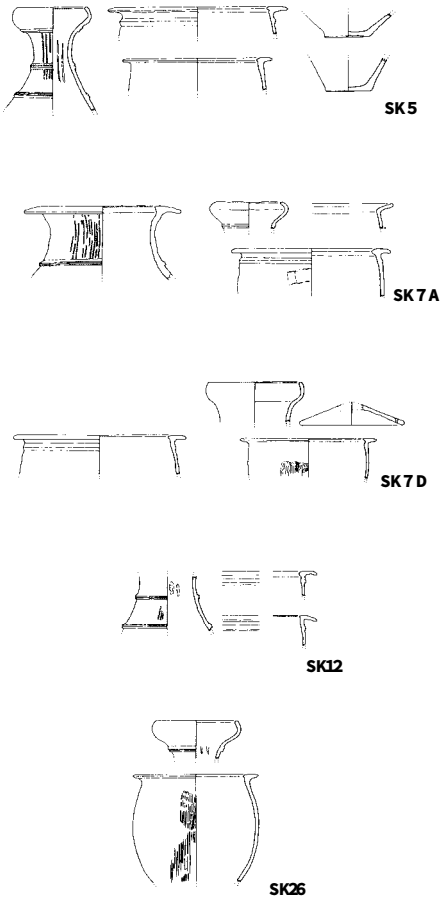




不條地区１号濠Ⅰ層（杉原1999）



八反地区Ｆ区土器溜Ⅰ層（杉原2001）



川原畑地区 SK 群（山下・川口1997）

図67　原の辻遺跡出土丹塗土器一括資料

を行なった中期後葉から終末にかけては，奴国と伊都国が競って遣使入貢した時期と考えられないだろうか。このように考えると，原の辻における土器祭祀の多くは，『魏志』「往来に云為する所有れば，輒(すなわ)ち骨を灼きて卜し以て吉凶を占」にいう「往来」，すなわち交易や朝貢の無事や成功を祈るために行なわれたと思えてならない。

丹塗の土器が打ち棄てられた流れと意味深な土坑では，いったいどのような祭りが行なわれていたのか。これまでのことがらは朱色の余韻のもとでの空想である。その糧には原の辻遺跡における丹塗土器の在り方を用いた。そして「どのような祭り」から「どのような集団による祭り」だったのかと，空想の対象は変わる結果となった。

祭祀土坑を検出した当初，「舟形土坑」と呼んでいた。遺構の形が舟に見えたのだ。遺構を掘下げ，目を見張った。底面には列石，中央部には杭。それらはあたかも舟の重要な一部であるバラストとマストに見えた。しかも西には船着き場がある。東側がややくびれて変形菱形状となる祭祀土坑は，まさに東に舳先を向け，船着き場から出航する舟の姿と時間を超えて交錯する。

今後，この課題を検討するには，いうまでもなく他地域の丹塗土器の様相をもとにした帰納的な検討が不可欠である。しかし，人のこころに関わる事象を考えるには，時に思い切った発想が許されるのではないか，とも考えている。以上，浅学非才の空想として許して頂ければ幸いである。

【参考文献】

馬場　弘稔（1982）「弥生時代の土器祭祀について－祭祀行為の基礎概念化」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』

宮崎　貴夫（2001）「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』第４号　西海考古同人会

石橋　新次（1992）「糸島型祭祀用土器の成立とその意義」『北部九州の古代史』名著出版

小田富士雄（1993）『倭国を掘る』吉川弘文館

【註】

（註１）原の辻遺跡には祭儀場と呼称される台地最頂部があるが，ここからは祭祀に関連する遺物は出土していない。

（註２）今回の調査で出土した丹塗土器は含まれていない。また調査面積や報告書紙面数などの制約があり，今回の統計が原の辻遺跡における丹塗土器（祭祀用土器）の様相を正確に示しているとはいえない。あくまで傾向を掴むための統計と認識している。ちなみに地域における調査面積の比率は丘陵部(33%)幡鉾川流域(21%)西側低地部（37%）東側低地部（20%）丘陵南側（５%）である。丘陵部と３ヶ所の低地部（幡鉾川流域・西側・東側）の調査面積に極端な差はない。

（註３）東側低地部の出土量が少ない理由に，報告されていない丹塗土器の存在を指摘できる。平成５年度の調査では18条の溝状遺構や大溝遺構が確認されているが，報告されているのは５号溝と大溝の遺物のみである。

（註４）壕や溝には丘陵部で検出したものも含まれる（23点）。この場合，祭祀の対象を水だけでなく境界に関わる性質も検討されなければならないが，ここでは省略し，後の課題としたい。

（註５）遺跡における遺構の新旧判断が難しい土質も理由になるが，これまでの調査手法を省みる必要もあると思われる。

（註６）高元地区は東亜考古学会の調査における甕棺出土により墓域として捉えられている。しかし未発表であるため詳細は不明である。

（註７）これは時期判断が可能な口縁部破片および底部の個数である。その他の破片は含まれていない。

Ⅵ章　ま　と　め

今回の調査で確認した遺構には河道３条，溝状遺構９条，護岸遺構１基，樹皮敷遺構１基，祭祀土坑１基，水田遺構１基，集石遺構１基，甕棺墓１基などがある。主な遺構について要約すると，次のようになる。

①河道１　…丘陵部西側の裾野を這うように南北軸で流れる河道跡。弥生後期～古代を長い期間にわたり流れを形成していた。その下部には流れる軸が異なる弥生前期～中期にかけての河道が確認された。

②河道２　…河道１の北側延長部に，西側から直交する河道跡。上層と下層に分かれ，流れの軸は異なる。上層では大量の流木に混在する丹塗土器が検出され，弥生中期後葉～後期初頭の人工的な流路（水路）と判断した。下層は上層よりも南東向きに軸を取る河道跡であるが，遺物の出土はなく，時期判断はできなかった。

③祭祀土坑　…河道２北側の微高地で検出した変形菱形状の土坑。底面に玄武岩を列石状に敷き，中央部に杭を打ち込む。玄武岩上から穿孔された壺（弥生中期前葉）が出土した。堆積層には炭化物層や焼土痕が認められる。河道２における丹塗土器の様相も考慮し，祭祀に関わる土坑と判断した。

④樹皮敷遺構…河道２の南岸に敷き詰められた樹皮状繊維による遺構。東側には未検出部分が残るが，西側は終息する。遺構の北側には33本の杭列を備える。その打ち込み深度や間隔から，強い計画性と規則性がうかがえる。堆積層からは遺構上部に盛り土を確認した。以上の状況から，河道２南岸の保護及び造成を目的に構築された遺構と判断した。

⑤河道３　…河道１・２が合流し，北上して形成する河道跡。下層（砂礫層）には弥生中期中葉～後葉，上層には弥生後期を主体とする遺物を含む。

⑥護岸遺構　…河道３の東側で検出した石積み遺構。その構築方法から，船着き場跡との関連性がうかがえる。構築時期は河道３堆積層との関係，および遺構上層で検出した遺物から弥生中期後葉と判断した。遺構の性格については不明な点も多いが，状況的に護岸遺構であると判断した。

⑦小児甕棺墓…合せ口の壺棺。主軸はほぼ南東方向で丘陵側を向く。削平のため上部は消失し，弥生後期終末頃のものと考えられる。周辺では甕棺墓の出土はない。環濠外に墓域を形成する傾向の中で，例外的に居住空間内での小児甕棺墓の存在が確認されている。小児甕棺墓の性格について検討する類例となる。

⑧SD９～10　…４条の溝状遺構である。ともに底面標高が約６㍍で，周囲の環濠・溝状遺構の底面に照らせば溝状遺構となるが，断面逆台形を示すものがあること，丘陵に隣接した地域であるため，本来遺構は南東方向の勾配を上がるように構築された可能性もあることから，環濠であった可能性もある。

⑨水田遺構　…原の辻遺跡における４例目。矢板を備え，それを境に北側に床土跡，南側に畦畔跡を確認した。土器などの遺物は伴っていないため，時期判断はできなかった。矢板材の放射性炭素年代測定（β線係数法）では補正年代2540年±（60年）であった。近辺で検出された矢板も同様の数値が計測されているが，時期判断には慎重を要する。

次に，特徴的な遺物では以下があげられる。

双管付小型甕…河道３において検出。底部にほぼ90度の角度で左右に開く管状のものが取り付けられる。用途については不明。

石釧　　…碧玉製。壱岐での石釧出土は勝本町伊志呂遺跡における表面採集のみである。４世紀代のものと考えられ，その時期の権威者の所有物か。溝の中に廃棄されたようなかたちで出土することは稀である。

西側低地部の遺構配置およびその変遷については本文中でも触れているが，詳細は「『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集　総集編Ⅰ　長崎県教育委員会（2005）」を参照頂きたい。

【引用報告書】

山下英明・川口洋平（1997）『原の辻遺跡・安国寺前Ａ遺跡・安国寺前Ｂ遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第１集）長崎県教育委員会
西　信男（1998）『原の辻遺跡・鶴田遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第４集）長崎県教育委員会
西　信男（1999）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第15集）長崎県教育委員会
杉原敦史（1999）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集）長崎県教育委員会
杉原敦史（2000）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集）長崎県教育委員会
村川逸朗・西　信男（2000）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第20集）長崎県教育委員会
杉原敦史（2001）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第21集）長崎県教育委員会
安楽　勉（2001）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第22集）長崎県教育委員会
中尾篤志（2003）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集）長崎県教育委員会
福田一志・小玉友裕（2004）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集）長崎県教育委員会
小石龍信（2000）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第１集）原の辻遺跡保存等協議会
小石龍信（2001）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第２集）原の辻遺跡保存等協議会

付　　編

長崎県，原の辻遺跡（平成15年度県道緊急調査）における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．放射性炭素年代測定結果

1．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
№1	17・18調査区中央，河道２④	木杭	酸－アルカリ－酸洗浄，ベンゼン合成	Radiometric
№2	20調査区中央，護岸遺構１層	木材	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
№3	20調査区中央，護岸遺構３層	木材	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
№4	26調査区，矢板	木材	酸－アルカリ－酸洗浄，ベンゼン合成	Radiometric
№5	17・18調査区中央，河道２④	木材	酸－アルカリ－酸洗浄，ベンゼン合成	Radiometric
№6	17・18調査区中央，河道２④	木杭	酸－アルカリ－酸洗浄，ベンゼン合成	Radiometric

１）Radiometric は液体シンチレーションカウンタによるβ線計数法
２）AMS は加速器質量分析法：Accelerator Mass Spectrometry.

2．測 定 結 果

試料名	測定№（Beta-）	^{14}C年代（年 BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（BP）	暦年代（西暦）（１σ：68%確率，２σ：95%確率）
№1	190657	2030±50	－27.2	2000±50	交点：cal AD10 １σ：cal BC50～AD60 ２σ：cal BC110～AD100
№2	190658	2320±40	－26.7	2290±40	交点：cal BC380 １σ：cal BC390～370 ２σ：cal BC400～350，300～220
№3	190659	2420±40	－26.5	2400±40	交点：cal BC410 １σ：cal BC520～400 ２σ：cal BC760～680，550～390
№4	190660	2530±60	－24.5	2540±60	交点：cal BC780 １σ：cal BC800～760，680～550 ２σ：cal BC820～420
№5	190661	2470±60	－29.7	2390±60	交点：cal BC410 １σ：cal BC520～390 ２σ：cal BC770～380
№6	190662	2350±50	－28.0	2310±50	交点：cal BC390 １σ：cal BC400～370 ２σ：cal BC420～350，300～220

(1) ^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から，単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は，国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

(2) δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

(3) 補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り，^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ^{13}C値を－25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

(4) 暦　年　代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には，年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値，およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは，補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（68%確率）と２σ（95%確率）は，補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって，複数の交点が表記される場合や，複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

３．所　　見

放射性炭素年代測定の結果，№１の木杭では2000±50年BP（２σの暦年代でBC110～AD100年），№２の木材では2290±40年BP（同BC400～350，300～220年），№３の木材では2400±40年BP（同BC760～680，550～390年），№４の木材（矢板）では2540±60年BP（同BC820～420年），№５の木材では2390±60年BP（同BC770～380年），№６の木杭では2310±50年BP（同BC420～350，300～220年）の年代値が得られた。

このうち，№３，№４，№５については放射性炭素年代測定値よりも暦年代の年代幅がかなり大きくなっているが，これは該当時期の暦年代較正曲線が長期間にわたって停滞しているためである（添付資料参照）。

【文献】

Stuiver et al.（1998）, INTCAL 98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p. 1041-1083.
中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1-36.

Ⅱ．花粉分析および寄生虫卵分析

１．はじめに

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は，花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており，人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いてトイレ遺構の確認や人糞施肥の有無の確認が可能であり，寄生虫卵の種類から，摂取された食物の種類や，そこに生息していた動物種を推定することも可能である。

２．試　　料

試料は，14調査区のSD-５，15調査区のSD-２，17・18調査区中央トレンチの河道２，19調査区，20調査区北側トレンチの河道３，20調査区中央ベルトの河道３，25調査区北壁のSD-９の７地点から採取された計11点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。なお，25調査区北壁のSD-９については寄生虫卵分析，それ以外は花粉分析として処理を行ったが，各試料について両者の検出・同定を試みた。

３．方　　法

⑴　花粉分析

花粉粒の分離抽出は，中村（1973）の方法をもとに，以下の手順で行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
２）水洗処理の後，0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法で砂粒を除去
３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
４）水洗処理の後，氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
５）再び氷酢酸を加えて水洗処理
６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
７）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については，中村（1974，1977）を参考にして，現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが，個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

⑵　寄生虫卵分析

微化石分析法を基本に，以下のように行った。

１）サンプルを採量

２）脱イオン水を加えて撹拌
３）篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去
４）25%フッ化水素酸を加えて30分静置（２～３度混和）
５）遠心分離（1500rpm，２分間）による水洗の後にサンプルを２分割
６）片方にアセトリシス処理を施す
７）両方のサンプルを染色後，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
８）検鏡・計数

４．結　　果

⑴　花粉分析

出現した分類群は，樹木花粉29，樹木花粉と草本花粉を含むもの３，草本花粉25，シダ植物胞子２形態の計59である。分析結果を表１に示し，花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属，モミ属，ツガ属，マツ属複維管束亜属，スギ，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科，ヤナギ属，サワグルミ，ハンノキ属，カバノキ属，クマシデ属－アサダ，クリ，シイ属－マテバシイ属，ブナ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ニレ属－ケヤキ，エノキ属－ムクノキ，アカメガシワ，サンショウ属，キハダ属，モチノキ属，ブドウ属，ツバキ属，グミ属，ハイノキ属，モクセイ科，ニワトコ属－ガマズミ属，スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科，マメ科，ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属，オモダカ属，イネ科，イネ属型，カヤツリグサ科，イボクサ，ミズアオイ属，タデ属サナエタデ節，ギシギシ属，アカザ科－ヒユ科，ナデシコ科，コウホネ属，キンポウゲ属，アブラナ科，ツリフネソウ属，ノブドウ，チドメグサ亜科，セリ亜科，ナス科，オオバコ属，オミナエシ科，ゴキヅル，タンポポ亜科，キク亜科，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子，三条溝胞子

１）14調査区（図１）

SD‐５の⑤層（試料№１）では，樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高い。樹木花粉では，シイ属－マテバシイ属が優占し，コナラ属アカガシ亜属，エノキ属－ムクノキなどが伴われる。草本花粉では，イネ属型を含むイネ科が優占し，次いでヨモギ属が多い。

２）15調査区（図２）

SD‐２の③層（試料№２）では，樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く，シダ植物胞子も多い。樹木花粉では，シイ属－マテバシイ属が優占し，コナラ属アカガシ亜属，クリ，マツ属複維管束亜属，エノキ属－ムクノキなどが伴われる。草本花粉では，イネ属型を含むイネ科が優占し，ヨモギ属，セ

リ亜科，カヤツリグサ科などが伴われる。

３）17・18調査区中央トレンチ（図３）

河道２の①層（試料№３）と③層（試料№４）では，樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では，イネ属型を含むイネ科が優占し，ヨモギ属も比較的多く，カヤツリグサ科，アブラナ科，セリ亜科などが伴われる。樹木花粉では，シイ属－マテバシイ属，コナラ属アカガシ亜属，エノキ属－ムクノキなどが出現する。

４）19調査区

５層（試料№５）では，花粉がほとんど検出されなかった。

５）20調査区北側トレンチ

河道３の③層（試料№６）では，草本花粉のイネ科，タンポポ亜科，ヨモギ属，樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属やコナラ属コナラ亜属などが検出されたが，いずれも少量である。

６）20調査区中央ベルト（図４）

河道３の⑨層（試料№９）では，樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が高率に出現し，ヨモギ属，カヤツリグサ科，アブラナ科などが伴われる。樹木花粉では，シイ属－マテバシイ属，コナラ属アカガシ亜属，エノキ属－ムクノキ，マツ属複維管束亜属などが出現する。⑥層（試料№８）と①層（試料№７）でもおおむね同様の結果であるが，ヨモギ属やセリ亜科がやや増加しており，イネ属型は見られなくなっている。

７）25調査区北壁（図５）

SD-９の⑦層（試料№２）では，樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では，イネ属型を含むイネ科が優占し，ヨモギ属，カヤツリグサ科，アカザ科－ヒユ科，ミズアオイ属，オモダカ属などが伴われる。樹木花粉では，シイ属－マテバシイ属，コナラ属アカガシ亜属がやや高率で出現する。①層（試料№１）では，ヨモギ属やアカザ科－ヒユ科が増加し，イネ科は大幅に減少している。

⑵ 寄生虫卵分析

15調査区 SD-２の③層（試料№２）では鞭虫卵，20調査区中央ベルト SD-８の⑨層（試料№９）では回虫卵と鞭虫卵が検出されたが，いずれも少量である。その他の試料からは，寄生虫卵はまったく検出されなかった。

５．花粉分析から推定される植生と環境

⑴ 14調査区

SD-５の⑤層の堆積当時は，周辺で水田稲作が行われており，その周囲には水田雑草の性格を持つイネ科，カヤツリグサ科，ミズアオイ属などが生育していたと考えられる。また，比較的乾燥したところにはヨモギ属なども生育していたと推定される。森林植生としては，近隣にシイ属－マテバシイ属やカシ類（コナラ属アカガシ亜属）を主要素としてツバキ属なども見られる照葉樹林が分布していたと考えられ，部分的にエノキ属－ムクノキやモクセイ科などの落葉樹も生育していたと推定される。

⑵ 15調査区

SD-２の③層の堆積当時は，周辺で水田稲作が行われており，その周囲には水田雑草の性格を持つイネ科，カヤツリグサ科，オモダカ属などが生育していたと考えられる。また，比較的乾燥したところにはヨモギ属なども生育していたと推定される。森林植生としては，近隣にシイ類やカシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたと考えられ，部分的にエノキ属－ムクノキ，クリ，マツ類なども生育していたと推定される。

同層では寄生虫卵の鞭虫卵が検出されたが，低密度であることから，集落周辺における通常の汚染程度と考えられる。

⑶ 17・18調査区中央トレンチ

河道２の①層と③層の堆積当時は，周辺で水田稲作が行われており，その周囲には水田雑草の性格を持つオモダカ属，ミズアオイ属，イネ科，カヤツリグサ科などが生育していたと考えられる。また，比較的乾燥したところにはヨモギ属，アブラナ科，アカザ科－ヒユ科，チドメグサ亜科なども生育していたと推定される。このうち，アブラナ科にはアブラナ，ダイコン，ハクサイ，タカナ，カブなど多くの栽培植物が含まれており，これらが栽培されていた可能性も考えられる。

森林植生としては，周辺地域にシイ類やカシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたと考えられ，部分的にエノキ属－ムクノキ，クリ，マツ類なども生育していたと推定される。

⑷ 19調査区

５層では，花粉がほとんど検出されなかった。花粉があまり検出されない原因としては，乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

⑸ 20調査区北側トレンチ

河道３の③層では，花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが，20調査区中央ベルトの同層準と同様の状況であった可能性が考えられる。花粉があまり検出されない原因としては，前述のようなことが考えられる。

⑹ 20調査区中央ベルト

河道の⑨層の堆積当時は，周辺で水田稲作が行われており，その周囲には水田雑草の性格を持つミズアオイ属，イネ科，カヤツリグサ科などが生育していたと考えられる。また，比較的乾燥したところにはヨモギ属，アブラナ科，アカザ科－ヒユ科，チドメグサ亜科，タンポポ亜科なども生育していたと推定される。このうち，アブラナ科については栽培されていた可能性も考えられる。森林植生としては，周辺地域にシイ類やカシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたと考えられ，部分的にエノキ属－ムクノキやマツ類なども生育していたと推定される。

同層では回虫卵や鞭虫卵が検出されたが，低密度であることから，集落周辺における通常の汚染程度と考えられる。回虫と鞭虫は，どちらも中間宿主を必要としない種類であり，虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。

⑥層と①層の時期には，周辺でヨモギ属などが生育する人里の環境が拡大し，森林植生は減少したと考えられる。

⑺ 25調査区北壁

SD-９の⑦層の堆積当時は，周辺で水田稲作が行われており，その周囲には水田雑草の性格を持つミズアオイ属，オモダカ属，イネ科，カヤツリグサ科などが生育していたと考えられる。森林植生としては，周辺地域にシイ類やカシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたと考えられ，部分的にクリ，エノキ属－ムクノキ，マツ類なども生育していたと推定される。

①層の時期には，周辺でヨモギ属，アカザ科－ヒユ科，アブラナ科，タンポポ亜科などが生育する人里の環境が拡大し，周辺では二次林とみられるマツ類が増加したと考えられる。

６．ま　と　め

SD-２，SD-５，河道２，河道３，SD-９の各遺構の埋土底部の堆積当時は，周辺で水田稲作が行われており，その周囲には水田雑草の性格を持つミズアオイ属，オモダカ属，イネ科，カヤツリグサ科などが生育していたと考えられる。また，比較的乾燥したところにはヨモギ属やアブラナ科なども生育していたと推定される。遺跡周辺にはシイ類やカシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたと考えられ，部分的にクリ，エノキ属－ムクノキ，マツ類なども生育していたと推定される。

河道３と SD-９の埋土上部の時期には，ヨモギ属などが生育する比較的乾燥した人里の環境が拡大したと考えられ，周辺ではアブラナ科などの栽培も行われていたと推定される。また，この時期には周辺地域で二次林とみられるマツ類が増加したと考えられる。

SD-２と河道３の埋土底部では，寄生虫卵の回虫卵や鞭虫卵が検出されたが，いずれも低密度であることから，集落周辺における通常の汚染程度と考えられる。回虫と鞭虫は，どちらも中間宿主を必要としない種類であり，虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。

【文献】

中村　純（1973）花粉分析．古今書院，ｐ.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，ｐ.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60ｐ.

中村　純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91ｐ.

中村　純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，ｐ.187-193.

中村　純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，ｐ.21-30.

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，ｐ.14-15.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物･扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，８，医歯薬出版，ｐ.9-55.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学，２，同成社，ｐ.151-158.

表１　長崎県，原の辻遺跡県道緊急調査における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/ｇ）

分類群	学名	地点・試料 1	2	3	4	5
イネ科	Gramineae (Grasses)					
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	53	36	29	22	36
ムギ類(穎の表皮細胞)	*Hordeum-Triticum* (husk Phytolith)			7		
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	8	7		30	
ススキ属型	*Miscanthus* type	8	14			
ウシクサ族Ａ	Andropogoneae A type	8	36	15	7	36
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)					
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	8	7	140		
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*		7	22		
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)			29		
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	23	36	29		22
未分類等	Others	8	57	81	15	7
その他のイネ科	Others					
表皮毛起源	Husk hair origin	15	7	15	30	14
棒状珪酸体	Rod− shaped	30	72	110	74	58
未分類等	Others	151	337	471	281	304
樹木起源	Arboreal					
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*	23	7	7	52	22
クスノキ科	Lauraceae	23	43	7	15	14
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*		14			7
その他	Others	15	86	15	30	43
(海綿骨針)	Sponge	15	7			
植物珪酸体総数	Total	369	768	978	555	564

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²･cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	1.55	1.06	0.86	0.65	1.06
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	0.48	0.45		1.87	
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.09	0.18			
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	0.09	0.08	1.62		
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*		0.03	0.11		
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)			0.22		
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	0.07	0.11	0.09		0.07

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	56	37	80		
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*		15	5		
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)			11		
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	44	48	4		100

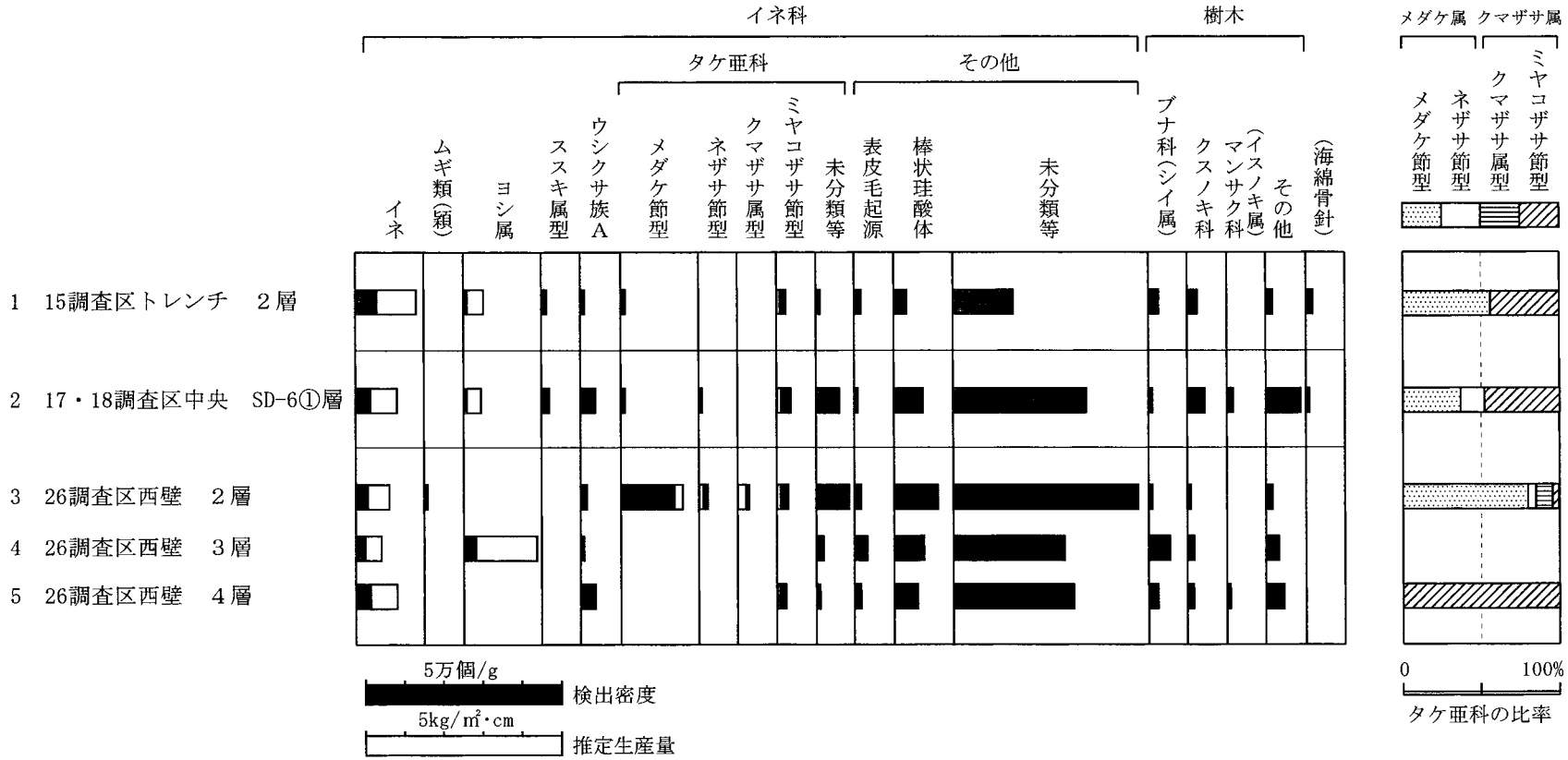
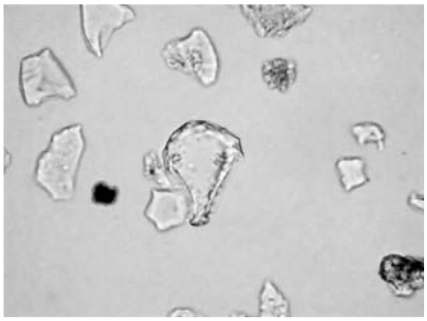
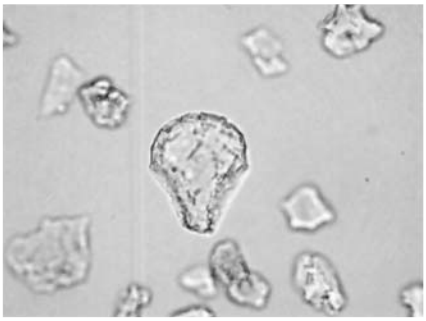


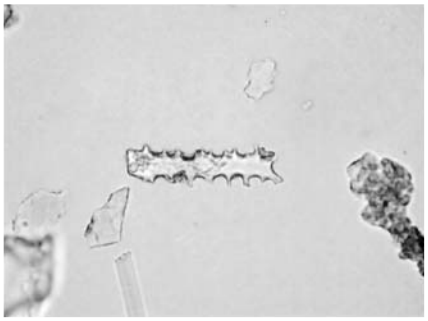
図1 原の辻遺跡，平成15年度県道緊急調査における植物珪酸体（プラント・オパール）分析結果



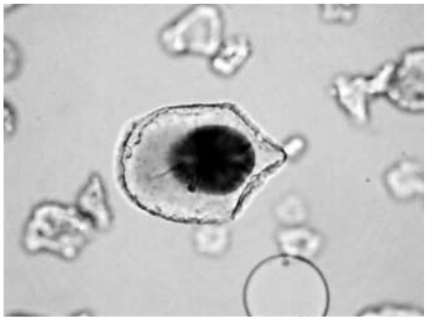
イネ
試料1



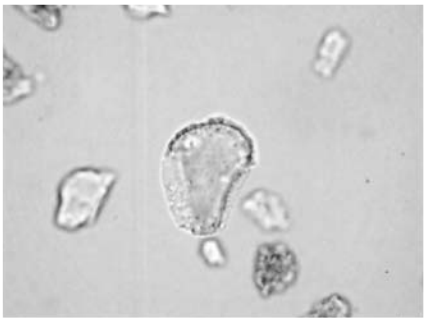
イネ
試料5



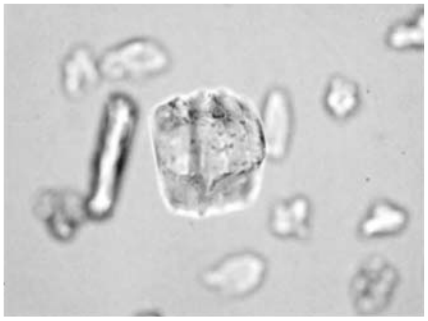
ムギ類（穎の表皮細胞）
試料3



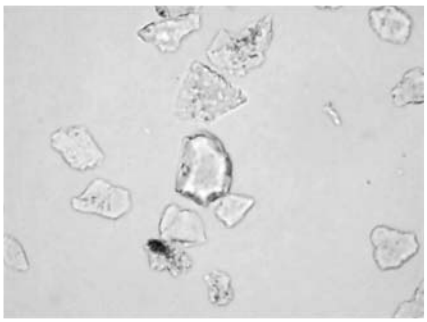
ヨシ属
試料4



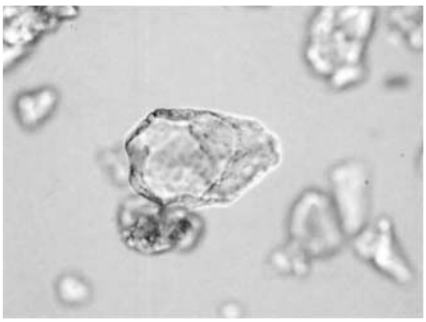
メダケ節型
試料3



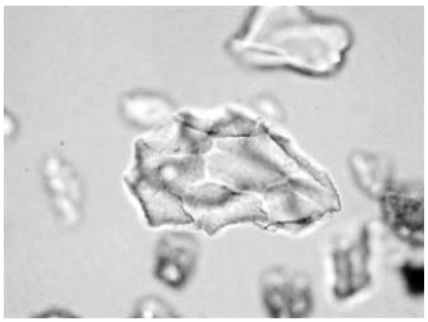
ネザサ節型
試料3



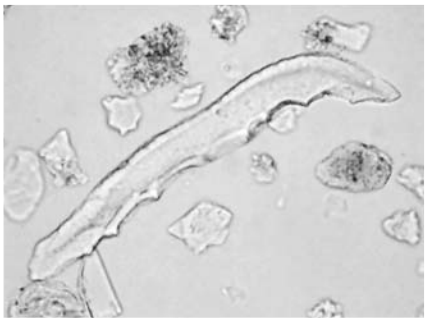
ミヤコザサ節型
試料1



ブナ科（シイ属）
試料1

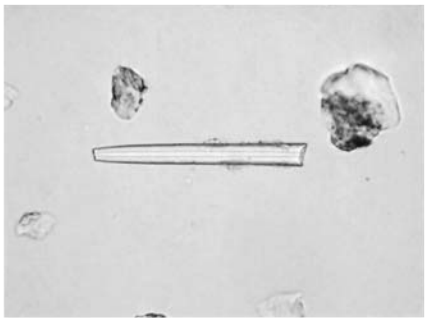


ブナ科（シイ属）
試料3



クスノキ科
試料1

マンサク科（イスノキ属）
試料5



海綿骨針
試料1

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真　――― 50μm

Ⅲ．珪藻分析

1．はじめに

珪藻は，珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり，海水域や淡水域などの水域をはじめ，湿った土壌，岩石，コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は，塩分濃度，酸性度，流水性などの環境要因に応じて，それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は，当時の堆積環境を反映しており，水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

2．試　　料

試料は，試料は，14調査区のSD-５，15調査区のSD-２，17・18調査区中央トレンチの河道２，19調査区，20調査区北側トレンチの河道３，20調査区中央ベルトの河道３の６地点から採取された計９点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。なお，これらは花粉分析に用いられたものと同一試料である。

3．方　　法

以下の手順で珪藻を抽出し，プレパラートを作成した。

１）試料から乾燥重量１ｇを秤量
２）10%過酸化水素水を加え，加温しながら１晩放置
３）上澄みを捨て，細粒のコロイドと薬品を水洗
４）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥
５）マウントメディアによって封入し，プレパラート作成
６）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって600～1000倍で行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い，少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4．結　　果

出現した珪藻は，真－中塩性種（海－汽水生種）１分類群，貧－中塩性種（淡－汽水生種）１分類群，貧塩性種（淡水生種）59分類群である。分析結果を表１に示し，珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図1,図２に示す。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

〔貧塩性種〕

Amphora copulata, Achnanthes lanceolata, Aulacoseira sp., Caloneis bacillum, Cymbella silesiaca, Cocconeis placentula, Cymbella lanceolata, Cymbella tumida, Eunotia minor, Eunotia praerupta, Fragilaria construens, Gomphonema acuminatum, Gomphonema augur v. turris, Gomphonema gracile, Gomphonema parvulum, Gomphonema subtile, Gomphonema truncatum, Gyrosigma sp., Hantzschia amphioxys, Navicula americana, Navicula confervacea, Navicula elginensis, Navicula pupula, Navicula viridula v. rostellata, Neidium ampliatum, Pinnularia acrosphaeria, Pinnularia

brevicostata, Pinnularia gibba, Pinnularia microstauron, Pinnularia viridis, Stauroneis phoenicenteron, Synedra ulna, Tabellaria fenestrata-flocculosa

⑴ 14調査区（図１）

SD-５の⑤層（試料№１）では，貧塩性種（淡水生種）で止水性種の占める割合が高く，沼沢湿地付着生種群の *Eunotia minor* が優占し，*Neidium ampliatum, Pinnularia microstauron* が伴われる。流水性種は少なく，*Gomphonema parvulum*，中～下流水性河川指標種群の *Navicula viridula v. rostellata,Achnanthes lanceolata*，流水不定性種で沼沢湿地付着生種群の *Pinnularia gibba* などが検出される。

⑵ 15調査区（図２）

SD-２の③層（試料№２）では，珪藻密度は低いものの，貧塩性種（淡水生種）で止水性種の占める割合が高く，流水不定性種の *Gomphonema augur v. turris* も多い。止水性種では沼沢湿地付着生種群の *Eunotia minor* がやや優占し，*Gomphonema acuminatum, Cymbella lanceolata, Synedra ulna*，流水性種の *Gomphonema parvulum* などが伴われる。

⑶ 17・18調査区中央トレンチ

河道２の①層（試料№３）と③層（試料№４）では，貧塩性種（淡水生種）で止水性種，流水不定性種などの珪藻が検出されたが，いずれも少量である。

⑷ 19調査区（西壁）

５層（試料№５）では，珪藻は検出されなかった。

⑸ 20調査区北側トレンチ

河道３の③層（試料№６）では，珪藻はほとんど検出されなかった。

⑹ 20調査区中央ベルト

河道３の①層（試料№７），⑥層（試料№８），⑨（層試料№９）では，珪藻はほとんど検出されなかった。

５．珪藻分析から推定される堆積環境

⑴ 14調査区（南壁）

SD-５の⑤層では，止水性種の占める割合が高く，沼沢湿地付着生種群が優占し，流水性種がやや低率に伴われることから，水草の生育する深さ１ｍまでのよどんだ止水域の環境であり，時期や季節などによって一時的に流水の影響を受けるような状況であったと推定される。

⑵ 15調査区

SD-２の③層では，珪藻密度が低いことから堆積環境の詳細な推定は困難であるが，SD-５の⑤層と同様に，水草の生育するよどんだ止水域の環境であり，時期や季節などによって一時的に流水の影響を受けるような状況であったと推定される。

珪藻密度が低い原因としては，珪藻の生育に適さない比較的乾燥した堆積環境であったことや，水流による淘汰を受けたこと，土層の堆積速度が速かったことなどが考えられる。

⑶ 17・18調査区中央トレンチ

河道２の①層と③層では，珪藻密度が低いことから堆積環境の推定は困難であるが，止水性種と流水不定性種を主とする貧塩性種（淡水生種）が検出されることから，時期や季節によって一時的に滞水するような環境が示唆される。珪藻密度が低い原因としては，前述のようなことが考えられる。

⑷ 19 調 査 区

５層では，珪藻が検出されなかった。

⑸ 20調査区北側トレンチ

河道３の③層では，珪藻はほとんど検出されなかった。珪藻密度が低い原因としては，前述のようなことが考えられる。

⑹ 20調査区中央ベルト

河道３の①，⑥層，⑨層では，珪藻はほとんど検出されなかった。珪藻密度が低い原因としては，前述のようなことが考えられる。

６．ま　と　め

SD-２と SD-５の埋土底部の堆積当時は，水草の生育するよどんだ止水域の環境であり，時期や季節などによって一時的に流水の影響を受けるような状況であったと推定される。その他の遺構では，珪藻がほとんど検出されないことから，珪藻の生育にはあまり適さない比較的乾燥した堆積環境が示唆される。

【文献】

Hustedt,F.(1937-1938)Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol, Suppl. 15, p.131-506.

Patrick, R.eimer, C. W.(1966)The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644 p.

Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollusion tolerance of fresh-water diatoms.333 p., National Environmental Reserch.Center.

Patrick, R.eimer, C. W.(1975)The diatom of the United States, vol.2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia,No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213 p.

Asai, K.&, Watanabe, T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecologi
cal Groups relaiting to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom, 10, p. 35-47.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第１号，植生史研究会，ｐ.29-44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，ｐ.1-20.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，ｐ.73-88.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，６，ｐ.23-45.

表１　原の辻遺跡，平成15年度県道緊急調査における花粉分析結果

分類群		14調査区	15調査区	17・18調査区中央		19調査区	20調査区北	20調査区中央ベルト		
		No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9
学名	和名	SD-5⑤層	SD-2③層	SD-6①層	SD-6②層	5層	SD-8③層	SD-8①層	SD-8⑥層	SD-8⑨層
Arboreal pollen	樹木花粉									
Podocarpus	マキ属			1						2
Tsuga	ツガ属				1					
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	8	11	3	12	1	1	11	4	14
Cryptomeria japonica	スギ	2	1	1				1	2	2
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科							1		
Salix	ヤナギ属				1					
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ				1					
Alnus	ハンノキ属	2		3	1	1			1	1
Betula	カバノキ属	2		1	3					1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ			2	1					
Castanea crenata	クリ	5	13	7	7		1	1	3	4
Castanopsis-Pasania	シイ属-マテバシイ属	96	146	55	56	1		22	29	51
Fagus	ブナ属							1		
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	5	1	1	6		2	1		7
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	30	19	36	41		4	13	26	24
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	1			1				1	2
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	16	6	52	19	1			2	20
Mallotus japonicus	アカメガシワ			1						
Zanthoxylum	サンショウ属		1		1					
Phellodendron	キハダ属			1						
Ilex	モチノキ属			1	8					
Vitis	ブドウ属	1			2					1
Camellia	ツバキ属	6	2	4						1
Elaeagnus	グミ属	1		1	1					
Symplocos	ハイノキ属	1	1	3	2					
Oleaceae	モクセイ科	9		2	1				1	2
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属	1	1							
Lonicera	スイカズラ属	1		1	1			1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉									
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		9	10	4		3	2	1	9
Leguminosae	マメ科		2	3						2
Araliaceae	ウコギ科				1					1
Nonarboreal pollen	草本花粉									
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属				1			1	1	
Sagittaria	オモダカ属		1	4					2	
Gramineae	イネ科	82	81	165	180	2	32	156	204	146
Oryza type	イネ属型	5	4	9	7					12
Cyperaceae	カヤツリグサ科	9	8	22	34	1	3	27	26	21
Aneilema keisak	イボクサ	1		1						
Monochoria	ミズアオイ属	4		4	3					1
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	1	1	1	3		1	3	1	1
Rumex	ギシギシ属	1	1	1						
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		1	7	7			3	7	3
Caryophyllaceae	ナデシコ科		1	1						
Nuphar	コウホネ属	1								
Ranunculus	キンポウゲ属	1							2	
Cruciferae	アブラナ科		1	16	10		7	12	19	15
Impatiens	ツリフネソウ属			2				1		
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ	1		1	1				1	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	4	2	8	5	1	1	2		3
Apioideae	セリ亜科	4	16	13	14		4	22	22	4
Solanaceae	ナス科		1							
Plantago	オオバコ属	1								
Valerianaceae	オミナエシ科			1						
Actinostemma lobatum	ゴキヅル				13					
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	1	2	2		14	5	10	4
Asteroideae	キク亜科		3	6	1			3	13	3
Artemisia	ヨモギ属	44	18	45	53	1	11	81	69	46
Fern spore	シダ植物胞子									
Monolate type spore	単条溝胞子	3	18	8	2		4	2	19	4
Trilate type spore	三条溝胞子	13	82	6	5		7	8	12	8
Arboreal pollen	樹木花粉	187	202	176	166	4	8	52	69	132
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	11	13	5	0	3	2	1	12
Nonarboreal pollen	草本花粉	160	140	309	334	5	73	316	377	259
Total pollen	花粉総数	347	353	498	505	9	84	370	447	403
	試料1cm^{3}中の花粉密度	3.8 $\times 10^4$	7.8 $\times 10^3$	5.6 $\times 10^4$	7.1 $\times 10^4$	6.0 $\times 10$	7.0 $\times 10^2$	2.6 $\times 10^4$	3.2 $\times 10^3$	1.5 $\times 10^4$
Unknown pollen	未同定花粉	9	21	10	5	1	4	8	12	5
Fern spore	シダ植物胞子	16	100	14	7	0	11	10	31	12
Helminth eggs	寄生虫卵									
Ascaris(lumbricoides)	回虫卵									1
Trichuris(trichiura)	鞭虫卵		1							1
Total	計	0	1	0	0	0	0	0	0	2
	試料1cm^{3}中の寄生虫卵密度	0.0	0.8 $\times 10$	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2 $\times 10$
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

表２　原の辻遺跡，平成15年度県道緊急調査における寄生虫卵および花粉分析結果

分類群		25調査区北壁	
		No. 1	No. 2
学名	和名	SD-9①層	SD-9⑦層
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉		
Podocarpus	マキ属		1
Abies	モミ属		3
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	13	3
Cryptomeria japonica	スギ	3	
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		2
Betula	カバノキ属		1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	2	
Castanea crenata	クリ	4	5
Castanopsis-Pasania	シイ属-マテバシイ属	14	17
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	1	3
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	17	12
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	5	1
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	3	5
Zanthoxylum	サンショウ属		1
Ilex	モチノキ属	1	1
Vitis	ブドウ属	1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	28	18
Leguminosae	マメ科	10	2
Araliaceae	ウコギ科	3	
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属		1
Sagittaria	オモダカ属		7
Gramineae	イネ科	82	203
Oryza type	イネ属型	1	22
Cyperaceae	カヤツリグサ科	14	10
Aneilema keisak	イボクサ		1
Monochoria	ミズアオイ属		12
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節		2
Rumex	ギシギシ属		3
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	21	4
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	
Ranunculus	キンポウゲ属		3
Cruciferae	アブラナ科	14	4
Impatiens	ツリフネソウ属		1
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科		1
Apioideae	セリ亜科	15	3
Valerianaceae	オミナエシ科	1	
Lactucoideae	タンポポ亜科	13	
Asteroideae	キク亜科	3	1
Artemisia	ヨモギ属	78	17
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	3	2
Trilate type spore	三条溝胞子	12	14
Arboreal pollen	樹木花粉	64	55
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	41	20
Nonarboreal pollen	草本花粉	243	295
Total pollen	花粉総数	348	370
	試料1cm^{3}中の花粉密度	2.5 $\times 10^4$	4.6 $\times 10^4$
Unknown pollen	未同定花粉	7	2
Fern spore	シダ植物胞子	15	16

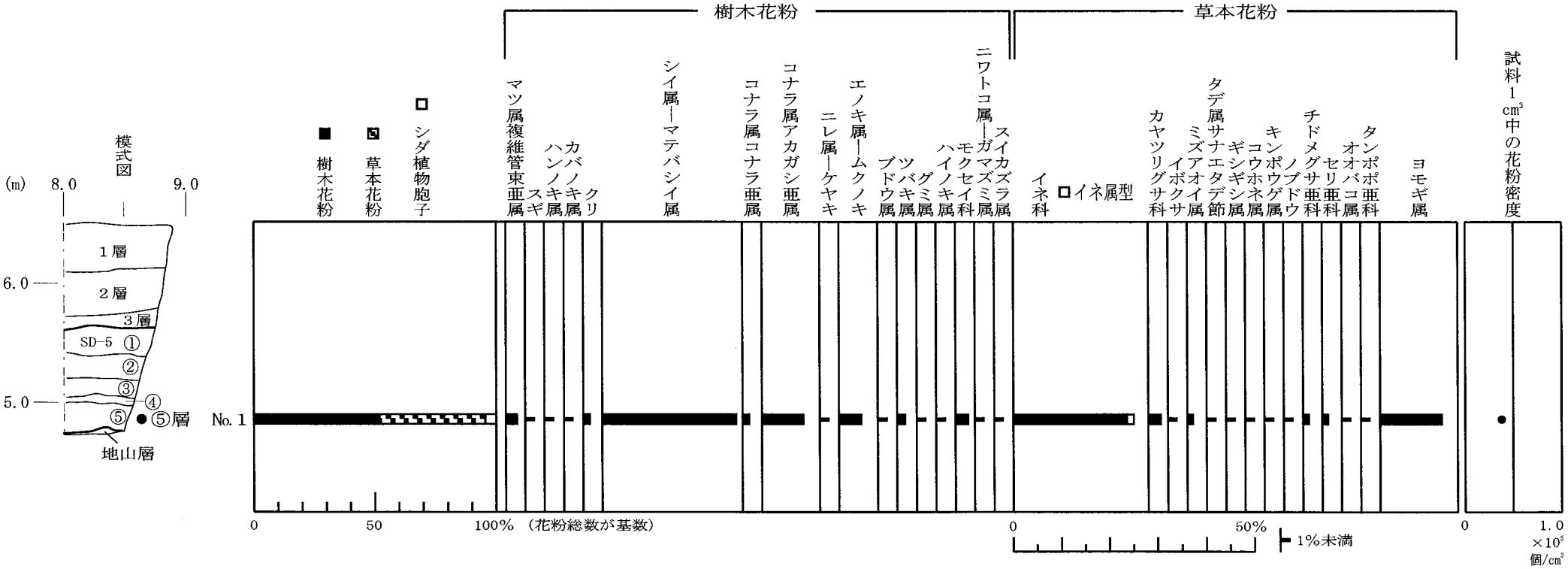


図1　14調査区（南壁），SD-5における花粉ダイアグラム

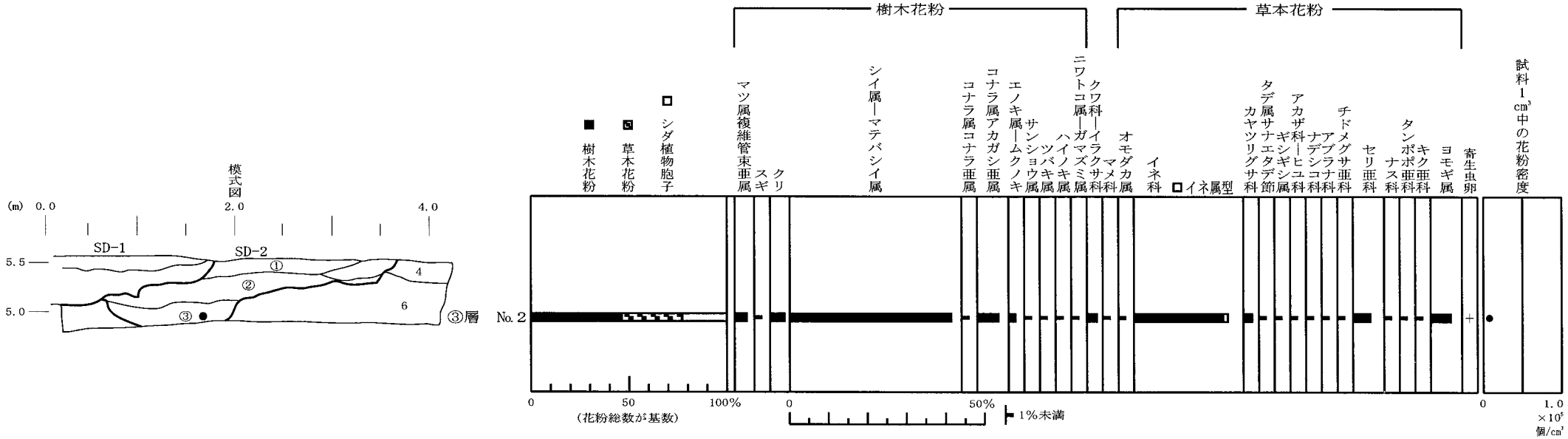


図2　15調査区（南壁），SD-2における花粉ダイアグラム

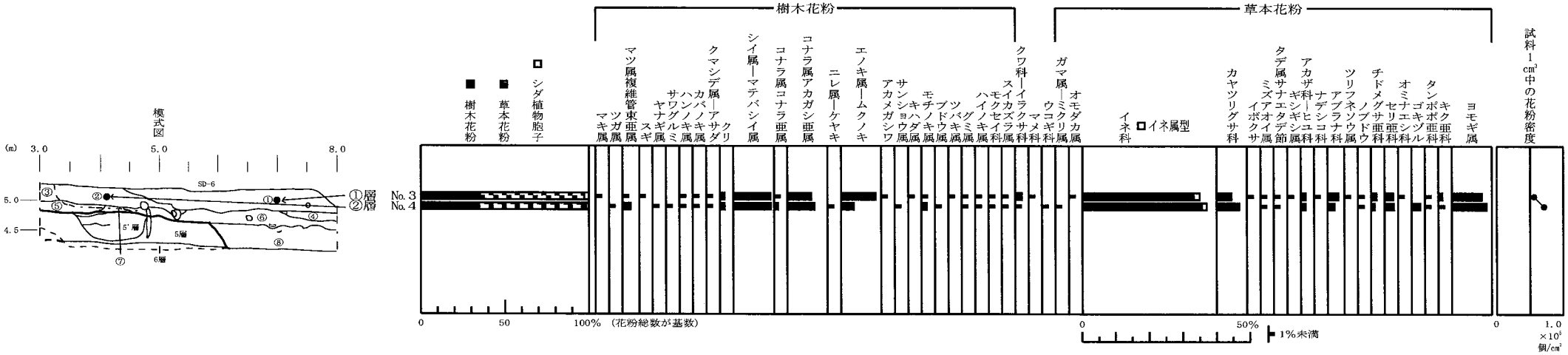


図3　17・18調査区中央トレンチ（西壁），SD-6における花粉ダイアグラム

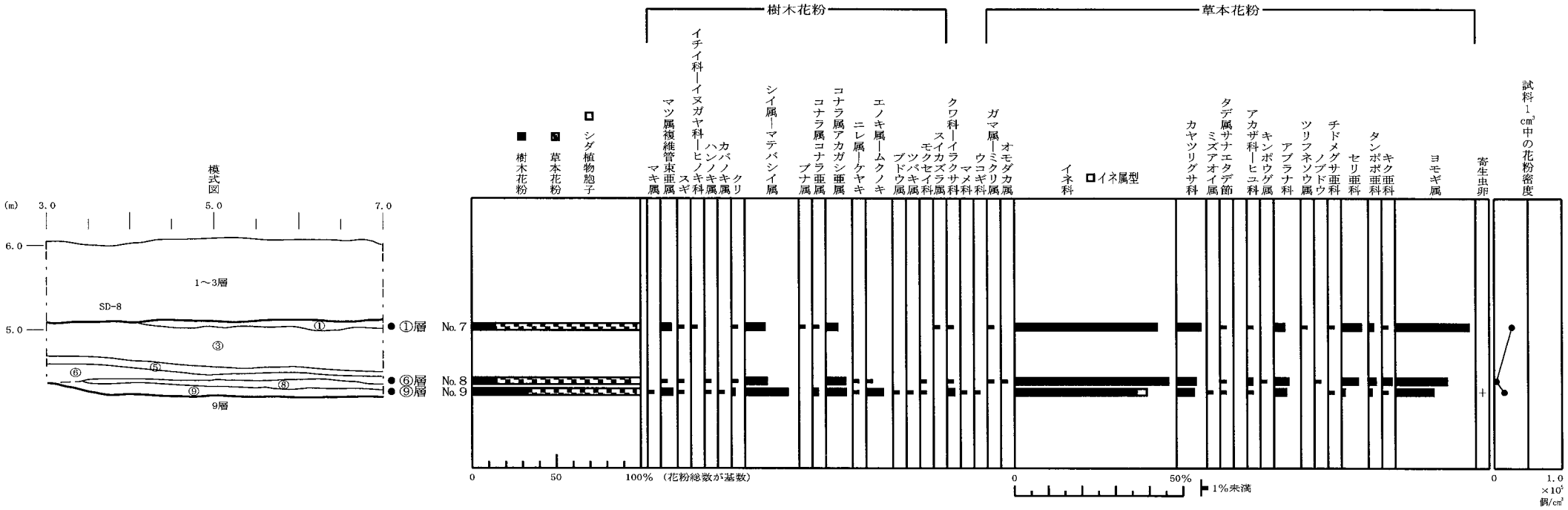


図4　20調査区中央トレンチ（西壁），SD-8における花粉ダイアグラム

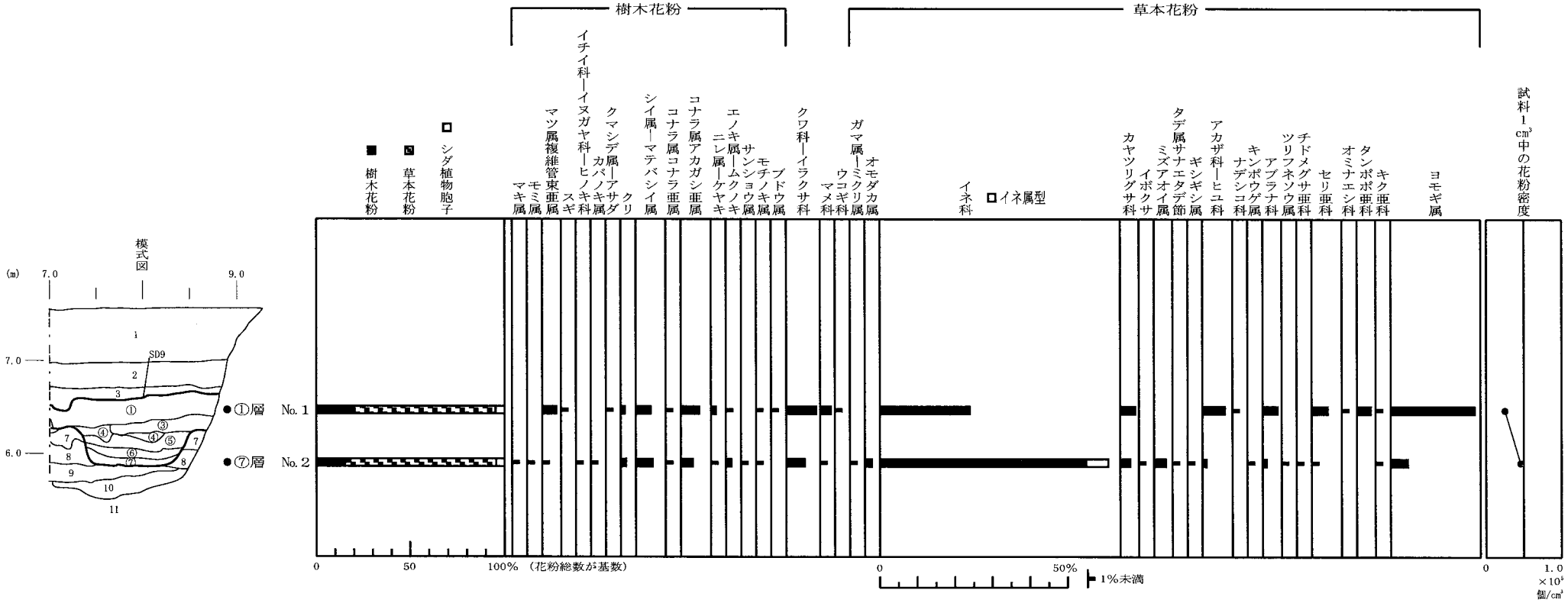
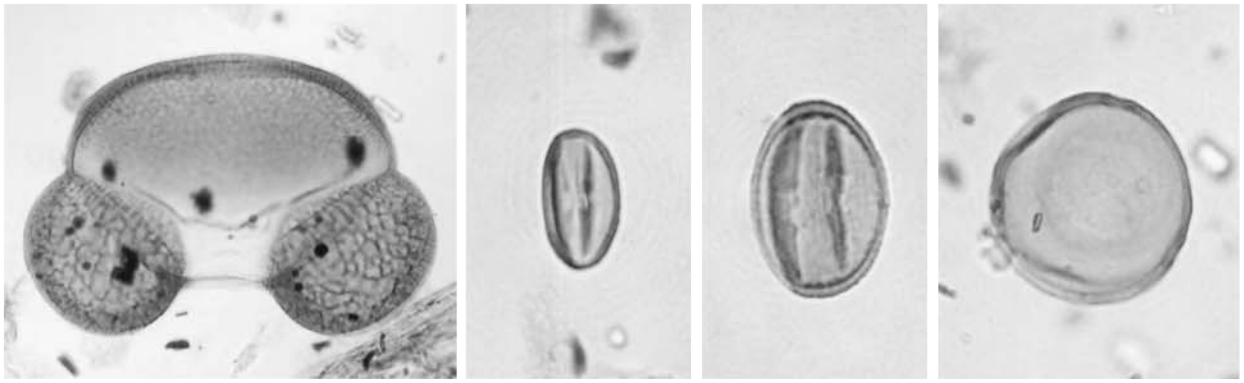


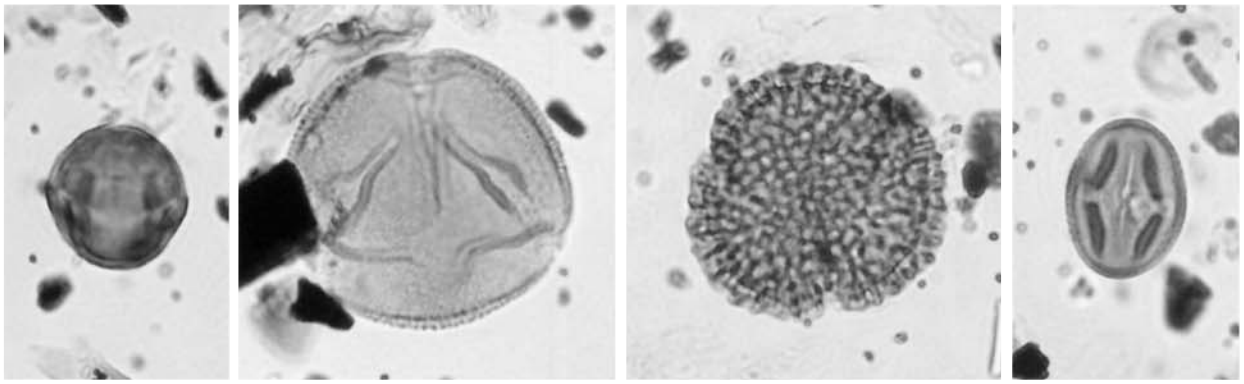
図5　25調査区北壁，SD-9における花粉ダイアグラム

原の辻遺跡第42次調査の花粉・胞子・寄生虫卵

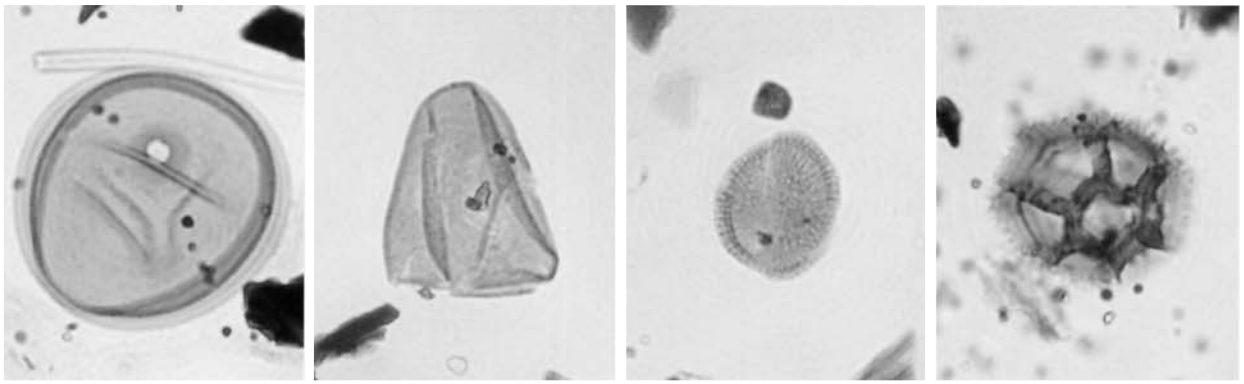


1　モミ属　　2　シイ属ーマテバシイ属　　3　コナラ属　　4　エノキ属ームクノキ アカガシ亜属

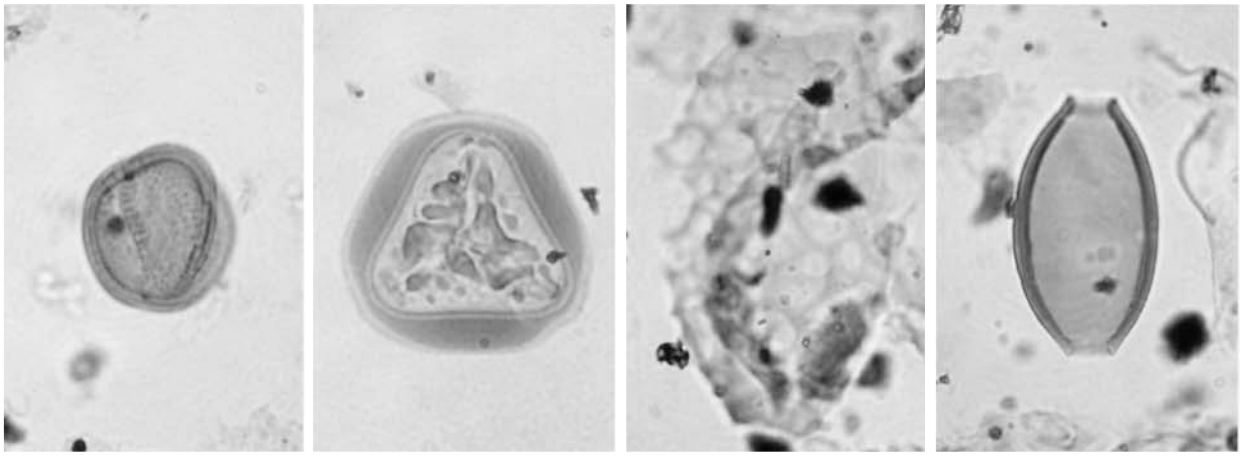
10μm



5　アカメガシワ　　6　ツバキ属　　7　モクセイ科　　8　マメ科



9　イネ属型　　10　カヤツリグサ科　　11　アブラナ科　　12　タンポポ亜科



13　キンポウゲ属　　14　シダ植物三条溝胞子　　15　回虫卵　　16　鞭虫卵

10μm

Ⅳ．植物珪酸体（プラント・オパール）分析

１．はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また，イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

２．試　　料

分析試料は，15調査区トレンチの２層（試料№１），17・18調査区中央の河道２・①層（試料№２），26調査区西壁の①層の上層（試料№３），①層（試料№４），②層（試料№５）の計５点である。このうち，17・18調査区中央の河道２・①層（試料№２）は，花粉分析・珪藻分析の試料№３と同一層準から採取されたものである。

３．分　析　法

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて，次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１ｇに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μm以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は，400倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}ｇ）をかけて，単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。これにより，各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03），ヨシ属（ヨシ）は6.31，ススキ属（ススキ）は1.24，メダケ節は1.16，ネザサ節は0.48，クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75，ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については，植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

４．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ，ムギ類（穎の表皮細胞），ヨシ属，シバ属，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ属），ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），クマザサ属型（クマザサ属チシマザサ節・チマキザサ節など），ミヤコザサ節型（クマザサ属ミヤコザサ節など），未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），その他

５．考　　察

⑴　稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合，一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料１ｇあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に，そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし，密度が3,000個/ｇ程度でも水田遺構が検出される事例があることから，ここでは判断の基準を3,000個/ｇとして検討を行った。

分析の結果，すべての試料からイネが検出された。このうち,15調査区トレンチの２層（試料№１）では密度が5,300個/ｇと高い値であり，17・18調査区中央の河道２・①層（試料№２）および26調査区西壁の②層（試料№５）でも3,600個/ｇと比較的高い値である。したがって，これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

26調査区西壁の①層の上層（試料№３）と①層（試料№４）では，密度が2,900個/ｇおよび2,200個/ｇと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては，稲作が行われていた期間が短かったこと，土層の堆積速度が速かったこと，洪水などによって耕作土が流出したこと，採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと，および上層や他所からの混入などが考えられる。

⑵　イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには，イネ以外にもムギ類，ヒエ属型（ヒエが含まれる），エノコログサ属型（アワが含まれる），キビ属型（キビが含まれる），ジュズダマ属（ハトムギが含まれる），オヒシバ属（シコクビエが含まれる），モロコシ属型などがある。このうち，本遺跡の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類（穎の表皮細胞）は，26調査区西壁の①層の上層（試料№３）から検出された。密度は700個/ｇと低い値であるが，穎（籾殻）は栽培地に残されることがまれであることから，少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって，同層準の時期に調査地点もしくはその

近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため，その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお，植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため，根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

⑶ 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

26調査区西壁の①層の上層（試料№３）では，上記の分類群以外にもメダケ節型が比較的多く検出され，ウシクサ族Ａ，ネザサ節型，クマザサ属型，ミヤコザサ節型も検出された。その他の試料では，ウシクサ族Ａ，ミヤコザサ節型が検出され，部分的にヨシ属，ススキ，メダケ節型も検出されたが，いずれも少量である。なお，各試料からブナ科（シイ属）やクスノキ科などの樹木（照葉樹）が検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから，少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山，1999)。おもな分類群の推定生産量によると，おおむねイネが優勢であり，26調査区西壁の①層の上層（試料№３）ではメダケ節型，３層（試料№３）ではヨシ属も多くなっている。

以上の結果から，各層準の堆積当時は，調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと考えられ，部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。26調査区西壁の①層の上層の時期には，周辺にメダケ属（メダケ節）などの竹笹類が多く分布していたと考えられるが，その他の層準ではイネ科の野・雑草はあまり見られなかったと推定される。また，当時の遺跡周辺にはブナ科（シイ属）やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

６．ま　と　め

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果，15調査区トレンチの２層，17・18調査区中央の河道２・①層，26調査区西壁の②層では，イネが多量に検出され，稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また，その他の層準でも稲作が行われていた可能性が認められた。さらに，26調査区西壁の①層の上層では，ムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

各層準の堆積当時は，調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと考えられ，部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また，遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

【文献】

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，ｐ.70-83.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38⑵，ｐ.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，ｐ.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究⑴ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー．考古学と自然科学，９，ｐ.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究⑸ープラント・オパール分析による水田址の探査ー．考古学と自然科学，17，ｐ.73-85.

表１　原の辻遺跡，平成15年度県道緊急調査における珪藻分析結果

分類群	14調査区	15調査区	17・18調査区中央		19調査区	20調査区北	20調査区中央ベルト		
	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9
	SD-5⑤層	SD-2③層	SD-6①層	SD-6②層	5層	SD-8③層	SD-8①層	SD-8⑥層	SD-8⑨層
貧塩性種（淡水生種）									
Achnanthes inflata				1					
Achnanthes lanceolata	3								
Amphora copulata		1							
Aulacoseira sp.		2				1			
Caloneis bacillum	3								
Caloneis hyalina	1								
Cocconeis placentula		1	1						
Cymbella lanceolata	1	3		1					
Cymbella minuta	1								
Cymbella naviculiformis	2								
Cymbella silesiaca	3			1					
Cymbella tumida		1	1						
Diploneis sp.	1								
Eunotia bilunaris	1								
Eunotia gracialis				1					
Eunotia minor	33	9	1	3					
Eunotia praerupta		1						1	
Eunotia soleirolii			1						
Fragilaria construens	4								
Fragilaria olsenii	1								
Frustulia vulgaris	2								
Gomphonema acuminatum	1	4		1					
Gomphonema augur		1		1					
Gomphonema augur v. *turris*	1	13		2					
Gomphonema clevei	2								
Gomphonema gracile	4	1							
Gomphonema parvulum	7	2	2						
Gomphonema sp.	1								
Gomphonema subtile	9	1							
Gomphonema truncatum		2		1					
Gyrosigma sp.	8	3							
Hantzschia amphioxys	2								
Navicula americana		1							
Navicula bacillum	1								
Navicula capitata	1								
Navicula confervacea	1	1		1					
Navicula cuspidata	1			3					
Navicula elginensis	5								
Navicula laevissima	1			1					
Navicula meniscus	1								
Navicula mutica			1	1					1
Navicula placenta v. *obtusa*	1								
Navicula pupula	5								
Navicula viridula v. *rostellata*	6								
Neidium affine	1								
Neidium ampliatum	6	1							
Nitzschia clausii	1								
Pinnularia acrosphaeria	3								
Pinnularia brevicostata		1							
Pinnularia gibba	9								
Pinnularia interrupta	2								
Pinnularia major	1								
Pinnularia microstauron	6								
Pinnularia sp.	1								
Pinnularia viridis	3	1							
Rhopalodia gibba	2								
Stauroneis phoenicenteron		2							
Synedra ulna	5	3		1					
Tabellaria fenestrata-flocculosa	4								
貧-中塩性種（淡-汽水生種）									
Rhopalodia gibberula	1								
真-中塩性種（海-汽水生種）									
Nitzschia levidensis v. *victoriae*	2								
合　計	161	55	7	19	0	1	0	1	1
未同定	19	7	0	0	0	0	0	0	0
破片	36	33	1	14	0	0	1	2	12
試料1cm³中の殻数密度	2.2 $\times 10^6$	2.4 $\times 10^4$	2.0 $\times 10^3$	7.6 $\times 10^3$	0.0	2.0 $\times 10^2$	0.0	2.0 $\times 10^2$	2.0 $\times 10^2$
完形殻保存率（%）	83.3	65.3	-	-	-	-	-	-	-

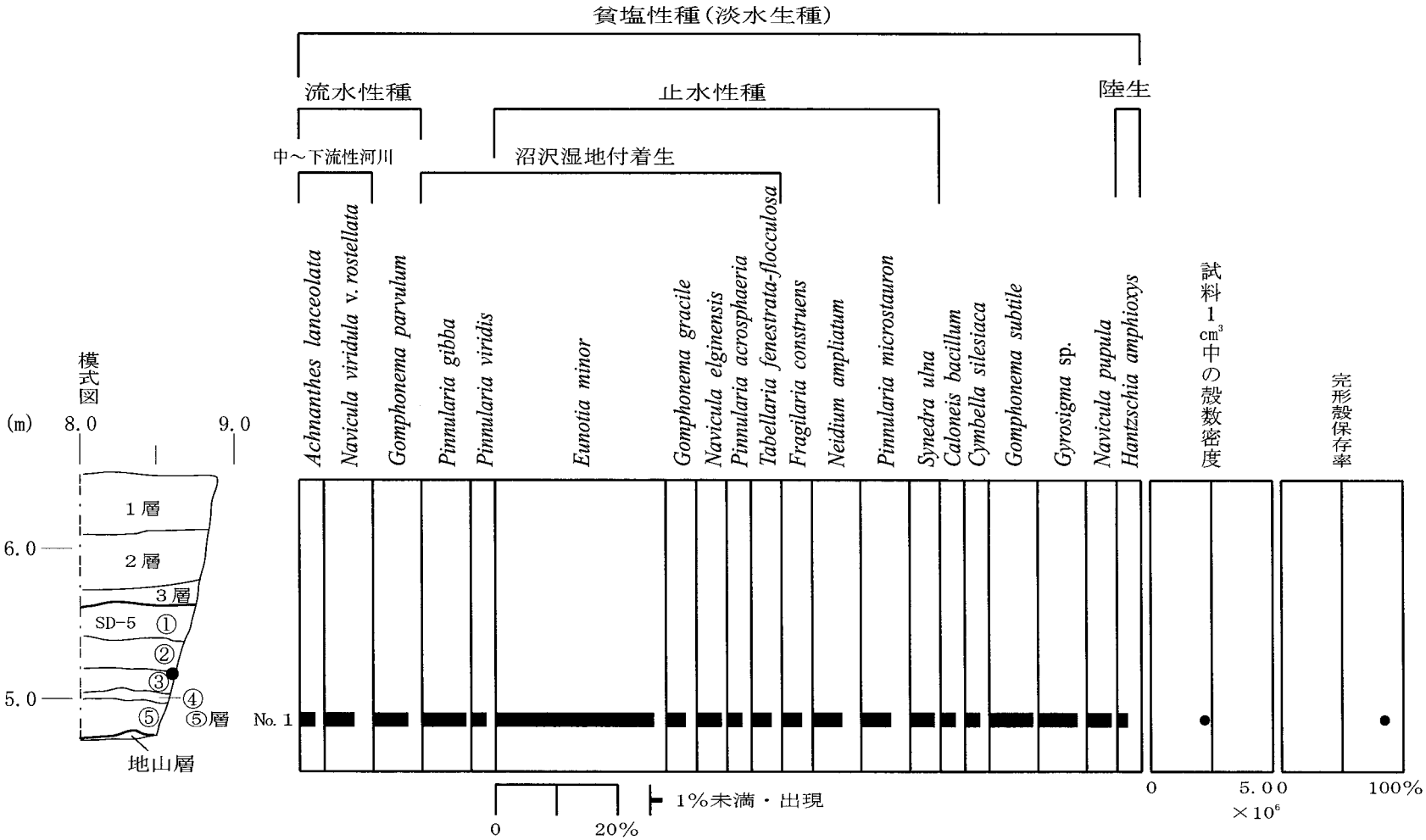


図1　14調査区（南壁），SD-5における主要珪藻ダイアグラム

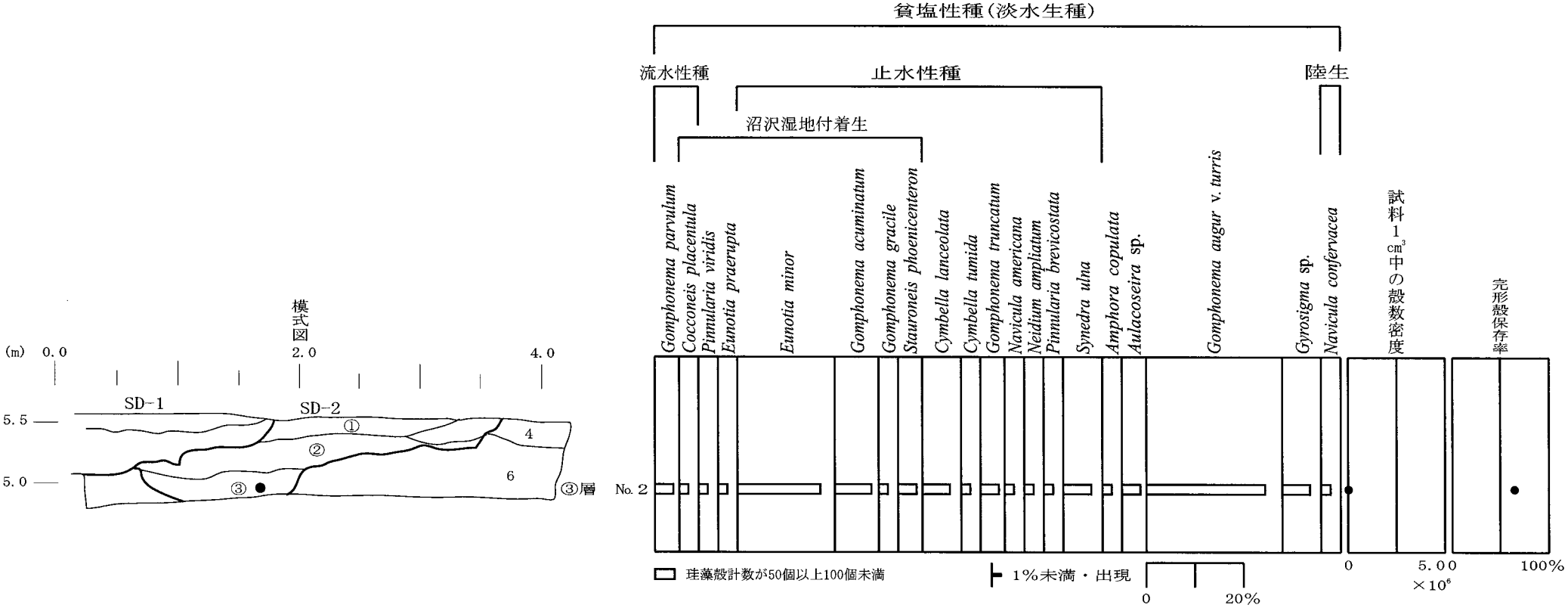
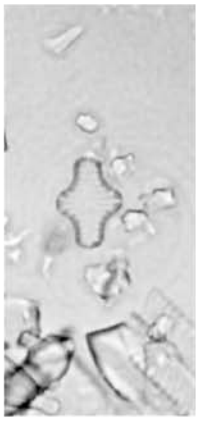


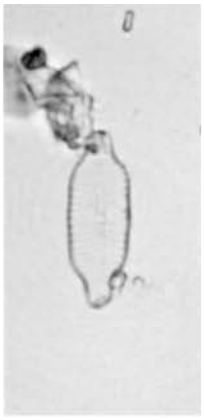
図2　15調査区（南壁），SD-2における主要珪藻ダイアグラム

原の辻遺跡第42次調査の珪藻　Ⅰ

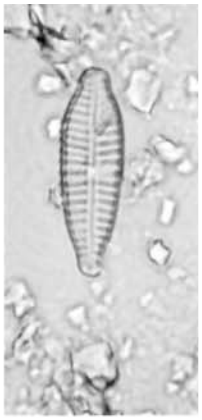
1

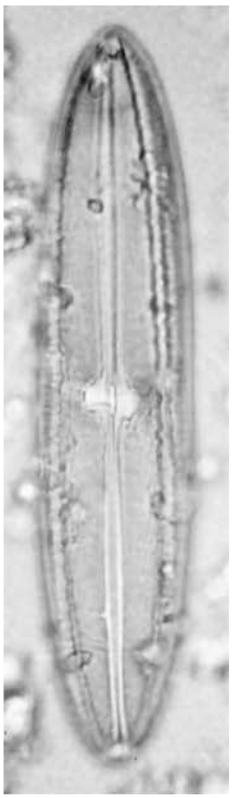

2

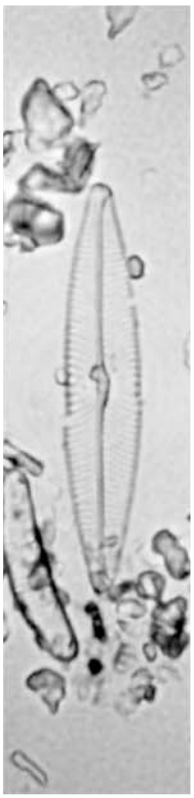
3

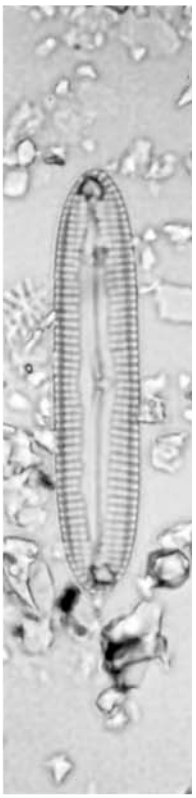

4

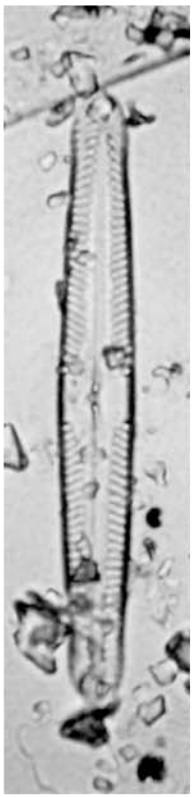
5

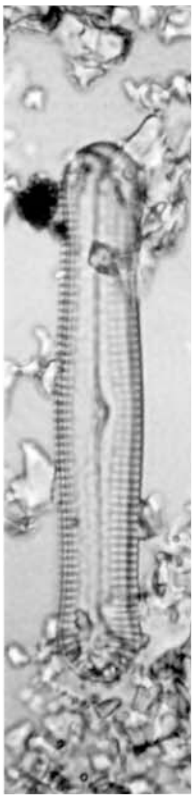

6

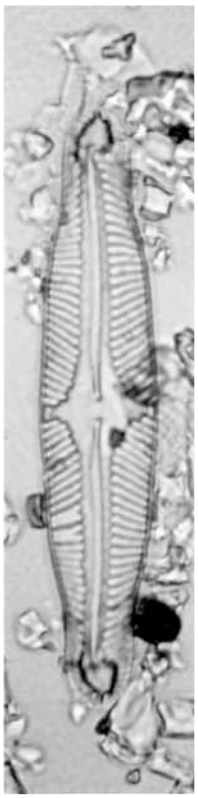

7

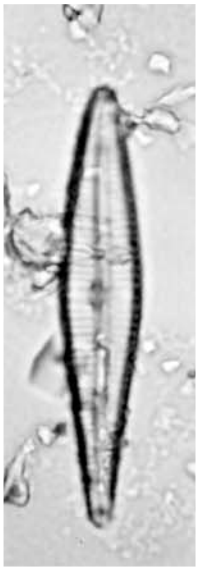

8

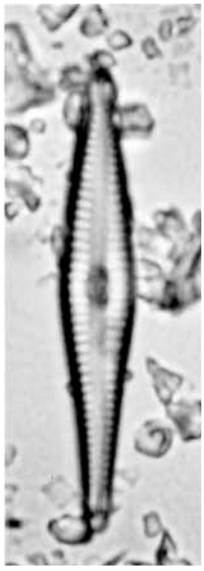

9

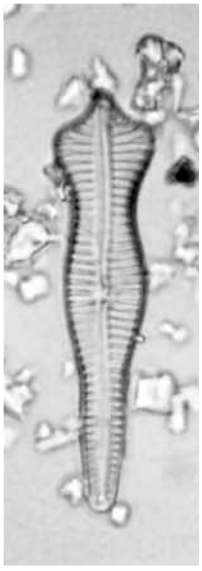

10

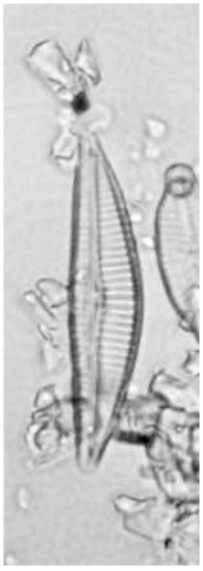

11

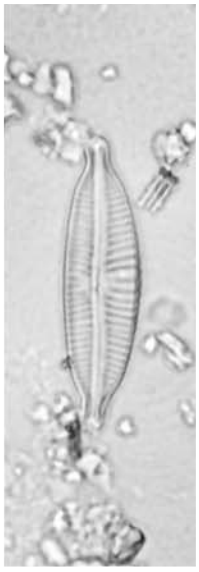

12

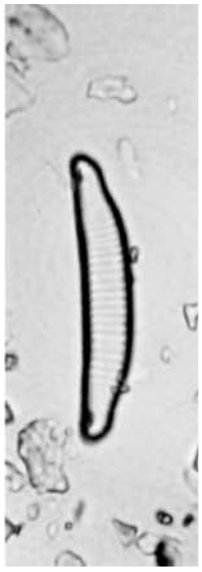

13


14

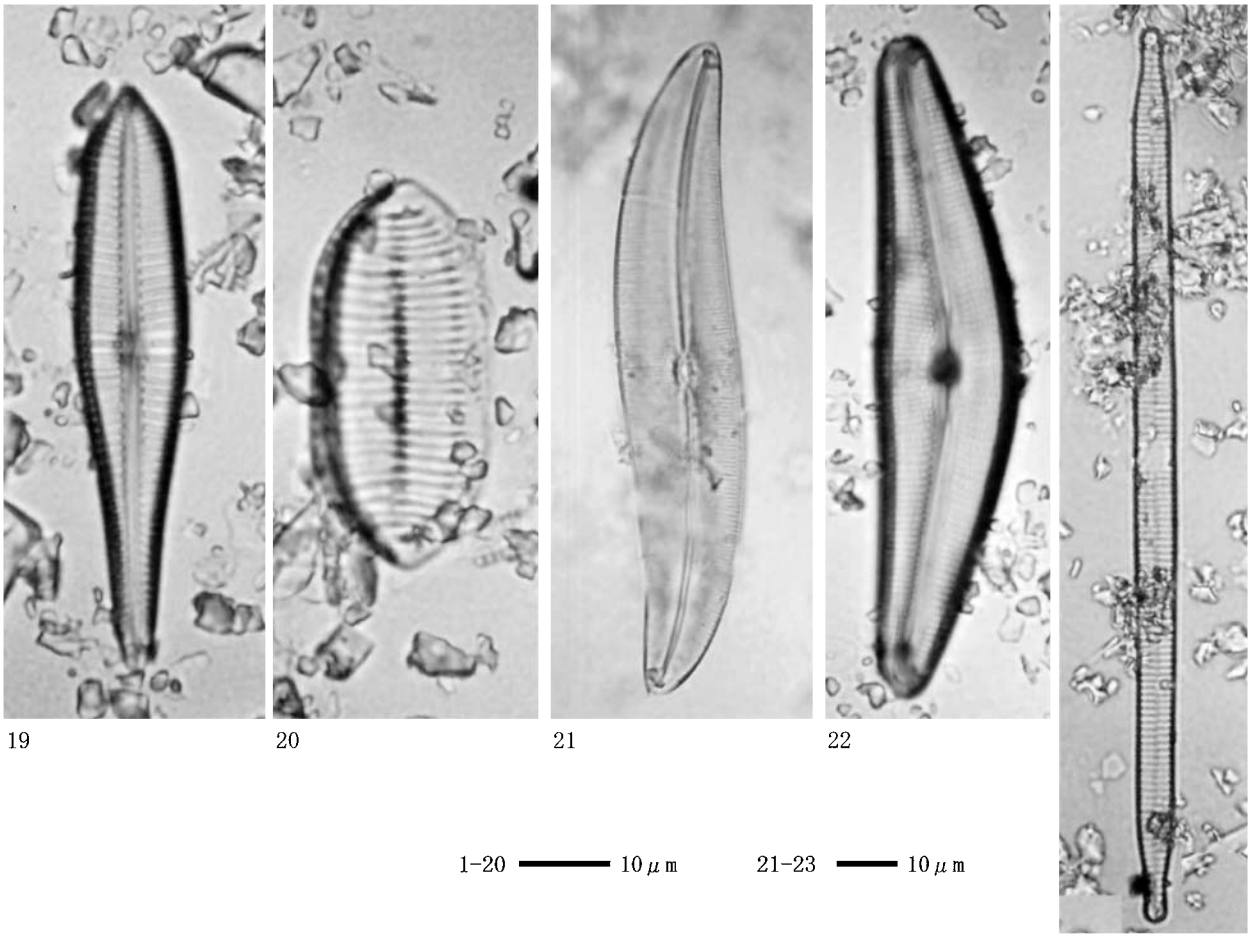

15


16


17

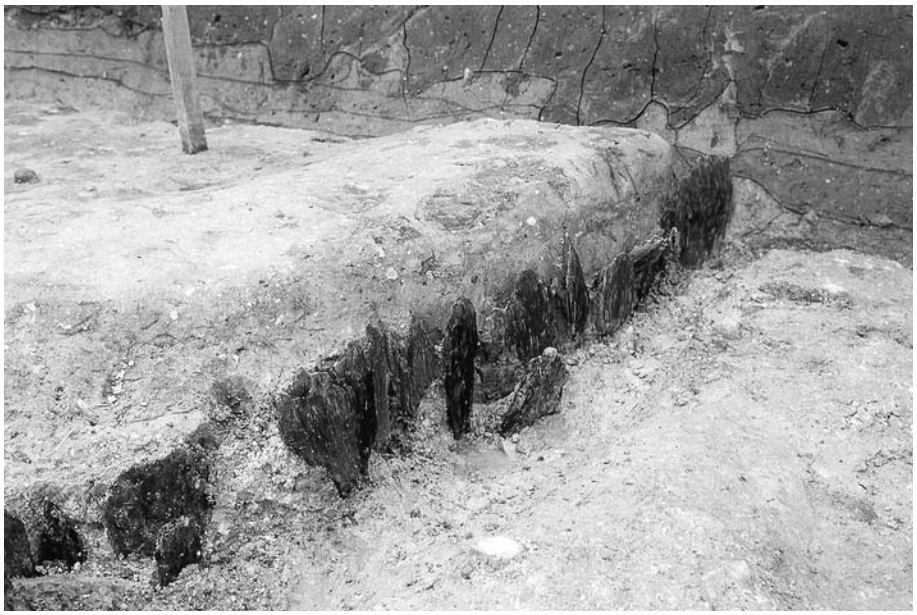

18

原の辻遺跡第42次調査の珪藻　Ⅱ



1．*Tabellaria fenestrate-flocculosa*　2．*Fragilaria construens*　3．*Caloneis bacillum*　4．*Navicula elginensis*
5．*Navicula pupula*　6．*Gomphonema parvulum*　7．*Neidium ampliatum*　8．*Navicula viridula* v. *rostellata*
9．*Pinnularia viridis*　10．*Pinnularia gibba*　11．*Pinnularia acrosphaeria*　12．*Pinnularia microstauron*
13．*Gomphonema gracile*　14．*Gomphonema subtile*　15．*Gomphonema acuminatum*　16．*Cymbella silesiaca*
17．*Cymbella naviculiformis*　18．*Eunotia minor*　19．*Gomphonema auger* v. *turris*　20．*Nitzschia levidensis* v. *victoriae*
21．*Gyrosigma* sp.　22．*Cymbella lanceolata*　23．*Synedra ulna*

写 真 図 版



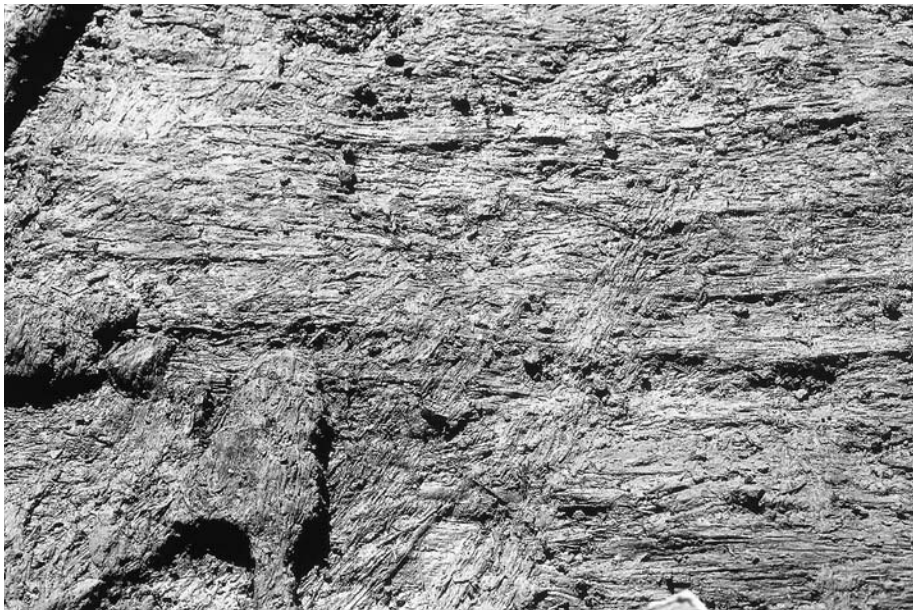
図版10
矢板①（東から）

図版11
矢板②（北から）

図版12
矢板③（北から）

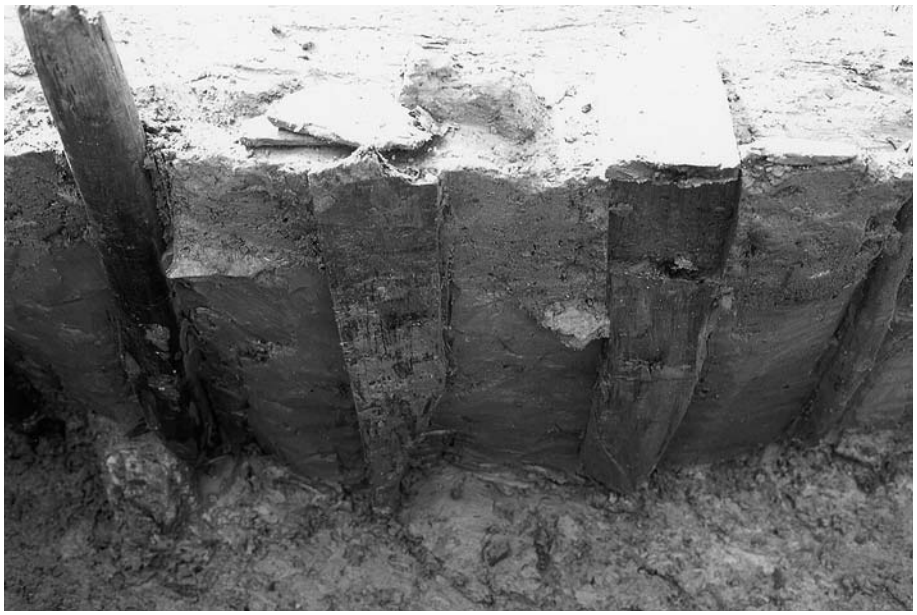
図版13
樹皮敷遺構①（近景①　樹皮敷遺構東側　北から）

図版14
樹皮敷遺構②（近景②）



図版15
樹皮敷遺構③（近景③）

図版16
樹皮敷遺構④（杭列検出状況　北から）



図版17
樹皮敷遺構⑤（矢板検出状況　北から）

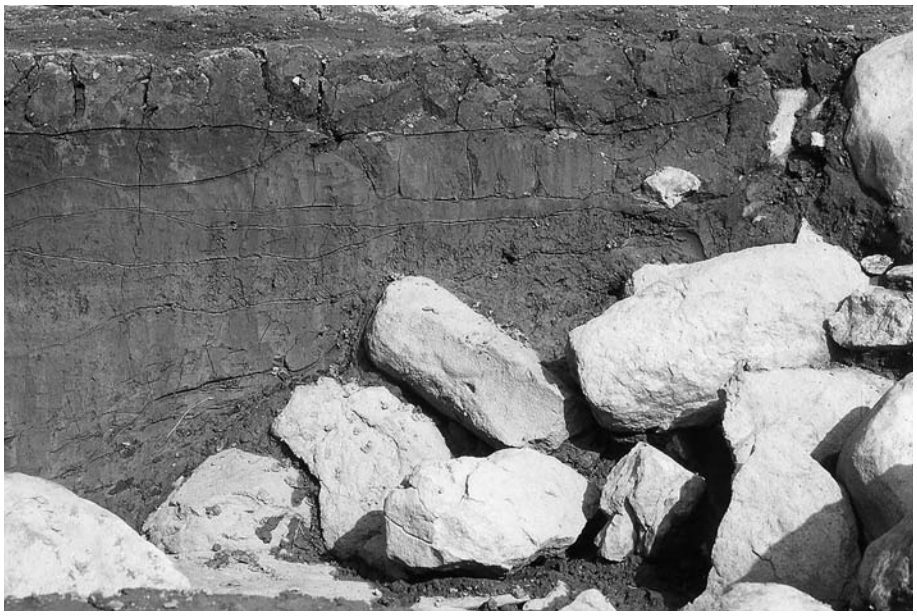
図版18
樹皮敷遺構⑥（杭列検出状況　北から）

図版19
護岸遺構①（遺構検出状況　20調査区南側南から）

図版20
護岸遺構②（遺構掘下げ状況　20調査区南側南から）

図版21
護岸遺構③（遺構掘下げ状況　20調査区南側西から）

図版22
河道３①（20調査区西壁土層　東から）

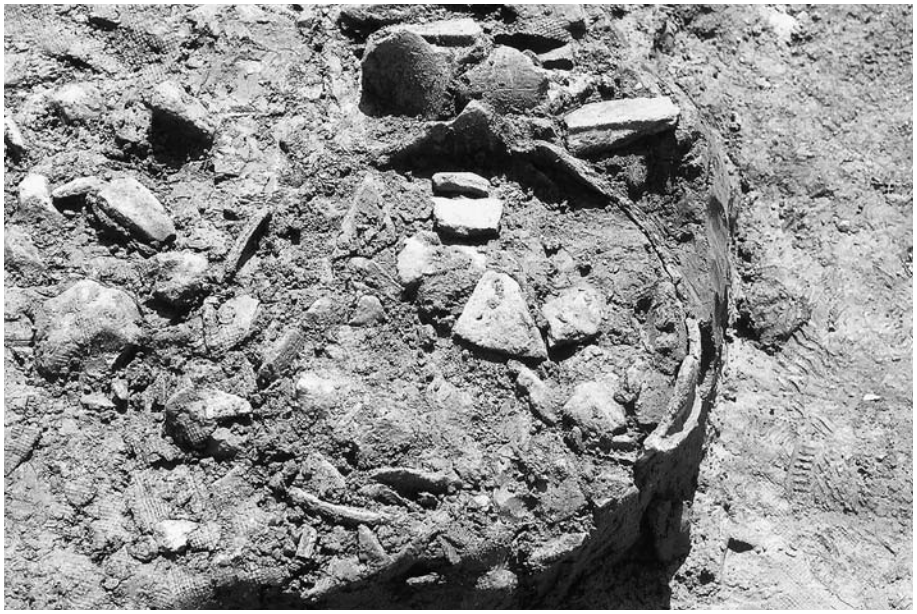


図版23
河道３②（20調査区中央ベルト南土層　南から）

図版24
河道３③（河道３上層遺物検出状況　西から）

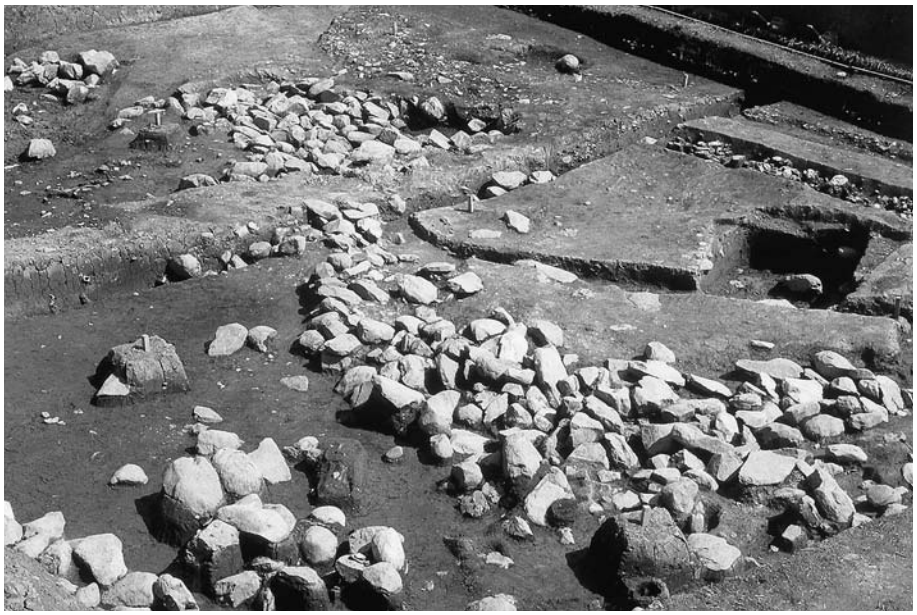
図版25
河道３④（河道３下層遺物検出状況　南から）

図版26
護岸遺構④（遺構直上遺物検出状況　※67頁１）



図版27
護岸遺構⑤（遺構直上遺物検出状況　※67頁２）

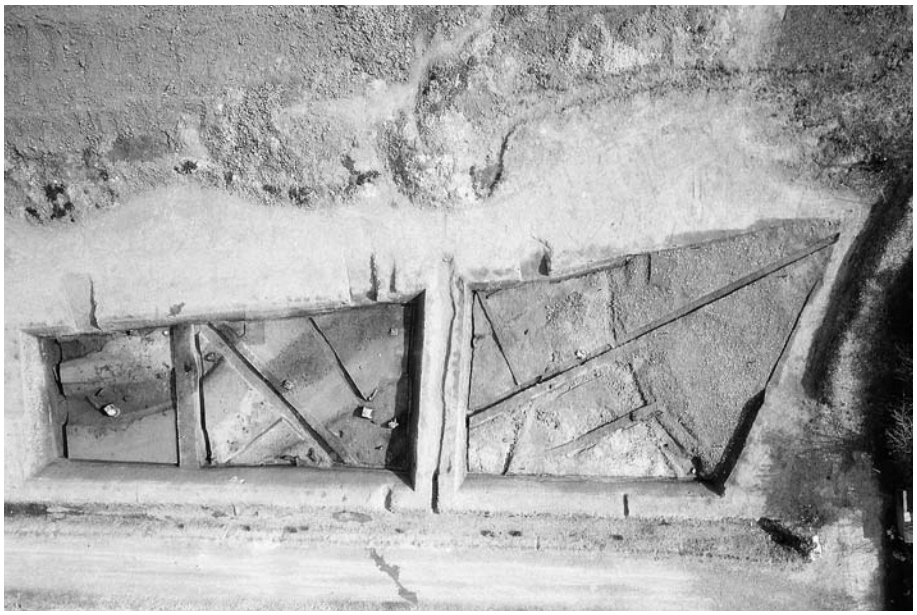
図版28
護岸遺構⑥（遺構掘下げ状況　21調査区　西から）



図版29
護岸遺構⑦（遺構掘下げ状況　21調査区　南西から）

図版30
護岸遺構⑧（遺構掘下げ状況　21調査区　南から）

図版31
SD３（遺構完掘状況
　東から）



図版32
SD９・SD10・SD11・
SD12・水田遺構（遺
構掘下げ状況　空撮
左が北）

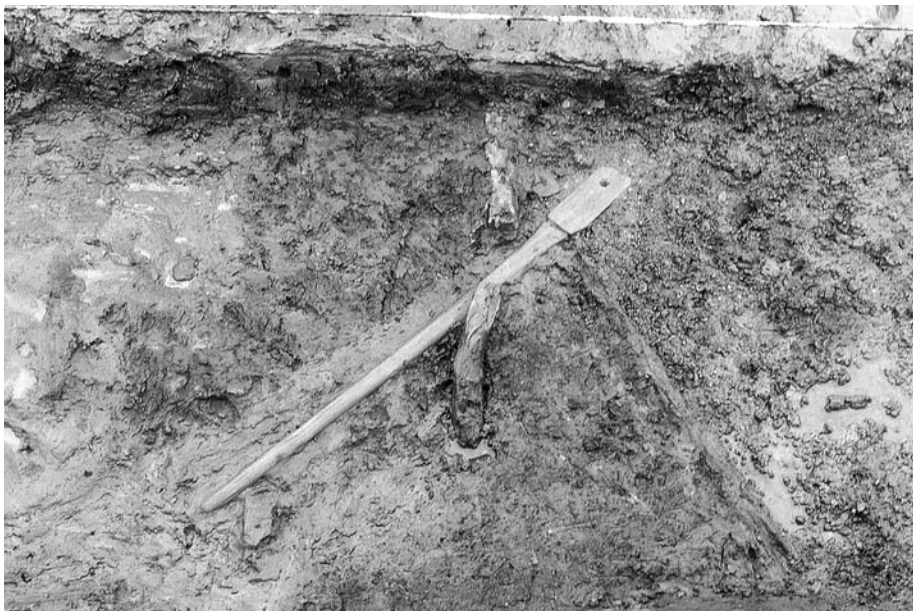
図版33
小児甕棺墓
（検出状況）

図版34
石剣①（出土状況）

図版35
石剣②（出土状況）

図版36
骨格器（出土状況）

図版37
仿製鏡（出土状況）



図版38
木製品①（出土状況）

図版39
木製品②（出土状況）

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書
巻次	②
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第29集
編著者名	林　隆広
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	㊡811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地１　TEL0920(45)4080
発行年月日	西暦2005年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原の辻遺跡（はるつじ）	長崎県壱岐市（ながさきけんいきし） 芦辺町（あしべちょう）・石田町（いしだちょう）	42423 42424	73-10 72-92	33°45′30″	129°45′55″	20030609 ～ 20040225	3,100m²	主要地方道勝本石田線道路改良工事

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	河道・溝 護岸遺構 樹皮敷遺構 祭祀土坑 水田遺構 小児甕棺墓	弥生土器 旧石器 磨石・敲石 石剣・石戈 仿製鏡・銅鏃・ 木製品・骨格器	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第29集

原の辻遺跡

2005. 3. 25

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂